

[ 博士学位論文 ]

# 現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究

杉 村 泰

## 表記について

1. 例文の文頭の \* は、その文が非文であることを示す。  
(例) \*彼はカナラズ君のことが好きなのでしょう。
2. 例文の文頭の ? は、その文が不自然であることを示す。  
(例) ?彼は来ると言ったらキット来る男だ。
3. 例文の文頭の # は、その文自体は非文ではないが、当該文脈では使えないことを示す。  
(例) #私はゼンゼン勉強しない。
4. 書籍や新聞などから引用した例文中、考察の対象となる表現には下線 ' \_\_\_\_ ' を引く。  
(例) 明日はカナラズ雨が降るだろう。
5. 例文中、共起関係などの重要箇所には下線 ' ..... ' を引く。  
(例) 明日はキット雨が降るニチガイナイ。
6. 他の論文から例文を引用した場合、その例文に下線があれば下線を引き、下線がなければ下線を引かない。

## 目次

表記について	[1]
--------	-----

目次	[2]
----	-----

第1章 序 論	1
1．研究の目的	1
2．命題とモダリティ	3
2.1 命題とモダリティの定義	3
2.2 発話態度のモダリティ	6
2.2.1 文類型のモダリティ	6
2.2.2 丁寧さのモダリティ	10
2.3 命題とモダリティの境界	10
2.4 命題とモダリティの分類基準	15
3．事態の蓋然性と判断の蓋然性	20
4．先行研究における副詞の二類型	21
4.1 属性副詞と陳述副詞	21
4.1.1 山田（1936）の研究	21
4.1.2 橋本（1939）の研究	24
4.1.3 時枝（1950）の研究	25
4.1.4 渡辺（1971）の研究	26
4.2 命題副詞とモダリティ副詞	28
4.2.1 中右（1980）の研究	28
4.2.2 益岡（1991）の研究	30
4.2.3 工藤（1982）の研究	33
4.2.4 森本（1994）の研究	35
5．本研究の構成	38
第2章 事態の蓋然性と判断の蓋然性	39
1．蓋然性の二類型	39
2．主観性判定テスト	40
2.1 否定形テスト	40

2.2	疑問の焦点テスト	41
2.3	文代名詞化テスト	41
2.4	連体修飾テスト	44
2.5	過去テスト	46
2.6	2 節のまとめ	52
3	事態の蓋然性	53
4	ヨウダ、ソウダ、ベキダ	56
4.1	比況のヨウダと推量判断のヨウダ	57
4.2	ヨウダとソウダ	61
4.3	ヨウダとベキダ	65
5	第 2 章のまとめ	72
第 3 章	文末のモダリティ形式	74
1	はじめに	74
2	認識と推量判断	75
2.1	話し手の判断と文の種類	75
2.2	認識や推量判断の関わる文	76
3	カモシレナイ、ニチガイナイ、ダ/	78
3.1	カモシレナイとニチガイナイの異質性	78
3.2	カモシレナイとダ/ の同質性	85
3.3	認識確定性	88
3.4	判断の焦点	92
3.5	連体修飾	95
3.6	ニチガイナイによる独話的推量	102
3.7	3 節のまとめ	108
4	ニチガイナイ、ヨウダ、ラシイ	109
4.1	判断の根拠	109
4.2	推論の型	113
4.3	推論の裏付けとなる根拠	118
4.4	連体修飾	125
4.5	4 節のまとめ	128
5	ダロウ	129
6	第 3 章のまとめ	133

第4章	キットとカナラズ	135
1.	はじめに	135
2.	類似点と相違点	136
3.	先行研究	138
4.	命題とモダリティ	145
5.	共起制限	150
5.1	文末のモダリティ形式との共起	150
5.2	根拠	153
5.3	蓋然性	155
6.	文の意味と副詞の意味	156
6.1	推量的機能と習慣的機能	157
6.2	一回的文脈と反復的文脈	159
7.	キットとカナラズの意味	161
7.1	意志文、命令文、勧誘文のキット	161
7.2	カナラズの二類型	162
7.3	カナラズとキマッテ	166
8.	第4章のまとめ	168
第5章	タブンとタイテイ、オソラク、サゾ	170
1.	はじめに	170
2.	タブンとタイテイ	170
2.1	類似点と相違点	170
2.2	先行研究	172
2.3	命題とモダリティ	173
2.4	共起制限	175
2.5	文の意味と副詞の意味	178
2.6	タブンとタイテイの意味	179
2.6.1	意志文、命令文、勧誘文のタブン	179
2.6.2	タイテイの二類型	180
2.6.3	カナラズとタイテイ	181
2.6.4	タイテイ、タイガイ、オオカタ	184
2.7	2節のまとめ	186
3.	キット、タブン、オソラク	187
3.1	蓋然性の高さ	187

3.2	文体差、好ましくない事態	189
3.3	共起制限	192
3.4	判断の対象	194
3.5	蓋然性の違いの生じる理由	196
3.6	3 節のまとめ	199
4	サゾ	199
4.1	先行研究	200
4.2	命題とモダリティ	203
4.3	共起制限	204
4.4	サゾの意味	205
4.4.1	共感	205
4.4.2	人称制限	208
4.4.3	過去、現在、未来の事態	209
4.4.4	程度性	210
4.5	4 節のまとめ	211
第 6 章	モシカスルト	213
1	はじめに	213
2	命題とモダリティ	214
3	共起制限	215
3.1	文末形式との共起制限	215
3.2	カモシレナイとの共起	217
3.3	デハナイカとの共起	219
4	モシカスルトの意味	221
4.1	想定外の事態	221
4.2	判断の根拠	223
4.3	蓋然性の高さ	224
4.4	モシカシテとの違い	225
4.5	アルイハ、モシカスルト、ヒョットスルト	227
5	第 6 章のまとめ	230
第 7 章	ドウモ、ドウヤラ	232
1	はじめに	232
2	先行研究	233

2.1 証拠性 .....	233
2.2 不確定性 .....	234
3 . 命題とモダリティ .....	236
3.1 ドウモ .....	237
3.2 ドウヤラ .....	240
4 . 共起制限 .....	242
5 . ドウモ、ドウヤラの意味 .....	244
5.1 ドウモ .....	244
5.2 ドウヤラ .....	246
6 . 第7章のまとめ .....	247
 第8章 タシカ .....	 249
1 . はじめに .....	249
2 . 先行研究 .....	249
3 . 命題とモダリティ .....	251
4 . 共起制限 .....	252
5 . タシカの意味 .....	254
6 . 第8章のまとめ .....	256
 第9章 マサカ .....	 257
1 . はじめに .....	257
2 . 先行研究 .....	257
3 . 命題とモダリティ .....	259
3.1 主観性判定テスト .....	259
3.2 主観性の違い .....	260
3.3 話し手の心的態度 .....	262
3.4 発話時点での心的態度 .....	263
4 . 共起制限 .....	266
5 . マサカの意味 .....	271
5.1 想定外 .....	271
5.2 他の副詞との比較 .....	273
5.2.1 ケッシテ、ゼンゼンとの比較 .....	273
5.2.2 モシカスルトとの比較 .....	277
5.2.3 キットとの比較 .....	278

5.2.4 ヤハリとの比較 .....	279
6 . 第9章のまとめ .....	281
第10章 終わりに .....	282
1 . 事態の蓋然性と判断の蓋然性 .....	282
2 . 文末のモダリティ形式 .....	283
3 . 蓋然性を表す副詞の意味.....	284
4 . 残された課題 .....	286
参考文献 .....	289
例文の出典 .....	294



## 第1章 序 論

### 1. 研究の目的

本研究は、現代日本語における蓋然性<sup>1)</sup>を表す副詞について、モダリティ論の立場から意味記述を行なったものである。蓋然性を表す形式には、副詞、文末のモダリティ形式、動詞がある。例文(1)～(3)は、これらの形式によって「明日は雨が降る」という事態の蓋然性について述べたものである。

- (1) 明日は{ゼッタイニ/カナラズ/キット/タブン/オソラク}雨が降るだろう。
- (2) 明日は雨が降る{<sup>2)</sup>/カモシレナイ/ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ/ダロウ}。
- (3) 明日は雨が降る{ト思ワレル/ト考エル/ト予想サレル/ト感ジル/ト思ウ}。<sup>3)</sup>

このうち、文末のモダリティ形式の研究が体系性を議論するところまで進んできているのに対し、<sup>4)</sup>副詞の研究は「キット」と「カナラズ」の類義分析以外にはほとんど進んでいないのが現状である。<sup>5)</sup>こうした状況の中、副詞の体系を構築するためには個々の副詞の意味記述を積み重ねていく必要がある。<sup>6)</sup>

先行研究では蓋然性を表す副詞の意味の違いについて、蓋然性の高さの違いと共起する文末のモダリティ形式の違いの両面から分析されてきた。たしかに、この二つは蓋然性を表す副詞の分析にとって欠かせないものである。しかし、先行研究の分析には以下の5つの点で問題が見られる。

第1の問題点は、蓋然性の高さを比べる場合に、質的に異なるもの同士が比較されてきた点である。たとえば、従来「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」

- 
- 1) 蓋然性とは、ある事態の成立する可能性の度合いのことである。
  - 2) 「<sup>2)</sup>」は無形のモダリティ形式を表す。
  - 3) 仁田(1989:47)はこれを「判断・認知活動を表す動詞」としている。森山(1992b)は「ト思ウ」について考察し「不確実表示用法」としている。
  - 4) 三宅(1995)や木下(1999)は、各形式の意味をモダリティの体系の中で記述している。
  - 5) 副詞の意味分析は、文末のモダリティ形式との共起関係から考える必要がある。そのため、文末のモダリティ形式の分析が進んでからでないと副詞の研究も進まないのである。
  - 6) 体系性を視野に入れた研究として工藤(1982)、森本(1994)がある。その問題点についてはそれぞれ本章4.2.3節、4.2.4節で扱う。

は、この順に蓋然性が低くなると説明されてきた。しかし、これらの副詞には単なる蓋然性の違いでは説明のできない違いがある。詳しくは第4章から第6章で論じるが、同じ蓋然性を表す副詞といっても「カナラズ」が命題副詞として機能するのに対し、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」はモダリティ副詞として機能するという違いがある。さらに、同じモダリティ副詞でも「キット」が推量文、意志文、命令文、勧誘文に使われるのに対し、「タブン」は推量文にしか使われないとか、「モシカスルト」は推量ではなく可能性の存在を表す文で使われるといった違いがある。こうした違いを考えずに一律に蓋然性の高さを比べるのは問題である。

第2の問題点は、文末のモダリティ形式との共起に関して、副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味との間で循環論に陥っている点である。従来、副詞の意味は文末のモダリティ形式の意味を基に定義されてきた。しかし、ここで問題なのは、ある副詞の意味の基準となるべきはずの文末のモダリティ形式の意味が、逆にその副詞の意味を基に定義されている点である。たとえば、「ドウモ～ヨウダ」を例にとると、「ドウモ」の意味を「ヨウダ」によって定義するわけであるが、基準となる「ヨウダ」の意味が逆に「ドウモ」によって定義されているのである。すなわち「ドウモ」と「ヨウダ」の間で循環論となっているのである。こうした問題を解決するには、最初に一方の意味を他方とは独立に定義しておく必要がある。この場合に副詞のみを独立に定義しようとしても、分析の対象となる文の中に文末のモダリティ形式も現れるためそれが困難である。一方、文末のモダリティ形式は副詞を伴わずに使うことができるためそれが可能である。

- (4)a. ドウモ明日は雨が降るヨウダ。
- b. \*ドウモ明日は雨が降る。
- c. 明日は雨が降るヨウダ。

しかも、意味の違いがタ形や連体形などの形態変化となって現れるため分析がしやすい。そこで、まずはじめに副詞とは独立に文末のモダリティ形式を定義する必要がある。

これと関連して第3の問題点は、文末のモダリティ形式の意味が自明であるかのように論じられてきた点である。たとえば、「キット～ニチガイナイ」、「モシカスルト～カモシレナイ」という共起関係を根拠にして、「キット」は蓋然性の高いこと、「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表すと説明されてきた。しかし、「カモシレナイ」が一般的事実を表す文に使えるのに対し、「ニチガイナイ」はそれができないという違いがある。

- (5)a. 宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
- b. \*宝くじというものは当たるニチガイナイものだ。

こうした違いを考えずに単なる蓋然性の違いとして議論するのは問題である。

さらにこれと関連して第4の問題点は、副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味が一体的に捉えられてきた点である。たしかに、「キット～ニチガイナイ」、「モシカスルト～カモシレナイ」、「ドウモ～ヨウダ」といった一定の共起関係のあることは事実である。しかし、これらは古語の「ナ～ソ」のように呼応と呼べるほど一体的なものでない。なぜならば、上の組み合わせ以外にも「キット～ダロウ」、「モシカスルト～ノデハナイカ」、「ドウヤラ～ヨウダ」などの共起が可能だからである。副詞と文末のモダリティ形式には一定の共起関係があり、意味的に関連していることを認めながらも、両者は独立した意味を担っていると考える必要がある。

第5の問題点は、ある副詞が蓋然性以外の意味をも持つ場合に、蓋然性の意味とそれ以外の意味との関係についてあまり考察されてこなかったという点である。たとえば、「ドウモ」を例にとると、「明日はドウモ雨が降るようだ」という文では蓋然性を表すが、「この数学の問題はドウモ分からない」という文では蓋然性を表さない。こうした場合に、蓋然性を表す用法だけを考察したのでは不十分な分析となる恐れがある。

以上の問題点を踏まえ、本研究では副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味を独立のものとして分析を行なった。本研究で考察の対象とする副詞は次の通りである。

キット、タブン、オソラク、カナラズ、キマッテ、タイテイ、タイガイ、オオカタ、サゾ、アルイハ、モシカスルト、ヒョットスルト、ドウモ、ドウヤラ、タシカ、マサカ

## 2. 命題とモダリティ

### 2.1 命題とモダリティの定義

本研究は、一つの文は話し手の切り取った客体世界の事態<sup>1)</sup>を描く「命題」と、発話時点における話し手の心的態度<sup>2)</sup>を表す「モダリティ」から成るとするモダリティ論の立場に立つ。モダリティはさらに、話し手による客体世界の把握の仕方と関わる「命題態度の

---

1) 本研究の「事態」には、「状態」(state)、「過程」(process)、「行為」(action)を含む。

2) モダリティの構成要素として、心的態度、話し手、発話時点の三つがあるとする考え方は、中右(1980、1994)に基づく。この「発話時点」は、厳密には「持続的現在時」と区別して「瞬間的現在時」のことを指す。

モダリティ」と、話し手の発話態度と関わる「発話態度のモダリティ」とから成る。<sup>1)</sup> この三者の関係は、発話態度のモダリティの中に命題態度のモダリティが埋め込まれ、命題態度のモダリティの中に命題が埋め込まれるという構造となっている。この関係を図1-1に示す。

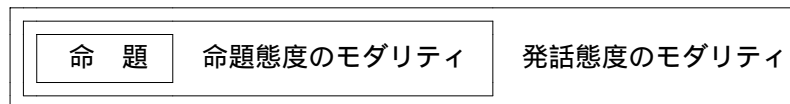


図1-1 文の構造

命題、命題態度のモダリティ、発話態度のモダリティの関係を例文(6)によって説明する。例文(6)は図1-2の状況で発せられたものである。

(6) かわいい猫だよ！

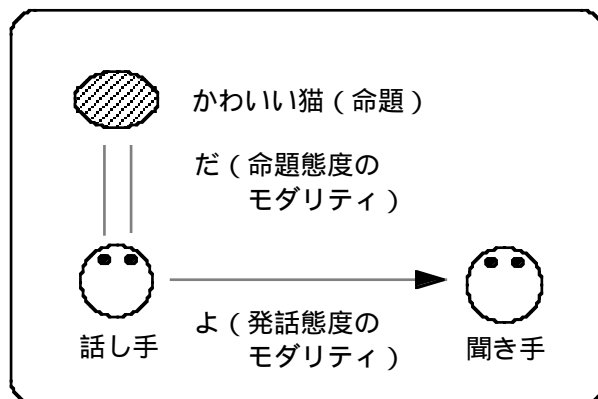


図1-2 「かわいい猫だよ！」の発せられた状況

図1-2において、話し手は客体世界に「かわいい猫」という対象を発見し、そのことを聞き手に伝えている。この場合に、「かわいい猫」は話し手の存在とは独立に客体世界に存在している。そのため「かわいい猫」は命題として機能する。一方、「だ」はそれが確

1) 仁田（1989、1991）の「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」、益岡（1991）の「判断系のモダリティ」と「表言系のモダリティ」も同様の観点から分けたものである。また、芳賀（1954）は陳述を次の二種に分類した。第一種の陳述（述定の陳述）：客体的に表現された事柄の内容についての、話し手の態度（断定・推量・疑い・決意・感動・詠嘆など）。第二種の陳述（伝達の陳述）：事柄の内容や、話し手の態度を、聞き手（時には話し手自身）に向かってもちかけ、伝達する言語表示（告知・反応を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答など）。

かに「かわいい猫」であると認識したことを示す表現である。これは発話時点における話し手の心的態度に依存する表現であるためモダリティとして機能する。また、「よ」は「かわいい猫だ」という認識を聞き手に伝える表現である。これも発話時点における話し手の心的態度に依存する表現であるため、モダリティとして機能する。

さて、「かわいい猫だよ！」という発話は、「（何々だ）よ！」という発話態度のモダリティを基に成り立っている。この「よ」は話し手の持つ情報を一方的に聞き手に伝える機能を持っている。もし、話し手が聞き手との知識の共有を確認するのであれば「よ」の代わりに「ね」が使われるし、独り言を言うのであれば「なあ」が使われる。

- (7)a.かわいい猫だね！
- b.かわいい猫だなあ！

次に発話態度のモダリティの中に命題態度のモダリティが埋め込まれる。命題態度のモダリティは命題の成立可能性に関するもので、命題の成立が確実であると捉えられた場合には「（何々）ダ/ 」<sup>1)</sup>が使われ、確実でないと捉えられた場合には「（何々）かもしれない」や「（何々）（の）ようだ」などが使われる。

- (8)a.かわいい猫かもしれないよ！
- b.かわいい猫のようだよ！

最後に命題態度のモダリティの中に命題が埋め込まれて文が完成する。ここで注意しておきたいのは、発見の対象となったものを「小さな猫」や「愛らしい猫」あるいは「かわいい子猫」や「かわいい犬」ではなく、まさに「かわいい猫」と捉えたのも話し手の主観によると言えなくもないということである。しかし、「かわいい猫」は話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるという意味で、本研究では客観的な成分であるとする。

こうした命題とモダリティの違いは副詞にも見られる。このことを例文(9)によって説明する。

- (9) おや、きっと明日はかなり雨が降るにちがいないぞ。

例文(9)は、まず「おや、（X）ぞ」という発話態度のモダリティを基に成り立っている。

---

1) 「ダ」と「 」は交替形の関係にある。「ダ」が名詞や形容動詞型活用 of the 語につくのに対し、「 」は動詞型活用 of the 語や形容詞型活用 of the 語につく。

この( X )に命題態度のモダリティ「きっと( Y )にちがいない」が埋め込まれ、最後に( Y )に命題「明日はかなり雨が降る」が埋め込まれて文が完成する。この場合に、雨の降る程度を「ずいぶん」や「そうとう」ではなく、まさに「かなり」と捉えたのも、話し手の主観によると言えなくもない。しかし、「かなり雨が降る」という現象は、話し手が客体世界の事態として切り取ったものである。そういった意味で本研究では客観的な成分であるとする。このように、同じ副詞と呼ばれるものの中にも「キット」のようなモダリティ副詞と「カナリ」のような命題副詞とがある。例文(9)の構造を図示すると図1-3のようになる。

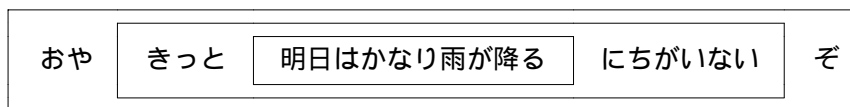


図1-3 例文(9)の構造

ところで、ここに示した構造は意味による構造であって、必ずしも日本語の語順がこのようであるとは限らない。たしかに、日本語の語順は多くの場合に「命題」の外側に「命題態度のモダリティ」が位置し、さらにその外側に「発話態度のモダリティ」が位置している。そのため、益岡(1991)をはじめ日本語のモダリティ構造を語順と関連させて論じる研究が多く見られる。しかし、モダリティ構造と語順が一致しない場合もある。

- (10) おや、明日はきっと かなり雨が降るにちがいないぞ。  
 (11) 昨日は 雨が 降り ませ ん で し た よ。

例文(10)では、モダリティ副詞「きっと」が命題である「明日は」の内側に位置しており、例文(11)では、発話態度のモダリティである「ます」や「です」(丁寧さ)が、命題である「ん」(極性)や「た」(テンス)の内側に位置している。したがって、先の構造はあくまでも意味的な構造を示したものである。

## 2.2 発話態度のモダリティ

本研究のモダリティ論では、文は第一に発話態度のモダリティから成ると考える。発話態度のモダリティは、対人関係と関わる話し手の態度を表したもので、文類型のモダリティと丁寧さのモダリティの2つがある。

### 2.2.1 文類型のモダリティ

まず文類型のモダリティについて説明する。文類型のモダリティは話し手と聞き手の情

報伝達に関わるもので、聞き手が関与するかどうかによって大きく「話し手内部での発話」と「聞き手に向けた発話」の2つに分かれる。前者はさらに話し手による真偽判断の有無によって「感嘆文」と「真偽判断文」に分かれ、後者は聞き手に対する働きかけの違いによって「伝達文」、「質問文」、「命令文」、「意向文」、「挨拶文」の5つに分かれる。本研究では文類型のモダリティとしてこの7つを認めることにする。これら7つは、中に埋め込まれる命題態度のモダリティや命題の違いによってさまざまな文を作る。たとえば、同じ推量のモダリティでも「真偽判断文」に使われれば「推量文」となり、「伝達文」に使われれば「推量伝達文」となる。推量文が発話時点での推量判断の表明を表すのに対し、推量伝達文は一度客体化された推量判断の表明となる。

- (12)a. きっと明日は雨だろうなあ！（推量文）  
 b. きっと明日は雨でしょう。（推量伝達文）

まずはじめに「話し手内部での発話」から説明する。これには話し手の真偽判断を介さない「感嘆文」と、話し手の真偽判断を介する「真偽判断文」の二つがある。このうちの「感嘆文」は話し手の発話時点での心情を吐露した文で、話し手の感情を表出した「感情表出文」、話し手の願望を表出した「願望文」、話し手の意志を表出した「意志文」、話し手の眼前の情景を描写した「眼前描写文」に分かれる。「願望」や「意志」も感情の一種ではあるが、「タイ」、「（ヨ）ウ」、「（意志）」という特徴的なモダリティ形式があるため他と区別される。

こうした分類は常に白か黒かはっきり区別できるものではなく、「レモンが欲しい！」のように「感情表出文」と「願望文」の両方にまたがる例や、「まあ、きれい！」のように「感情表出文」と「眼前描写文」の両方にまたがる例もある。後者を例にとると、話し手の感情表出に重点があると捉えれば「感情表出文」となり、眼前にある対象の描写に重点があると捉えれば「眼前描写文」となる。

一方、「真偽判断文」は話し手の発話時点での真偽判断を描写した文で、過去の記憶を想起して述べた「想起文」、事態の成立可能性について推量判断を加えずに述べた「認識文」、事態の成立可能性についての推量判断を述べた「推量文」に分かれる。本研究では「認識」と「推量判断」を区別し、話し手がある事態の成立を見たままに捉えたり、記憶のままに捉えるのを「認識」、事態の認識が不確定でその成立可能性について推論するのを「推量判断」と呼ぶことにする。認識と推量判断の関係を図1-4に示す。

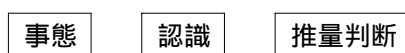


図1-4 認識と推量判断

「認識」の場合、事態の成立可能性は発話時点において確定しているのに対し、「推量判断」の場合はそれが不確定であるという違いがある。残る「想起文」は過去の記憶を想起することによって事態の成立可能性を述べるため推量判断は加わらない。したがって、その点では「認識文」と同じである。しかし、記憶に基づく判断であるため事態の成立可能性は不確定である。そのため「認識文」とは別に分類される。

さて、もう一つの文類型のモダリティである「聞き手に向けた発話」には、話し手から聞き手に情報を伝達する「伝達文」、聞き手に情報を要求する「質問文」、聞き手に対して命令、禁止、許可、依頼をする「(広義)命令文」、聞き手に対して申し出、勧誘をする「意向文」、挨拶の意を表明する「挨拶文」の5つがある。このうちの「伝達文」は伝達する情報の違いにより、さらに「感情伝達文」、「願望伝達文」、「意志伝達文」、「知識伝達文」、「推量伝達文」、「伝聞文」の6つに分かれる。感情・願望・意志は話し手の心情から発する情報、知識は記憶や認識による情報、推量は話し手による推量判断を経た情報、伝聞は他者から得た情報に基づいて情報が伝達される。なお、「知識伝達文」の「知識」には眼前描写によるもの、想起によるもの、認識によるものが含まれる。

以上に述べた文の類型を整理すると次のようになる。

#### A．話し手内部での発話

##### A-1 感嘆文（発話時点での発見、感情、願望、意志などの心情を吐露した文）

- ・感情表出文（話し手の感情を表出した文）  
「痛い!」「ちくしょう!」「びっくりした!」
- ・願望文（話し手の願望を表出した文）  
「水が飲みたい!」
- ・意志文（話し手の意志を表出した文）  
「よし、行こう!」「ぜったいに見るぞ!」
- ・眼前描写文（話し手の眼前の情景を描写した文）  
「あ、雨だ!」「あ、火事だ!」「おや、雨が降りそうだ!」

##### A-2 真偽判断文（発話時点での真偽判断を描写した文）

- ・想起文（過去の記憶を想起して述べた文）  
「たしか今日だったなあ!」「そうだ、今日は休みだったんだ!」
- ・認識文（事態の成立可能性について推量判断を加えずに述べた文）  
「あの女はスリだ!」「昔はよかった!」「俺は生きているんだ!」
- ・推量文（事態の成立可能性についての推量判断を述べた文）  
「明日は雨だろうなあ!」「犯人はあの男に違いない!」



B．聞き手に向けた発話

B-1 伝達文（話し手から聞き手に情報を伝達した文）

- ・感情伝達文（話し手の発話時点での感情を伝達した文）  
「おい、痛いなあ」「やい、こんちくしょうめ」「びっくりしたよ」
- ・願望伝達文（話し手の発話時点での願望を伝達した文）  
「水が飲みたいよ」「早く教えてほしいわ」
- ・意志伝達文（話し手の発話時点での意志を伝達した文）  
「はい、行きます」「ぜったいに見るよ」
- ・知識伝達文（話し手の知識を伝達した文）  
「あ、雨だよ」「たしか今日でした」「あの女はスリだよ」  
「彼は水を飲みたがっているわよ」「私は大学に行くつもりです」
- ・推量伝達文（話し手の発話時点での推量判断を伝達した文）  
「たぶん明日は雨が降ると思います」「きっと犯人はあの男だよ」
- ・伝聞文（他からの情報を伝達した文）  
「彼は来ないそうです」「彼は来ないらしいよ」

B-2 質問文（聞き手に情報を要求した文）

「明日は雨ですか？」「水が飲みたいですか？」「これは何ですか？」

B-3 命令文（聞き手に対して命令、禁止、許可、依頼をした文）

「行け」「行くな」「行ってもよい」「行ってください」

B-4 意向文（聞き手に対して申し出、勧誘をした文）

「私が行きましょう」「一緒に行こう」

B-5 挨拶文（挨拶の意を表明した文）

「おはよう」「ありがとう」「失礼しました」「すみません」

先にも示したように、ある一つの表現が複数の文類型と関わることもある。たとえば、話し手が「さて、今晚の献立はどうでしょうか！」と独り言を言ったとする。これが単なるつぶやきであれば「A．話し手内部での発話」となるが、客体化された話し手自身に問いかけている場合には「B．聞き手に向けた発話」となる。後者の場合は「さて、今晚の献立はどうしましょうか！」のように丁寧さのモダリティを関与させることができる。

また、「ぜひ一緒に行きませんか？」という表現は、一方では聞き手に対する質問の機能を持ちながら、一方では勧誘の機能も果たしている。こうした表現は「質問文」と「意向文」の両方に関わる表現であるといえる。同様に「今日は暑いですね」という表現は、単に話し手の感情を伝達する場合にも使われるが、窓を開けることを要求する場合にも使

われる。これは「伝達文」と「命令文」の両方に関わる表現であるといえる。<sup>1)</sup>

### 2.2.2 丁寧さのモダリティ

次に丁寧さのモダリティについて説明する。これも対人関係に関わるもので、聞き手に対する丁寧さを表すモダリティである。そのため、基本的に聞き手を対象とした「伝達文」、「質問文」、「命令文」、「意向文」、「挨拶文」に使われ、独話的な「感嘆文」や「思考文」には使われない。丁寧さのモダリティは大きく普通体と丁寧体に分かれる。「伝達文」と「質問文」と「挨拶文」の場合、普通体には基本形が使われ、丁寧体にはデス・マス・ゴザイマス形が使われる。

- (13)a. 夏休みの家族旅行はハワイだ。(伝達文：普通体)
- b. 夏休みの家族旅行はハワイです。(伝達文：丁寧体)
- (14)a. あなたは夏休みにハワイに行くか？(質問文：普通体)
- b. あなたは夏休みにハワイに行きますか？(質問文：丁寧体)
- (15)a. おはよう！(挨拶文：普通体)
- b. おはようございます！(挨拶文：丁寧体)

一方、「命令文」と「意向文」は、「行ってもよい/行ってもいいです」、「行ってくれ/行ってください」、「行こう/行きましょう」のように普通体と丁寧体の対立のあるものと、「行け」、「行くな」、「ほら、さっさと行く！」のように普通体のみのものである。

### 2.3 命題とモダリティの境界

ここでは命題とモダリティの境界について考える。モダリティとは文の中で話し手の主観的態度を表した成分であるが、何を基準に主観的態度であると判断するのが問題となる。先の例文(6)と例文(9)では、「かわいい猫」や「明日はかなり雨が降る」が命題で、「だよ」や「おや、きっと～にちがいないぞ」がモダリティであるとした。しかし、主観性を広く考えると、猫の様子を「小さな猫」や「愛らしい猫」ではなく「かわいい猫」と捉えたり、雨の降る程度を「ずいぶん」や「そうとう」ではなく「かなり」と捉えるのも、話し手の主観によるものだということになる。そう考えると、全ての言語表現がモダリティに属することになる。これに対し、本研究では「かわいい猫」や「明日はかなり雨が降る」は、話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるという意味で、客観的な成分で

---

1) こうしたことは、Palmer (1986)、仁田 (1991) にも論じられている。

あると考えることにする。

モダリティを構成する要素には、 心的態度、 話し手、 発話時点の三つがある。これらは互いに独立した概念であり、全ての要素がそろったときに典型的なモダリティ表現となる。これら三つの要素には、中右（1994：43-45）の指摘にもあるように、優位性（重要性）の順序がある。第一に必要なのは、 の「心的態度」の要素である。モダリティが主観的態度を表す以上、この要素は不可欠である。この要素のないものは全て命題となる。第二に必要なのは、 の「話し手」の要素である。話し手以外の心的態度は話し手によって直接経験することができず、客体化されたものとなるためである。第三に必要なのは、 の「発話時点」の要素である。話し手の心的態度であっても、それが過去のものであれば客体化されたものとなるためである。この「発話時点」というのは、厳密には瞬間的現在時に限られる。それは、持続的現在時の場合もまた客体化されたものとなるためである。 の要素があって、 の要素のないものは、主観的な性質を帯びていても、すでに話し手によって客体化されたものであるため命題となる。

それでは、この考えに従って次の各表現を命題とモダリティに分類してみよう。まず、「{彼/私}は大学に行く」の部分は、話し手の発話とは独立した客体世界の事態を表しているため命題に分類される。<sup>1)</sup>

- (16)a. 彼は大学に行く意志がある。
- b. 私は大学に行く意志がある。
- c. 彼は大学に行くつもりだった。
- d. 私は大学に行くつもりだった。
- e. 彼は大学に行くつもりでいる。
- f. 私は大学に行くつもりでいる。
- g. 彼は大学に行くつもりだ。
- h. 私は大学に行くつもりだ。
- i. 私は大学に行こう。
- j. 私は大学に行く。（この場合の「」は意志を表す）

例文(16a)の「意志がある」は他者のものであるため命題に分類される。一方、例文(16b)の「意志がある」は、話し手自身の意志について述べたものである。しかし、持続的現在時のものであるため命題に分類される。<sup>2)</sup>

---

1) 取り立て助詞「は」の問題については、本研究では論じないことにする。

2) 例文(16a) (16b)は、「私(に)は本がある/子供がある/大学に行く予定がある」などと同様に、「存在・所有」を表す文の中に位置付けて考えられる。

- (17)a. 前々から私は大学に行く意志がある。(持続的現在時)  
 b. \*よし決めた。それじゃあ私は大学に行く意志がある。(瞬間的現在時)

例文(16c) (16d)の「つもりだった」は過去の心的態度、例文(16e) (16f)の「つもりでいる」は持続的現在時の心的態度について、話し手がそれを客体化して述べたものであるため命題に分類される。例文(16g)の「つもりだ」も、他者の心的態度を表しているため命題に分類される。ただし、厳密には「つもりだ」のうち「だ」の部分はモダリティとして機能する。(この点については本章2.4節で論じる。)

問題となるのは例文(16h)の「つもりだ」である。一般に「つもりだ」は意志のモダリティを表すとされているが、<sup>1)</sup> 本研究では命題に属すと考える。その理由は、同じ意志の表現である「(よ)う」<sup>2)</sup> や「(意志)」と比べ、主観性に違いがあるからである。ここで「つもりだ」の実例を見ておく。例文(18)~(20)の「つもりだ」は、それぞれ話し手以外、過去、持続的現在のものであることが明確なため命題と判断される。これに対し、例文(21)の「つもりだ」は一見モダリティのように見える。

- (18) 「その壁の後ろに国民の目がある。国民がじっと見ている。そのつもりでやってください」(魚住昭『特捜検察』)  
 (19) 座談会に登場して頂いた小沢泉さんが、一九九八年三月に病気で他界された。芝浦屠場の「生き字引き」といわれるほどに歴史に詳しい方で、これからも押しえて頂くつもりだっただけに、訃報は青天の霹靂だった。末尾ながら、心からご冥福を祈ります。(鎌田慧『ドキュメント屠場』)  
 (20) 久光は、西郷の行動に怒った。西郷が尊攘派を扇動、あるいは彼らと同調して騒ぎを大きくするつもりでいるとみたからである。(毛利敏彦『大久保利通』)  
 (21) 「おれも何度かおまえさんを殺そうとした これからも殺そうとするつもりだ」(手塚治虫『ブッダ』)

しかし、例文(22a)が不適格となることから分かるように、「つもりだ」は瞬間的現在時ではなく持続的現在時を表す。

1) 益岡・田窪(1992)など。

2) 小坂(1999: 352)に「「~(よ)う」には過去形がない。すなわち、「~(よ)う」は発話時だけにおける話者の意志を述べる表現である。文の主語が話者の場合に限って文法的になる」との指摘がある。

- (22)a. 前々からおまえさんを殺そうとするつもりだよ。(持続的現在時)  
 b. \*よし決めた。おまえさんを殺そうとするつもりだよ。(瞬間的現在時)

これと同様に文脈を補って考えると、例文(16h)の「つもりだ」が瞬間的現在時ではなく持続的現在時を表していることが明確になる。

- (23)a. 前々から私は大学に行くつもりだ。  
 b. \*前々から私は大学に行こう。<sup>1)</sup>  
 c. \*前々から私は大学に行く。  
 (24) 大学に行くのか就職するのか今ここで決めなさい。  
 a. \*よし決めた。それじゃあ、私は大学に行くつもりだ。  
 b. よし決めた。それじゃあ、私は大学に行こう。  
 c. よし決めた。それじゃあ、私は大学に行く。

例文(23)は持続的現在時の意志について述べた文脈である。この場合は「つもりだ」は使えるが、「(よ)う」と「(意志)」は使えない。一方、例文(24)は瞬間的現在時の意志について述べた文脈である。この場合は「つもりだ」が使えないのに対し、「(よ)う」と「(意志)」は使える。このように文脈を補って考えると、例文(16h)の「つもりだ」も、例文(16g)の「つもりだ」と同様に持続的現在時の意志を表していることが分かる。こうした事実から、「つもりだ」は命題に属すと判断される。例文(16a)～(16h)の構造を図1-5に示す。

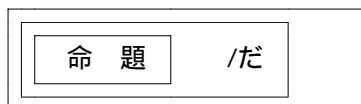


図1-5 例文(16a)～(16h)の構造

一方、例文(16i)の「(よ)う」および例文(16j)の「(意志)」はモダリティ表現である。その証拠に、これらの表現は上に示した通り瞬間的現在時の意志を表す上に、話し手自身の意志に限って表すことができる。

- (25)a. 私は大学に行こう。

1) 後ろに「と思っていた」が付けば適格な文となる。その場合に「大学に行こう」は、引用句の中で瞬間的現在時の意志を表す。

- b. \*あなたは大学に行こう。
- c. \*彼は大学に行こう。
- (26)a. 私は大学に行く。
- b. \*あなたは大学に行く。
- c. \*彼は大学に行く。

こうした事実により、「(よ)う」と「(意志)」はモダリティであることが証明される。例文(16i) (16j)の構造を図1-6に示す。

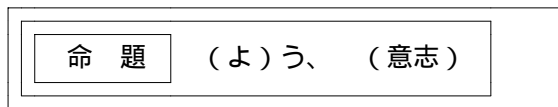


図1-6 例文(16i) (16j)の構造

ところで、中右(1994)は「つもりだ」を命題態度のモダリティ<sup>1)</sup>の一つである「拘束判断のモダリティ」<sup>2)</sup>に分類している。その理由は、中右のモダリティ論では命題の真理値と関わるものを広く命題態度のモダリティ(Sモダリティ)としているためである。<sup>3)</sup>これに対し、本研究では「つもりだ」によって話し手自身が拘束されるのは、語用論的な要因によるものであると考える。話し手自身が「私は~つもりだ」と意志表明をすれば、遂行発話として受け止められ、話し手自身を拘束することになる。しかし、これは「約束をする」という場面で「私は~つもりだ」という意志表明をすることによる派生的な現象である。このことは「(よ)う」や「(意志)」などにも共通することである。したがって、本研究では「拘束判断のモダリティ」という類型は立てない。

- 
- 1) 中右(1994)は、「命題態度のモダリティ」を「真偽判断のモダリティ」(だろう、にちがいない、たぶん、たしか、よ、ね等)、「判断保留のモダリティ」( (だろう)か、という、そうだ、うわさでは等)、「是非判断のモダリティ」(疑問に思う、賛成だ等)、「価値判断のモダリティ」(残念に思う、あいにく、愚かにも等)、「拘束判断のモダリティ」の五つに分類している。中右は英語の分類を先に行ない、その日本語訳に相当するものをそのまま当てはめているため、一つの類型に異質なものが混在してしまっている。たとえば、「よ」や「ね」は聞き手に対する態度表明を行なうため、「発話態度のモダリティ」に分類するのが妥当である。
  - 2) 中右(1994: 57)は、これを「命題内容が指し示す未来の行為の実現に関して、その行為遂行者を拘束する話し手の立場を表明するモダリティのこと」と説明している。「つもりだ」の他には、「たい(と思います)、(と)約束します/誓います、ろ、てくれ、てください、てほしい、ていただきたい、(よう)お願いします/頼みます」が挙げられている。
  - 3) 「命題態度とは命題内容の真理値(真か偽の値)について話し手がぐだす査定判断のことである」(中右1994: 41)。「Sモダリティ S-MOD とは、話し手が発話時点において全体命題 PROP<sup>4</sup> (の真偽いずれかの値) に対してとる信任態度(コミットメント)のことをいう」(中右1994: 54)。

以上に論じたように、本研究では 心的態度、話し手、発話時点（瞬間的現在時）の三つの要素がそろったものをモダリティとし、それ以外は全て命題に含めて考える。したがって、「つもりだ」のように心的な気持ちを表したもののでも、客体的に表現されたものは命題となる。本研究ではこうした表現を心的事態と呼ぶことにする。心的事態には、「つもりだ」の他に「しそうだ」、「べきだ」、「はずだ」、「うれしい」、「たのしい」、「心配だ」などが含まれる。心的態度がモダリティに属すのに対し、心的事態は命題に属す。両者の境界が命題とモダリティの境界となる。

#### 2.4 命題とモダリティの分類基準

次に命題とモダリティの分類基準を設定する。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため、それ自体は真偽の対象とならず、連体修飾成分ともならず、<sup>1)</sup> 過去文の中に収まらない<sup>2)</sup> という性質をもつ。一方、命題は客観的な成分であるため、こうした制限が加わらない。

そこで、本研究では命題とモダリティの分類基準として、否定の焦点となるかどうか（否定の焦点テスト）、疑問の焦点となるかどうか（疑問の焦点テスト）、文代名詞の対象となるかどうか（文代名詞化テスト）、連体修飾成分となるかどうか（連体修飾テスト）、過去文の中に収まるかどうか（過去テスト）の5つの主観性判定テストを実施する。<sup>3)</sup> これらのテストで適格となるものは命題に属し、不適格となるものはモダリティに属すと考えられる。このほか、命題とモダリティの分類基準には、否定形となるかど

1) この基準は益岡（1999：47）に基づく。益岡は「本稿では、「コト」という名詞を内容補充する連体修飾部に入り得る要素を命題内要素とみなすという基準を立てたいと考える。例えば、「私が仕事を必要としていること」という例であれば、「私が仕事を必要としている」を命題内要素と見るということである」と説明している。益岡はコトという名詞を修飾するものに限定して例文を集めているが、コトは命題の一般概念を表したものであるため、広く連体修飾成分となるものを命題としてよい。ただし、丁寧さのモダリティの「ます」は、「次に止まります駅は新横浜です」のように連体修飾成分となるため、除外して考える必要がある。

2) この基準は先行研究で広く使われている。しかし、タ形の内側に来るもの全てが過去文の対象となるとは限らない。たとえば、従来「ニチガイナカタ」は発話以前の心的態度を表すとされてきた。しかし、こうした表現は小説などの語り物で、「～ニチガイナイという状況が発話時点以前にあった」という意味で使われる表現である。過去の推量判断を述べるには「ニチガイナイと思った」と言うのが普通である（詳細は第2章2.5節で論じる）。もう一つ注意が必要なのは、丁寧さのモダリティを表す「ます」や「です」である。これは「先ほど止まりました駅は新横浜でした」のようにタ形の内側に来るため、除外して考える必要がある。

3) 否定の焦点テスト、疑問の焦点テストは Greenbaum（1969）、澤田（1978）による。文代名詞化テストは 澤田（1978）による。

うか（否定形テスト）という基準もある。<sup>1)</sup> ただし、この基準は副詞のように元来否定形を持たないものには適用できない。

次に、主観性判定テストが命題とモダリティの区別に有効であることを「かわいい猫だよ」という表現を例に確認する。

(27)a. かわいい猫ではなく、かわいくない猫です。（否定の焦点テスト）

b. \*かわいい猫だではなく、かわいい猫かもしれないです。（＃）

c. \*かわいい猫だよではなく、かわいい猫だねです。（＃）

(28)a. かわいい猫ですか、かわいくない猫ですか？（疑問の焦点テスト）

b. \*かわいい猫だですか、かわいい猫かもしれないですか？（＃）

c. \*かわいい猫だよですか、かわいい猫だねですか？（＃）

(29) A：かわいい猫だよ。（文代名詞化テスト）

B：それは本当ですか？

（それ＝「かわいい猫」であること）

（それ 「かわいい猫だ」であること）

（それ 「かわいい猫だよ」であること）

(30)a. かわいい猫の目（連体修飾テスト）

b. \*かわいい猫だの目（＃）

c. \*かわいい猫だよの目（＃）

(31)a. かわいい猫でした。（過去テスト）

b. \*かわいい猫だでした。（＃）

c. \*かわいい猫だよでした。（＃）

以上の結果、「かわいい猫だよ」という表現のうち「かわいい猫」の部分は命題に属し、「だ」と「よ」の部分はモダリティに属することが確認された。

1) この基準は仁田（1981）による。仁田は、「蓋然性」は否定を包み込むことができる。「かもしれない」や「にちがいない」自体が否定になることはない。これは、「可能性」を表わす「ことがある」の類が、否定を含むとともに、それ自身も否定形になることを考えれば、蓋然性の特徴として留意すべきである。「可能性」は有る場合もあれば、無い場合もある。それに対して、蓋然性の無い場合は考えられない。零%の蓋然性が有るのである。これは、蓋然性が「可能性」に比べて陳述性、作用性の高いことを示している」（仁田1981：96）とした。

仁田は、「ことがある」、「公算がある」、「恐れがある」、「可能性がある」を「可能性」、「にちがいない」、「かもしれない」を「蓋然性」、「だろう」を「推量」として、可能性と蓋然性を「疑似ムード」、推量を「ムード」と呼んだ。その上で「この順で陳述性、作用性が高くなる」（仁田1981：100）とした。



ここで注意すべき点は、一見テストに通過しているかのように見えても、実際にはそうでない場合があるということである。たとえば、例文(32)に示されるように「だろう」は質問文に使うことができる。

(32) かわいい猫だろうか。

しかし、例文(32)で疑問の焦点となっているのは、「だろう」の部分ではなく「かわいい猫」の部分である。その証拠に、「かわいい猫」と「かわいくない猫」を対比した文は成り立つが、「だろう」と「（無形の確言形）」を対比した文は非文となる。

(33) かわいい猫だろうか、かわいくない猫だろうか。

(34) \*かわいい猫だろうか、かわいい猫か。

主観性判定テストの実施にあたっては、こうした点に注意する必要がある。

以上のようにして命題とモダリティを区別した結果、両者にはそれぞれ次のような種類の属することが分かる。

#### 命題態度のモダリティ

##### 1．真偽判断のモダリティ（事態の成立の真偽性を表す）

たしか、もしかすると、だ／、かもしれない、か

きっと、たぶん、にちがいない、ようだ、らしい、だろう

##### 2．伝聞のモダリティ（事態が他者からの伝聞によるものであることを表す）

するそうだ、という、らしい

##### 3．願望のモダリティ（話し手の瞬間的現在時の願望を表す）

たい（願望）、たくない（否定願望）

##### 4．意志のモダリティ（話し手の瞬間的現在時の意志を表す）

（よ）う、（意）志、ない（否定意志）

#### 命題

##### 1．事態（机、私、行く、高い、かなり、（男）らしい、いつ、どこで）

##### 2．心的事態（たい（願望）、しそうだ（兆候・様相）、ようだ（様態）、べきだ（当為）、つもりだ（意志）、はずだ（道理）、うれしい）

##### 3．ヴォイス（、（ら）れる、（さ）せる）

##### 4．アスペクト（、ている）

##### 5．テンス（、た）

## 6. 極性（肯定・否定）（ 、 ない）

これらは先の7つの文類型の中に埋め込まれてさまざまな文を作る。（直接命題が埋め込まれるものもある。）

「感嘆文」+（命題）	「感情表出文」
「感嘆文」+「願望のモダリティ」	「願望文」
「感嘆文」+「意志のモダリティ」	「意志文」
「感嘆文」+「真偽判断のモダリティ」	「眼前描写文」
「真偽判断文」+「真偽判断のモダリティ」	「想起文」、「認識文」、「推量文」
「伝達文」+（命題）	「感情伝達文」
「伝達文」+「願望のモダリティ」	「願望伝達文」
「伝達文」+「意志のモダリティ」	「意志伝達文」
「伝達文」+「真偽判断のモダリティ」	「知識伝達文」、「推量伝達文」
「伝達文」+「伝聞のモダリティ」	「伝聞文」
「質問文」+「真偽判断のモダリティ」	「質問文」
「（広義）命令文」+（命題）	「（狭義）命令文」、「依頼文」など
「意向文」+「意志のモダリティ」	「申し出文」、「勧誘文」
「挨拶文」+（命題）	「挨拶文」

ところで、いくつかの形式は命題と命題態度のモダリティの両方にまたがって使われるので注意を要する。まず「極性」について説明する。これは「行くコト/行かないコト」のように連体修飾成分となり、「行った/行かなかった」のように過去文の中に収まる。このような「ない」は命題であると判断される。一方、「よし決めた、大学に行かない！」（否定意志）の「ない」は、「よし決めた、大学に行く！」（肯定意志）の「」と同様に、話し手の瞬間的現在時での心的態度を表す。このような「ない」はモダリティであると判断される。図1-7に意志文の構造を示す。

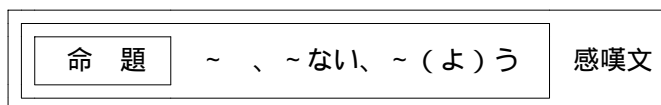


図1-7 意志文の構造

次に「たい」について説明する。「たい」は「飲みたいモノ」のように連体修飾成分となり、「飲みたかった」のように過去文の中に収まる。このような「たい」は命題である

と判断される。一方、「ああ、水が飲みたい!」の「たい」は、話し手の瞬間的現在時での心的態度を表す。このような「たい」はモダリティであると判断される。図1-8に願望文の構造を示す。

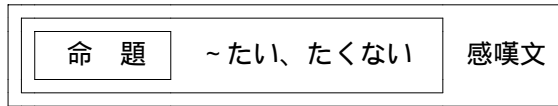


図1-8 願望文の構造

次に心的事態の「ようだ、そうだ、べきだ、つもりだ、はずだ」について説明する。従来、これらの表現はモダリティを表すとされてきた。これに対し、本研究ではこれらの表現は命題を表すと考える。この様子を図式化したのが図1-9である。

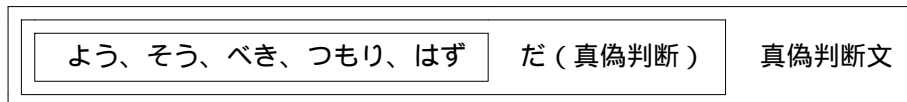


図1-9 心的事態を含む文の構造

すなわち、「そうだ、ようだ、べきだ、つもりだ、はずだ」は、「だ」の部分を除いて全て命題に属すると考えるのである。その理由は、「泣きそうな顔、人間のような顔、言うべき話、買うつもりの本、来るはずの人」のように、「だ」以外の部分が連体修飾成分となるためである。このことは、一般の形容動詞文や名詞文において「元氣だ」「元氣な人」、「病氣だ」「病氣の人」のように、「だ」以外の部分が連体修飾成分となることと並行的に考えられる。（「しそうだ」については第2章4.2節で、「べきだ」については第2章4.3節で論じる。）

ところで、「ようだ」は「まるで男のようだ」のように様態を表す場合には命題として機能するが、「どうも雨のようだ」のように推量を表す場合にはモダリティとして機能する。その証拠に、上の各形式が否定形になるのに対し、推量の「ようだ」は否定形にはならない。「泣きそうにない、人間のようにではない、言うべきではない、買うつもりではない、来るはずがない」は可能であるが、「\*雨が降るようではない」は非文となる。また、上の各形式が「泣きそうですか?、人間のようにですか?、言うべきですか?、買うつもりですか?、来るはずですか?」のように疑問の焦点となるのに対し、「\*雨が降るようですか?」は非文となる。さらに、連体修飾において「\*雨が降るような天気」が非文となることも根拠として挙げられる。こうした事実により、推量の「ようだ」はモダリティ形

式であると判断される。<sup>1)</sup> 推量の「ようだ」の構造を図1-10に示す。

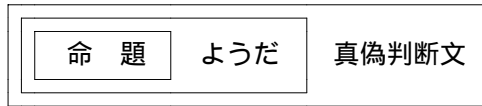


図1-10 推量の「ようだ」の構造

最後に真偽判断の「かもしれない」について説明する。「だ/」は当該の事態の成立が確実であると認識したことを表し、「かもしれない」は他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す。「かもしれない」は、「あの人はもう来ないかもしれない!」のように発話時点における話し手の真偽判断を表す場合にはモダリティとしての性質を示し、「来ないかもしれない人を待つ」のように連体修飾成分となる場合には命題としての性質を示す。事実、「宝くじというものは、当たるかもしれないし当たらないかもしれないものだ」の「かもしれない」は、宝くじの当落が不確実であるという一般的事実を表しているにすぎず、話し手の真偽判断は関与していない。（「かもしれない」については、第3章3節で論じる。）

### 3. 事態の蓋然性と判断の蓋然性

先行研究では、一般に事態の蓋然性と判断の蓋然性が区別されずに議論されることが多かった。そのため、ある副詞と別のある副詞との蓋然性の高さが問題とされた場合に、異質のもの同士で比較されることが多かった。しかし、事態の蓋然性と判断の蓋然性は別々の概念であり、区別して考える必要がある。

「事態の蓋然性」：客体世界における事態成立の可能性の度合い

「判断の蓋然性」：話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合い

前者は「明日は寒波が来る可能性が高い」のように客体世界と関わるものであり、後者は「明日は寒波が来るニチガイナイ」のように話し手の心的態度と関わるものである。これに対応して、副詞にも「明日はカナラズ寒波が来る」のように事態の蓋然性を表すものと、

1) 推量の「ようだ」は、「ような気がする/ような予感がする/ような直感がする/ような感じがする」の意味が、「ようだ」一語で表されたものである。様態の「ようだ」と推量判断の「ようだ」の関係については、第2章4.1節で論じる。

「明日はキット寒波が来る」のように判断の蓋然性を表すものがある。両者は異質のものであり分けて考える必要がある。

このことに関して、三原（1995）は次のような指摘をしている。

一般的に言って概言のムード表現に関する研究において、事態の成立に関する蓋然性と判断に関する蓋然性が時として混同されることもあったように思う。蓋然性という概念はあくまでも話者による判断に限定して用いられるべきである。（三原1995：295）

三原の指摘した通り、事態の蓋然性と判断の蓋然性を区別せず、一律に蓋然性として捉えるのは問題である。ただし、用語の問題として、従来どちらも蓋然性として捉えられてきたことから、本研究では事態の蓋然性、判断の蓋然性と呼び分けることにする。<sup>1)</sup> 前者は命題に属す概念であり、後者はモダリティに属す概念である。

#### 4．先行研究における副詞の二類型

日本語における副詞の研究は、山田（1936）以来多くの分析が試みられてきた。研究者によってどの語を副詞と認定するか、どのように分類するかという点で様々な見解が示されてきたが、いずれも副詞を大きく二つに分類するという点では共通している。本節ではこうした研究の流れを概観する。

##### 4.1 属性副詞と陳述副詞

###### 4.1.1 山田（1936）の研究

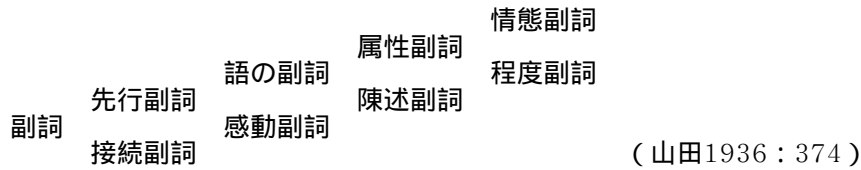
山田（1936：368）は、「副詞は語形に変化なく、常にその依りて立つべき語句の前に存するものなりとす」として、次のように分類した。このうちの「語の副詞」が一般にいう「副詞」に相当する。

---

1) 一般の国語辞典にも、この二つの用法が記述されている。

がいぜん・せい【蓋然性】あることが起こる確実性の度合い。知識・判断などの確からしさの程度。公算。プロバビリティー。（『旺文社国語辞典〔第八版〕』）

【がいぜん・せい 蓋然性】何かが起こり得る確実性の度合い。また、判断などが、多分そうだろうという可能性の程度。確からしさ。（『現代国語例解辞典〔第二版〕』）



山田は「語の副詞」には属性を修飾するものと、陳述を修飾するものがあると見て、両者は区別して考える必要があるとした。

語に依存する副詞は又これを大別して属性の装定をなすものと陳述の装定をなすものの二とするを得べし。この二別は用言に属性と陳述の力との二要素の存する事実とに並行するものなり。従来の説にては副詞の職能は用言の修飾をなすものとした。然れどもそれはその職能の全体にあらざること前に述べし如くなるが、同じく用言を修飾すといひても、その普通の用言に属性と陳述との二者の合併して存在せるものなるを注意せざるを以て副詞の研究は甚だ粗雑なるものなりき。用言は一面に於いて属性觀念をあらはし、一面に於いて陳述をなすものなり。かくて用言に関する方面より見れば副詞にもこの属性の装定をなす性質のものと、陳述の装定をなす性質のものとあり得べき筈なり。(山田1936:372)

山田は「語の副詞」を「情態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の三つに分類した。このうち本研究と関係するのは「程度副詞」と「陳述副詞」である。

「情態副詞」：自ら属性をあらはし、かねて、属性の修飾をなしうるもの

(例) あきらか、つまびらか、はるか、ほのぼの、ちらちら、からり  
漠然、混沌、静粛

「程度副詞」：意義としては単に程度をあらはすものにして専ら他の属性をあらはす副詞又は用言に属してその属性の程度を示すに用ゐらるゝもの

(例) いと、やや、甚だ、頗る、もつとも、たゞ

「陳述副詞」：述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるもの

(例) けだし、もし、よも、をさをさ

このうちの「陳述副詞」は、特定の文末表現と呼応するものである。山田は陳述副詞を次のように下位分類した。

【述語に断言を要する副詞】

一、肯定を要するもの

かならず もつとも 是非 まさに

二、打消を要するもの

いさ え さらさら つやつや つゆ ゆめ

三、強めたる意をあらはすもの。述語はその意によりて肯定又は打消をなす

いやしくも さすが

四、決意をあらはすもの。同上

是非 所詮

五、比況をあらはすもの。同上

恰も さも

【述語に疑惑仮説等にわたるものを要する副詞】

一、述語に疑問の語を要するもの

など なぞ いかゞ あに いかで

二、述語に推測の語を要するもの

けだし よも をさをさ

三、述語が仮定条件を要するもの

もし たとひ よし

さて、蓋然性を表す副詞には、命題部分を修飾する「カナリ」、「アマリ」などと、モダリティ部分を修飾する「キット」、「タブン」などがある。これを山田の分類に当てはめると、前者はほぼ「程度副詞」に相当し、後者はほぼ「陳述副詞」に相当する。しかし、山田の分類には不十分なところがあり、そのまま本研究に適用することはできない。それは次の理由による。

山田は「述語に肯定の断言を要する」陳述副詞として、「カナラズ」、「モットモ」、「ゼヒ」、「マサニ」などを所属させている。しかし、一見同じ肯定の断言と呼応しているように見えても実際には性質が異なっている。たとえば、「カナラズ」が属性の装定をするのに対し、「ゼヒ」は陳述の装定をするという違いがある。<sup>1)</sup>

1) 山田は用言に属性概念と陳述の二つの機能を認めている。しかし、陳述は用言自体の機能ではなくその外側にあるモダリティ部分にある。三浦(1975: 241)にも、「陳述副詞は用言に結びつくのではない。用言は純粹に属性概念を表現するだけで、二種の内容をかねそなえているわけではないからである。陳述副詞は用言に伴う零記号の判断辞や助動詞に結びつくのである」との指摘がある。

- (35)a. 私はカナラズ毎日日記をつけることにしたい。  
 b. 私はゼヒ毎日日記をつけることにしたい。

その証拠に、「カナラズ」が連体修飾成分となるのに対し、「ゼヒ」は連体修飾成分とはならない。

- (36)a. [カナラズ毎日日記をつける]ことが私の目標です。  
 b. \* [ゼヒ毎日日記をつける]ことが私の目標です。

先の例文(35a)は願望文で、単に毎日日記をつけるのではなく、毎日欠かさず日記をつけたいという願望を述べた文である。この文において、「カナラズ」は願望の対象として命題成分となる。その証拠に、この文から「カナラズ」を省くと、願望の内容が単に毎日日記をつけることになるからである。「カナラズ」が叙述の内容に関わるという事実は、「カナラズ」が陳述副詞ではないということを示している。一方、例文(35b)から「ゼヒ」を省いても、話し手の願望の強さこそ変化するものの、願望の内容自体は変わらない。そのため、「ゼヒ」はモダリティとして機能する。<sup>1)</sup>

このように、一口に「述語に肯定の断言を要する」陳述副詞といっても、主観性の点で異なるものが混在している。このことは「打消を要するもの」にも言えることである。その他、「強めたる意をあらはすもの」というのも恣意的な基準であるし、「決意をあらはすもの」と「比況をあらはすもの」を並列させる理由も明確でない。これは山田の分類が直感的に成されたものであるためであると思われる。こうした点を考慮せずに、一律に「陳述の装定をなす」とするのは問題である。<sup>2)</sup>

#### 4.1.2 橋本(1939)の研究

山田が意味によって副詞を分類したのに対し、橋本(1939)は形式の面から分類した。橋本は、活用せず主語や客語にならないものを「副用言」と呼び、これを接続機能を持つ「接続詞」、用言を修飾する「副詞」、体言を修飾する「副体詞」(いわゆる連体詞)の三つに分類した。このうち副詞については、「山田氏は「-と」「-に」のあるものは之を除いたものを副詞とした。独立せぬものを一語とするは贅しがたき故、之をみとめず」(橋本1939:113)と述べ、これを形容動詞の副詞形とした。しかし、橋本の品詞分類は形式面に片寄っており、機能の観点から見た場合に、形容動詞の副詞形を副詞から分離し

---

1) 渡辺(1971:310)は、陳述副詞について「叙述の知的内容量に対しては、全く増減の影響を及ぼすことがない」と指摘している。  
 2) このことに関しては、案野(1996:91)にも同様の批判がある。



て捉えることは必ずしも必要であるとは思われない。また、橋本は「用言を修飾する」ものを副詞と規定しながら、「さうだ」や「しばらくだ」のように述語になったり、「稍北」の「やや」や「最も東」の「モットモ」ように体言を装定するものもあるとしている。こうした規定の曖昧さも問題である。

さらに、橋本は「山田氏の陳述副詞のうち、確める意及び決意を表はすものは、必ずしも、言ひ方を制限しない」（橋本1939：117）として、陳述副詞を特別の述語を要求するものに限定した。しかし、陳述副詞にとって重要なのは有標の形式を要求することではなく、陳述の装定をするという機能にある。したがって、無形の陳述形式を修飾するものを排除するのは問題である。

#### 4.1.3 時枝（1950）の研究

時枝（1950）は、その思想の表現過程の違いによって語を「詞」と「辞」に分類し、語は基本的にいずれか一方に所属するとした。前者は「思想内容或は表現される事柄を、一旦客体化し、概念化した」（時枝1950：51-52）ものであり、後者は「客体界に志向する言語主体の感情、情緒、意志、欲求等を表はす」（時枝1950：54）ものである。ただし、副詞および連体詞は例外で、一語にして概念と同時に修飾的陳述を含むとして、一つの語に二つの機能が備わっているとした。

時枝は「きっぱり」を副詞、「ゆっくり」「はつきり」を体言としているが、これらはすべて「きっぱり言う/ゆっくり言う/はつきり言う」のように動詞を修飾する機能があり、特に区別する必要はない。<sup>1)</sup>

また、時枝は「詞」と「辞」を区別する中で、「辞」を修飾する副詞を一般の副詞と区別して「陳述副詞」と呼び、「恐らく」といえば「だろう」のような推量表現と、「決して」といえば「ない」のような否定表現と、「もし」といえば「ば」のような仮定表現と呼応するとした。

(37) 明日は恐らく晴天だろう。（時枝1950）

(38) 彼はあのことを決して忘れない。（時枝1950）

(39) もし君が行けば僕も行く。（時枝1950）

こうして、「陳述副詞と云はれてゐるものは、云はば、陳述が上下に分裂して表現されたもので、「無論……だ」「決して……ない」「恐らく……だろう」を一の辞と考へるべきであらう」（時枝1950：124）と説明した。

---

1) 鈴木一彦（1959：66）にも同様の批判がある。

たしかに、陳述副詞にはこのような共起関係が見られる。<sup>1)</sup> しかし、時枝のいうように上下で一つの辞と考えるのは問題である。なぜならば、これらは古語の「な～そ」のような一対一の対応関係にあるわけではないからである。たとえば、呼応の例として「キット～ダロウ」の取り上げられることが多いが、「キット」は「行くだろう」（推量）、「行きます」（意志）、「行け」（命令）、「行こう」（勧誘）など複数の表現と共起するし、「ダロウ」も「キット」、「タブン」、「オソラク」など複数の表現と共起する。こうしたことから、「キット」と「ダロウ」が共起して一つの表現と関わるとしても、それぞれの語は独立した機能を担っていると考えられる。

#### 4.1.4 渡辺（1971）の研究

渡辺（1971）は、「職能」という観点から副詞を連体副詞（いわゆる連体詞）、連用副詞（同程度副詞）、誘導副詞（同陳述副詞）、接続副詞（同接続詞）、並列副詞（同接続詞）、陳述副詞（同感動詞）の6つに分類した。このうち本研究と関係のあるのは連用副詞と誘導副詞である。<sup>2)</sup> それぞれについて、渡辺は次のように説明している。

美しく咲く花

静かに読むから頭に入るのだ。

ちょっと登ってごらん。

などと言う場合、統叙作用である「咲く・読む・登る」などの動作は、当然のこととして「如何に」咲き「如何に」読み「如何に」登るか、などを更に問いうる動作であって、そこにはその動作の行なわれる状態が、動作に必然的に含まれる属性として、未分析のままに内蔵されていると考えられる。そして統叙素材に未分析のままに内蔵されていると考えられる。そして統叙素材に未分析のままに内蔵されている属性概念を分析抽出したものが、連用素材としての「美しい」であり「静かだ」であり「ちょっと」に他ならないのである。（渡辺1971：156）

例えば「決して」や「もし」が否定を表わし仮定を表わす、と考えるのは適當ではないであろう。否定や仮定の表現は何かの素材的要素を対象として成立し、その素材

1) 糸川（1989：105）は、「確かに頻度の上では、陳述副詞には、「呼応」といいたいような傾向が観察されるようではある」、「一対一対応ともいえないうちは、型としてとらえることにあまり意義が認められないように思われる」としている。糸川の言うとおり、陳述副詞と呼応相手を固定した表現のように捉えるのは問題である。ただ一対一対応でないとはいえ、特定の表現との対応が見られることも事実である。本研究ではこの現象を「共起」と呼ぶことにする。

2) 渡辺（1957）では、それぞれ「程度副詞」、「陳述副詞」と呼んでいる。

的要素を完全に支配する。

美しくない 桜なら

という場合、否定の表現は素材的要素「美しい」を完全に支配しているが、こういうのが否定の表現なり仮定の表現なりの真のあり方である。これに対して

決して美しい もし桜だ

という言い方が、否定表現や仮定表現であり得ないということから明瞭のように、「決して」や「もし」は、否定そのものを表現し仮定そのものを表現するとは認められないのである。それらの役割は真の否定表現や真の仮定表現に先行して、その真の否定表現・真の仮定表現の予告をする、というに留るのである。これが本書の誘導の副詞である。すなわち表現の本体は後続する部分にあり、その後続する本体を予告しそれを誘導する、それがこの関係構成的職能の実質であると言うことが出来る。山田博士に従って、この職能を「陳述を修飾」と考えることには、「陳述」という述語と共に「修飾」という述語に疑問がある。この職能は誘導対象を持ちはしても、連体展叙・連用展叙のような修飾・限定の対象を持ちはしないからである。（渡辺 1971：311-312）

渡辺の研究は単に呼応関係に着目するのではなく、構文的職能の観点から捉えようとしている。これは品詞の違いを越え、機能的に同じものを同列に扱うことができるという点で一般性のある考え方である。しかし、「展叙」や「統叙」といった概念になお議論の余地がある上に、ある一つの職能を表すとされるものの中に異質なものが混在しているといった不備が見られる。<sup>1)</sup>

渡辺が誘導副詞と誘導対象との機能を分離したことは評価できる。しかし、「キット」が「行くだらう」（推量）、「行きます」（意志）、「行け」（命令）、「行こう」（勧誘）など複数の表現と共起したり、「ダロウ」が「キット」、「タブン」、「オソラク」など複数の副詞と共起したりすることは、単に誘導という概念だけでは説明することができない。さらに、「キット」と違って「タブン」と「オソラク」の場合、推量とは共起するが、意志、命令、勧誘とは共起しないということも、誘導という概念だけでは説明することができない。

さらに、「ゼンゼン」と「ケッシテ」はともに否定表現を誘導するが、これを単に否定を誘導するというだけでは、次のような違いを説明することができない。

(40)a. この問題はどうか解けばいいのかゼンゼンわかりません。

---

1) 北原（1975）にこの点に関する論及がある。

- b. \*この問題はどうか解けばいいのかケッシテわかりません。
- (41)a. \*私はあの時のことをゼンゼン忘れないつもりだ。
- b. 私はあの時のことをケッシテ忘れないつもりだ。

例文(40)は、「どれくらいわかるのか」について述べたものである。こうした場合には、「ケッシテ」ではなく「ゼンゼン」が使われる。「ゼンゼン」は事態の否定を表すというよりは、「スベテわかる/カナリわかる/スコシわかる/アマリわからない/スコシモわからない」と同様に、事態の程度量を表す表現であるといった方が適切である。一方、例文(41)は、どれくらい忘れるのかという程度量を述べているのではなく、「あの時のことを忘れる」という事態の成立する可能性が0であることを述べている。こうした違いは、渡辺の誘導という概念では説明できない。

渡辺(1971:310)は、誘導副詞について「叙述の知的内容量に対しては、全く増減の影響を及ぼすことがない」と説明している。しかし、「ゼンゼン」は程度量という叙述の知的内容量に影響を及ぼすし、「ケッシテ」は事態の蓋然性に影響を及ぼす。<sup>1)</sup> そうすると、誘導副詞とは何か、連用副詞とは何かということが改めて問い直されなければならない。これに関して案野(1996:92)は、「渡辺は、誘導成分の概念を「表現主体の批評内容」としているが、極端なことを言うならば、程度副詞の程度概念も先に記したように、表現主体の主観的な評価を伴うとも言えるし、(中略)程度概念を持ち合わせる語を誘導するとも言えるのである。「誘導」の表す範囲を「修飾」にまで広げた例であり、述語としての厳密性は薄れることになる」と批判している。この点については、一文の中で事態を表す部分と判断を表す部分とを厳密に区別する必要がある。

## 4.2 命題副詞とモダリティ副詞

### 4.2.1 中右(1980)の研究

中右(1980:159)は、「命題」を「話者が切り取った現実世界の状況(出来事、状態、行為、過程など)」、「モダリティ」を「発話時における話者の心的態度を叙述したもの」と定義し、副詞には命題の内側にある「命題内副詞」と命題の外側にある「命題外副詞」の二つがあるとした。

---

1) 渡辺(1971)は、「決して美しい」という例文を挙げて、ケッシテを冠することによって些かも詳しさを増さないと述べている。たしかに、「美しさ」の程度についてはそうであるが、それを美しいとする事態の蓋然性には影響を与える。「ケッシテ」が判断の蓋然性ではなく事態の蓋然性に属することは、「ケッシテ美しい人」のように連体修飾成分となることから証明できる。

- 命題外副詞...(1) 価値判断の副詞、(2) 真偽判断の副詞、(3) 発話行為の副詞、  
 (4) 領域指定の副詞<sup>1)</sup>  
 命題内副詞...(6) 時・アスペクトの副詞、(7) 場所の副詞、(8) 頻度の副詞、  
 (9) 強意・程度の副詞、(10) 様態の副詞

先の陳述・誘導副詞をこれと比較すると、多くの陳述・誘導副詞が命題外副詞に対応している。しかし、従来陳述・誘導副詞に分類されていた「ゼンゼン、ケッシテ、マツタク、タトエ、カリニ(モ)」は、命題外副詞ではなく命題内副詞のうちの「(9)強意・程度の副詞」に分類されている。これは中右の捉えているモダリティが「瞬間的現在時の話者の心的態度」(中右1980:159)に限られているためである。

ところで、「(9) 強意・程度の副詞」は雑多なものの集合となっており、上の例のほか「スコシ、チョット、タダタンニ、カンゼンニ、ゼツタイニ、タイヘン、タイソウ、ホントウニ、ヒジョウニ、カナリ、モット、モットモ、ハナハダ、ナカナカ、ナントナク、キワメテ、ホトンド、アエテ、アクマデ(モ)、トウテイ、イカニモ」が挙げられている。この点に関しては、中右自身も分類に不備のあることを認めている。

この分類で(9)に含まれる一部の副詞については問題が残る。第1に、強意の副詞と程度の副詞を分ける明確な論拠が求められる。第2に、強意の副詞は、概して、命題外副詞(モダリティの副詞)とするのが妥当と思われる理由がある。たとえば、「ない」と呼応関係にある「決して」、「到底」、「ほとんど」など。(中右1980:166)

このうちの第2の点に関しては問題がある。中右は「ない」と呼応関係にあることを根拠に、「ケッシテ」、「トウテイ」、「ホトンド」がモダリティ副詞に入るのではないかと考えている。しかし、これらの副詞は過去文の中に収まるという性質がある。

- (42) あれから6時に駅に着くのは{\*ケッシテ/トウテイ/ホトンド}不可能だった。  
 (43) この問題は解き方が{\*ケッシテ/\*トウテイ/ホトンド}わかりませんでした。  
 (44) 太郎はあの時のことを{ケッシテ/\*トウテイ/\*ホトンド}忘れないつもりだった。

さらに、これらの副詞は連体修飾成分となるという性質がある。

---

1) 中右(1980)では、次に「(5)接続副詞」が取り上げられ、接続副詞をモダリティの文副詞に含める研究もあるが、中右自身の枠組みでは接続詞と考えると説明されている。

- (45) {トウテイ/ホトンド} 不可能なコト
- (46) ホトンドわからないコト
- (47) ケッシテ忘れないコト

こうした事実により、これらの副詞は命題副詞であることが証明される。

もし、否定と呼応するという理由でモダリティ副詞とするならば、「このたびの事件はハナハダ遺憾だ」の「ハナハダ」や、「この問題は解き方がホトンドわかる」の「ホトンド」は肯定と呼応するモダリティ副詞ということになる。しかし、これらは客体的な程度量を規定するため命題副詞に分類される。これと平行的に考えると、「トウテイ」や「ホトンド」も客体的な程度量を規定することから命題副詞に分類するのが妥当である。

一方、例文(44)の「ケッシテ」は話し手の否定意志と結びついているためモダリティのように見える。しかし、これは過去文の中に収まっており、主体が話し手以外の第三者であるというように、「発話時における話し手の心的態度」というモダリティの基準から外れている。ところが、同じ「ケッシテ」でも「～(する)な」という禁止を表すモダリティ表現と共起する場合もある。

- (48) あの時のことをケッシテ忘れるな。

こうした点については、なお検討する必要がある。

その他、中右は「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」などを一律に「真偽判断の副詞」としている。しかし、これらには単なる蓋然性の違いでは説明のできない違いがある。この点についても検討が必要である。中右の副詞の二分類は、文の構造に沿ったもので、表面的な呼応とか誘導による分類と比べて優れている。しかし、今述べたような問題も残っており、さらに考察を進める必要がある。

#### 4.2.2 益岡(1991)の研究

益岡(1991:34)は、モダリティを「表現者の表現時での判断・表現態度を表す要素」と定義し、この定義に従うものを一次的モダリティ(中右のモダリティに相当)、客観化を許すものを二次的モダリティとした。<sup>1)</sup> 益岡のモダリティ論の特徴は、モダリティを階層構造として捉えている点にある。益岡は、モダリティには核要素(「ダロウ」、「ラシイ」、「ヨウダ」、「カ」など)と呼応要素(「タブン」、「ドウモ」、「イッタイ」など)とが考え、それらが命題の外側を順次挟み込んでいくといったモダリティ観に

1) 仁田(1989、1991)は、「真性モダリティ」、「疑似モダリティ」と呼んでいる。

立っている。しかし、ある要素と別のある要素が本当に呼応関係にあるのかといった点や、形式的に外側にある成分が本当に上位のモダリティなのか、といった点で論証がなされていない。

副詞と文末形式の共起について、益岡は「たぶん、花子はもうすぐ帰って来るだろう」という文を例にして次のように論じている。<sup>1)</sup>

この例では、「だろう」は、真偽判断の対象としてふさわしい内容を表す要素の存在を要求するという意味において、主要素の機能を果たしている。そして、真偽判断の対象を表し、「だろう」に対する従要素の位置にあるのが、「花子はもうすぐ帰って来る」という要素である。これに対して、「たぶん」は真偽判断の対象に含まれるのではなく、主要素「だろう」と相応ずる要素である。

そこで、依存関係における主要素として働くモダリティ形式を「モダリティの核要素」、その形式と同じカテゴリーに属し文中でそれと呼応するモダリティ形式を「モダリティの呼応要素」、とそれぞれ呼ぶ（以下略）（益岡1991：41）

さらに益岡は次のような指摘をしている。

例えば、「きっと」、「たぶん」、「あるいは」は確かさの度合いを表す代表的な副詞であるが、これらはそれぞれ、非常に高い度合い、かなり高い度合い、低い度合い、を表現するのに用いられる。そして、次の例からわかるように、「きっと」は「に違いない」と共起し、「あるいは」は「かもしれない」と共起する。

(26) そのおかあさんは、きっとそのことを悟られたに相違ない。（寿岳章子「暮しの京ことば」）

(27) あるいは直子が僕に対して腹を立てていたのは、キスギと最後に会って話をしたのが彼女ではなく僕だったからかもしれない。（「ノルウェイの森」）

要点として強調しておかなければならないのは、「に違いない」と「かもしれない」が確かさの度合いの中の特定のものを表すという点である。どちらも共起する副詞が特定のものに限られるわけである。これに対して、前節で論じた「だろう」は、確かさの度合いを表す副詞と共起できることは事実であるが、特定の度合いしか表せないというのではなく、基本的には確かさの度合いに限定はない。「きっと」、「たぶん」

1) その他、「ドウモ〜ラシイ・ヨウダ」（真偽判断のモダリティ）、「ムカシ・カツテ・モウスグ〜タ」（テンスのモダリティ）、「ゼヒ〜テクダサイ」、「イッタイ〜カ」（表現類型のモダリティ）、「ケッシテ・カナラズシモ〜ナイ」（みとめ方のモダリティ）なども同様の依存関係にあるとしている。

といっしょに使えることは、(18) (19)に示される通りである。<sup>1)</sup> ただし、「あるいは」と共起し難いことからすると、あまり度合いが低い場合は、断定保留の基本的表現にはそぐわないと言えそうである。(益岡1991:115-116)

このように、多くの副詞研究および文末形式の研究では、文末形式の意味がこうだから副詞の意味はこうであるとか、副詞の意味がこうだから文末形式の意味はこうであるという議論を行なっている。しかし、こうした議論は次の点で問題となる。

1. 益岡の始めの文章では「呼応」という表現を使い、次の文では「共起」という表現を使っている。たしかに、これらの副詞と文末形式は共起関係にあると言ってよい。しかし、これらは古語の「ナ～ソ」のように呼応と呼べるほど固く結び付いているわけではない。
2. 益岡は「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」が特定の確かさを表し分ける文末形式であることを、「キット」や「アルイハ」との共起を根拠に説明している。しかし、「キット」や「アルイハ」が確かさの度合いを表す副詞であることは証明されていない。
3. 益岡は、「ダロウ」は基本的に確かさの度合いに限定がないとしながら、「アルイハ」と共起し難いことを理由に、「あまり度合いが低い場合」は断定保留の基本的表現にはそぐわないとしている。しかし、「あまり度合いが低い場合」というのがどのような場合なのかの説明はない。たとえば、「あの男は賄賂なんか受け取らないと信じていたけど、これだけの証拠がある以上アルイハ本当に受け取ったのかもしれない」といった文脈では、「アルイハ」の確かさの度合いが低いとは言えない。ところが、その場合でも「ダロウ」との共起は困難である。こうした点について、単なる蓋然性の違いとして論じるのは問題である。

副詞と文末形式に一定の共起関係のあることは確かである。しかし、文末形式の意味がこうだから副詞の意味はこうであるとか、副詞の意味がこうだから文末形式の意味はこうであるということは簡単には言えない。たとえば、「ソウダ」と「ヨウダ」はともに「ドウヤラ」と共起関係にある。

---

1) 益岡の挙げた例文(18) (19)は次のとおり。

(18) 典ちゃんの勘は、たぶん当たっているだろうね。(宮本輝「花の降る午後」)

(19) 一人ぼっちで二十歳の誕生日を過すというのはきっと辛いものだろう。(村上春樹「ノルウェイの森」)



- (49)a. 明日はドウヤラ雨が降りソウダ。  
b. 明日はドウヤラ雨が降るヨウダ。

しかし、第2章4.2節で考察するように、「ソウダ」と「ヨウダ」には命題とモダリティの違いがある。こうした違いは、単に副詞との共起関係を見るだけでは明らかとならない。

以上のことから、本研究では副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味とを独立に考える立場を取る。「共起」と「呼応」に関しては、工藤（1982）にも次のような指摘がある。

「共起」現象は、同じレベルに同居しているということだから、比較的単純に形式化しうる。「呼応」は、単なる同居ではなく、むすびつきであるから、つきつめていけば“意味”的關係である。「ぜひ私も行きたい。」の「ぜひ」を話し手の希望と呼応しているとするか、有情主体の希望と呼応しているとするか、実現の必要性と呼応しているとするか、という問題が生じるのも、このためである。最終的には分析者の解釈力が問われることになる。

しかしまた、「共起」と「呼応」が基本的に（あるいは大多数の場合というべきか）平行関係にあることも、事実である。（工藤1982：71）

益岡がモダリティを核要素と呼応要素から成ると捉えたのは、益岡のモダリティ観が命題を各種のモダリティが包み込んでいくものであることに起因している。一方、本研究では、始めに文類型のモダリティ（「感嘆文」、「真偽判断文」、「伝達文」、「質問文」、「命令文」、「意向文」、「挨拶文」）があり、その中に順次必要な成分が埋め込まれていくというモダリティ観に立っている。したがって、特定の副詞と文末のモダリティ形式が共起するのは、ある文が意味的に関連のある副詞や文末のモダリティ形式を従えた結果であると考えられる。本研究で考える副詞と文末のモダリティ形式の関係は、核要素と呼応要素のような密接なものではなく、意味的に関連はするものの互いに独立して機能するものであると考えられる。

#### 4.2.3 工藤（1982）の研究

工藤（1982）は、いわゆるモダリティを「叙法性 modality」と呼んだ。工藤は叙法性を「話し手の立場からする、文の叙述内容と、現実および聞き手との関係づけの文法的表現」（工藤1982：50）と定義し、叙法性に一次的な基本叙法と二次的な疑似叙法のあることを論じている。

「するようだ・しそうだ・するにちがいない・するにきまっている・すると見える」等々の形式が、過去形をもち、連体形・条件形など文中の位置に立つ語形（または機能）をもち、また、判定作用の主が必ずしも話し手ではない、といった性格をもつ。これらを、二次的叙法、あるいは疑似叙法 *quasi-modality* とよんでおく。先の定義のうち「話し手の立場からする」という部分が間接化される点で疑似である」（工藤1982：51）

その上で、「本稿でいう《叙法副詞》とは、以上のような疑似叙法をも含めた文の叙法性に関わりをもつ副詞である、とラフに規定しておく」（工藤1982：52）として、副詞の中に叙法副詞という一類型を立てた。

工藤の叙法副詞の分類は、いまだ恣意的な面が残っており、検討の余地が多分に残されているが、注目すべきは、一般に「蓋然性」と呼ばれているものに、異なる二つの種類のあることを指摘した点である。

この表を見れば、推量的な副詞群は、四つにひとまず分けられよう。かりに名まえもつけておけば、

確信 : きっと かならず ぜったい(に)  
 推測 : おそらく たぶん さぞ おおかた etc.  
 推定 : どうやら どうも よほど  
 不確定 : あるいは もしかすれば ひょっとしたら etc.

しかし、四つに区分しうるということ以上に、ここで重視したいのは、この四種の相互関係、いわゆる連続的な関係である。連続は二つの といっても根は同じ、二つの面と言える。

ひとつは、対象面から言えば事態実現の確実さ（蓋然性）が、作用面から言えば話し手の確信の度合いが、 から の方向で低くなっていくことである。（工藤1982：65）

工藤の指摘は、事態の蓋然性と判断の蓋然性とを分けて考える本研究と通じるところがある。しかし、次の点で重要な違いがある。たとえば、「明日はキット雨だ」という発話において、「キット」は話し手の高い確信を表しており、実際に雨が降る確率も高いであろう。その意味では、対象面から見た確実さと作用面から見た確信度は関連がある。<sup>1)</sup> しかし、だからといって「キット」が事態実現の確実さをも表しているとは言えない。「キット」はあくまでも作用面から確信度を表しているにすぎず、対象面から見た確実さは派生

1) 「対象面」と「作用面」は、本研究でいう「事態」と「判断」に相当する。

的に伴う現象である。他方、「この地方では雨が降ればカナラズ土砂降りになる」と言ったとき、「カナラズ」は客観的な事態実現の確実さを表している。事態実現の確実さが話し手の確信とつながるとしても、「カナラズ」自体が話し手の確信の高さを表すわけではない。以上のことから、本研究では事態の蓋然性と判断の蓋然性は独立した概念であると考ええる。

#### 4.2.4 森本（1994）の研究

森本（1994）は、次の意味条件をみたす副詞を S S A 副詞（a speaker's subjective attitude）と定義した。

話し手が自分の言うことに対し、主観的／心理的態度を表現するものであって、文の主語として表される行為作用主体の主観的／心理的態度を表現するものではない。  
（森本1994：26）

その上で、各 S S A 副詞が平叙文に使えるか、過去平叙文に使えるか、ダロウ構文に使えるか、ラシイ構文に使えるか、ウ／ヨウ構文（意向文）に使えるかなどの共起関係テストを行ない、その特徴の違いによって以下のように下位分類した。

#### 【グループA〔+平叙文〕】

##### グループA 1〔-過去平叙文〕

- A 11〔+だろう〕 たぶん、おそらく、さぞ、まさか、きっと、かならず、  
ぜったい、ひょっとしたら
- A 12〔+だろう〕 どうせ、しょせん
- A 13〔-だろう〕 どうも、どうやら

##### グループA 2〔+過去平叙文〕

- A 21〔+だろう〕 やはり、けっきょく、とうぜん
- A 22〔-だろう〕 さいわい(に(も))、あいにく、うんよく、寛容にも
- A 23〔-だろう〕 たしかに、たしか、あきらかに、もちろん、じつは、事  
実
- A 24〔-だろう〕 しょうじき

#### 【グループB〔-平叙文〕】

- B 1〔-意向文〕 どうぞ、どうか
- B 2〔+意向文〕 ぜひ

森本の研究は、いわゆるモダリティ副詞を、共起関係テストという客観的な基準で分類しようとした点で評価できる。さらに、先の工藤（1982）などの行なった類義分析を進め、その意味的な違いにまで踏み込もうとした点で価値のある研究である。

しかし、次の点で問題が残されている。第1の問題点は、分類基準の適用順が恣意的であるという点である。森本は、最初に平叙文に使えるかどうかで分け、次に過去文に使えるかどうかで分けるというような順序を取っているが、なぜこのような適用順であるのかが明確ではない。たとえば、森本の分類によるとA22とA23は近い関係にある。しかし、A22が「運」や「価値判断」を表すのに対し、A23は「真理性」や「確実性」<sup>1)</sup>を表すというように、両者は意味的にかなり違っている。蓋然性を表すという意味的な近さからいえば、A23はむしろA11と近い関係にある。分類基準の適用順が違っていれば、A23とA11は近い位置に収まっていた可能性もある。

第2の問題点は、分類基準の立て方が恣意的であるという点である。たとえば、A13がA11と区別されているのは、ダロウ構文との共起が不自然で、ラシイ構文と共起するのが自然であるとの理由による。それに従えば、A11の「ヒョットシタラ」は、ダロウ構文との共起が不自然で、カモシレナイ構文やノデハナイカ構文と共起するのが自然であるため、A11から独立させてよいはずである。また、森本は共起関係テストに加え意味的な違いも重視しているが、何をもって意味的な違いとするのかが恣意的に決められている。たとえば、A23では「事実確認」を表す「タシカニ」と「文の内容の真理値についての意見」を表す「ジツハ」という、意味的に異質なものが同居している。<sup>2)</sup> しかも、前者は「タシカニ聞いたことのある話」のように連体修飾成分となるため、命題副詞であると考えられる。こうした点を見ると、一見客観的なテストによって分類しているように見えても、実際には恣意的な分類に陥っていることが明らかである。

第3の問題点は、蓋然性の定義上、重要な部分で一貫性に欠けるという点である。森本は、「ゼツタイニ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」などの副詞について、「蓋然性の程度」（本研究でいう事態の蓋然性）ではなく、「話し手の信念の程度」（本研究でいう判断の蓋然性）を表すと考えるべきであることを示唆している。

これらの副詞は、かれらの真実についての信念の度をあらわすのである。こうして、「蓋然性の程度」は「話し手の信念の程度」に読み替えることができる。筆者の直感では、この、後の解釈の方が、日本語の副詞についてより現実に即した解釈のように思われる（森本1994：65）

1) 「運」、「価値判断」、「真理性」、「確実性」という表現は、森本（1994：58）による。

2) 「事実確認」という表現は森本（1994：110）、「文の内容の真理値についての意見」という表現は森本（1994：114）による。

ところが、実際にこれらの副詞の意味記述をする際には、両者を分けることなく単に蓋然性が高いか低いかということで議論してしまっている。結局、森本は「蓋然性の程度」と「話し手の信念の程度」を区別しているようで、区別しきれていないのである。

#### 4.3 4 節のまとめ

以上のように、先行研究において副詞は大きく二つに分類されてきた。すなわち、山田（1936）、橋本（1939）、時枝（1950）の「程度副詞」（および「情態副詞」）と「陳述副詞」、渡辺（1971）の「連用副詞」と「誘導副詞」、中右（1980）の「命題内副詞」と「命題外副詞」などである。益岡（1991）のモダリティの呼応要素、工藤（1982）の叙法副詞、森本（1994）のSSA副詞は、中右の「命題外副詞」に相当する。

下に先行研究の問題点をまとめておく。

1. 山田（1936）は、「肯定の断言」と呼応するとか「打消」を要するなどの基準によって「陳述副詞」を設定した。しかし、このような分類では、命題に属するものでも「陳述の装定をなす」とされるものが出てくる。
2. 橋本（1939）は、形式の面から副詞を分類した。しかし、陳述副詞にとって重要なのは特別の形式を要求することではなく、その機能が陳述の装定をすることである。したがって、無形の陳述を修飾するものを排除するのは問題である。
3. 時枝（1950）の言うように、陳述副詞と文末形式には共起関係が見られる。しかし、両者は独立した機能を持っていると考えるべきで、上下で一つの辞を表すと考えるのは問題である。益岡（1991）にも同様の問題が見られる。
4. 渡辺（1971）は、「表現主体の批判内容」について厳密に定義していないため、一文の中で事態を表す部分と判断を表す部分とを明確に区別することができない。したがって、連用副詞と誘導副詞の区別が曖昧になる危険性がある。
5. 中右（1980）は、「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」などを一律に「真偽判断の副詞」としているが、これらには単なる蓋然性の違いでは説明のできない違いがある。この点についての説明が必要である。
6. 工藤（1982）は、対象面から見た「事態実現の確実さ（蓋然性）」と、作用面から見た「話し手の確信の度合い」を分けて捉えている点で優れている。しかし、一つの形式が二つの側面を同時に表していると考えるのは問題である。
7. 森本（1994）は、明確な分類基準によってSSA副詞の分類をしようと試みている。しかし、その基準の適用順には検討の余地がある。さらに、森本は「蓋

然性の程度」と「話し手の信念の程度」を区別しているようではあるが、結局は区別しないままに分析が行なわれている。

以上の問題点を踏まえ、本研究ではモダリティ論の立場から蓋然性を表す副詞の意味記述を行なう。

## 5．本研究の構成

第1章では、研究の目的、命題とモダリティ、事態の蓋然性と判断の蓋然性、先行研究における副詞の二類型について論じてきた。以下、本研究の構成は次の通りである。

第2章では、蓋然性を表す文末表現「80パーセントデアル」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」、「ソウダ」、「(ような)気ガスル」、「ト思ウ」、「」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」を対象に、これらの表現が命題に属するのかモダリティに属するのかを分析する。

第3章では、文末のモダリティ形式「」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」を対象に、それぞれの形式の判断のあり方の違いについて分析する。

第4章では、「キット」、「カナラズ」、「キマッテ」を対象に分析し、「キット」が判断の蓋然性を表し、「カナラズ」と「キマッテ」が事態の蓋然性を表すことを明らかにする。

第5章では、「タブン」が判断の蓋然性を表し、「タイテイ」が事態の蓋然性を表すこと、「キット」、「タブン」、「オソラク」に推量判断のあり方に違いのあること、大部分の意味を表す「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」に事態の切り取り方に違いのあること、「サゾ」が共感に基づく推量判断を表すことを明らかにする。

第6章では、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」を対象に分析し、想定外の事態の成立可能性を表すことを明らかにする。

第7章では、「ドウモ」、「ドウヤラ」を対象に分析し、事態の不確定性を表すことを明らかにする。

第8章では、「タシカ」を対象に分析し、話し手の記憶による事態成立の確認を表すことを明らかにする。

第9章では、「マサカ」を対象に分析し、当該の事態が想定外の事態であることを表すことを明らかにする。

最後に、第10章で本研究のまとめをし、残された課題について考える。

## 第2章 事態の蓋然性と判断の蓋然性<sup>1)</sup>

### 1. 蓋然性の二類型

蓋然性を表す副詞の議論に入る前提として、本章と次章では蓋然性を表す文末表現について考察する。本章では事態の蓋然性と判断の蓋然性の区別について論じ、次章では文末のモダリティ形式について論じる。

先行研究では、事態の蓋然性と判断の蓋然性が混同されて議論されることが多かった。しかし、前者は客体世界と関わる命題表現、後者は話し手の心的態度と関わるモダリティ表現であり、それぞれ別々の概念であることに注意する必要がある。

「事態の蓋然性」：客体世界における事態成立の可能性の度合い

「判断の蓋然性」：話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合い

たとえば、同じ可能性を表す表現でも、「何々の可能性ガアル」が客体世界に存在する事態を表すのに対し、「何々ニチガイナイ」は話し手の判断を表すという違いがある。

- (1) 明日は雨が降る可能性ガアル。
- (2) 明日は雨が降るニチガイナイ。

その証拠に、「事態」は真偽の対象となるためそれを否定することができるが、「判断」は発話時点における話し手の心的態度を表すものであり、真偽の対象とはならないためそれ自体を否定することはできない。

- (3) 明日は雨が降る可能性ガナイ。
- (4) \*明日は雨が降るニチガイナクナイ。

こうした違いがあるにも関わらず、両者を一律に「蓋然性」として捉えるのは問題である。両者は図2-1、図2-2に示されるように、区別して考える必要がある。

---

1) 本章は杉村(1999)をもとに加筆修正したものである。

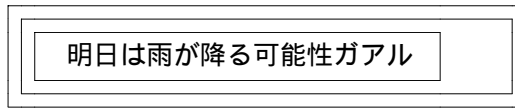


図2-1 「可能性ガアル」文の構造

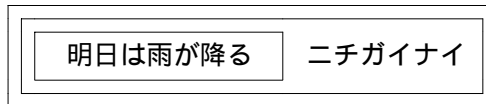


図2-2 「ニチガイナイ」文の構造

以下、蓋然性を表す文末表現「80パーセント（である）」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」、「ソウダ」、「（ような）気ガスル」、「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」を対象に、事態の蓋然性を表すのか判断の蓋然性を表すのかを分析する。

## 2. 主観性判定テスト

次に、第1章2.4節で設定した主観性判定テストに従って、上に挙げた蓋然性を表す文末表現を事態の蓋然性を表すものと判断の蓋然性を表すものとに分類する。このテストで適格となるものは事態の蓋然性を表し、不適格となるものは判断の蓋然性を表すと考えられる。

### 2.1 否定形テスト

まず、各表現が否定形となるかどうかをテストする。

- (5)a. 明日の降水確率は80パーセントデハナイ。
- b. 明日は雨が降る確率が高クナイ。
- c. 明日は雨が降る可能性ガナイ。
- d. 明日は雨が降りソウニナイ。
- e. 明日は雨が降るような気ガシナイ。
- f. 明日は雨が降るトハ思ワナイ。
- g. \*明日は雨が降る ナイ。<sup>1)</sup>

1) 「明日は雨が降らない」なら適格な文であるが、その場合は「」を否定したことにはならない。したがって、「」は極性（肯定・否定）の外側にあると考えられる。



- h. \*明日は雨が降るカモシレナクナイ。
- i. \*明日は雨が降るニチガイナクナイ。
- j. \*明日は雨が降るヨウデハナイ。
- k. \*明日は雨が降るラシクナイ。
- l. \*明日は雨が降るダロウナイ。

このテストでは「ト思ウ」までが適格で「」以降が不適格となる。後者が否定形を持たない理由は、発話時点における話し手の心的態度は真偽の対象とはならず、それ自体を否定することができないためである。

## 2.2 疑問の焦点テスト

次に、各表現が疑問の焦点となるかどうかをテストする。

- (6)a. 明日の降水確率は80パーセントですか、90パーセントですか？
- b. 明日は雨が降る確率が高イですか、雨が降る確率が低イですか？
- c. 明日は雨が降る可能性ガアリますか、雨が降る可能性ガナイですか？
- d. 明日は雨が降りソウですか、雨が降りソウニナイですか？
- e. 明日は雨が降るような気がシマスか、雨が降るような気がシマセンか？
- f. 明日は雨が降るト思イマスか、雨が降るトハ思イマセンか？
- g. \*明日は雨が降る ですか、雨が降るカモシレナイですか。<sup>1)</sup>
- h. \*明日は雨が降るカモシレナイですか、雨が降る ですか？
- i. \*明日は雨が降るニチガイナイですか、雨が降る ですか？
- j. \*明日は雨が降るヨウですか、雨が降る ですか？
- k. \*明日は雨が降るラシイですか、雨が降る ですか？
- l. \*明日は雨が降るダロウですか、雨が降る ですか？

このテストでも「ト思ウ」までが適格で「」以降が不適格となる。後者が疑問の焦点とならない理由は、発話時点における話し手の心的態度というものが真偽の対象とはならないためである。

## 2.3 文代名詞化テスト

- 
- 1) この文は、「『明日は雨が降る』と言ったのですか、『明日は雨が降るカモシレナイ』と言ったのですか？」という引用文としての解釈ならできる。しかし、「」や「カモシレナイ」という判断自体を真偽の対象とする解釈はできない。以下の文も同様である。

次に、各表現が文代名詞の対象となるかどうかをテストする。

- (7)a. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日の降水確率は80パーセントだ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日の降水確率が80パーセントであること)
- b. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降る確率が高イ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降る確率が高イこと)
- c. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降る可能性ガアル。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降る可能性ガアルこと)
- d. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降りソウダ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降りソウなこと)
- e. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るような気ガスル。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降るような気ガスルこと)
- f. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るト思ウ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)
- g. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降る 。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)
- h. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るカモシレナイ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降るカモシレナイこと)

- i. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るニチガイナイ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)
- j. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るヨウダ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)
- k. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るラシイ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)
- l. A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るダロウ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)

このテストは前二つのテストとは異なり、「カモシレナイ」は文代名詞の対象となり、「ト思ウ」は文代名詞の対象から外れる。

まず、「ト思ウ」について説明する。例文(7f) (= (8)) は、明日の天気についてどう思うのかを問答したものである。こうした客体世界の事態についてそれをどう思うのか述べた文脈では、「発話時点」、「話し手」、「心的態度」というモダリティの3要素を満たすため、「ト思ウ」はモダリティとして機能する。

- (8) A : 明日の天気はどうでしょうか？  
B : 明日は雨が降るト思ウ。  
A : それは本当ですか。  
(それ = 明日は雨が降ること)

一方、同じ「ト思ウ」という形でも、「思ウ」自体が問答の焦点となる場合には、客体化された命題として機能する。

- (9) A : 明日は雨が降ると思いますか、雨が降ると思いませんか？  
B : 明日は雨が降るト思ウ。

A：それは本当ですか。

（それ＝明日は雨が降るト思ふこと）

次に「カモシレナイ」について説明する。第1章2.4節で論じたように、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す。一般に「カモシレナイ」は推量判断を表す表現の一つに数えられているが、必ずしも推量文のみに使われるわけではない。事実、次の「カモシレナイ」は推量を表してはならず、二つの可能性が同時に存在することを述べているにすぎない。

- (10) 生まれる子供は男か女のどちらかである。男の子カモシレナイし、女の子カモシレナイ。昔から決まっていることである。

このように、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す表現である。「複数の事態の成立可能性がともに存在する」ということ自体は、話し手の存在とは独立した客体世界の事態である。したがって、本研究では「カモシレナイ」を「カモシレナイ<sub>p・M</sub>」と分析し、前半の「カモシレナイ<sub>p</sub>」は命題を表し、後半の「<sub>・M</sub>」はモダリティを表すと考える。連体形の場合は「<sub>・M</sub>」がつかないため命題として機能する。

- (11) あの人はもう来ないカモシレナイ<sub>p・M</sub>。

- (12) 来ないカモシレナイ<sub>p</sub>人を待つ。

表面上同じ「カモシレナイ」という形をとっていても、「<sub>・M</sub>」のつく場合とつかない場合があるのである。

#### 2.4 連体修飾テスト

次に、各表現が連体修飾成分となるかどうかをテストする。

- (13)a. 降水確率が80パーセントノ空模様だ。  
 b. 雨が降る確率ガ高イ空模様だ。  
 c. 雨が降る可能性ノアル空模様だ。  
 d. 雨が降りソウナ空模様だ。  
 e. \*雨が降るような気ガスル空模様だ。

- f. \*雨が降るト思ウ空模様だ。<sup>1)</sup>
- g. \*雨が降る 空模様だ。<sup>2)</sup>
- h. 雨が降るカモシレナイ空模様だ。
- i. ?雨が降るニチガイナイ空模様だ。<sup>3)</sup>
- j. \*雨が降るヨウナ空模様だ。
- k. \*雨が降るラシイ空模様だ。
- l. ?雨が降るダロウ空模様だ。

このテストで特徴的なのは、「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」が連体修飾成分とならない点と、「カモシレナイ」が連体修飾成分となる点である。

まず、「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」について説明する。同じ「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」でも連体修飾成分となる場合もある。しかし、これと上の連体修飾テストの場合とは違いがある。

- (14) 桜の季節には子供に返ったような気ガスルコトがある。
- (15) 桜の季節には子供に返ったト思ウコトがある。

例文(14) (15)の「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」は、次に示すようにそれ自体が判断の対象となっている。こうした場合には、客観化され連体修飾成分となる。

- (16) 桜の季節には子供に返ったような気ガシマスカ、気ガシマセンカ。
- (17) 桜の季節には子供に返ったト思ウコトガアリマスカ、思ウコトガアリマセンカ。

一方、空模様の内容を限定するのは、「(ような)気ガスルかどうか」や「ト思ウかどうか」ということではなく、「雨が降るかどうか」ということである。こうした場合には、「(ような)気ガスル」や「ト思ウ」は主観的なモダリティとして機能するため、連体修

- 
- 1) 受身形の「雨が降るト思ワレル空模様だ」なら適格となる。
  - 2) 連体形を使った「雨が降る空模様だ」なら適格な文であるが、その場合は「」が連体修飾成分となったことにはならない。したがって、「」は連体修飾成分の外側にあると考えられる。
  - 3) 例文(13i)が適格だと感じられるとすれば、「～ニチガイナイと思われる空模様だ」の「と思われる」が省略されたものを思い浮かべたためであろう。「という」のない例として考えると不自然である。例文(13l)も同様である。

飾成分とはならないのである。<sup>1)</sup>

次に「カモシレナイ」について説明する。一般に「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」は、前者は相対的に蓋然性の高いこと、後者は相対的に蓋然性の低いことを表す表現であるとされている。もし、両者が単に蓋然性の違いで説明できるのであれば、例文(18a)よりも蓋然性の高いことを例文(18b)として言えるはずである。しかし、それができないことから考えると、両者には蓋然性の違いでは説明のできない違いのあることが分かる。<sup>2)</sup>

- (18)a. 私が韓国に渡ったことを知られたら、残酷に殺されるかもしれない危険があったからです。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)
- b. <sup>?</sup>私が韓国に渡ったことを知られたら、残酷に殺されるニチガイナイ危険があったからです。

本研究では、「ニチガイナイ」が蓋然性の高さを表す推量表現であるのに対し、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す表現であると考え。 「カモシレナイ」は一般に蓋然性の低いことを表す表現であるとされているが、それは複数の事態の成立可能性を同時に認めるということから来る派生的な意味であると考え。

連体修飾については、第3章3.5節(カモシレナイ、ニチガイナイ)、同4.4節(ヨウダ、ラシイ)、同5節(ダロウ)で再び論じることにする。

## 2.5 過去テスト

次に、各表現が過去文の中に収まるかどうかをテストする。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表したものであるため、過去文の中に収まらない。<sup>3)</sup>

- (19)a. その日の降水確率は80パーセントデアッタ。

- 
- 1) 仁田(1989: 48)は、「ト思ワレル」、「ト思エル」、「ト考エル」、「ト感ジル」、「～気ガスル」、「～気ガシテナラナイ」、「～感ジガスル」、「～感ガアル」、「～見込ミダ」、「～見通シダ」などの表現について、「実質形式とモダリティを表す文法形式の中間に位置するような存在であろう。実質形式と文法形式とが連続することのあることを物語っている一例である」と説明している。
- 2) 三原(1995)にも、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」の連体修飾節における許容度の違いが指摘されている。三原は「ニチガイナイ」が言いにくいのは、文法的な理由によるものではなく文体的な落ち着きの悪さによるものであるとしている。
- 3) 高橋(1985: 212)は、「過去のことについて推量するばあいには、「シタダロウ」という、おしはかり形の過去形をつかったり、確率を推定するコピュラとくみあわせて「シタカモシレナイ」「シタニチガイナイ」のような形式をつかったりするものがふつうである」と指摘をしている。

- b. その日は雨が降る確率が高カッタ。
- c. その日は雨が降る可能性ガアッタ。
- d. その日は雨が降りソウダッタ。
- e. その日は雨が降るような気がシタ。
- f. その日は雨が降るト思ッタ。
- g. \*その日は雨が降る た。<sup>1)</sup>
- h. その日は雨が降るカモシレナカッタ。
- i. ?その日は雨が降るニチガイナカッタ。
- j. その日は雨が降るヨウダッタ。
- k. その日は雨が降るラシカッタ。
- l. \*その日は雨が降るダロウタ。

このテストでは、「 」と「ダロウ」は形態的にタ形を持たず不適格となり、「ニチガイナイ」は不自然な文となる。以下、問題となる「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」について説明する。

先行研究では「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」を「疑似モダリティ」（仁田（1991））、「二次的モダリティ」（益岡（1991））などと呼び、タ形をとった場合に過去における判断を表すと説明している。しかし、これらの形式が本当に過去における判断を表すのかどうか、もう一度考えてみる必要がある。（なお、過去における判断は発話時点においてすでに客体化されたものであるため、本研究の立場では命題に属すと考える。）

まず「カモシレナイ」について説明する。次は「カモシレナイ」がタ形となる例である。

- (20) 六時三十分に高田馬場駅の改札口で会うことにした。お金は二千元しかなかった  
ので、経理のブロンディのところに行って大急ぎで給料の前借りを頼もうか、と思っ  
たが、机の前にブロンディの姿はなかった。もう帰り仕度のために洗面所に行っ  
ているのかもしれないかった。（椎名誠『新橋烏森口青春篇』）
- (21) 私は台所の椅子に腰を下ろしていった誰が私のごみためのような部屋をかたづ  
けてくれたのか思いをめぐらしてみた。誰かが何かの目的のために手間をかけて隅  
から隅までかたづけたのだ。それは例の記号士の二人組かもしれないし、あるいは  
『組織』の人間かもしれないかった。（村上春樹『世界の終わりとハイドボイルド・

---

1) 「その日は雨が降った 」なら適格な文であるが、その場合は「 」が過去文に収まったことにはならない。したがって、「 」はテンスの外側にあると考えられる。

ワンダーランド』)

先に説明したように、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す表現である。「複数の事態の成立可能性がともに存在する」ということ自体は、話し手の存在とは独立した客体世界の事態である。従来「カモシレナイ」は形式全体がモダリティを表すとされてきたが、本研究では「カモシレナイ<sub>P-M</sub>」のように命題部分とモダリティ部分から成ると考える。これを基に考えると、「カモシレナカッタ」は「カモシレナカッタ<sub>P-M</sub>」のように分析される。そうすると、「<sub>M</sub>」はテンスの外側に来ることになり、「カモシレナカッタ」が過去における判断を表すという説明は成り立たなくなる。これは「その日は雨が降った」の「」がテンスの外側に来るのと平行した現象である。「カモシレナイ<sub>P-M</sub>」全体が過去文の中に収まるのは、「～カモシレナイと思った」のように引用文の中に入った場合である。

(22) 「その日は雨が降るカモシレナイ」と思った。

次に「ニチガイナイ」について説明する。例文(23)(24)は「ニチガイナイ」がタ形となる例である。

- (23) 私は、おばさんからこれまで働いた分の給料をもらいたいと思いましたが、ないしょで出ていかなければならなかったので、最後まで黙っていました。おばさんは韓国の話が出るたびに警戒する人だったので、私が行くというと止めるに違いなかったからです。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)
- (24) わたしが保衛部にいたときの経験からして、北が外国の機関に対してそのような依頼をしてきたときには、すでに北の逮捕網がくまなく張りめぐらされているにちがいはなかったからである。(康明道著、尹学準訳『北朝鮮の最高機密』)

この「ニチガイナカッタ」は「に+違い+ない」のタ形で、そうした状況の成立に間違いのないことを表す命題表現である。その証拠に文代名詞の対象となる。

- (25) 最後まで黙っていたのは、行くというと止めるニチガイナカッタからです。  
それは本当ですか？  
(それ=行くというと止めるニチガイナカッタから)  
(それ 行くというと止めるから)



こうした「に+違い+ない」が、発話時点における話し手の推量判断を表す場面に使われたものが、推量判断の「ニチガイナイ」であると考えられる。

これに対し、推量判断を表す「ニチガイナイ」は、タ形にすると不自然な表現となる。次の例文は過去の事態について述べられたもので、全体がタ形で描写されている。しかし、「ニチガイナイ」の部分だけはル形で描かれている。このル形をタ形に変え、「<sup>?</sup>本の内容が事実であるならば、金日成・正日父子は畜生以下のゴミに等しい人間ニチガイアリマセンデシタ」とすると、不自然な文となる。

- (26) その家に住んでいるあいだ『ローヤルファミリー』という韓国の本を読むことができました。

金正日の甥である李韓永が、韓国に渡ってから書いた本でした。本の内容が事実であるならば、金日成・正日父子は畜生以下のゴミに等しい人間に違いありません。

二日間一睡もせずに本を読み通しました。その間、私の体は無重力状態に陥ったかのようになり、神経も麻痺してしまいました。時折、思わず悲鳴を上げたりして家の人が駆けつけたりもしました。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)

例文(26)の「ニチガイナイ」は、話し手の視点が物語場面の現在に移動したものと考えれば説明ができる。そのような視点の移動がない場合には、「ニチガイナカッタ」を使うのではなく、「ゴミに等しい人間ニチガイナイと思いました」のように引用文の中に入れるのが自然である。

ところで、小説などでは「ニチガイナカッタ」が物語りの中のまさにその場面において下される推量判断を表す場合がある。これを説明するのに分かりやすい例が例文(27)である。例文(27)は、「ここでも佐知子に置きかえればよい」という表現からも明らかなように、今現在話し手が推理を働かせている場面である。したがって、「室田夫人に焦点を当てたに違いない」という判断は、物語の発話時点において下されたものであると言ってよい。ところが、ここでは「当てたに違いなかった」のようにタ形で終わっている。(同様のことは、「食い止めえたかも分からなかった」にも言える。)そうすると、この「タ」が何を表しているのが問題となる。

- (27) 本多が、なぜ“杉野友子”と名のった久子の、東京での住所を知ったか？ 前に、室田社長として考えたことを、ここでも佐知子に置きかえればよい。彼女は、本多に、久子の行先を示唆したのだ。本多は、事件のすべてが明確に分かった時に、いっさいを禎子に告げるはずであった。だから、彼の東京行きは、禎子に一部分を黙っ

ていたことで、不幸な事態を起こした。もし彼が、それまでに知りえた知識を、全部、禎子に話していたら、禎子はもっと早く、室田夫人に焦点を当てたに違いなかった。そうすれば、あるいは、久子の死だけでも、食い止めえたかも分からなかったのである。（松本清張『ゼロの焦点』）

例文(27)において、「タ」は当該の部分が小説の執筆時点よりも前に起きた事態であることを表している。すなわち、例文(27)は例文(27)' のような構造を持っているのである。

(27)' [もし彼が、それまでに知りえた知識を、全部、禎子に話していたら、禎子はもっと早く、室田夫人に焦点を当てたに違いない。そうすれば、あるいは、久子の死だけでも、食い止めえたかも分からない]（という状況が執筆時点以前にあった）た。

この「ニチガイナイ」や「カモシレナイ」は、物語の中のまさにその場面において「ニチガイナイ」、「カモシレナイ」と述べる視点と、執筆時点においてそれを過去のものとする視点が合わさってできた表現であると考えられる。

次の表現も同様で、もし単純に過去における判断を表すとしたら、「かなりの家庭に育ち、かなりの教育を受けた人に違いないと思った」、「自分の手で復讐することを選んだに違いないと思った」のように言うと思われる。

(28) それにしても、佐知子夫人の気持を考えると、禎子も哀れでならなかった。夫人の生い立ちは、禎子には分かっていない。しかし、かなりの家庭に育ち、かなりの教育を受けた人に違いなかった。（松本清張『ゼロの焦点』）

(29) 千尋は、結局、頼れるものは自分しかいないと考え、ペスを殺した時のように、自分の手で復讐することを選んだに違いなかった。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

この点に関してはこれ以上立ち入らないが、「ニチガイナカッタ」や「カモシレナカッタ」がタ形となっているからといって、単純に過去の判断を表しているとは結論できないことを指摘しておく。<sup>1)</sup>

次に「ヨウダ」について説明する。「ヨウダ」がタ形になる場合は、推量判断を表すと

1) これに関して仁田（1999：40）は、「語り物」の中では、有標のモダリティ形式を持った文は、出来事の連なりといった主筋の展開には関わらない。挿入的な語り手の心内発話を表す。語り手の心内発話を表すことになる、この主の文におけるモダリティ形式の非過去・過去の交替には、語り手の視点が関わっているのかもしれない」と述べている。

いうよりは、過去における様態を婉曲的に表現するという解釈が強くなる。

- (30) 母は憲一が三十六歳まで独身だったということにまだ不安を持っているようだった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (31) 野村浩子という臨床心理士は、すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいるようだったし、人間的にも信頼が置けそうだった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

実際、例文(30)は「母はまだ不安を持っている様子だった」、例文(31)は「野村浩子はすでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいる様子だった」という解釈となる。推量判断の「ヨウダ」が過去文の中に収まるようにするには、「～(の)ヨウダと思った」のように引用文の中に入れる必要がある。(比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」の関係については、本章4.1節と第3章4.3節で考察する。)

最後に「ラシイ」について説明する。「ラシイ」もタ形になる場合は、推量判断を表すというよりは、過去における様態を婉曲的に表現するという解釈が強くなる。

- (32) 禎子は、会社からの今の電話を伝えた。義兄は、それで意外に重大なことになったのを悟ったらしかった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (33) 噂の内容については、浩子が、ぼかした書き方をしているので、かなり推測で補うことを余儀なくされた。だが、要するに、千尋が「呪い」によって三人を殺したというものらしかった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

例文(32)は「義兄は意外に重大なことになったのを悟った様子だった」、例文(33)は「浩子の筆によると、千尋が「呪い」によって三人を殺したと言いたい様子だった」という解釈となる。推量判断の「ラシイ」が過去文の中に収まるようにするには、「～ラシイと思った」や「～ラシイと分かった」のように引用文の中に入れる必要がある。

- (34) 千尋には、叔父さんと叔母さんの会話の内容がすべて理解できたわけではなかったが、やはり両親が亡くなったらしいということはわかった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

ただし、次のように過去における推量判断を表していると解釈するのが妥当な例もある。

- (35) トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあって、どうやら漁業組合

の集合所らしかった。(安部公房『砂の女』)

こうした例は先の「ニチガイナカッタ」と同じように、小説など語り物の中で使われる表現である。例文(35)は物語の場面の中に入って「どうやら漁業組合の集合所ラシイ」と推量判断する視点と、そういう状況が過去にあったことを執筆時点から眺める視点とが合わさってきた表現である。

## 2.6 2節のまとめ

以上の結果をまとめると表2-1のようになる。このうちの「80パーセントデアル」、「確率ガ高イ」、「可能性ガアル」、「ソウダ」は命題として事態の蓋然性を表す。これに対し、「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」は、事態の蓋然性を表す場合もあれば、判断の蓋然性を表す場合もある。また、「カモシレナイ」は「カモシレナイ<sub>p</sub>-<sub>M</sub>」と分析され、「カモシレナイ<sub>p</sub>」の部分は命題として機能し、「-<sub>M</sub>」の部分はモダリティとして機能する。残る「<sub>p</sub>」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」はモダリティとして判断の蓋然性を表す。

蓋然性を表す表現	否定形	疑問	文代名詞	連体修飾	過去文
80パーセントである	+	+	+	+	+
確 率 ガ 高 イ	+	+	+	+	+
可 能 性 ガ ア ル	+	+	+	+	+
シ ソ ウ ダ	+	+	+	+	+
(ような)気ガスル	+	+	+	+ / -	+
ト 思 ウ	+	+	+ / -	+ / -	+
	-	-	-	-	-
カモシレナイ	-	-	+	+	+
ニチガイナイ	-	-	-	?	?
ヨ ウ ダ	-	-	-	-	+
ラ シ イ	-	-	-	-	+
ダ ロ ウ	-	-	-	?	-

表2-1 蓋然性を表す文末形式

注) +は当該のテストで可となること、-は不可となること、  
?は不自然となること、+/-は両方の場合があることを表す

以下、3節では「80パーセントデアル」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」などの表現が事態の蓋然性を表すことを確認する。4節では、一般に同じモダリティ表現とされてきた「ヨウダ」、「ソウダ」、「ベキダ」の主観性の違いを分析し、推量判断の「ヨウダ」はモダリティであるが、「ソウダ」、「ベキダ」および比況の「ヨウダ」は命題であることを指摘する。（「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」については第3章で考察する。）

### 3．事態の蓋然性

本節では「80パーセントデアル」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」などの表現が事態の蓋然性を表すことを確認する。事態の蓋然性とは、客体世界における事態成立の可能性の度合いを表したものである。これには例文(36)の「確率が五〇％」や「確率は二〇％」のように具体的な数値で示される場合と、「可能性が高い」のように可能性の高低（あるいは有無）で示される場合とがある。

- (36) 名古屋地方気象台も同日、東海地方の長期予報を発表。十二月から来年二月までの冬の平均気温は平年より高くなる確率が五〇％と最も高く、低い確率は二〇％。高温傾向が続き、暖冬となる可能性が高い。（『中日新聞』1999.10.8 朝刊）

具体的な数値で示される場合とは、例文(37)の「降水確率」のような表現である。たとえば、「降水確率80パーセント」とは、同一気象条件で「80パーセント」という予報が100回出た時に80回は1ミリメートル以上の降水があるという意味である。<sup>1)</sup> 降水確率というものは、話し手の存在とは独立に客体世界に存在するものであるため命題表現である。これは「明日の天気は雨だ/曇りだ/晴れだ」という表現が、客体世界の状況を描いたものであるのと同じことである。

- (37)a. 明日の降水確率は100パーセントである。  
b. 明日の降水確率は80パーセントである。  
c. 明日の降水確率は50パーセントである。  
d. 明日の降水確率は20パーセントである。

---

1) 『旺文社国語辞典〔第八版〕』の「降水確率」の項参照。ただし、原文は「七％」。

e. 明日の降水確率は0パーセントである。

一方、可能性の高低（あるいは有無）で示される場合とは、例文(38)~(41)のような表現である。これらも話し手の存在とは無関係の一般的事実を描いた表現である。もちろん、危険性があるのか無いのか、確率が高いのか低いのかということは人間の主観によるものであるが、話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるという意味では客観的な成分である。これはある色を「青」と捉えるか「水色」と捉えるかということと同じである。「青」も「水色」も客体世界の状況を描いたものである。

- (38) 長時間肉体を離れていると、しだいに人間としての感覚や感情を喪失してしまう危険性があるという。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (39) 日本では、知らない人と目を合わせてにっこり笑うと、知っている人と勘違いされる恐れがある。（福田健『ユーモア話術の本』）
- (40) 焼きすぎますと、マーガリンが溶け出す恐れがあります。（「フジパンの商品説明」）
- (41) 最も労働意欲の上がる確率が高いのは、成果主義は導入せずに仕事条件の整備だけを実施した職場である。反対に、労働意欲の向上確率が最も低いのは、成果主義だけを導入し、仕事条件は変わっていない職場である。

この関係は、薬を服用している人としていない人では、前者の方が病気である可能性が高いのと似ている。いまは薬を服用している人が、そうしていなければ病気は更に悪化していたかもしれない。（『日本経済新聞』1999.12.30 朝刊）

例文(38)~(41)の各表現は、客体世界の事態を描いているという点で次の「傾向がある」と同じである。

- (42) また、裁判所も「行政権の裁量の範囲」という理屈で、行政の政策判断について、司法判断をなかなか下さない傾向がある。今回の薬害エイズ事件については、裁判所はかなり踏み込んだ判断をし、解決に向けて大きな貢献をしたと、私は評価している。（菅直人『大臣』）

これに対し、次の表現は話し手の存在があってはじめて成立するものである。しかし、これも話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるという意味では客観的な成分である。これはちょうど、ある料理を食べて「おいしい」と捉えるか「まずい」と捉えるかということと同じである。「おいしい」や「まずい」が「おいしい味」、「まずい味」

のように連体修飾成分となるように、これらの表現も「確率が高イコト/可能性ガアルコト/可能性がきわめて高いコト/可能性が限りなくゼロに近くなったコト」のように連体修飾成分となる。したがって、これらの表現も命題であると判断される。

- (43) 空模様を眺めると、明日は雨が降る確率が高イと思われる。
- (44) 空模様を眺めると、明日は雨が降る可能性ガアルと思われる。
- (45) このような説明を聞いて、私は公表すべきだと判断した。あくまで蓋然性の問題であり、一パーセントではない。しかし、現実には数千人の規模で患者が出ており、その感染源の可能性がきわめて高いと思われるものがあるのなら、これは発表すべきだ。(菅直人『大臣』)
- (46) 笹口町長は「住民投票を反映させ原発問題に一定の決着を付けるのが私の最大の課題で、これで任期中にある程度の責任を果たせた。土地売却で原発の可能性は限りなくゼロに近くなったと思う」と述べた。(『中日新聞』1999.9.3 朝刊)

ところで、「確率が高イ」と「可能性が高イ(アル)」とは次のような違いがある。すなわち、「確率が高イ」は一般的事実を表すことができるが、「可能性が高イ(アル)」はそれができないという違いである。

- (47)a. 毎年クリスマスは雪の降る確率が高イ。
- b. \*毎年クリスマスは雪の降る可能性が高イ。
- c. \*毎年クリスマスは雪の降る可能性ガアル。

一方、未実現の事態について述べる場合にはいずれの表現も使える。この場合に「確率が高イ」は既定の事実を表し、「可能性が高イ(アル)」は未実現の事態に対する見込みを表す。

- (48)a. 今年のクリスマスは雪の降る確率が高イ。
- b. 今年のクリスマスは雪の降る可能性が高イ。
- c. 今年のクリスマスは雪の降る可能性ガアル。

ただし、「可能性が高イ(アル)」が見込みを表すと言っても、それは発話時点における話し手の心的態度を表したのではなく、客体化された命題として表される。その証拠に、これらの表現は過去文の中に収まることができる。

- (49)a. 今年のクリスマスは雪の降る確率が高カット。  
 b. 今年のクリスマスは雪の降る可能性が高カット。  
 c. 今年のクリスマスは雪の降る可能性ガアッタ。

以上、「80パーセントデアル」、「確率が高イ」、「可能性ガアル」のような表現が事態の蓋然性を表すことを指摘した。

#### 4. ヨウダ、ソウダ、ベキダ<sup>1)</sup>

一般に日本語の文末表現「ニチガイナイ」、「ヨウダ」<sup>2)</sup>、「ソウダ」<sup>3)</sup>、「ベキダ」、「ツモリダ」は、話し手の主観的な態度を表すモダリティ表現であるとされている。

- (50)a. 太郎が来るニチガイナイ。  
 b. 太郎が来るヨウダ。  
 c. 太郎が来ソウダ。  
 d. 太郎が来るベキダ。  
 e. 太郎が来るツモリダ。

この考えに従うと、例文(50)は「太郎が来るコト」という命題に対して、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ソウダ」、「ベキダ」、「ツモリダ」という話し手の主観的な判断を下した表現であることになる。これを図示すると図2-3のようになる。

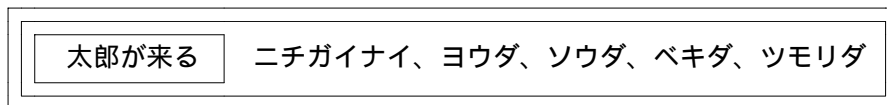


図2-3 従来考えられてきた文の構造

これに対し、本研究では「ソウダ」、「ベキダ」、「ツモリダ」は命題表現であると考

1) 本節は杉村(2000b, 2001)をもとにしたものである。  
 2) 「ヨウダ」には「比況」、「推量判断」、「例示」、「婉曲」などの用法があるが、本研究では特に断わらない限り「推量判断」の「ヨウダ」を指すことにする。  
 3) 「ソウダ」には「雨が降りソウダ」のように連用形について「兆候や様相の現れ」を表すものと、「雨が降るソウダ」のように終止形について「伝聞」を表すものとがある。ここでは前者の「ソウダ」について考察する。



える。その証拠に、「ニチガイナイ」と「ヨウ」が疑問の対象とならないのに対し、「ソウダ」、「ベキダ」、「ツモリダ」は疑問の対象となる。このことは、「ソウダ」、「ベキダ」、「ツモリダ」が話し手の存在とは独立した客観的な事態を表していることを示している。

- (51)a. \* [ 太郎が来るニチガイナイ ] かどうかを考える。  
 b. \* [ 太郎が来るヨウ ] かどうかを考える。  
 c. [ 太郎が来ソウ ] かどうかを考える。  
 d. [ 太郎が来るベキ ] かどうかを考える。  
 e. [ 太郎が来るツモリ ] かどうかを考える。

こうした事実により、本研究では「ニチガイナイ」と「ヨウダ」は形式全体がモダリティとして機能するが、「ソウダ」、「ベキダ」、「ツモリダ」は「ダ」の部分のみモダリティとして機能し、「ソウ」や「ベキ」の部分は命題として機能すると考える。すなわち、例文(50)の各表現は図2-4のような構造となっていると主張する。

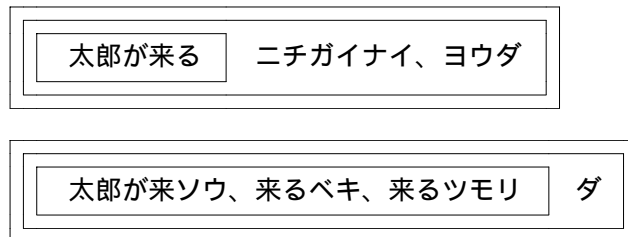


図2-4 本研究で考える文の構造

以上の表現のうち、「ツモリダ」はすでに第1章2.3節で分析した。本節では「ヨウダ」と「ソウダ」および「ベキダ」の主観性の違いについて分析し、推量判断の「ヨウダ」がモダリティであるのに対し、「ソウダ」、「ベキダ」および比況の「ヨウダ」は命題であることを指摘する。（「ニチガイナイ」については第3章で論じる。）

#### 4.1 比況のヨウダと推量判断のヨウダ

はじめに、比況の「ヨウダ」が客観的な性質を示すのに対し、推量判断の「ヨウダ」は主観的な性質を示すことを指摘する。

例文(52a)は比況の例で、「この人の顔の色艶」と「生きている人の顔の色艶」とが近い関係にあることを表している。この場合、話し手はこの人が死んでいることは知っており、単に両者が似た様態にあることを述べているにすぎない。一方、例文(52b)は推量判断の例

である。この場合、話し手は発話時点でこの人の生死が分かっておらず、「この人の顔の色艶」が「生きている人の顔の色艶」のもつ属性を備えていることを根拠に、「生きている」と推量判断したことを表している。

- (52)a. 顔の色艶を見ると、この人はまるで生きているヨウダ。(比況)
- b. 顔の色艶を見ると、この人はどうやら生きているヨウダ。(推量判断)

同様に、例文(53a)は「あの人の歩き方」と「男の歩き方」とが似た様態にあることを表し、例文(53b)は「あの人の歩き方」が「男の歩き方」のもつ属性を備えていることを根拠に、「あの人が男」と推量判断したことを表している。

- (53)a. あの歩き方からすると、あの人はまるで男のヨウダ。(比況)
- b. あの歩き方からすると、あの人はどうやら男のヨウダ。(推量判断)

この場合にも、例文(53a)では「あの人が男」とでないことが分かっており、例文(53b)では「あの人の性別が不明である。

- (54)a. あの歩き方からすると、あの女はまるで男のヨウダ。
- b. \*あの歩き方からすると、あの男はまるで男のヨウダ。
- c. \*あの歩き方からすると、あの性別不明の人はまるで男のヨウダ。
- (55)a. \*あの歩き方からすると、あの女はどうやら男のヨウダ。<sup>1)</sup>
- b. \*あの歩き方からすると、あの男はどうやら男のヨウダ。
- c. あの歩き方からすると、あの性別不明の人はどうやら男のヨウダ。

比況も推量判断も、あるAとあるBがともにXという属性をもつことを根拠に、AがBと近接関係にあることを表す表現であるという点で共通している。したがって、両者は次のように一般化して表すことができる。

- (56) 根拠Xにより、AはB(の)ヨウダ。

比況と推量判断は、AをBに例えて言うときには比況、AをBと推測して言うときには

---

1) 例文(55a)は、「あの女と思われた人は実は男のヨウダ」の意味でなら適格となる。しかし、この場合にも、話し手は発話時点において「あの女」の性別に不審を抱いている。性別の分かっている場面としては、やはり不適格な文となる。

推量判断というように、文脈によって用法が分かれる。したがって、いずれの文脈かはつきりしない場合には、どちらとも解釈しうる中間的な例となる。次の例文(57)は比況の例、例文(58)は推量判断の例、例文(59)は中間的な例である。

- (57)a. あたりは真暗 濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足は氷のよう (山岸凉子『スピックス』)
- b. 濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足はマルデ氷のヨウダ。
- c. \*濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足はドウヤラ氷のヨウダ。
- (58)a. 久光は、これまでのいきさつから、このような動きに心おだやかならぬものがあったようだ。(毛利敏彦『大久保利通』)
- b. \*このような動きにマルデ心おだやかならぬものがあったヨウダ。
- c. このような動きにドウヤラ心おだやかならぬものがあったヨウダ。
- (59)a. ひんやりとした風の中に、微かに潮の香りを感じた。この半島では、町中をも海が包んでいるようだった。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- b. この半島では、マルデ町中をも海が包んでいるヨウダッタ。
- c. この半島では、ドウヤラ町中をも海が包んでいるヨウダッタ。

次に主観性判定テスト(否定の焦点テスト、疑問の焦点テスト、文代名詞化テスト、連体修飾テスト、過去テスト)によって、比況の「ヨウダ」が客観的な性質を見せるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は主観的な性質を見せることを証明する。

まず、否定の焦点テストにおいて、比況の「ヨウダ」が否定の対象となるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は否定の対象とはならないという違いが見られる。

- (60)a. いくら力があるといっても、あの人は男のヨウではない。
- b. \*どうやらあの人は男のヨウではない。

例文(60a)は、あの人に男としての属性のないことを述べた文で適格となる。一方、例文(60b)は非文となる。あの人が男ではないことを推量する場合には、否定の「ナイ」が「ヨウダ」の内側に來るのが自然である。

- (61) どうやらあの人は男ではないヨウダ。

また、疑問の焦点テストにおいても、比況の「ヨウダ」が疑問の対象となるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は疑問の対象とはならない。推量判断は発話時点における話し手の

心的態度を表したものであるため、否定や疑問などの対象とはなりえないのである。

- (62)a. あの人はまるで男のヨウですか？  
b. \*あの人はどうやら男のヨウですか？

文代名詞化テストでも、比況の「ヨウダ」が文代名詞の対象となるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は文代名詞の対象とはならない。

- (63)a. A：あの人はまるで男のヨウダよ。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝あの人がまるで男のヨウであること)  
b. A：あの人はどうやら男のヨウダよ。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝あの人が男であること)

同様に、連体修飾テストにおいても、比況の「ヨウダ」が連体修飾成分となるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は連体修飾成分とはならない。

- (64)a. まるで男のヨウナ人  
b. \*どうやら男のヨウナ人

比況の「ヨウダ」は「B(の)ヨウナA」という形で連体修飾成分となり、A、Bという別々のものにXという共通の属性を見つけ、それを根拠にAがBと似た性質を示すことを表す。「猿のヨウナ顔」、「氷のヨウナ心」、「鈴を転がすヨウナ美しい声」、「見てきたヨウナ嘘の話し」なども同様である。<sup>1)</sup>

一方、推量判断の「ヨウダ」は、一般には連体修飾成分とならない。しかし、後に「直感/感じ/気/予感」など話し手の直感を表す表現が続く場合には連体修飾成分となる。

- (65) メリーは、今年のクリスマスは雪が降るヨウナ気がしている。

---

1) このAとBが上位語と下位語の関係になり、Aの特徴をBによって説明したのが例示の「ヨウダ」である。「東京のヨウナ大都会」、「サイダーのような飲み物」、「ピーマンのヨウナ緑黄色野菜」などがそうである。例示の用法は「ピーマンのヨウナ緑黄色野菜」、「ピーマンのヨウニ栄養がある」のように、「ヨウナ+体言」や「ヨウニ+用言」の形でのみ使われ、「ヨウダ」の形では使われない。

(66) 去年のクリスマスは雪が降るヨウナ気がした。

(67) 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ気がする。

このうち、(65)のように第三者の心的態度を表したり、(66)のように過去の心的態度を表す場合には客観的表現であることが明確である。しかし、(67)のように発話時における話し手の心的態度を表す場合には、「ヨウナ気ガスル」全体がモダリティとして機能する。こうした表現が短縮されて「ヨウダ」一語で表されるようになったものが、推量判断の「ヨウダ」であると考えられる。「ヨウナ直感ガスル/ヨウナ感じガスル/ヨウナ予感ガスル」なども同様である。

過去テストにおいては、比況の「ヨウダ」は自然に過去文の中に収まる。しかし、例文(68b)の「ヨウダ」は、過去における推量判断を表すというよりは、「あの人は男だった」と断定するのを避けた婉曲表現としての解釈が強くなる。

(68)a. あの女はまるで男のヨウダッタ。

b. あの人はどうやら男のヨウダッタ。

例文(69)は、実際には車が来たことを知っていても、あえて直接言うのを避け遠回しで丁寧な物言いにした表現である。例文(68b)もこうした婉曲表現であると考えられる。

(69) (車が来たのを見て)社長、どうやらお車が来たヨウデス。(婉曲)

以上、比況の「ヨウダ」が客観的な表現であるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は主観的な表現であることを指摘した。(比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」の関係は、さらに第3章4.3節で「推論の型」との関係で論じることにする。)

#### 4.2 ヨウダとソウダ

次に、推量判断の「ヨウダ」と兆候や様相の現れを表す「ソウダ」の主観性の違いについて分析する。一般に「ソウダ」はモダリティ表現であるとされているが、<sup>1)</sup> 主観性判定

1) 寺村(1984)、中畠(1991)、三原(1995)、野田(1995)は「概言のムード」、仁田(1989、1991)は「判断のモダリティ」、三宅(1994)は「認識的モダリティ」としている。これに対し、森山(1989: 63-64)は「アスペクト的な意味に極めて近い。そもそも、連用形につくということ自体、意味的にも、形態的にも、前述のような認識的ムード形式にあわない」と述べ、小林(1980)も推量のモードゥスから除外している。ただし、森山も小林もそれ以上の考察はしていない。

テストの結果から、命題表現であることが証明される。

(否定テスト)	雨が降りソウにない。	おいしソウではない。
(疑問テスト)	雨が降りソウか。	おいしソウか。
(連体修飾テスト)	雨が降りソウな気配。	おいしソウな匂い。
(過去テスト)	雨が降りソウだった。	おいしソウだった。
(文代名詞化テスト)	A：雨が降りソウだよ。	A：おいしソウだよ。
	B：それは本当ですか。	B：それは本当ですか。
	(それ＝雨が降りソウなこと、おいしソウなこと)	
	(それ 雨が降ること、おいしいこと)	

「ソウダ」の意味について寺村(1984:239)は、「ある対象が、近くある動的事象が起ることを予想させるような様相を呈していること、あるいはある性質、内情が表面に現れていることをいう表現である」と定義した。例文(70)は性質・内情の例、例文(71)は動的事象の例である。<sup>1)</sup>

(70) やさしそうな表情は女たちの流行。(中島みゆき『誘惑』)

(71) 崩れそうな強がりは男たちの流行。(中島みゆき『誘惑』)

本研究では、「ソウダ」は兆候や様相の現れを表し、前接する成分と一体となって一つの形容動詞として機能する表現であると考え。すなわち、「ソウダ」は「ヨウダ」と違って推量判断を表す表現ではないと考える。その証拠に、「ソウダ」は推量判断が入らず眼前の様相をそのまま描写する文に使うことができる。

(72) 人々はみな髪を光にすかして幸福そうにすれ違ってゆく。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)

(73) 夫は煙草をくわえて煙を吐き、目をけむたそうにしかめた。(松本清張『ゼロの焦点』)

(74) 警察署を出ると、曇った空は、いまにも雨が降りだしそうだった。(松本清張『ゼロの焦点』)

1) 寺村(寺村1984:243-244)は、「ヨウダ」と「ソウダ」の意味の違いについて、「先の予想のソウダと、推量のヨウダを比べると、まずソウダのほうは視覚的、直感的に見たままをいうのに対し、ヨウダのほうは、視覚、聴覚、その他の感覚により得た情報、あるいは周囲の状況も考慮に入れて推量した結果をいうという違いがある」と説明している。

- (75) ほほが夕陽に輝き、それは、まるで一刻ずつ姿を変えてゆくまぶしい夕空のようにはかない笑顔だった。白い歯も、細い首も、じっと彼を見つめる大きな瞳も、みんな砂や風や波音にまぎれて今にもさらりと消え入りそうだった。（吉本ばなな『TUGUMI』）
- (76) 立って、夫からの絵はがきをとりだした。紙が指から抜けて落ちそうであった。（松本清張『ゼロの焦点』）

推量の意味が感じられるのは、次のような未実現・未確認の事態を推測する文脈である。

- (77) これで横綱への夢もどうやら実現しそうです。（NHK総合「大相撲夏場所千秋楽」1999.5.23）
- (78) 私はびっくりして目を見開いてしまった。かなり歳は上そうだったが、その人は本当に美しかった。（吉本ばなな『キッチン』）
- (79) 「教習所ここにしようかと思って 家からも近いし設備もよさそうだし」（臼井儀人『クレヨンしんちゃん』）

しかし、この場合にも「ソウダ」自体は客体世界に何らかの兆候や様相が現れていることを表しているにすぎない。たとえば、「横綱への夢が実現しソウダ」という表現は、客体世界に横綱への夢が実現しそうな状況があることを述べているだけである。これが横綱への夢が実現しそうかどうかを推量する場面に使われると推量の意味を帯びてくる。しかし、その場合に推量の意味を担うのは、「横綱への夢が実現しソウ（に思われる）」の表現上隠れた部分である。例文(77)～(79)の「ソウダ」も、「実現しソウナ横綱の夢」、「歳が上ソウナ人」、「設備がよさソウナ教習所」のように連体修飾成分となるため命題であることが証明される。

「ヨウダ」と「ソウダ」の主観性の違いは、「が/の」交替テストからも証明できる。「が」と「の」は入れ替え可能な場合もあるが、後ろに名詞性成分の続かない場合には「の」が使えない。

- (80)a. 太郎は頭がいい子だ。  
b. 太郎は頭のいい子だ。
- (81)a. 太郎は頭がいい。  
b. \*太郎は頭のいい。

次の表現で「の」が使えないのはこのためである。

- (82)a. 今年のクリスマスは雪が降りソウダ。  
 b. \*今年のクリスマスは雪の降りソウダ。  
 (83)a. 今年のクリスマスは雪が降るヨウダ。  
 b. \*今年のクリスマスは雪の降るヨウダ。

そこで「の」の後ろに名詞性成分「予感（がする）」を補うと、例文(84b)は適格な文となる。これは大島（1999：37）が「主格の「の」は、当該の節が主節に対して構造的に“従”であることを明示する」と指摘しているとおり、「雪の降りソウ」が主節である「予感がする」に対して“従”となるためである。

- (84)a. 今年のクリスマスは雪が降りソウナ予感がする。  
 b. 今年のクリスマスは雪の降りソウナ予感がする。  
 (85)a. 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ予感がする。  
 b. ?今年のクリスマスは雪の降るヨウナ予感がする。

ここで注目したいのは、例文(85b)は依然許容度が落ちるということである。この文法性の差は「ソウダ」と「ヨウダ」の主観性の違いに基づくと考えられる。すなわち、「ソウダ」は命題成分であるため容易に従属節の中に入るのに対し、「ヨウダ」はモダリティ成分であるためそれが困難なのである。一方、例文(85a)が適格となるのは、「今年のクリスマスは雪が降る」が主節として機能し、「ヨウナ予感がする」はそれ全体でモダリティを表すためであると考えられる。

最後に、時制との関わりの違いについて説明する。例文(86) (87)において「昨日」、「現在」、「明日」という時の副詞の係り先を調べると、「ヨウダ」と「ソウダ」では違いが見られる。

- (86)a. 昨日は雨が降ったヨウダ。  
 b. 現在雨が降っているヨウダ。  
 c. 明日は雨が降るヨウダ。  
 (87)a. 昨日は雨が降りソウダッタ。  
 b. 現在雨が降っていソウダ。  
 c. 明日は雨が降りソウダ。

例文(86)の場合、時の副詞は「雨が降る」の部分と関わっており、「ヨウダ」とは関わっ



ていない。そのため、「ヨウダ」に過去の時制に係る「\*昨日は雨が降るヨウダッタ」という表現は非文となる。一方、例文(87)の場合、時の副詞は「雨が降りそうだ」全体と関わり、「ソウダ」の時制に影響を与えている。こうした事実から、「ヨウダ」が命題の時制とは独立に機能するのに対し、「ソウダ」は命題の時制の中に含まれていると結論することができる。

以上、推量判断の「ヨウダ」が主観的な表現であるのに対し、兆候や様相の現れを表す「ソウダ」は客観的な表現であることを指摘した。

#### 4.3 ヨウダとベキダ

最後に、推量判断の「ヨウダ」と当為表現<sup>1)</sup>の「ベキダ」の主観性の違いについて分析する。一般に「ヨウダ」と「ベキダ」はともにモダリティ表現であるとされてきた。たとえば、益岡(1987)は「ヨウダ、ラシイ、ニチガイナイ、カモシレナイ、ダロウ」などを「真偽判断のモダリティ」、「ベキダ、ハウガヨイ、テモヨイ、ナケレバイケナイ、テハイケナイ」などを「価値判断のモダリティ」と呼び、ともに「判断のモダリティ」(本研究でいう「命題態度のモダリティ」)に属すとした。この考え方に従うと、例文(88)~(90)の下線部は、いずれも「政府は二千元札を発行する」という命題に対する判断を表した表現であるということになる。

(88) 政府は二千元札を発行する。

(89) 政府は二千元札を発行するヨウダ。

(90) 政府は二千元札を発行するベキダ。

しかし、例文(88) (89)と例文(90)とでは文の構造が異なっている。それは、例文(88)と例文(89)が「政府は景気対策をするかどうか」という問いに対する答となるのに対し、例文(90)は「政府は二千元札を発行するベキかどうか」という問いに対する答となることから分かる。すなわち、「」と「ヨウダ」が真偽の対象とはならないのに対し、「ベキダ」は真偽の対象となるという違いがあるのである。

もう一つ注意したいのは、「」と「ヨウダ」が「確言」と「慨言」という推量判断内部での対立となっているのに対し、「」と「ベキダ」は当為表現内部での対立ではなく、「非当為表現」と「当為表現」の対立となっている点である。当為表現内部での対立を問題にするならば、「ハウガイイ」や「ナケレバイケナイ」などと比べる必要がある。

1) 本研究の「当為表現」は、益岡(1987, 1991)の「価値判断」、森山(1989)の「策動的判断〔必要/意図/願望〕」、中右(1994)の「拘束判断」に対応する。しかし、本研究ではこれをモダリティとは考えないため、「判断」という言い方を避け「当為表現」と呼ぶ。

- (91)a. 政府は二千円札を発行したハウガイイ。  
b. 政府は二千円札を発行しナケレバイケナイ。

一方、益岡（1987：34）は、「「ベキダ」等を取らないゼロの形式は、価値判断についてこれを不問に付するか、或は、保留することを表す」と述べてはいる。しかし、結局はこれを「理念」と「現実」の対立と考え、「確言」と「概言」の対立に平行したものとして説明している。

それでは、「確かさ - 不確かさ」の対立と「現実 - 理念」の対立とは、全く別々のものであろうか。私見によれば、これらの対立の間には、注目すべき共通点がある。それは、基本的には、ある事柄を「現実的なもの」と認定するか「現実的でないもの」と認定するか、という点の対立であると思われる。（益岡1987：38）

益岡は、真偽判断と価値判断の共通性を重視しているが、ここまで抽象化して共通性を見出す論法には無理がある。以下の考察からも明らかなように、両者は異質なものとして考えるべきである。以下、「ヨウダ」がモダリティであるのに対し、「ベキダ」は命題であることを主観性判定テストによって証明する。

まず第1に、「ヨウダ」は否定の対象とならないが、「ベキダ」は否定の対象となるという違いがある。「ヨウダ」が否定の対象とならないのは、これが発話時点における話し手の推量判断を表したものであり、真偽の対象とはなりえないからである。

- (92)a. \*政府は二千円札を発行するヨウではない。  
b. 政府は二千円札を発行するベキではない。

逆に否定の「ナイ」を「ヨウダ」や「ベキダ」の内側に持ってくると、「ヨウダ」の文が適格となるのに対し「ベキダ」の文は非文となる。こうした事実は、「ヨウダ」の前接部分には極性（肯定・否定）が分化するが、「ベキダ」の前接部分には極性が分化しないことを示している。同じ「政府は二千円札を発行する」という形でも、「ヨウダ」の前接

部分と「ベキダ」の前接部分とでは性質が異なっているのである。<sup>1)</sup>

- (93)a. 政府は二千元札を発行しないヨウダ。
- b. \*政府は二千元札を発行しないベキダ。

第2に、「ヨウダ」は疑問の対象とならないが、「ベキダ」は疑問の対象となるという違いがある。「ヨウダ」が疑問の対象とならないのは、これが発話時点における話し手の推量判断を表したものであり、真偽の対象とはなりえないからである。推量判断の場合には、「国民は政府が二千元札を発行するかどうか考えよう」のように、疑問の対象に推量表現を含めずに言う必要がある。<sup>2)</sup>

- (94)a. \*政府が二千元札を発行するヨウかどうか考えよう。
- b. 政府が二千元札を発行するベキかどうか考えよう。

第3に、「ヨウダ」は文代名詞の対象とならないが、「ベキダ」は文代名詞の対象となるという違いがある。

- (95)a. A：政府は二千元札を発行するヨウダ。  
B：それは本当ですか。  
(それ = 政府が二千元札を発行すること)
- b. A：政府は二千元札を発行するベキダ。  
B：それは本当ですか。  
(それ = 政府が二千元札を発行するベキであること)

- 
- 1) 他の当為表現の場合、「ハウガイイ」と「テモイイ」の前接部分には極性が分化するが、「ナケレバイケナイ」の前接部分には極性が分化しない。
    - (i)a. 政府は二千元札を発行{する/しない}ハウガイイ。
    - b. 政府は二千元札を発行{し/しなく}テモイイ。
    - c. 政府は二千元札を発行{し/\*しなく}ナケレバイケナイ。
 しかし、いずれも否定の対象となる点では共通している。
    - (ii)a. 政府が二千元札を発行するハウガイイわけではない。
    - b. 政府が二千元札を発行しテモイイわけではない。
    - c. 政府が二千元札を発行しナケレバイケナイわけではない。
  - 2) 同様に他の当為表現も疑問の対象に入る。
    - (i)a. 政府が二千元札を発行するハウガイイかどうか考えよう。
    - b. 政府が二千元札を発行しテモイイかどうか考えよう。
    - c. 政府が二千元札を発行しナケレバイケナイかどうか考えよう。

第4に、「ヨウダ」は連体修飾成分とならないが、「ベキダ」は連体修飾成分となるという違いがある。

- (96)a. \*政府は二千元札を発行するヨウナ時が来たと判断した。  
b. 政府は二千元札を発行するベキ時が来たと判断した。

すでに論じたように、「ヨウダ」は「直感/感じ/気/予感」などの表現が続く場合には連体修飾成分となる。

- (97) 禎子は、本多良雄が夫について、もっと何か知っているような直感がした。(松本清張『ゼロの焦点』)  
(98) 「いや、つまるところです。年じゅう、暗いような感じがして重苦しい所です」(松本清張『ゼロの焦点』)  
(99) もっとも、その直後に数百年に一度の大震災が襲ってきたというのは、あまりにも偶然がすぎるような気もするが。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)  
(100) 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ予感がする。

一方、「ベキダ」は広く連体修飾成分となる。「ベキダ」の形だと「ダ」に認識判断が加わるのでモダリティのように見えるが、「彼だってやるベキ時はやる」のように「ベキ」の形をとり、話し手の判断を伴わない一般的事実を述べる場合を考えると、「ベキ」が命題表現であることがはっきりする。次の例も同様である。

- (101) 王政復古の際、岩倉、大久保が強調した慶喜の「辞官納地」は、論理的には諸侯すべてに及ぼすべきことであった。(毛利敏彦『大久保利通』)  
(102) 周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信頼すべき男だと云ふ感じが強くなる。(森鷗外『雁』)  
(103) 弔電は葬儀の後、遺族だけが読むべきものだ。(飛鳥圭介『おじさん図鑑』)

第5に、テンスとの関係において次の二つの違いが見られる。一つは、「ヨウダ」が過去文の中で婉曲の用法となるのに対し、「ベキダ」は自然に過去文の中に収まる点である。

- (104)a. 政府は二千元札を発行するヨウだった。  
b. 政府は二千元札を発行するベキだった。

もう一つは、「ヨウダ」の前接部分はテンスが分化するのに対し、「ベキダ」の前接部分はテンスが分化しないという点である。<sup>1)</sup> 前接部分がル形の場合にはその違いが見えにくい、タ形の場合にはその違いがはっきりと現れる。

- (105)a. 政府は二千円札を発行{する/した}ヨウダ。  
b. 政府は二千円札を発行{する/\*した}ベキダ。

「ヨウダ」の場合は、未実現の事態に対する推量判断を表すときには前接部分がル形となり、既成の事態に対する推量判断を表すときには前接部分がタ形となる。一方、「ベキダ」の場合は、未実現の事態に対する当為を表すときには「ベキダ」自体がル形となり、既成の事態に対する当為を表すときには「ベキダ」自体がタ形となる。

- (106)a. 政府は二千円札を発行するベキ{だ/ではない}。  
b. 政府は二千円札を発行するベキ{だった/ではなかった}。

こうした事実により、「ヨウダ」の前接部分にはテンスが分化するが、「ベキダ」の前接部分にはテンスが分化しないことが明らかとなる。<sup>2)</sup>

- 
- 1) このことは益岡(1987)でも指摘されている。  
2) 他の当為表現のうち、「テモイイ」と「ナケレバイケナイ」の前接部分は連用形や未然形であるためテンスの分化はない。  
    (i)a. 政府は二千円札を発行{する/した}ハウガイイ。  
    b. 政府は二千円札を発行{し/\*した}テモイイ。  
    c. 政府は二千円札を発行{し/\*した}ナケレバイケナイ。  
    一方、「ハウガイイ」の前接部分はル形もタ形もくる。しかし、この場合のル形やタ形は、「ヨウダ」の場合とは性格が異なることに注意したい。「ヨウダ」の場合、前接部分がル形の場合は未実現の事態に対する推量判断を表し、タ形の場合は既成の事態に対する推量判断を表す。  
    (ii) 政府は二千円札を発行{する/した}ヨウダ。  
    これに対し、「ハウガイイ」は前接部分がル形の場合もタ形の場合も、未実現の事態を表している。ル形とタ形の違いは、ル形がその行為自体に重点があるのに対し、タ形は行為の結果に重点があるという点にある。したがって、(iii)のようにどちらの解釈でもよい場合にはル形もタ形も使えるが、(iv)のように行為の結果に重点のある場合にはル形が使いにくくなる。  
    (iii) 海外旅行に行くより日本で温泉めぐりを{する/した}ハウガイイ。  
    (iv) 頭が痛いときは早く寝{?る/た}ハウガイイ。  
    なお、過去の事態について「ハウガイイ」と述べる場合には、「ハウガイイ」がタ形となる。  
    (v) 政府は二千円札を発行したハウガヨカッタ。

以上の考察の結果、推量表現の判断の対象が推量表現を含まない部分であるのに対し、当為表現の判断の対象は当為表現を含んだ部分であることが明らかとなった。益岡の考えに従えば、「ベキダ」は「政府が二千円札を発行する」という命題に対する判断であるということになる。しかし、当為表現の判断の対象は「ベキ」を含む「政府が二千円札を発行するベキ」全体であると考えるのが妥当である。一見同じように見える「二千円札を発行する」という形でも、「ヨウダ」の前接部分と「ベキダ」の前接部分とは性質が異なっているのである。益岡は命題の外側を順次上位のモダリティが包んでいくというモダリティ観に立っているが、これとは逆に、本研究のように上位のモダリティの中に下位のモダリティや命題が埋め込まれていくというモダリティ観に立つことにより、こうした事実が見えてくるのである。

また、益岡（1991）は真偽判断と価値判断がパラディグマティックな関係にあると主張している。

真偽判断と価値判断は基本的に相互排除の関係にある。一文において、一方を選べば他方は選ばれないということである。これは、二者が蓋然性と当為性という異なる領域に属する事柄を表現することに起因する。このように相互排除の関係にあるということは、両者が範列的な関係（‘paradigmatic’な関係）にあるということでもある。これら2つのカテゴリーに共通して「判断」の名を冠する理由はこの点に存するのである。（益岡1991：54）

しかし、次の例が示すように、両者は明らかにシンタグマティックな関係にある。

- (107)a. 政府は二千円札を発行するベキ・ダ。
- b. 政府は二千円札を発行するベキ・カモシレナイ。
- c. 政府は二千円札を発行するベキ・カナ。
- (108)a. 政府は二千円札を発行したハウガイイ・。
- b. 政府は二千円札を発行したハウガイイ・ニチガイナイ。
- c. 政府は二千円札を発行したハウガイイ・ヨウダ。

その一方で、益岡は「価値判断の二次的モダリティの形式に真偽判断の形式が接続することは十分可能である」（益岡1991：58）とも述べ、例文(109)を挙げている。しかし、このような例は特殊なものではなく、上の例文(107)(108)のようにいくらでも考えつく。

- (109) オムレツは出来たてをたべるべきだろう。（益岡1991：第3章注3の例文）

このあたり益岡の説明には混乱がある。益岡は価値判断のモダリティを恒常的に主観性を表現する一次的モダリティの形式（「コトダ」「モノダ」）と、客観的表現になりうる二次的モダリティの形式（「ベキダ」、「～ナケレバナラナイ」、「ハウガヨイ」など）とに分類した。ここで、価値判断の一次的モダリティに限り、真偽判断のモダリティとパラディグマティックな関係にあるとするのなら論旨は一貫する。しかし、益岡は一次的モダリティの形式も二次的モダリティの形式も、真偽判断のモダリティとパラディグマティックな関係にあると考えている。その証拠に、益岡は次の例文(110) (111)を挙げて、「これらの文は、事の適否を問題にしているだけであり、真偽の判断は関与しない」（益岡1991：53）とも説明している。この説明の「これらの文」には、「コトダ」とともに「ベキダ」も含まれている。

- (110) 清二さんもこれに懲りて、あまり不得手な分野に手を出さないことだ。（益岡1991：第3章の例文(8)：上之郷利昭『新・西武王国』）
- (111) オムレツはうちで出来たてをたべるべきだ。（益岡1991：第3章の例文(9)：石井好子『巴里の空の下オムレツのにおいは流れる』）

ここで、二次的モダリティの形式が発話時点における話し手の当為の気持ちを表した場合には、一次的モダリティの形式になると解釈することもできる。しかし、その場合にも例文(107) (108)のような反例が出る。そもそも、真偽判断と価値判断が相互排除の関係にあるとする考え方に無理があるのである。真偽判断と当為表現はパラディグマティックな関係ではなく、シンタグマティックな関係にあると認める必要がある。

以上の結果、「ベキダ」が命題に属して当為表現を表すのに対し、「ヨウダ」はモダリティに属して真偽判断を表すと結論することができる。

ところで、「ベキ・ニチガイナイ」という表現は不可となる。これは他の当為表現が、「ハウガイイ・ニチガイナイ、テモイイ・ニチガイナイ、ナケレバイケナイ・ニチガイナイ、テハイケナイ・ニチガイナイ」のように適格となるのとは対象的である。同様に、「ベキ・ノヨウダ」という表現も不自然な感じがする。これも「ハウガイイ・ヨウダ、テモイイ・ヨウダ、ナケレバイケナイ・ヨウダ、テハイケナイ・ヨウダ」が適格となるのとは対照的である。<sup>1)</sup>

- (112)a. オムレツは出来たてをたべるベキ・ダ。

---

1) この点についてはなお考察の必要がある。

- b. オムレツは出来たてをたべるベキ-カモシレナイ。
- c. \* オムレツは出来たてをたべるベキ-ニチガイナイ。
- d. ? オムレツは出来たてをたべるベキ-ノヨウダ。
- e. オムレツは出来たてをたべるベキ-ラシイ。
- f. オムレツは出来たてをたべるベキ-ダロウ。

一方、「ベキ-カモシレナイ」は適格となる。一般に「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」は蓋然性の高低を表し分ける表現であるとされているが、両者には単に蓋然性の高さでは説明できない違いがある。「ベキダ」との接続可能性の違いも、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」の異質性を示す証拠となっている。

## 5. 第2章のまとめ

本章では、蓋然性を表す文末表現「80パーセント(である)」、「確率が高い」、「可能性ガアル」、「ソウダ」、「(ような)気ガスル」、「ト思ウ」、「」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」を対象に考察し、それぞれ事態の蓋然性を表すのか判断の蓋然性を表すのかを分析した。事態の蓋然性とは客体世界における事態成立の可能性の度合いのことで、命題に属す概念であり、判断の蓋然性とは話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合いのことで、モダリティに属す概念である。

ある表現が命題に属すのかモダリティに属すのかを判定する基準として、本研究では主観性判定テスト(否定の焦点テスト、疑問の焦点テスト、文代名詞化テスト、連体修飾テスト、過去テスト)を実施した。命題に属すものはこのテストで適格となり、モダリティに属すものはこのテストで不適格となる。この結果、「80パーセント(である)」、「確率が高い」、「可能性ガアル」、「ソウダ」は命題、「」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」はモダリティと判定された。「(ような)気ガスル」と「ト思ウ」は、それ自体が判断の対象となる場合には命題となるが、前接部分が判断の対象となり、それ自体は発話時点における話し手の心的態度を表す場合にはモダリティとなる。また、一般に「カモシレナイ」はモダリティであると言われているが、本研究ではこれを「カモシレナイ<sub>P-M</sub>」と分析し、命題を表す「カモシレナイ<sub>P</sub>」の部分とモダリティを表す「<sub>-M</sub>」の部分とから成り立っていると考える。連体形のときは「<sub>-M</sub>」がつかないため命題としてのみ機能する。

最後に、一般にモダリティとされている「ヨウダ」、「ソウダ」、「ベキダ」の主観性



の違いについて分析し、推量判断の「ヨウダ」はモダリティであるが、「ソウダ」、「ベキダ」および比況の「ヨウダ」は命題であることを指摘した。推量判断の「ヨウダ」と比況の「ヨウダ」は、「根拠Xにより、AはB（の）ヨウダ」のように一般化して表すことができる。AをBに例えて言うときには比況、AをBと推測して言うときには推量判断というように、文脈によって用法が分かれる。

## 第3章 文末のモダリティ形式

### 1. はじめに

本章では、「ダ/ 」<sup>1)</sup>、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」の違いについて分析する。たとえば、例文(1)の各表現は「明日は雨が降る」という事態の成立可能性について、その真偽に関する話し手のさまざまな判断を述べたものである。

- (1)a. 明日は雨が降る。
- b. 明日は雨が降るカモシレナイ。
- c. 明日は雨が降るニチガイナイ。
- d. 明日は雨が降るヨウダ。
- e. 明日は雨が降るラシイ。
- f. 明日は雨が降るダロウ。

例文(1a)は「明日は雨が降る」という事態の成立が確実で、他の事態の成立する可能性のないことを表し、例文(1b)～(1f)は「明日は雨が降る」という事態の成立が確実ではなく、他の事態の成立する可能性も残っていることを表している。前者のように当該の命題と矛盾対立する命題の成立可能性が否定されているものを「確言」と呼び、後者のように当該の命題と矛盾対立する命題の成立可能性が否定されていないものを「概言」と呼ぶ。<sup>2)</sup>

例文(2)のような矛盾対立する命題の成立を許す文脈において、「確言」を表す表現は使えないが、「概言」を表す表現は使える。

- 
- 1) 「ダ」と「 」は交替形の関係にある。名詞(雨・ダ)や形容動詞型活用の語(静か・ダ)には「ダ」がつき、動詞型活用の語(降る・ )や形容詞型活用の語(うれしい・ )には「 」がつく。
  - 2) 益岡(1991)はこれらの表現を既定真偽判断(Palmer(1986)の epistemic modality)を表すものとして位置付け、「根本的には、対象となる事柄が真であることを無条件に認める「断定」と、真であることを限定を加えた上で認める「断定保留」とに二分される」(益岡1991: 110)と説明している。

- (2)a. \*明日は雨が降る。しかし、晴れるかもしれない。  
 b. 明日は雨が降る{カモシレナイ/ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ/ダロウ}。しかし、晴れるかもしれない。

本研究では、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」が第一義的に「推量判断」を表すのに対し、「ダ/」と「カモシレナイ」は第一義的に「認識」を表すことを主張する。後者は、推論の帰結を述べる文脈に使われたとき派生的に推量の意味を帯びる。一方、「ダロウ」は証拠不足のため当該の認識や推量判断が確認できないことを表す。以下、これらの表現が次の意味を表すことを指摘する。

- 「ダ/」 : 当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す  
 「カモシレナイ」 : 当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す  
 「ニチガイナイ」 : 話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す  
 「ヨウダ」 : 二つの事態に共通の属性があることを根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す  
 「ラシイ」 : 他者からの情報や外界の現象を根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す  
 「ダロウ」 : 証拠不足のため当該の認識や推量判断が確認できないことを表す

## 2. 認識と推量判断

### 2.1 話し手の判断と文の類型

話し手の判断と文の類型に関して論じた先行研究に田野村(1990)がある。田野村は次の二つの例文を比較して、文には推量判断の関わるものと、推量判断の関わないものとがあることを指摘した。

- (3)a. (君八知ラナイダロウガ)あの男はヤクザだ。(田野村1990の例文)  
 b. (アノ風体カラスルト)あの男はヤクザだ。(田野村1990の例文)

田野村は例文(3a)のような文を「知識表明文」と呼び、「話者が知識としてもっている情報が表明されているにすぎない。発話の時点において判断が下されるわけではない」

( 田野村1990 : 786 ) と説明し、例文(3b)のような文を「推量判断実践文」と呼び、「この文の話者はいままさに判断 この場合、推量的判断 をくだした、もしくは、くだしつつあるといえる」( 田野村1990 : 785 ) と説明している。このように、同じ真偽判断を表す表現の中にも、客体世界における事態の真偽を見たままに「認識」するものと、話し手の頭の中で事態の真偽を「推量判断」するものがある。

## 2.2 認識や推量判断の関わる文

文には、話し手の「真偽判断」(「認識」あるいは「推量判断」)の関わるものと関わらないものがある。第1章2.4節に示した各種の文をこれによって分類すると次のようになる。このうち、本章と関わるのは「真偽判断のモダリティ」の関与する文である。

「真偽判断のモダリティ」の関与する文

...眼前描写文、想起文、認識文、推量文、知識伝達文、推量伝達文、質問文

「真偽判断のモダリティ」の関与しない文

- ・「伝聞のモダリティ」の関与する文...伝聞文
  - ・「願望のモダリティ」の関与する文...願望文、願望伝達文
  - ・「意志のモダリティ」の関与する文...意志文、意志伝達文、申し出文、勧誘文
  - ・「命題態度のモダリティ」の関与しない文
- ...感情表出文、感情伝達文、( 広義 ) 命令文、挨拶文

はじめに、「認識」と「推量判断」の関係について説明する。<sup>1)</sup> 話し手がある事態の成立を見たままに捉えたり、記憶のままに捉えるのが「認識」、事態の認識が不確定でその成立可能性について推論するのが「推量判断」である。これを図式化すると図3-1(第1章2.2.1節の図1-4の再掲)のようになる。



図3-1 認識と推量判断

たとえば、ある人物の性別について、見たままや記憶のままに「あれは男だ」と捉えるのが「認識」である。「認識」の場合、事態の成立可能性は発話時点において確定している。

1) 宮崎(1991、1992)は、判断系のモダリティを「事態把握(認識)」と「判断成立(判断)」の階層として捉えている。しかし、認識を「」(確定)と「ダロウ」(推量)の対立とし、判断を「ニチガイナイ、カモシレナイ」等(断定)と「カ、カナ等」(疑い)の対立としているなど、その内容は本研究とは異なる。

一方、ある人物の性別について、見ただけでは分からなかったり記憶が不確かであった場合に、推論の結果「あれは男だ」と捉えるのが「推量判断」である。「推量判断」の場合、事態の成立可能性は発話時点において確定していない。このように、「真偽判断のモダリティ」の関与する文は「推量判断」の有無によって大きく二つに分類される。

先に挙げた「真偽判断のモダリティ」の関与する文のうち、「認識」のみ関わり「推量判断」の関与しない文は、「眼前描写文」、「想起文」、「認識文」、「知識伝達文」、「質問文」である。「眼前描写文」は話し手の見たままの眼前の情景、「想起文」は話し手の思い出したとおりの記憶、「認識文」は話し手の認識したとおりの事態を描写したもの、「知識伝達文」は話し手の既知の知識を聞き手に伝達したもの、「質問文」は聞き手の持つ情報の提供を要求した文である。

- (4)a. あ、雨が降ってきた。(眼前描写文)
- b. そういえば、昨日は雨が降った。(想起文)
- c. 寝ている間に一雨降ったな。(認識文)
- d. 富士山が笠をかぶると雨が降るよ。<sup>1)</sup>(知識伝達文)
- e. 富士山が笠をかぶると雨が降るんですか。(質問文)

一方、「推量判断」の関わる文は、「推量文」と「推量伝達文」である。「推量文」は事態の認識が不確定でその成立可能性について推論を加えたもの、「推量伝達文」はそうした推論による判断を聞き手に伝えたものである。

- (5)a. 富士山が笠をかぶっているから雨が降るニチガイナイ。(推量文)
- b. 富士山が笠をかぶっているから雨が降るデショウ。(推量伝達文)

ところで、木下(1999)は「確言性」(確言形)と「蓋然性」(ヨウダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ、ダロウ)を次のように定義し、「本稿は、真偽についての判断には、「推論」過程があると仮定する」(木下1999:19)と説明した。

- 「確言性」：命題と矛盾対立する「推論」の帰結成立の可能性が否定されている
- 「蓋然性」：命題と矛盾対立する「推論」の帰結成立の可能性が否定されていない

木下のいう「真偽判断」は、「推論」過程のあることから察して、本研究の「推量判断」

---

1) 富士山が笠をかぶったとき実際に雨の降る確率は60パーセント程度である。

に相当すると思われる。<sup>1)</sup> しかし、これらの文末形式は必ずしも「推論」過程のある場面で使われるとは限らない。その証拠に、例文(6a) (6b)は一般的事実を述べた文、例文(7c)は確認要求の文であり、話し手の「推論」は加わらない。

- (6)a. 宝くじというものはまず当たらない。
- b. 宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
- c. ほら、言ったダロウ。宝くじなんてそうそう当たらないダロウ。

こうした表現も事態の成立可能性について述べたものであるため、真偽判断の中に位置付けて考える必要がある。

### 3. カモシレナイ、ニチガイナイ、ダ／

従来、「カモシレナイ」は蓋然性の高いことを表し、「ニチガイナイ」は蓋然性の低いことを表すとされてきた。しかし、両者には単なる蓋然性の違いでは説明の仕切れない違いがある。そこで、本研究では「カモシレナイ」は話し手の認識を表し、「ニチガイナイ」は話し手の推量判断を表すと考える。すなわち、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表し、「ニチガイナイ」は当該の事態の成立が確実であると推量したことを表すと考えるのである。認識の場合、発話時点において事態成立の確実・不確実がすでに決まっているのに対し、推量判断の場合、発話時点ではそれがまだ決まっていない。「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」はこうした質的な違いによって区別されるのであり、蓋然性の高さという量的な違いで区別されるのではない。量的な違いによって「カモシレナイ」と対になる表現は、当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す「ダ／」である。

#### 3.1 カモシレナイとニチガイナイの異質性

一般に先行研究では、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表し、「ニチガイナイ」

---

1) 木下は「真偽判断のモダリティ」がモダリティの体系の中でどこに位置付けられるのかを説明しておらず、「ヨウダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ、ダロウは、主に文末に位置し、命題が真か、真に近似するものか、などの真偽に関する態度（「真偽判断のモダリティ」）を表わしていると言うことができる」（木下1999：1）という大まかな定義をするにとどまっている。したがって、明確に「真偽判断のモダリティ」と「推量判断」の関係について記述しているわけではない。

は蓋然性の高いことを表すと説明されてきた。<sup>1)</sup> これに対し、木下(1999)は二語の違いを蓋然性の高低ではなく、可能性の分散の有無にあるとした。

カモシレナイ：「推論」の帰結の中に、唯一際立って「可能性」が高い(低い)ものがない(「可能性」が分散している)

ニチガイナイ：「推論」の帰結の中に、唯一際立って「可能性」が高いものがある

両者を比較すると、木下の説明の方がすぐれている。それは、蓋然性の高低による説明では、何を基準に蓋然性の高低を決めるのかが不明確だからである。たとえば、例文(7a)は雨の降る蓋然性が相対的に低く、例文(7b)は雨の降る蓋然性が相対的に高い。後者の場合、話し手は雨の降る可能性が低いと言っているところか、むしろ雨の降る方に判断が傾いている。こうした場合に単なる蓋然性の高低では説明ができない。

- (7)a. まず降らないと思うけど、万が一雨が降るカモシレナイから傘を持っていこう。
- b. この雲行きだとかなりの確率で雨が降るカモシレナイから傘を持っていこう。

一方、木下の説明は、「推論」の帰結の中に唯一際立って可能性の高いものがあれば「ニチガイナイ」、それがなければ「カモシレナイ」というように、使い分けの基準が明確である。これに従えば、例文(7a)と例文(7b)は、相対的な蓋然性の程度は異なるものの、いずれも雨の降る可能性を唯一際立って高いものとは考えていないため「カモシレナイ」が使われていると説明することができる。

木下は可能性の分散の有無が二語の使い分けに関わっている証拠として、複数の矛盾対立する事態の成立可能性がともに高いことを、「ニチガイナイ」によって表すことはできないと指摘している。事実、例文(8a)のように言うことはできるが、例文(8b)のように言うことはできない。

- (8)a. 容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないA氏の犯行である可能性も高いし、強い犯行動機を持つB氏がやった可能性も高い。(木下1999: 第4章の例文(36))
- b. \*容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないA氏の犯行であるニチガイナイし、強い犯行動機を持つB氏がやったニチガイナイ。(木下1999: 第4章の例文(37))

---

1) 「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」を蓋然性の高さの違いに求めた研究として、仁田(1981、1989、1991)、野田(1984)、森山(1989、1992a)、益岡(1991)、宮崎(1991、1992)、中畠(1993)、森本(1994)、劉(1996)、安達(1997)などがある。

一方、こうした場面で「カモシレナイ」は使える。このとき、「カモシレナイ」は決して蓋然性の低いことを表しているわけではない。

- (9) 容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないA氏の犯行であるカモシレナイし、強い犯行動機を持つB氏がやったカモシレナイ。

こうしたことから、二語の違いを蓋然性の高低ではなく、可能性の分散の有無に求める木下の説明の方がすぐれていることが分かる。

ところが、木下の説明にも依然として問題は残っている。たしかに、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の違いに可能性の分散の「有無」が関与することは間違いない。しかし、木下の言うように二語ともに推論の帰結を表す表現と考えるのは問題である。その理由は、例文(10)のように推論の帰結を表す文脈では二語ともに使えるが、例文(11)のように一般的事実を述べる文脈では許容度に違いが生じるためである。一般的事実はすでに話し手の頭の中に知識として備わっているものであり、発話時点において新たに推論によって導き出したものではない。それにもかかわらず例文(11a)が成立するということは、「カモシレナイ」は推論過程を経ない場合にも使われることを示している。

- (10) (話し手の頭の中で宝くじが当たるかどうかを推論して)
- a. 宝くじは当たらないカモシレナイ。
  - b. 宝くじは当たらないニチガイナイ。
- (11) 宝くじというものは当たるものですか。
- a. 宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
  - b. \* 宝くじというものは当たらないニチガイナイものだ。

従来、二語は同じ蓋然性の高低あるいは可能性の分散の有無という範疇の中で捉えられてきた。しかし、もし二語の違いがそれによって説明できるのであれば、例文(11a)より蓋然性の高いこと、あるいは可能性の分散のないことを例文(11b)によって述べることができるはずである。ところが、それができないということは、二語が同じ蓋然性あるいは可能性という範疇では捉えられないことを示している。「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、蓋然性の高低や可能性の分散の有無といった量的な違いではなく、推論過程を経るか



どうかといった質的な違いとして捉える必要がある。<sup>1)</sup>

二語の異質性を示す証拠には、一般的事実を述べることができるかどうかという違いの他、文代名詞の焦点となるかどうか、連体修飾成分となるかどうか、対話文に使えるかどうか、想起文に使えるかどうか、伝聞文に使えるかどうかという違いが指摘できる。いずれの場合も、「カモシレナイ」が自然に使えるのに対し、「ニチガイナイ」はそれができない。

まず、二語が文代名詞の焦点となるかどうかについて見る。例文(12a) (12b) (= 第2章の例文(7h) (7i)) に示されるように、「カモシレナイ」は文代名詞の焦点となるが、「ニチガイナイ」は文代名詞の焦点とはならない。例文(12a)で話題の焦点となっているのは、「雨が降ること」ではなく「雨が降るカモシレナイこと」であり、例文(12b)で話題の焦点となっているのは、「雨が降るニチガイナイこと」ではなく「雨が降ること」である。

- (12)a. A : 明日の天気はどうでしょうか?  
 B : 明日は雨が降るカモシレナイ。  
 A : それは本当ですか。  
 (それ = 明日は雨が降るカモシレナイこと)
- b. A : 明日の天気はどうでしょうか?  
 B : 明日は雨が降るニチガイナイ。  
 A : それは本当ですか。  
 (それ = 明日は雨が降ること)

次に、二語が連体修飾成分となるかどうかについて見る。例文(13a) (13b) (= 第2章の例文(13h) (13i)) では、「カモシレナイ」が自然に連体修飾成分となるのに対し、「ニチガイナイ」が連体修飾成分となるのは不自然である。例文(13b)は、「雨が降るニチガイナ

1) 三宅 (1992, 1993) は、「カモシレナイ」を「可能性判断」、「ニチガイナイ」を「確信的判断」のように、異なるものとして分類している。

「可能性判断」：命題が真である可能性があると認識する。(三宅1992 : 38)

「確信的判断」：命題が真であると確信する。(三宅1993 : 38)

ただし、三宅が両者を「認識的モダリティ」(本研究の「真偽判断のモダリティ」に相当)の範疇で捉えているのに対し、本研究では「カモシレナイ」は事態と認識の二つの性質を合わせ持つと捉えている点で違いがある。

また、小林 (1980 : 8) は、「[ ~ かもしれない ] はある事柄のフィフティー、フィフティーの可能性を (中略) 述べたもので推量表現とは見なしがたく本論ではこれらを除外して考える」としている。しかし、「カモシレナイ」は必ずしもフィフティー、フィフティーの可能性を述べるわけではないこと、推量のモードウスから除外した後の位置付けがなされていないことから、なお検討の余地が残されている。

イと思われる空模様だ」の「と思われる」が省略されたものとしてなら解釈できるが、そうでなければ不自然である。（連体修飾については本章3.5節で詳しく分析する。）

- (13)a. 雨が降るカモシレナイ空模様だ。
- b. <sup>?</sup>雨が降るニチガイナイ空模様だ。

次に対話文における違いを見る。先の例文(10)に示されるように、独話文では二語とも使うことができる。しかし、対話文で「ニチガイナイ」を使うのは不自然である。（対話文や独話文との関係については本章3.6節で詳しく分析する。）

- (14) この宝くじは当たるといいますか。
- a. そうですねえ、この宝くじは当たるカモシレマセンよ。
- b. <sup>?</sup> そうですねえ、この宝くじはまず当たらないニチガイアリマセンよ。

さらに、過去の記憶を想起して述べる想起文において、「カモシレナイ」は使えるが、「ニチガイナイ」は使えないという違いがある。

- (15)a. 私は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたカモシレナイが、記憶には残っていない。
- b. <sup>\*</sup>私は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたニチガイナイが、記憶には残っていない。

次のように他者のことを述べる場合には「ニチガイナイ」も使える。しかし、この場合は発話時点において他者の過去の事態を推量判断しているのであり、想起文ではなく推量文となる。

- (16)a. あの子は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたカモシレナイが、記憶には残っていない。
- b. あの子は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたニチガイナイが、記憶には残っていない。

最後に、他からの情報を伝達する伝聞文において、「カモシレナイ」は伝聞の対象となるが、「ニチガイナイ」は伝聞の対象とはならないことを指摘する。

- (17)a. 雨が降るカモシレナイそうだ。  
 b. <sup>?</sup>雨が降るニチガイナイそうだ。

この点について仁田(1991:61)は、「「～するかもしれないそうだ」に比べて、「～するにちがいないそうだ」は容認可能性がかなり落ちるものと思われる。「～ニチガイナイ」は、「～カモシレナイ」に比べて第三者の心的態度の表現になることは難しい」と説明している。仁田は二語をともにモダリティと考えているため、このような説明となっているが、本研究ではこの「カモシレナイ」は命題として機能するため伝聞の対象となり、「ニチガイナイ」は推量判断を表すため伝聞の対象とならないと考える。

一般に「カモシレナイ」はモダリティを表すとされている。これに対し、本研究では「カモシレナイ」は「カモシレナイ<sub>P-M</sub>」と分析され、命題を表す「カモシレナイ<sub>P</sub>」とモダリティを表す「<sub>-M</sub>」からなると考える。これと平行して考えると、例文(17a)は「雨が降るカモシレナイ<sub>P</sub>-そうだ<sub>M</sub>」となり、伝聞のモダリティ「ソウダ」の中に「雨が降るカモシレナイ」という命題の埋め込まれた文であると分析される。つまり、例文(17a)の「カモシレナイ」は仁田の説明にあるような心的態度を表したのではなく、命題に属するものであると結論することができる。一方、「ニチガイナイ」は形式全体が発話時点における話し手の推量判断を表すため、伝聞の対象とはならないと考えられる。「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、蓋然性の高低や可能性の分散の有無といった量的な違いではなく、推論過程の有無といった質的な違いとして捉えられるのである。

さて、木下(1999:19)は推論を「一つ以上の根拠から帰結を導くこと」と定義し、「本稿は、真偽についての判断には、「推論」過程があると仮定する」と主張した。木下に従えば、次の文で「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」が使えない理由は、「これらの形式が、「推論」の結果ただ一つの帰結が導かれたことを表わすことによると考えられる」(木下1999:85)と説明されることになる。たしかに、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は、推論の結果ただ一つの帰結が導かれたことを表すと言える。

- (18)a. 泊まるかもしれないし泊まらないかもしれない。どっちにしても相当遅くなる。  
 (三宅1992:例文(7):山田太一『丘の上の向日葵』)  
 b. \*泊まるニチガイナイし泊まらないニチガイナイ。どっちにしても相当遅くなる。  
 (木下1999:第4章の例文(35))  
 c. \*泊まるヨウダし、泊まらないヨウダ。(木下1999:第4章注7の例文(i))  
 d. \*泊まるラシイし、泊まらないラシイ。(木下1999:第4章注7の例文(ii))

問題は、はたして例文(18a)に推論過程があるのかどうかということである。たしかに、

この表現は例文(19a)のように未知推量をする文脈に使われることもある。しかし、例文(19b)のように既定の事実を述べただけの知識伝達文として使われる場合もある。

(19)a. 今日、お父さん家に帰ってくるかしら。

そうね、泊まるカモシレナイし泊まらないカモシレナイわね。

b. 今日の予定はどうなってるの。

泊まるカモシレナイし泊まらないカモシレナイ。その時の都合ということになってるの。

例文(19b)の場合、発話時点において推量判断を行なっているわけではなく、単に複数の事態の成立可能性がともにあることを述べているにすぎない。このことから考えると、例文(19a)でも「カモシレナイ」自体は複数の事態の成立可能性が共存することを述べているにすぎず、推量判断の意味は未知推量をするという文脈に由来するものであると考えることができる。

同様に、次の例文(20) (21)は発話時点において推量判断を下している文脈であるが、例文(22) (23)は発話時点において推量判断を下しておらず、一般的真理として複数の命題が可能性として共存することを表しているにすぎない。前者の場合も「カモシレナイ」自体は複数の事態の成立可能性が共存することを述べているにすぎず、推量の意味は未知推量をするという文脈に委ねられる。

(20) 「ふっ どうやらとんでもない事件に首をつっこんじまったらしい オレはもう平和な日常にはもどれぬかもしれん!!」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)

(21) 「たぶんね……、私、よくはわからないけれど、あのロケットの中には、時空間をこえてものを運ぶ装置がついていたのよ。爆発のときに、何かのはずみであそこら一帯が、四次元空間にほうりだされて、そして、すぐもとの世界へもどったのだけど、時間がずれて、五十年もむかしへきてしまったのかもしれないわね…」(手塚治虫『鉄腕アトム』)

(22) 経路全体を考えれば、複雑さはさらに広がる。電子は、たとえばAから出発してまっすぐにOまで来たのかもしれないし、ぐるっとまわり道をしてOにたどりついたのかもしれない。これらすべての可能性を加えてはじめて、現在電子がOにある状態の共存度が計算できるのである。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)

(23) たとえば、この章の最初にでてきたプレゼント交換の例で、AさんとBさんが近所に住んでいて、毎年プレゼントを交換するようになっていると、一回限りの交換とは違ってきそうです。今年、高い品物をプレゼントすれば、たとえ相手からの今

年のプレゼントが安い品物であっても、来年はお返しに高い品物をもらえるかもしれません。あるいはまたおたがいに高い品物を交換していれば、これからもその関係を続けたいと思うようになるかもしれません。（西山賢一『勝つためのゲームの理論』）

以上の考察の結果、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、蓋然性の高低や可能性の分散の有無という量的な違いではなく、認識と推量判断という質的な違いによって区別されることが証明される。「カモシレナイ」は、当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表し、「ニチガイナイ」は、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す。

### 3.2 カモシレナイとダ/ の同質性

一般に「カモシレナイ」と対をなす表現は「ニチガイナイ」であるとされている。これに対し、本研究では「カモシレナイ」と対をなす表現は「ダ/」であることを主張する。それは、「ダ/」と「カモシレナイ」の対立が、認識における事態成立の確実・不確実という同質の範疇の中での対立となっているためである。以下、「ダ/」は他の事態の成立可能性を認めず、当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す表現であり、「カモシレナイ」は他の事態の成立可能性を認め、当該の事態の成立が不確実であると認識したことを表す表現であることを証明する。

次の例文において、「カモシレナイ」は「ニチガイナイ」との置き換えは難しいが、「ダ/」との置き換えは可能である。もし、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が単なる蓋然性の高さや可能性の分布の違いで対立しているのならば、「ニチガイナイ」との置き換えは可能なはずである。

- (24)a. 温泉の滑らかな湯に肌をひたしている女の美しさなどは、日本人でなければ好くわからないかも知れない。湯のしみ込んだ檜の肌の美しさなどもそうであろう。  
（和辻哲郎『古寺巡礼』）
- b. 温泉の滑らかな湯に肌をひたしている女の美しさなどは、日本人でなければ好くわからない。
- c. <sup>2</sup>温泉の滑らかな湯に肌をひたしている女の美しさなどは、日本人でなければ好くわからないニチガイナイ。<sup>1)</sup>

1) この文は外国人の発言としてなら適格である。しかし、話し手（書き手）が日本人自身の場合には不自然な感じがする。これは、話し手自身の知りうるはずの事柄を推量するのが不自然なためである。したがって、同じ日本人でも客観的な立場から推論しているという文脈なら適格な文として容認できる。

- (25)a. 死を前にして、助かる方法があるかもしれないってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。(鈴木光司『リング』)
- b. 死を前にして、助かる方法がある っってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。
- c. \*死を前にして、助かる方法があるニチガイナイってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。
- (26)a. 不動産の場合、この土地は自分の物だと言ったところで、そうだと断定する根拠が明確でない。塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地かもしれない。したがって、家や土地を手に入れたら、かならず登記しておく必要があるのだ。(相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる!』)
- b. 塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地ダ。
- c. \*塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地ニチガイナイ。<sup>1)</sup>

こうした事実から、真偽判断のモダリティを表す文末形式の中で、「カモシレナイ」と対をなす表現は、「ニチガイナイ」ではなく「ダ/ 」であることが分かる。

「カモシレナイ」は、一般的事実として複数の事態の共存を認める場合に使われるほか、ある事態の成立を「ダ/ 」によって確言するのをためらう場合に、婉曲的な言い回しとして使われることもある。

- (27) 女はどんな正直な女でも、その時心に持っている事を隠して、外の事を言うのを、男程苦にしはしない。そしてそう言う場合に詞数の多くなるのは、女としては余程正直なのだと云っても好いかも知れない。(森鷗外『雁』)
- (28) 今逃げて行った男 女かもしれないが は、たぶん伸子がついウトウトとソファで眠り込んでいる間に入って来たのだろう。(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

例文(27)は、話し手の主張に確言するだけの自信がないため、そうでない可能性を残し婉曲的な表現にした例である。話し手は自分の主張が不確実であると述べているだけであり、特に推量判断をしているわけではない。例文(11)は、侵入者が「男」である確証がないため、「女」である可能性も残し婉曲的な表現にした例である。この場合も、特に侵入者の性別について推量判断をしているわけではない。

なお、同じ「カモシレナイ」という形でも、文末のモダリティ形式ではないものもあるので注意が必要である。これらは「知れない」という本動詞の意味が機能している表現で

---

1) 次のような表現なら適格となる。しかし、これは元のような一般的事実を表す文ではなく、推量判断を表す文となる。

(i) 塀で囲い、家を建てて住んでいるけれど、あれは借家、借地ニチガイナイ。

ある。

- (29) いつ “お迎え” がくるかも知れないという状況は昔も今も変わりませんが、死刑囚を包む日常は確実にしかも限りなく悪化しているのです。(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)
- (30) 地元栃木県下では大パニックとなった。破れかぶれの境地と飢えとで獺猛になった菊地が、母親をイビリ、村八分にしたお礼参りにいつ我が家に押し込んでくるかもしれない、と人びとは戦慄した。実際、警察の広報車が「死刑囚がいつ押し入ってくるかわからないので、戸締まりは厳重に」と警告してまわった。(大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』)
- (31) どうにもならないんじゃないじゃありませんか、別れていても、いつ帰ってくるかも知れないひとがあるんですよ。(林芙美子『放浪記』)
- (32) しかしこうして書きはじめた以上はどこまで迷いこむかもしれない地獄への旅にでたようなものだど覚悟をきめる必要があるだろう。(倉橋由美子『聖少女』)
- (33) あなたがお父様たちの御意志を裏切って、そう、ほんとに考えようもないやり方で裏切って、どこの馬の骨かも知れない男と……。 (北杜夫『楡家の人びと』)
- (34) 其釘隠が馬鹿に大きい雁であった。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びている。(伊藤左千夫『野菊の墓』)

これらが本動詞である根拠として、第一に、これらの「カモシレナイ」が「ダ/ 」と対立していないことが挙げられる。事実、これらの「カモシレナイ」を「ダ/ 」と置き換えた「\*いつ “お迎え” がくる 」、「\*いつ我が家に押し込んでくる 」、「\*いつ帰ってくるひと」、「\*どこまで迷いこむ地獄」、「\*どこの馬の骨な男」、「\*木か金なほど古びている」は不適格となる。第二に、これらの文の「シレナイ」が「分からない」の意味で解釈されることが挙げられる。たとえば、例文(29)で話題となっているのは、「いつ “お迎え” がくるのか分からないコト」であり、例文(30)で話題となっているのは、「いつ我が家に押し込んでくるか分からないコト」である。例文(30)の場合、後の「わからない」という本動詞の存在からもこのことが証明される。例文(31)~(34)も同様である。<sup>1)</sup>

以上、認識における事態成立の確実・不確実において、「ダ/ 」と「カモシレナイ」が対をなすことを主張した。「ダ/ 」は当該の事態の成立が確実であると認識したことを表し、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性も

---

1) 「カモシレナイ」は、このような「か+も+知れ+ない」という表現からきたものであると考えられる。この点については須賀(1995)に記述がある。

あると認識したことを表す。

### 3.3 認識確定性

次に認識確定性について論じる。認識確定性は三原（1995）の判断確定性を修正して得た概念である。そこでまず、三原の判断確定性の概念から見ていく。

判断確定性の概念は現実世界における事態の生起可能性を捉えようとするものではなく、判断が話者の意識の中でどの程度確定的と捉えられているかを巡る概念である。つまりそれは文の内容に関わる確定性ではない（三原1995：296）

三原は判断確定性の概念を、ムードの表現が連体修飾節に入るかどうかという基準として使った。三原の判断確定性に関する表（三原1995：296）を表3-1に示す。この表の左端は、ムードの表現が連体修飾節に入るかどうかを示したものである。

	ムードの表現	判断確定性
OK	ソウダ（予感・予想）、ヨウダ・ミタイダ（様態）	完全確定
OK	デアロウ、ハズダ	主観的確定
OK	カモシレナイ	確定に近似
OK #	ニチガイナイ	直感的確定
??	ラシイ	未確定に近似
*?	ダロウ	未確定
*	ヨウダ・ミタイダ（蓋然性）、ソウダ	完全未確定

表3-1 三原（1995）の判断確定性

ここで注意したいのは、表の右端の「判断確定性」の欄が混乱した表記となっている点である。「主観的確定」、「直感的確定」、「確定に近似」などというのは、基準が不均一で分かりにくい分類である。このような分類となっているのは、三原が認識と推量判断を区別して考えてはいないためである。これに対し、本研究では判断確定性の概念を認識における確定・不確定として考える。用語としては、認識における確定性であることを明示するために「認識確定性」と呼ぶことにする。

認識確定性を説明するためには、まず事態確定性<sup>1)</sup>について説明しておく必要がある。

1) 本研究の「事態確定性」は、三原（1995）の「事実確定性」に相当する。「事態」と「判断」を対立的に考える本研究に従って用語を改めた。



事態確定性とは客体世界における事態成立の確定・不確定を捉える概念で、ある事態が「成立する」あるいは「成立しない」と捉えるものを事態確定性が「確定」と言い、「両方の可能性がある」と捉えるものを事態確定性が「不確定」と言う。一方、認識確定性とは話し手の認識の中で事態成立の確定・不確定を捉える概念で、確定にしる不確定にしる発話時点において事態確定性の定まっている場合、認識確定性が「確定」とあり、事態確定性が確定なのか不確定なのか不明の場合、認識確定性が「不確定」とあると言う。認識確定性は文末のモダリティ形式自体に備わったものではなく、認識文や推量文など、文に備わったものである。認識確定性が「確定」となるのは、認識のみ関わり推量判断の関与しない文（眼前描写文、想起文、認識文、知識伝達文、質問文）である。一方、認識確定性が「不確定」となるのは、推量判断の関与する文（推量文、推量伝達文）である。

このように、認識確定性を文に備わったものと考えることにより、「ダ/」や「カモシレナイ」のように、推量文にも非推量文にも使える表現についての説明が可能となる。すなわち、「ダ/」や「カモシレナイ」自体は常に事態確定性のみを表し、認識確定性は推量文や非推量文といった文に委ねられるのである。一方、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」はそれ自体が推量判断を表すので、認識確定性は不確定となる。なお、三原は「ソウダ（予感・予想）」、「ヨウダ・ミタイダ（様態）」、「ハズダ」をムードの表現に位置付けているが、これらは「ソウダ」、「ヨウダ」、「ミタイダ」、「ハズダ」と分析されるため「ダ/」と同様に考えればよい。三原はこれらを「完全確定」、「主観的確定」としているが、それはこれらが非推量文で使われるためであると説明できる。

結局、各文末のモダリティ形式は表3-2のように整理される。

モダリティ形式	事態確定性	認識確定性
ダ/	確定	
カモシレナイ	不確定	
ニチガイナイ		不確定
ヨウダ		不確定
ラシイ		不確定
ダロウ		

表3-2 文末のモダリティ形式と事態確定性、認識確定性

次に、文末のモダリティ形式と事態確定性および認識確定性の関係について、例文を挙げて説明する。たとえば、ある男が「スパイ」であるかどうか話題となっているときに、「スパイである可能性」が確定であれば例文(35a)のように言い、「スパイでない可能性」が確定であれば例文(35b)のように言う。また、「スパイである可能性」と「スパイでない可能性」が共に残されている場合には例文(35c)のように言う。前者の場合、事態確定性が確定であると言い、後者の場合、事態確定性が不確定であると言う。

- (35)a.   ねえ、知ってる？   あの男はスパイダよ。
- b.   ねえ、知ってる？   あの男はスパイジャナイよ。
- c.   ねえ、知ってる？   あの男はスパイカモシレナイよ。

これに対し、ある男がスパイである可能性が「ある」のか「ない」のか「両方」なのかということに関しては、例文(35)の各表現は発話時点ですでに一つの認識に達している。これを認識確定性が確定であると言う。<sup>1)</sup>

一方、「ダ/ 」や「カモシレナイ」は、例文(36)のように未知推量を行なう文脈で使われることもある。この場合、発話時点において話し手は、ある男がスパイである可能性が「ある」のか「ない」のか「両方」なのかを認識していない。これを認識確定性が不確定であると言う。

- (36)a.   思うに、あの男はスパイダ。
- b.   思うに、あの男はスパイジャナイ。
- c.   思うに、あの男はスパイカモシレナイ。

認識確定性が確定であるにせよ不確定であるにせよ、これは知識伝達文や推量文の性質によるものであり、「ダ/ 」と「カモシレナイ」はあくまでも事態確定性の確定・不確定

---

1) この点に関して、森山(1989)は、「「かもしれない」と判断されるということ自体は、話し手において確定的な情報である。それゆえ、情報は話し手のものである。ただ、話し手の情報でありながら、そこで述べられる命題情報が、事実とは判断されていないというに過ぎない。その意味で、不確定と区別して、不確定ということが適当である。それで、蓋然性判断の形式を伴う文の意味は、話し手において不確実な内容を、文の意味としては確定的に述べる意味だとも言える」(森山1989: 79)としている。森山はこの性質を狭義蓋然性判断の諸形式(カモシレナイ、ニチガイナイ、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、ソウダ、ハズダ)すべてに当てはまるとしている。

一方、大鹿(1992)は、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」に対象的な意味と作用的意味の二つを認め、「カモシレナイ」は対象の意味が「可能性」で作用的意味が「可能性認識」、「ニチガイナイ」は対象の意味が「確実性」で作用的意味が「確実性認識」であるとした。

を表しているにすぎない。この場合、話し手は想像の中で事態成立の確実・不確実を認識していると考えられる。

話し手は事態成立の確実・不確実が不明な場合、「わからない」と言うこともあるが、推量判断によって何らかの帰結を導くこともある。文末のモダリティ形式のうち、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」はそれ自体が推量判断を表すため、認識確定性は不確定となる。

- (37)a. 思うに、あの男はスパイニチガイナイ。
- b. 思うに、あの男はスパイノヨウダ。
- c. 思うに、あの男はスパイラシイ。

残る「ダロウ」は推量表現であるとされることが多い。たしかに、例文(38a)のように推量を表す文脈に使われる場合もある。しかし、例文(38b) (38c)のように非推量表現も可能なことから、それ自体が推量判断を表すのではないと考えられる。<sup>1)</sup>

- (38)a. 思うに、あの男はスパイダロウ。
- b. 私って綺麗デショウ？
- c. ニンジンを買うデショウ、玉ネギを買うデショウ、あと何だっけ？

「ダロウ」の特徴は、「ダ/ 」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」に後続する一方、「ヨウダ」、「ラシイ」には後続しない点にある。

- (39)a. あの男はスパイ・ダロウ。
- b. あの男はスパイカモシレナイ・ダロウ。
- c. あの男はスパイニチガイナイ・ダロウ。

---

1) 「ダロウ」に関する研究は多いが、その機能はいまだ明確にはなっていない。宮崎（1991：38）は、「推量」のダロウの不確かさは、判断の成立についての不確かさではなく、認識のあり方における不確かさであると考えられる」とし、森山（1992a：73）は、「ダロウは、結論にまだ至っていない - 判断を形成する過程にあること - を表示する」としている。大鹿（1992：129）は、「いうまでもないことだが、そこでは真偽の判断が行われているわけではない。むしろ推量はある事態を思い描く作用であると言ってもよい」とし、大鹿（1993：103）は、「「……だろう」という文は事実を推量しており、従って「……」の部分は事実として想定された事態である」と述べ、「ダロウ」は確実なこととして承認する断定と対立し、不確実なこととして承認するとしている。三宅（1995：2）は、「「推量」：話し手の想像の中で命題を真であると認識する」としている。

- d. \*あの男はスパイノヨウ・ダロウ。
- e. \*あの男はスパイラシイ・ダロウ。

本章4節で考察するように、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量判断を表す。これに対し、「ニチガイナイ」は思い込みによる推量を表す。「ダロウ」が「ニチガイナイ」にはつくが、「ヨウダ」、「ラシイ」にはつかないということは、これが根拠に基づく判断には使えないことを示している。一方、「あの男はスパイダロウ」、「あの男はスパイカモシレナイダロウ」という表現は、証拠不足のため事態の确实・不确实が確認できないことを表している。要するに、「ダロウ」は証拠不足のため当該の認識や推量判断が確認できないことを表す表現なのである。<sup>1)</sup>

### 3.4 判断の焦点

次に判断の焦点について論じる。田窪(1987:43)は、「日本語では、原則的に文末の述語以外が自然な質問文の焦点に来ることができない。そこで「の」をつけて、焦点に来る要素を文末述語内に入れる必要がある」と指摘している。次の文で「彼がいるから」や「英語をマスターするために」という理由節が質問文の焦点に入るためには、「の」のスコープに入れなければならない。

- (40)a.?? 彼がいるから、北海道大学に行きますか。(田窪1987:例文(28))
- b. 彼がいるから、北海道大学に行くんですか。(田窪1987:例文(30))
- (41)a.?? 英語をマスターするために、アメリカに行きますか。(田窪1987:例文(29))
- b. 英語をマスターするために、アメリカに行くんですか。(田窪1987:例文(31))

続いて田窪は、同様の現象がモーダルのスコープに関しても起こることを指摘している。

---

1) 例文(38c)は次の表現の婉曲用法であると考えられる。次の表現がニンジンや玉ネギを買うことをはっきり認識しているのに対し、例文(38c)はあえて確認を避けた表現を使うことによって、ニンジンや玉ネギを買うことを今現在認識している最中であるというニュアンスにしている。

(i) ニンジンを買う、玉ネギを買う、あと何だっけ?

森山(1992)は、「ダロウ」の意味を判断形成過程の表示であるとしている。しかし、例文(38b)の「私って綺麗デショウ?」などを判断形成過程で説明するのには無理がある。例文(38c)などの「ダロウ」が判断形成過程を表すのは文脈によるものであり、それ自体はあくまでも認識や推量判断が確認できないことを表すとした方が包括的な説明となる。

- (42)a. 彼が行ったから [ 彼女も行った ] でしょう。<sup>1)</sup> (田窪1987: 例文(33))  
 b. [ 彼が行ったから、彼女も行った ] のでしょう。(田窪1987: 例文(35))

例文(42a)の「彼が行ったから」は「彼女が行った」の理由にはならない。「から」節が「でしょう」のスコープに入って「彼女が行った」の理由を表すには、例文(42b)のように「の」のスコープに入れなければならない。

そこで、次の文末のモダリティ形式が、理由節をそのスコープに入れる場合に「の」が必要であるかどうかを確かめる。まず、主節の「二千元札を発行する」を焦点とする場合は、田窪の指摘の通り「の」が不要である。

- (43) (政府は国民の人気を取るために何をするのかという文脈で)
- a. 国民の人気を取るために、二千元札を発行するカモシレナイ。
  - b. 国民の人気を取るために、二千元札を発行するニチガイナイ。
  - c. 国民の人気を取るために、二千元札を発行するヨウダ。
  - d. 国民の人気を取るために、二千元札を発行するラシイ。
  - e. 国民の人気を取るために、二千元札を発行するダロウ。

一方、理由節を焦点とする場合、「カモシレナイ」と「ダロウ」は田窪の指摘の通り「の」が必要である。しかし、「ニチガイナイ」と「ラシイ」は「の」があってもなくてもよく、「ヨウダ」は「の」があると非文となる。<sup>2)</sup>

- (44) (なぜ政府が二千元札を発行するのかという文脈で)
- a. \* [ 国民の人気を取るために二千元札を発行する ] カモシレナイ。
  - b. [ 国民の人気を取るために二千元札を発行する ] ニチガイナイ。
  - c. [ 国民の人気を取るために二千元札を発行する ] ヨウダ。
  - d. [ 国民の人気を取るために二千元札を発行する ] ラシイ。
  - e. \* [ 国民の人気を取るために二千元札を発行する ] ダロウ。

1) この文について田窪(1987: 43)は、「すなわち、「から」は、「彼女が行った」理由でなく、話者がそう推測する理由を述べている」と説明している。

2) 安達(1997: 4)は、「証拠性判断の諸形式(引用者注: ヨウダ、ラシイ、ミタイダ、シソウダ)は形式の内部に「の(だ)」の介在を許さないという特徴を共有する」とし、「これは、本稿の立場からは、「の(だ)」の介在によって得られる効果と証拠性判断の形式の意味とが重なり合っていることを示唆していると考えられる」と説明している。しかし、「ラシイ」の場合には「の(だ)」の介在が許されると思われる。

(45) (なぜ政府が二千年札を発行するのかという文脈で)

- a. [国民の人気を取るために二千年札を発行する]のカモシレナイ。
- b. [国民の人気を取るために二千年札を発行する]のニチガイナイ。
- c. \* [国民の人気を取るために二千年札を発行する]のヨウダ。
- d. [国民の人気を取るために二千年札を発行する]のラシイ。
- e. [国民の人気を取るために二千年札を発行する]のダロウ。

こうした違いは、「カモシレナイ」、「ダロウ」と、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」との性質の違いを示す証拠となっている。すでに説明したように「ダ/ 」と「カモシレナイ」は事実確定性の確実・不確実で対立し、「ダ/ 」と「ダロウ」は事態の成立を確証的なものと捉えるか捉えないかで対立している。これと平行して考えると、「ノダ」を使う場面で、事実確定性が確実であれば「ノダ」、不確実であれば「ノカモシレナイ」、一応確実と捉えるが確証できないことを示す場合は「ノダロウ」が使われると説明することができる。要するに、「ノカモシレナイ」と「ノダロウ」は「ノダ」の成立可能性と平行的に考えればよいのである。一方、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は、「ノダ」の力を使わずに理由節を焦点にする機能が備わっていると結論される。

一般に「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」は蓋然性の高さの違いとして説明されている。もしそうであれば、例文(46)の文脈で、事件の原因が「奥野が突然発狂したこと」にある可能性の低いことを「カモシレナイ」によって表すことができるはずである。しかし、「ニチガイナイ」がそのままの形で使えるのに対し、「カモシレナイ」は「の」のスコープに入れなければならない。例文(46b)が成り立つのは、事件が起きた原因を推測する文脈ではなく、事件発生直後に奥野がどうなったのかを推測する文脈である。

(46) (事件の原因を推測する文脈で)

- a. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したにちがいないと思いました。(大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』)
- b. #事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したカモシレナイと思いました。
- c. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したノカモシレナイと思いました。

例文(46a) (46c)は、次の文の括弧内の言葉が省略されてできたものと考えられる。

- (47)a. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂したために事件が起きた

ニチガイナイと思ひました。

- b. 事件発生直後、近所に住む人たちは、奥野が突然発狂した（ために事件が起きた）ノカモシレナイと思ひました。

こうした違いからも、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の異質性が証明される。

### 3.5 連体修飾

次に、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が連体修飾成分となる場合について考察する。三原（1995）は「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の連体修飾について次のように記述している。

カモシレナイとニチガイナイは共に連体修飾節中に生起可能なようである。

（6）a. 犯人が立ち寄るかもしれない店

b. 倒産するかもしれない会社

（7）a. 犯人が立ち寄るに違いない店

b. 倒産するに違いない会社

ただし（7 a、b）については、文法的観点から言えば適格であるかもしれないが、文体的には完全であるとは言いにくい。注意深く推敲しながら文章を書く場合、例えば「きっと犯人が立ち寄ると思われる店」などのようにするのはないかと思われるからである。（三原1995：288）

この三原の記述は本研究の日本語の直観とも合うものである。一般に「ニチガイナイ」は連体修飾成分となるとされ、<sup>1)</sup> 実例にも現れるが、それは「～ニチガイナイと思われる〔名詞〕」の「と思われる」が省略された表現であると考えられる。一方、「カモシレナイ」の場合は「と思われる」を想定せずに連体修飾成分となる場合もある。以下、このことについて論じていく。

まず「カモシレナイ」の例から見る。

- (48) トウモロコシや丈の高い草の茎が両側から道の方にしな垂れかかり、狭い道をより狭く先細りさせ、急カーブの先に現われるかもしれないモノに対する不安を殊更にかきたてた、あの道路。（鈴木光司『リング』）

1) 森山（1989：62）には「行くに違いない人 cf. ??行くだろう人」、益岡（1991：115）には、「彼がリツに話すに違いないことは、よく承知していた。」という例が挙げられている。

- (49) 浅川はトイレから飛び出し、見苦しい自分の姿を顧みる余裕もなく、部屋中に顔を巡らせてそこにいるかもしれないモノにペコペコと頭を下げて懇願した。(鈴木光司『リング』)
- (50) このときまで、大久保は西郷への期待よりも、西郷が帰れば久光と衝突し、そうすれば、せつかくまとめあげてきた薩藩の体制にひびが入るかも知れぬのを、警戒する気持のほうが強かったようであるし、また、西郷よりも久光にいっそうの親近感をもっていたとも、想像される。(毛利敏彦『大久保利通』)
- (51) 寸劇に近かったかも知れぬものと一定の構想のもと挿入される趣向とは一線を画さねばならぬだろうが、小説作法上、あの久七を加えた三すくみの道中喜劇がこの類から着想されたと想定しても、さほど見当外れにはならないだろう。(江本裕訳注『好色五人女』)
- (52) 大泉さんは「ドナーさえ見つければ助かるかも知れない多くの命のために、少しでもお役に」と、公演や『孫』の収益の一部を骨髓バンクに寄付している(『中日新聞』「中日春秋」1999.12.25 朝刊)

これは、次の表現が連体修飾成分となるのと平行した現象である。<sup>1)</sup> 例文(53e)は、「ドナーさえ見つければ助かると思われる多くの命」の「と思われる」が省略された表現であると解釈されるが、他の表現は「と思われる」を想定せずに連体修飾成分となる。

- (53)a. 急カーブの先に現われるモノに対する不安
- b. そこにいるモノにペコペコと頭を下げて懇願した。
- c. 薩藩の体制にひびが入るのを警戒する気持
- d. 寸劇に近かったものと一定の構想のもと挿入される趣向
- e. ドナーさえ見つければ助かる多くの命のため

これと同様に、先の例文(52)は「と思われる」の省略された表現であると解釈されるが、例文(48)~(51)は「と思われる」を想定せずに連体修飾成分となる。「カモシレナイ」が「と思われる」を想定せずに使えることは、次のように一般的事実を述べる文脈で「カモシレナイ」が使えることから証明される。これに対し、「ニチガイナイ」は非文となる。

- 1) 次の(ib)は不自然な文であるが、言葉を補えば(ic)のように適格な文となる。
- (i)a. 犯人はなぜ見つかるかも知れないこの場所に戻ってきたか。(CBCテレビ「'99年末総力スペシャルテレビ公開大捜査! 未解決事件を追え!」1999.12.29)
- b. <sup>2</sup>犯人はなぜ見つかるこの場所に戻ってきたか。
- c. 犯人はなぜ来れば見つかるこの場所に戻ってきたか。



(例文(54)は例文(11)の再掲。)

(54) 宝くじというものは当たるものですか。

- a. 宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
- b. \* 宝くじというものは当たらないニチガイナイものだ。

新潮文庫の100冊 CD-ROM 版に収録された作品のうち、日本人作家によるもの67冊を対象に調べたところ、「カモシレナイ」が連体修飾成分となる例が19例見つかった。このうち次の5例は、複数の事態の成立可能性が共存することを客観的に述べた文であり、「と思われる」の省略された文ではない。一方、こうした客観的な文脈で「と思われる」の省略を考えずに「ニチガイナイ」を使うのは不自然である。

- (55)a. 殊にバクテリアなどは先頃まで度々分類学者が動物の中へ入れたんだ。今はまあ植物の中へ入れてあるがそれはほんのはずみなのだ。そんな曖昧な動物かも知れないものは勿論仁慈に富めるビジテリアン諸氏は食べたり殺したりしないだろう。(宮沢賢治『ビジテリアン大祭』)
- b. ? 殊にバクテリアなどは先頃まで度々分類学者が動物の中へ入れたんだ。今はまあ植物の中へ入れてあるがそれはほんのはずみなのだ。そんな曖昧な動物ニチガイナイものは勿論仁慈に富めるビジテリアン諸氏は食べたり殺したりしないだろう。
- (56)a. しかし、内藤はリングの上で獣になることのできないタイプのボクサーだつた。それはボクサーとして致命的な欠陥になるかもしれない弱点だった。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- b. ? しかし、内藤はリングの上で獣になることのできないタイプのボクサーだつた。それはボクサーとして致命的な欠陥になるニチガイナイ弱点だった。
- (57)a. 下の金庫には、重要書類と相当額の金とが納めてあり、火の中を無理に取りに行こうと思えば、行けるかも知れない状況であった(後略)(阿川弘之『山本五十六』)
- b. ? 下の金庫には、重要書類と相当額の金とが納めてあり、火の中を無理に取りに行こうと思えば、行けるニチガイナイ状況であった。
- (58)a. 「そう。だって……無罪かもしれない人に、会社を辞めると言うのはおかしいと思うの。世間の人、容疑者というだけでその人を犯人扱いするわ。たとえ無罪になっても……」(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

- b. <sup>?</sup>「そう。だって……無罪ニチガイナイ人に、会社を辞めろと言うのはおかしいと思うの。世間の人も、容疑者というだけでその人を犯人扱いするわ。たとえ無罪になっても……」
- (59)a. 「この中で、買えるかも知れない範囲の部屋があるのは、この二つですな」  
(曾野綾子『太郎物語』)
- b. <sup>?</sup>「この中で、買えるニチガイナイ範囲の部屋があるのは、この二つですな」

一方、次の14例は「何々カモシレナイ」という判断に話し手の主観が入っているため、「と思われる」の省略された文として解釈される。このように「と思われる」の省略を想定している場合には、「ニチガイナイ」も使うことができる。<sup>1)</sup>

- (60)a. 本陣の娘という身分柄には微妙な意味合が含まれていることに、佐次兵衛は迂闊にもごく近頃になって気がついたのである。それはもとより藩主の宿を承る名誉ある家柄の生れであることも示していたが、同時に藩主の愛を享けたかもしれない女という不確かな推量も含まれていた。(有吉佐和子『華岡青洲の妻』)
- b. 本陣の娘という身分柄には微妙な意味合が含まれていることに、佐次兵衛は迂闊にもごく近頃になって気がついたのである。それはもとより藩主の宿を承る名誉ある家柄の生れであることも示していたが、同時に藩主の愛を享けたニチガイナイ女という確かな推量も含まれていた。
- (61)a. その夜、寝る前に、私と志乃は湯にはいった。私には、寝る前に、ぜひ志乃に話しておかねばならぬことがあったが、そんなことは、新婚旅行の旅先で、新妻に語るべきことではないような気がして、日が暮れる前からいい出しかねていたのである。それは、私にとってはのんびきならない問題であったが、あるいは志乃の晴れた心を翳らせるかもしれないことなのであった。(三浦哲郎『初夜』)
- b. その夜、寝る前に、私と志乃は湯にはいった。私には、寝る前に、ぜひ志乃に話しておかねばならぬことがあったが、そんなことは、新婚旅行の旅先で、新妻に語るべきことではないような気がして、日が暮れる前からいい出しかねていたのである。それは、私にとってはのんびきならない問題であったが、おそらく志乃の晴れた心を翳らせるニチガイナイことなのであった。
- (62) 彼はもう芝居は気にならなかった。ただ何げなく杉子の顔を見る機会をつくることに苦心した。ここに自然のつくった最も美しい花がある。しかも自分の手のとどくかも知れない処に。(武者小路実篤『友情』)

1) ページの節約のため「ニチガイナイ」の例文は(60b) (61b)にとどめる。

- (63) (ほかの男なら、色香も褪せた不美人として興ざめするかもしれないこの女が、自分にはどんなに愛らしく、美しく思えることが……。年月と共に、この女の値打ちがわかり、この女もまた、心変わりしなかった……。)(田辺聖子『新源氏物語』)
- (64) 少なくとも、太郎が五月さんだったら、少しでも動くものには本能的にとびかかるというシャム猫のように、金を吐き出すかも知れないその男に、積極的に近づくだろう、と思えたのだった。(曾野綾子『太郎物語』)
- (65) 私は、家に残っている家族の顔を、まともに見ることができなかった。たとえ長兄の失踪にはどんな事情がからんでいたにしろ、生きているかもしれない彼を放置しているわけが私にはわからなかった。(三浦哲郎『幻燈畫集』)
- (66) ここも、総崩れがはじまったのだ。逃げ先は、金角湾に浮ぶ友船しかない。だが、このあたりは、金角湾へはどこよりも遠いのだ。人々はあせり、撃退できたかも知れない敵にも、もう眼もくれなかった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)
- (67) 戦線を放棄した彼は、自分の船に運びこまれてそこで手当てを受けていたが、その船も金角湾の外に脱出した後、まだ遅れてくるかもしれない避難民のために、湾外で待つことに決めた他のジェノヴァ船と夕暮時まで行動をともにしたのだが、その間も、コンスタンティノープルの市内から伝わってくる陥落時の異様な雰囲気や、脱出の機会を逃した湾内の友船が、次々とトルコ兵に襲われ略奪されていく様子から、耳と眼をふさぐことはできなかった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)
- (68) 本国ジェノヴァの指令どおりに中立を貫こうにも、ジェノヴァ居留区の責任者としては、コンスタンティノープルが今度も耐えぬくかもしれない可能性も、頭に入れておかねばならなかった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)
- (69) 堀のふちに立つ主君を城壁から守るように、彼もまた、両手を広げて仁王立ちになったのだ。そのままの姿で立ちつづけるトルサンの頭に、自分自身を襲うかも知れない危険はまったく浮んでこなかった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)
- (70) 暑かった日中の疲れがかれの全身をぐったりと重くしていた。一つの事件、かれと弟を身動きできなくしてしまうかもしれない一つの事件がはじまったところだった。(大江健三郎『戦いの今日』)
- (71) こういう善男善女がやつらの有名なワイセツを心臓にまで象徴化した筋道は、宗門の教理信条とは微塵の関係もなく、かならずや乳房を撫でたり撫でられたりという体験上愉快的、いつも興奮するに十分な操作からはじまったにちがいない。心臓以外の、いや、乳房以外の他の器官にも依ったかも知れない筋道をみごとに拭き消

しているのは、さすがにやつらの得意とする権謀術数のしわざ、礼儀作法の精妙である。(石川淳『かよい小町』)

- (72) (うぬぼれかもしれない) 仕事が終り鈴木にあった。(高野悦子『二十の原点』)
- (73) 男に生まれなかったことを、まるでじぶんや母親の責任であるかのようにいった六年生のコトエの顔がうかんでくる。希望どおりかの女が男に生まれていたとしても、いまごろは兵隊墓にいるかもしれないこのわかいのちを、えんりょもなくうばったのはだれだ。(壺井栄『二十四の瞳』)

次に「ニチガイナイ」の例を見る。「ニチガイナイ」が連体修飾成分となる場合は、「～ニチガイナイと思われる〔名詞〕」の「と思われる」が省略された表現であると解釈される。

- (74) こんなにも強い衝動もいつかはうすれてゆくにちがいないことのつらさ、これが郷愁というものなのだろうか。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- (75) 所長の上に矯正管区長、矯正局長、そして法務大臣。Fさんが生涯顔を会わせる機会もないにちがいない国家権力というはるかな高みへ段階はつながっていた。(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)
- (76) たとえば、今は昨日よりも少し楽に息ができる。また息もできない孤独な夜が来るに違いないことは確かに私をうんざりさせる。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)

これらの表現は、「こんなにも強い衝動もいつかはうすれてゆくにちがいないと思われること」、「Fさんが生涯顔を会わせる機会もないにちがいないと思われる国家権力というはるかな高み」、「また息もできない孤独な夜が来るに違いないと思われること」の、「と思われる」が省略された表現として解釈される。

こうした現象が一般的なものであるかどうかを、新潮文庫の100冊 CD-ROM 版に収録された作品のうち、日本人作家によるもの67冊を対象に調べたところ、「ニチガイナイ」が連体修する例が41例見つかった。<sup>1)</sup> これらの例は、いずれも「ニチガイナイ」の後に「と思われる」あるいは「という」などを補って考える必要がある。たとえば、例文(77) (78)は「と思われる」、例文(79) (80)は「という」を補って考えるのが自然である。

1) このうちの13例は北杜夫の『楡家の人びと』、6例は塩野七生の『コンスタンティノーブルの陥落』の例であり、この二つの作品だけで全体のほぼ半数を占めている。「ニチガイナイ」を連体修飾に使うかどうかは作家による個人差があると推測される。

- (77) もう死んでしまった、顔も見たこともない、きっと私よりもはるかに美しい人であつたに違いない瀬尾由加子さんの容姿やら表情やらを勝手に想像してみながら、モーツァルトのシンフォニイの、さざなみのような調べに身をまかせていたのでございます。(宮本輝『錦繡』)
- (78) 僕は兵隊の右足首を持ちあげ、形が良かったにちがいない太い拇指に、木札を結びつけた。(大江健三郎『死者の奢り』)
- (79) 慈海はそれでも元気な声をよそおったが、すぐに咳き込んだ。里子は奥の間との仕切りの襖を閉め、枕もとにきて、蓮沼に低頭してから、ゆっくり教師の顔をみた。何か慈念のことでいいにきたにちがいない直感が走った。(水上勉『雁の寺・越前竹人形』)
- (80) 幕営の中に残った将士は、李陵の服装からして、彼が単身敵陣を窺ってあわよくば単子と刺違える所存に違いないことを察した。(中島敦『李陵』)

他の37例もこうした引用文であることを示す言葉を補う必要がある。結局、これらの表現は「何々ニチガイナイと思われる〔名詞〕」、「何々ニチガイナイという〔名詞〕」の「と思われる」や「という」が省略された表現であると結論することができる。その証拠に、これらの「ニチガイナイ」は、物語の当該の場面における話し手あるいは登場人物の推量判断を表している。

- (81) 彼とはヒルトンホテルのロビーで会った。そこが彼の指定の場所だった。知人との義理で仕方なく会ってくれたに違いない彼は、しかし静かに私の話に耳を傾けてくれた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- (82) さて、退院してからのあたしは、じつは、すっかりもとどおりの末紀にかえっていたのでした。ただひとつの暗い穴、おそろしいもののたまっているにちがいない記憶の井戸をのぞいては。(倉橋由美子『聖少女』)
- (83) そう思うと、今あの山の麓で目を醒ましているに違いない兵士の姿が、たとえ日本の兵隊の惨めな起床の行事の裡であろうとも、故郷の庭で遊ぶ古い友を偲ぶような、懐しさで思いやられた。(大岡昇平『野火』)
- (84) 榆聡、たった二字の、なんとすっきりと洗煉されて誰の子よりも聡明に偉くなるにちがいないその名で、もう一人が龍子の二番目の子、藍子である。(北杜夫『榆家の人びと』)
- (85) それはもうまぎれもなく女の裸の心が自分の男を呼ぶ声であつた。島村は思いがけなかった。しかし宿屋中に響き渡るにちがいない金切声だったから、当惑して立ち上ると、女は障子紙に指をつっこんで棧をつかみ、そのまま島村の体へぐらりと

倒れた。(川端康成『雪国』)

- (86) 邯鄲の都は、天下一の名人となって戻って来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返った。(中島敦『名人伝』)

たとえば、例文(81)は、物語の当該場面において話し手が「知人との義理で仕方なく会ってくれたに違いない」と推量判断しているのであるし、例文(86)は、物語の当該場面において今まさに邯鄲の都の人々が「やがて眼前に紀昌の妙技が示されるに違いない」と推量判断しているのである。

三原(1995)は、「ニチガイナイ」が連体修飾しにくい理由を文体的な落ち着きの悪さであるとしている。しかし、これは単に文体的に落ち着かないのではなく、推量判断を表す「ニチガイナイ」が「と思われる」などを伴わずに連体修飾成分として客体化されるのが不自然なためであると考えた方が適切である。

### 3.6 ニチガイナイによる独話的推量

従来、「ニチガイナイ」は独話文に使われることが指摘されている。しかし、その一方で、独話文に限らず使われるとする研究もある。この点について、本研究では「ニチガイナイ」は基本的に独話文で使われると主張する。その理由として、実例で対話文で使われている場合であっても、書き言葉的である、対話の場面であっても独白的に使われている、「に+違い+ない」の意味で使われている、のいずれかであるという事実が指摘できる。そこでまず寺村(1984)の次の指摘から検討する。

ニチガイナイは、ふつう確信の度合いが、ダロウやカモシレナイより強いと説明され、それはまちがいでないが、ニチガイナイの特徴は、自分の思案、推量を自分に確かめるような、独白的な使い方がふつうであるところにある。誰かの質問に答える文では使われない。

- (32) 課長八今日来ラレマスカ？

ハイ、来マス

? ハイ、来ルデショウ

来ルカモシレマセンガ、来ナイカモシレマセン

\* ハイ、来ルニチガイアリマセン

\* イヤ、来ナイニチガイアリマセン

(寺村1984: 235-236)

寺村はこれ以上の説明をしていないが、この記述はニチガイナイの意味について重要な指

摘をしている。

一方、三宅（1993）、森山（1995）、木下（1999）の研究では、「ニチガイナイ」は対話文にも使われるとしている。三宅（1993）は、「ニチガイナイ」は医師の診断や天気予報など、聞き手に求められている情報がある種の責任をもって伝えるような文脈においては用いることができないが、そうでなければ用いることができるとしている。

話し手の確信（思い込み）を述べることが不適切であると見なされる文脈においては、ニチガイナイを用いることはまさに不適切であると言える。そのような文脈でなければ、対話であってもニチガイナイの生起は可能である。（三宅1993：40）

森山（1995）は、「ニチガイナイ」には「未知推測」としての意味と「排他的ニュアンス」の意味があるとして、次のように論じている。

単なる「独白」という性質だけで説明することはできない。むしろ、ニチガイナイの未知推測としての意味と排他的ニュアンスという意味から説明の方が妥当だと思われる。すなわち、質問文の純然たる情報要求に対して、ニチガイナイを使う返答は、未知内容であることを認めた上で、内容を排他的ニュアンスで主張するということになる。これが運用論的に妥当ではないのである（森山1995：181）

そして、医師が風邪の診断を下す場面で「ニチガイナイ」の使えない理由を次のように説明している。

排他的に強く主張はするが本来未知であるというぎりぎりの判断の内容が、「風邪」という簡単な診断だからである。しかし、診断という状況でニチガイナイが不適切だというわけではない。同じ「診断」でも重大な病気で診断が難しい場合には、

(45) 今までいろいろ検査をしましたが、この病気は肺繊維症にちがいありません。

のように適切になる。（森山1995：181）

木下（1999）は、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」の可能性の分布の違いから説明を試みている。

ニチガイナイの場合、命題の「可能性」が唯一際立って高いことを表わし、命題の成立をある程度保証する一方で、その帰結に至るための根拠は明示できないものであ

てもよいことによると考えられる。なぜその帰結に達したのか話者自身よくわからない部分がありながら、その成立をある程度保証するということは、責任ある態度が求められる場面では不適切なのである。

一方、カモシレナイの命題は唯一際立って「可能性」が高いこと表わすものではないのだから、特定の命題の成立を保証することは表わさない。発言に責任を持つことを求められる場面であっても、責任を持つことができれば仕方がない。カモシレナイも、ニチガイナイと同じくその根拠は非明示的であってもよいが、特定の命題の成立を保証せず、責任を持てないと述べているのであるから、根拠が非明示的であってもなくても、そのことは問題とならないのである。(木下1999: 92-93)

三宅、森山、木下は、「ニチガイナイ」が対話文に使えないのは、発言に責任を要する場面においてであると主張している。<sup>1)</sup> たしかに、発言に責任を要する場で「ニチガイナイ」が使えないのは間違いない。しかし、例文(87)は発言に責任のない場面であるにもかかわらず「ニチガイナイ」を使うのは不自然である。

(87) ライオンとトラはどちらが強いと思いますか。

ライオンです。

ライオンカモシレナイし、トラカモシレマセン。

? ライオンニチガイアリマセン。

ライオンニキマッテイマス。

例文(87)は話し手の思い込みを述べても構わない文脈である。その上、森山(1995)の説明にある未知推測の場面でもある。しかも、「ライオンニキマッテイマス」が適格であることから、排他的ニュアンスの伴う答え方も許容される。それにもかかわらず「ニチガイナイ」が不自然であるのは、責任の有無では「ニチガイナイ」の不適格さが説明できないことを示している。

ところで、「ライオンニチガイアリマセン」という形自体は、次のような文脈でなら使うことができる。

(88) これネコの子みたいだけど本当にライオンなの？

はい、ライオンニチガイアリマセン。

---

1) 三宅(1993: 40)は、先の寺村(1984)の例文(32)が非文となる理由について、「話し手の確信(思い込み)を述べるのが不適切であると見なされる文脈」だからであるとしている。



しかし、この文は話し手の既知の知識を伝達した文（知識伝達文）であり、特に話し手の推量判断は加わっていない。この「ニチガイナイ」は「に+違い+ない」と分析され、もとの「違い」という名詞の機能が働いている表現である。その証拠に「ライオンニチガイハアリマセン」のように間に助詞の「ハ」を入れても不適格とならないし、「ライオンに間違いありません」のように「に間違いない」で置き換えても不適格とならない。もしこれがモダリティの「ニチガイナイ」であるならば、「\*明日は雨が降るニチガイハナイ」、「\*明日は雨が降るに間違いない」のように不適格な文となる。

三宅（1993：39）は、「多少、文章語的なニュアンスのあるニチガイナイに対して、ニチガイナイとほぼ同義であるが文章語的なニュアンスのないニキマツテイルであれば、より自然に対話においても生起する」と説明した。三宅は、対話文で「ニチガイナイ」が不自然となる理由を文体に求めようとした。しかし、そもそも「ニチガイナイ」と「ニキマツテイル」の違いを単なる文体差で説明するのは問題である。その証拠に、「ニキマツテイル」が否定形となり、連体修飾成分となるのに対し、モダリティの「ニチガイナイ」は否定形とならず、連体修飾成分となる場合に「と思われる」を補う必要がある。

- (89)a. ライオントハキマツテイナイ。
- b. ライオンニキマツテイル理由は次の通りである。
- (90)a. \*ライオンニチガイナクナイ。
- b. ライオンニチガイナイ（と思われる）理由は次の通りである。

したがって、「ニキマツテイル」は「に+決まっている」という命題であると判断される。命題である「ニキマツテイル」が対話文に使えるからといって、モダリティである「ニチガイナイ」が対話文に使えることの証明とはならない。三宅自身の直観のとおり、「ニチガイナイ」を対話文で使うのは不自然なのである。

次に、三宅（1993）が「ニチガイナイ」が対話文に使われる例として挙げた次の二つの例文について考える。

- (91) 「石田部長も笑っている一人ですか」三原が言った。「一番大笑いしているに違いないね。」（三宅1993：例文(17)：松本清張『点と線』）
- (92) 「なるほど。それであなたはその男女を電車の中で見たのですか？」「いや、電車の中ではないのです。その時の電車は二両連結で、私は後部に乗っていました。乗客は少なかったですから、後部にいれば目についたわけです。きっと前部に乗っていたに違いありません」（三宅1993：例文(18)：松本清張『点と線』）

例文(91)は、たしかに対話文での用例である。しかし、独話的に使われていると捉えるのが妥当である。その証拠に、聞き手目当ての発話であることを示す丁寧さのモダリティの「です」、「ます」をつけて、「<sup>?</sup>一番大笑いしているに違いないですね」、「<sup>?</sup>一番大笑いしているに違いありませんね」と言うと不自然な感じがする。一方、例文(92)の「ニチガイナイ」は、丁寧さのモダリティ「ません」がついていることから分かるように、対話文として使われている。しかし、三宅自身もこうした表現には文章語的なニュアンスのあることを認めている。実際の会話では、「きっと前部に乗っていたんですよ」のように言う方が自然である。三宅の直観のとおりこれらの表現は文章語的であり、実際の会話では不自然であると認めた方がよいのではないと思われる。

たしかに、小説や演劇などでは次のような表現も使われる。しかし、一般の会話では「母は娘にそう言い聞かせたに決まってるさ」、「つぐみもきっと最高に楽しかったと思うわ」などと言うのが自然であると思われる。

- (93) 「おまえも鈍い奴だな。いいか、母の志津子は超能力を人に知られたが故に、不幸な生涯を送らざるを得なかった。娘に同じ轍を踏ませたくなかったんだらう。能力を隠し、ごく平凡に生きること、母は娘にそう言い聞かせたに違いない。貞子は力をぐっと押さえ、ごく一般的な念写になるよう調整したのさ」(鈴木光司『リング』)
- (94) 「この夏は楽しくて、一瞬だったような、すごく長かったような、不思議な気がする。恭一がいて良かった。つぐみも最高に楽しかったに違いないわ」(吉本ばなな『TUGUMI』)

次に、先に引用した森山(1995)の例文(45)「今までいろいろ検査をしましたが、この病気は肺繊維症にちがいありません」について考察する。この文は、「今までいろいろ検査をした」という文脈で発せられたものであることに注意する必要がある。この場合、医師は患者に伝える時点で既にこの病気が肺繊維症であるとの結論を出している。したがって、発話時点における推量判断を表したものではない。実際に発話時点での推量判断を伝えるときには、「この病気は肺繊維症ではないかと思われます」と言う方が自然である。森山はモダリティの「ニチガイナイ」の例として次の例文を挙げているが、これは「犯人は私に間違いありません」の意味で使われており、モダリティの「ニチガイナイ」ではなく、命題の「に+違い+ない」であると分析される。

- (95) (自首して)はい、おっしゃる通り、犯人は私にちがいありません。(森山1995:

例文(39))

例文(95)は話し手自身の既有的知識を伝える文であり、推量判断を表す文ではない。これと同様に考えると、肺繊維症の例も「検査の結果、肺繊維症に間違いないですよ」という意味で使われていると解釈するのが妥当である。

この「に+違い+ない」は、「にはちがいない」の形で譲歩を表すことができる。これはモダリティ表現の「ニチガイナイ」にはない用法である。

- (96) 「ここはいったいどこだ 科学省にはちがいないがなんだかようすがへんだぞ」  
(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (97) 「ええ？ つまり、頭の中に抱いた考えが生命体に変化するってことか？」「そういうことになるな」「そりゃ、また、極端だ」「極端には違いないが、似たような考え方は紀元前から論じられている。生气論の変形と受け取れないこともない」  
(鈴木光司『リング』)
- (98) この件については、官僚ともだいぶ議論をしたのだが、彼らの理屈では、過ちを認めないのが、国のためなのだという。つまり、行政が過ちを認めて和解に応じれば、今回のように税金から補償金を出さなければならなくなる。これは、国家にとって損失となることには、違いない。だから、自分から認めるわけにはいかない。裁判所が行政に責任があると判断して初めて行政としては対応する。これが正しいのだという。(菅直人『大臣』)

したがって、肺繊維症の場合にも、「この病気は肺繊維症には、違いありません。しかし、心配する必要はありません」のように、「は」を挿入して譲歩の言い方ができる。

次の例は銀行ギャングと思わしき人物に問いかけたもので、対話文で「ニチガイナイ」が使われている。これが自然な文として判断されるのは次の二つの場合である。

- (99) 「あのマスクを持ってたこととこの探偵を殺そうとしたんだから...銀行ギャングに違いないなっ えっ？ そうだなっ」(手塚治虫『鉄腕アトム』)

一つ目は、独白的に発せられたと解釈される場合である。実際には聞き手に向かって発話されていても、話し手の気分としては独り言のように言っている場合である。次の例も同様である。

- (100) 「たしかにあの人間は学者にちがいない あんだけの本を調べながら朝から晩

- まで図面をひいている……あの学者はたいしたやつにちがいない！ あの人間の脳細胞を吸いとれば十分地球の知識が手にはいるぞ」（手塚治虫『ザ・クレーター』）
- (101) 「この女の体内ではおそらく生と死がぶつかりあってはげしく戦っているにちがいない」（手塚治虫『ブッダ』）

二つ目は、「に+違い+ない」の意味で解釈される場合である。この場合、「銀行ギャングに間違いのないなっ！」と言い換えることができる。

こうした条件を考えずに、対話文でモダリティの「ニチガイナイ」を使うのは不自然である。小説、演劇、テレビドラマ、<sup>1)</sup> 演説、ニュース、アナウンサーの言葉など、書き言葉や改まった話し方をした場合を除いて一般には使いにくい。一般の話し言葉で「<sup>2)</sup> お前は銀行ギャングニチガイナイなっ！」というのは不自然で、「お前は銀行ギャングだなっ！」のように確言形で言う方が自然であると思われる。

なお、同じ推量表現でも「ヨウダ」と「ラシイ」は対話文で自然に使うことができる。

- (102) どうやらお前は銀行ギャング{ノヨウダ/ラシイ}なっ。  
よくわかったな。そのとおりだ。
- (103)a. 「そなたとわたしの血は思ったより近いらしいな」（山岸凉子『日出処の天子』）  
b. 「そなたとわたしの血は思ったより近いヨウダな」  
c. \*「そなたとわたしの血は思ったより近いニチガイナイな」
- (104)a. 「あのお方にはそんなことは気にもならないことらしいな」（山岸凉子『日出処の天子』）  
b. 「あのお方にはそんなことは気にもならないことノヨウダな」  
c. \*「あのお方にはそんなことは気にもならないことニチガイナイな」

以上の考察の結果、「ニチガイナイ」は責任の有無とは関係なく、基本的に独話文で使われると結論される。対話文で使われる「ニチガイナイ」は、書き言葉的である、対話の場面であっても独白的に使われている、「に+違い+ない」の意味で使われている、のいずれかである。

### 3.7 3 節のまとめ

- 
- 1) 次の文は聞き手に向けて述べられた発話である。  
(i) 「お前なら安心して正体を現すにちがいない」（東海テレビ「妖怪人間ベム」2000.8.29）

本節では「ダ/」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」について考察し、「ダ/」と「カモシレナイ」が事態確定性の確実・不確実による対立であるのに対し、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は認識と推量判断の対立であることを指摘した。従来、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、同じ蓋然性の「高低」あるいは可能性の分散の「有無」という範疇の中で捉えられてきた。しかし、「カモシレナイ」が一般的事実を表す文に使えるのに対し、「ニチガイナイ」はそれができないという事実から、二語の違いは蓋然性の「高低」や可能性の分散の「有無」といった量的な違いではなく、推論過程を経るかどうかといった質的な違いであると結論される。一般に「カモシレナイ」はモダリティを表すとされているが、本研究では「カモシレナイ<sub>p-m</sub>」と分析され、命題を表す「カモシレナイ<sub>p</sub>」とモダリティを表す「<sub>-m</sub>」からなると考える。一方、「ニチガイナイ」は形式全体が推量判断を表すモダリティ表現であると考ええる。

以上の結果を整理すると次のようになる。

- 「ダ/」：当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す
- 「カモシレナイ」：当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す
- 「ニチガイナイ」：話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す

#### 4. ニチガイナイ、ヨウダ、ラシイ

本節では、推論の判断を表す「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」の意味の違いについて考察する。考察に際しては「判断の根拠」、「推論の型」という観点から分析する。以下、「ニチガイナイ」が話し手の確信（思い込み）による推量を表すのに対し、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量を表すことを明らかにする。

##### 4.1 判断の根拠

一般に、「ニチガイナイ」は客観的な根拠に基づかない推量を表し、「ヨウダ」、「ラ

シイ」は根拠に基づく推量を表すと説明されている。<sup>1)</sup> たとえば、阪田・倉持(1993)はこれらの意味の違いを次のように記述している。

「～にちがいない」は、必ずしも客観的な論拠を得ていなくても、あることを事実だと判定し、それを確信する意を表すのに用いられる。(阪田・倉持1993:127)

文末の述語として用いられる場合には、現在の時点における話し手自身の判断に限られ、他者の意中を表すのに用いられる場合は、(中略)「～と思う」などを添えた引用の形式を用いて表さなければならない。(阪田・倉持1993:128)

「ようだ」は、何らかの根拠に基づいて、不確実ながらもそうとらえてよい状況・事態であるという話し手の判断を表す。何らかの根拠に基づくという点では「らしい」によって表される判断と共通するが、「らしい」が根拠の持つ客観性に依存する傾向が強いのに比し、「ようだ」はそれなりの客観的な状況や事態の裏付けを得ている場合が多いもののそれには全面的にはよりかからず、話し手自身の主体的な立場に立った判断として表そうとしている点に違いがみられる。(阪田・倉持1993:194)

「らしい」は、ある事柄について、かなり確信のもてる客観的根拠に基づいて、そうとらえるのが当然であるという話し手の判断を表す。すなわち、話し手自身が、判断の対象となる事柄を事実だと断定的には言い切ることができないものの、その場の状況や種々の情報を手がかりにして、それが事実だと十分に考えられる状態にあるととらえられた場合に用いるものである。(阪田・倉持1993:187)

先行研究の指摘の通り、「ヨウダ」「ラシイ」は何らかの根拠に基づく推量判断を表していると言える。例文(105)(106)の「大震災による被害も、ほとんどなかったようだ」、「席を立つだけの常識もないらしい」という推量判断も、学校の様子や男の態度という視聴覚的な情報を根拠にして行なったものである。

(105) 正門のグリルは黒塗りの鋳鉄で、大学と見まがうような銀杏並木が続いている。  
建物はすべて、美しい焦げ茶色の化粧煉瓦でできており、いかにも有名進学校ら

---

1) 「ヨウダ」「ラシイ」が根拠(証拠、手がかり、経験、兆候)に基づくことを指摘した研究に、柏岡(1980)、阪田・倉持(1980、1993)、小林(1980)、柴田(1982)、寺村(1984)、早津(1988)、中畠(1990)、益岡(1991)、宮崎(1991)、田野村(1994)、森本(1994)(ラシイについてのみ)、三宅(1994)、三原(1995)、野田(1995)、安達(1997)、野林(1999)などがある。

しい重厚なイメージを作り出すことに成功していた。ざっと見渡した限りでは、大震災による被害も、ほとんどなかったようだ。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

- (106) 例によって、どこか近くの席で、傍若無人な携帯電話の話し声がする。意味不明の私的な会話。当事者だけの笑い。若い男らしいが、席を立つだけの常識もないらしい。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

問題となるのは、「ニチガイナイ」にも根拠に基づく用法があるということである。例文(107) (108)の推量判断は、下線部“ ”に示される根拠に基づいている。この場合、「ニチガイナイ」を「ヨウダ」、「ラシイ」に置き換えることが可能である。

- (107)a. 「たしかにあの人間は学者にちがいない あんだけの本を調べながら朝から晩まで図面をひいている……あの学者はたいしたやつにちがいない！ あの人間の脳細胞を吸いとれば十分地球の知識が手にはいるぞ」（手塚治虫『ザ・クレーター』）
- b. たしかにあの人間は学者ノヨウダ あんだけの本を調べながら朝から晩まで図面をひいている……あの学者はたいしたやつノヨウダ！
- c. たしかにあの人間は学者ラシイ あんだけの本を調べながら朝から晩まで図面をひいている……あの学者はたいしたやつラシイ！
- (108)a. すりガラスの向こうは、小綺麗な浴室であった。水気はなく、バスタブの底も洗い場も、からからに乾いている。ここしばらく、この部屋に泊まった客はいないに違いない。（鈴木光司『リング』）
- b. 水気はなく、バスタブの底も洗い場も、からからに乾いている。ここしばらく、この部屋に泊まった客はいないヨウダ。
- c. 水気はなく、バスタブの底も洗い場も、からからに乾いている。ここしばらく、この部屋に泊まった客はいないラシイ。

例文(109)は霊能者の判断を表したものであるが、判断の根拠は明示されていない。この場合、直感的に推量判断が下されたとも考えられるし、霊現象など何らかの根拠によって推量判断が下されたとも考えられる。

- (109) 「あなたのすぐそばに人影が見えます それは生身の人間ではなさそうだ たぶん霊にちがいない」（手塚治虫『ブッダ 』）

一方、例文(110a)の「きっとそうに違いない」(引用者注：そう＝恐怖が想像にすぎないこと)は、判断の主体である「智子」の直感による勝手な思い込みによる推量を表している。こうした思い込みによる推量を表す場面では、「ニチガイナイ」を「ヨウダ」、「ラシイ」に置き換えられない。「ヨウダ」、「ラシイ」を使うと、発話時点で新たにそう推量するに足る根拠が見つかったことになってしまう。

(110)a. 十七歳の智子には恐怖の正体はまだよくわからない。しかし、想像の中で勝手に膨らんでしまう恐怖があることは知っている。

.....そうであってくれればいい。いや、きっとそうに違いない。振り返っても、そこには何もない。きっと、何もない。(鈴木光司『リング』)

b. #.....そうであってくれればいい。いや、どうもそのヨウダ。振り返っても、そこには何もない。

c. #.....そうであってくれればいい。いや、どうもそうラシイ。振り返っても、そこには何もない。

ただ、その直感を働かせた「何か」も根拠といえれば根拠である。この場合の「何か」とは、智子の持つ「想像の中で勝手に膨らんでしまう恐怖がある」という知識である。先行研究で言う「主観的な根拠」とはこのようなものを指すと思われる。しかし、劉(1996)の指摘にある通り、根拠自体の主観客観を述べるのは適切ではない。

推論の過程において、主観的であろうが、客観的であろうが、根拠自体は客観的なものであると考えられる。(劉1996:46)

結局、根拠の主観客観で「ニチガイナイ」と「ヨウダ」、「ラシイ」の違いを説明するのには限界があるのである。

しかし、たしかに例文(111)のように証拠らしい証拠はなく、単に話し手の直感のみに頼る推量判断を表す場合には、「ニチガイナイ」は使えるが「ヨウダ」、「ラシイ」は使えない。

(111)a. 彼は目のはじでちらと私のほうを見た。濃い影が流れ寄って来るような視線である。このとき、『彼は放火者にちがいない』と私は直感した。(三島由紀夫『金閣寺』)

b. \*彼は目のはじでちらと私のほうを見た。濃い影が流れ寄って来るような視線である。このとき、『彼は放火者{ノヨウダ/ラシイ}』と私は直感した。



以上、推量表現には「直感的な確信（思い込み）」によるものと、「根拠」に基づくものとがあることを指摘した。<sup>1)</sup>

#### 4.2 推論の型

次に「推論の型」について考察する。木下（1999）は、真偽判断のモダリティを表す表現には、次のように「演繹推論」の帰結を表すものと「蓋然性推論」の帰結を表すものとがあると指摘した。

「演繹推論」（カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ）：

「AならばC」とAを根拠とし、Cを導く「推論」  
 （「AならばC」には、「知識（pならばq）」<sup>2)</sup>と「qならばp」が含まれる）

根拠（P）：「知識（pならばq）」	根拠（P）：「qならばp」
p	q
帰結（Q）：q	帰結（Q）：p

「蓋然性推論」（ヨウダ、ラシイ）：

「知識（pならばq）」とqを根拠とし、pを導く「推論」

根拠（P）：「知識（pならばq）」
q
帰結（Q）：p

1) Palmer（1986）の judgments と evidentials、森山（1989）の「狭義判断」と「状況把握」、仁田（1989、1991）の「推し量りの確からしさを表したもの」と「兆候の存在の元での推し量りを表すもの」、益岡（1991）の「事態が成り立つ蓋然性（確かさの度合い）を表すもの」と「判断に至る様式を表すもの」に対応する。三宅（1995）は、「認識的モダリティ」に属するものを「断定」（無標）、「推量」（ダロウ、マイ、活用語の推定量・意向形〔ウ/ヨウ〕）、「実証的判断」（ラシイ、ヨウダ、ミタイダ、（～する）ソウダ、トイウ）、「可能性判断」（カモシレナイ）、「確信的判断」（ニチガイナイ、ハズダ）に分けている。

2) 「知識（pならばq）」：pであればqというように事態は存在、生起するという、事態のあり方（存在や生起の仕方）についての認識の型（木下1999：44）

これには次のような例が挙げられている。（それぞれ木下1999第3章の例文(19) (23) (25)）

原因と結果 「無理な運転をする 事故が起きる」

一般と特殊 「女の子は甘い物が好きだ 知子も花子も甘い物が好きだ」

モノと属性 「（ある物は）お父さんのシャツである （それは）大きい」

これを木下の例文によって説明する。例文(112)において「家が古い」をp、「ネズミがいる」をqとする。このとき「ヨウダ」、「ラシイ」が「知識(pならばq)」とqを根拠としてpを導く場合にしか使えないのに対し、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ハズダ」は、それに加えて「知識(pならばq)」とpを根拠としてqを導く場合にも使うことができる。木下の指摘は、こうした現象について明快な説明を与えてくれる。

(112) 「知識(家が古ければネズミがいる)」

(113) (家が古いことを知って)

- a. \* (どうやら) あの家にはネズミがいるヨウダ/ラシイ。
- b. あの家にはネズミがいるカモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ。

(114) (ネズミがいるのを知って)

- a. (どうやら) あの家は古いヨウダ/ラシイ。
- b. あの家は古いカモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ。

(順に木下1999: 第4章の例文(19) (20) (21))

ところで、木下は「演繹推論」には「知識(qならばp)」から導かれるものと、「qならばp」から導かれるものとの二種類があるとしている。これに対し、本研究では「演繹推論」は全て「知識(pならばq)」から導かれると考える。そこでまず始めに、木下が「qならばp」を設定した理由について見ておく。少し長くなるが該当箇所を以下に引用する。

「カモシレナイ、ハズダ」は、4.2.1節で見たように、「知識(p q)」のpが「推論」されたことを表わすことができる。しかし、次の(72)の場合にはやや不自然である。

(72)a. 「知識(無理な運転をする 事故が起きる)」

b. (事故が起きたのを見て)

?? 無理な運転をしたカモシレナイ/ハズダ。

これに対し、「ヨウダ、ラシイ」は専らpが「推論」されたことを表わすのであるから、当然のことながら、pの「推論」を表わしにくいということはある得ない。

(73) (事故が起きたのを見て)

(どうやら) 無理な運転をしたヨウダ/ラシイ。

このように、「カモシレナイ、ハズダ」はpが「推論」されたことを表わしにくい場合があるが、「ヨウダ、ラシイ」の場合には、そのようなことはない。

これは、「カモシレナイ、ハズダ」の表わす「推論」が「 $A \rightarrow C$ 」を根拠とし、Cを導くものであり、「ヨウダ、ラシイ」は「知識( $p \rightarrow q$ )」とqを根拠とし、pが導かれたことを表わすと考えれば説明ができる。

このように考えた場合、「カモシレナイ、ハズダ」を用いてpが導かれたことを表わすためには、「 $q \rightarrow p$ 」という「知識」の存在が必要となる。しかし、この「 $q \rightarrow p$ 」は、「知識」として存在しているとは想定しにくい場合があると考えられる。次の(74)は、先の(72a)に示した「知識( $p \rightarrow q$ )」の、pとqを逆転させた「 $q \rightarrow p$ 」という含意関係であるが、このような含意関係は不自然である。

(74)?? 事故が起きたならば無理な運転をした。

一方、「ヨウダ、ラシイ」は、pが「推論」されたことを表わす形式であるが、この「推論」に用いられる「知識」は、「知識( $p \rightarrow q$ )」であって、「 $q \rightarrow p$ 」ではない。従って、「 $q \rightarrow p$ 」が「知識」として存在しているか否かによって、pが「推論」されたことを表わせるかどうか左右されることはないのである。(木下1999: 61-62)

以上の説明をまとめると、木下が「演繹推論」に「知識( $p$ ならば $q$ )」から導かれるものと「 $q$ ならば $p$ 」から導かれるものの二種類を設定したのは、「カモシレナイ」と「ハズダ」には、pが推論されたことを表わせる場合と表わしにくい場合とがあり、その整合性を説明するための操作であることが分かる。この二つの場合を説明するためには、「知識( $p$ ならば $q$ )」と「知識( $q$ ならば $p$ )」の二つを考える必要がある。ところが、後者は「知識」として存在しているとは想定しにくい場合があるため、「 $q$ ならば $p$ 」とした。その上で「知識( $p$ ならば $q$ )」と「 $q$ ならば $p$ 」を包括して「 $A \rightarrow C$ 」としたのである。

しかし、「演繹推論」はあえて「 $q$ ならば $p$ 」を設定しなくても、「知識( $p$ ならば $q$ )」のみ考えれば説明できる。その理由として、既に明らかなように「カモシレナイ」と「ハズダ」は推量表現ではないことが指摘できる。そもそも「カモシレナイ」と「ハズダ」を「ニチガイナイ」と同列に考えることに無理があるのである。その証拠に、木下の例文(72b)は「ニチガイナイ」に置き換えると適格な文となる。

- (115)a. 「知識（無理な運転をする 事故が起きる）」  
 b. （事故が起きたのを見て）  
 無理な運転をしたニチガイナイ。

これについて、木下自身も「理由はわからないが、ニチガイナイの場合は不自然ではないと思われる」（木下1999：61）と述べている。「演繹推論」は「ニチガイナイ」のみを考えれば「知識（ $p$ ならば $q$ ）」一つで足りるのである。

木下の例文(72b)で「カモシレナイ」が使えるようにするためには、本章3.4節で論じたように「無理な運転をした」を「の」のスコープに入れる必要がある。

- (116) 無理な運転をしたノカモシレナイ。

これは、例文(116)が例文(117)の括弧内の言葉が省略されたものであると考えれば説明がつく。

- (117) 無理な運転をした（から事故が起きた）ノカモシレナイ。

例文(117)で「カモシレナイ」のスコープに理由節の「無理な運転をした」を入れるには、「ノカモシレナイ」の形にする必要がある。「の」がないと話題の焦点が「無理な運転をしたコト」ではなく「事故が起きたコト」になってしまう。

また、「ハズダ」の場合は、「無理な運転をしたハズダ」がおかしいだけでなく、「事故が起きるハズダ」もおかしい。

- (118)a. 「知識（無理な運転をする 事故が起きる）」  
 b. （無理な運転をしたのを見て）  
 \*事故が起きるハズダ。

これは「ハズダ」が道理を表す命題表現だからである。そのため、道理を表す文脈でなら、「無理な運転をしたハズダ」も「事故が起きるハズダ」も適格となる。

- (119)a. こんな見通しのいいところで事故を起したんだから、間違いなく無理な運転をしたハズダ。  
 b. 何で事故が起きたんだろう。……これでは事故が起きるハズダ。ブレーキが壊

れてるんだもん。

最後に、「演繹推論」と「帰納推論」<sup>1)</sup>について整理しておく。「演繹推論」は「知識 (  $p \rightarrow q$  )」を基に既知の  $p$  から未知の  $q$  を導く推論であり、「帰納推論」は「知識 (  $p \rightarrow q$  )」を基に既知の  $q$  から未知の  $p$  を導く推論である。「演繹推論」が  $p$  と  $q$  の流れが知識と推論で同方向であるのに対し、「帰納推論」は  $p$  と  $q$  の流れが知識と推論で逆方向となっている。

演繹推論：知識 (  $p \rightarrow q$  )    推論 (  $p \rightarrow q$  )

帰納推論：知識 (  $p \rightarrow q$  )    推論 (  $q \rightarrow p$  )

たとえば、ある話し手が「知識 ( 家が古い    ネズミがいる )」を持っていたとする。このとき、古い家を見てその家にネズミがいると推論するのが「演繹推論」、ネズミを見てその家を古いと推論するのが「帰納推論」である。

ところで、「ニチガイナイ」による推量判断は、「演繹推論」によるのか「帰納推論」によるのか曖昧なことがある。たとえば、「あの家にはネズミがいるニチガイナイ」という表現は、「知識 ( 家が古い    ネズミがいる )」から帰結を導いたとも考えられるが、「知識 ( ネズミがいる    家が古い )」から帰結を導いたとも考えられる。このように、「ニチガイナイ」は「演繹推論」と「帰納推論」の両方に使われる表現である。一方、「ヨウダ」、「ラシイ」は「帰納推論」のみに使われる表現である。(「ヨウダ」、「ラシイ」が「帰納推論」のみに使われる理由は、本章4.3節で「根拠」との関係によって説明する。)

ニチガイナイ： 「知識 (  $p \rightarrow q$  )」と  $p$  から、 $q$  を導く (「演繹推論」)

「知識 (  $p \rightarrow q$  )」と  $q$  から、 $p$  を導く (「帰納推論」)

ヨウダ、ラシイ： 「知識 (  $p \rightarrow q$  )」と  $q$  から、 $p$  を導く (「帰納推論」)

木下の「推論の型」はこのような修正を加えることにより一層説得力のある説明となる。

さて、ここで「ニチガイナイ」の「と」、「ヨウダ」、「ラシイ」との区別が問題となる。次に、この点について論じることにする。

1) 本研究では「演繹推論」と対になるように、木下の「蓋然性推論」を「帰納推論」と呼ぶことにする。

## 4.3 推論の裏付けとなる根拠

推量判断を表す「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」を比べると、「ニチガイナイ」が思い込みによる直感的な推量判断を表すことができるのに対し、「ヨウダ」、「ラシイ」はそれができないという違いがある。すなわち、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠が必要とされるのである。このことは、推量判断の「ヨウダ」、「ラシイ」が、比況の「ヨウダ」や伝聞の「ラシイ」と共通するものであることから説明できる。

さて、小林（1980）は推量のモードウスの使い分けについて、根拠の違いという観点から次のような説明を行なっている。

たとえば線路に近いある部屋で外を見ていた人がいたとする。いつもは何分かおきに通る電車が三十分以上途絶えていることにふと気付く。この事実に対して彼はどのような判断をするだろうか。ただしこのことについては何らの情報もなく、また眼前にそれについて何かを物語るものは何もない。

A × 電車が脱線したようだ。

× 電車が脱線したらしい。

B 電車が脱線したんだらう。

電車が脱線したに違いない。

〔電車のストップ＝事故〕が社会通念になっている現在、「事故」ということばならAの場合も可能となる。しかし飛び込み、脱線、トラックとの衝突などのような具体的な原因の判断はAの表現をもってはなされない。Aが成立するためにはAの事実を裏付けるような何らかの客観的な情報なり、証拠がなくてはならない。つまりAはそれらを基になされる推量判断を表す。これに対してBは話者の主観に基づいて推量判断がなされるため、上のようなより具体的な推量も可能となる。（小林1980：8）

小林の説明は「ニチガイナイ」と「ヨウダ」、「ラシイ」の違いを明確に示している。ただ、根拠自体の主観客観を述べるのは適切ではない。「Aの事実を裏付けるような何らかの情報なり、証拠」とした方が正確である。

次に、小林の例を先の「推論の型」によって説明する。小林の例は「電車が三十分以上途絶えている」という眼前の事態を根拠に「電車が脱線した」という未知の事態を推量するものである。この二つの事態は「電車が脱線する 電車が三十分以上途絶える」という「原因」と「結果」の関係になっている。小林の例は「結果」と「電車が脱線する 電車が三十分以上途絶える」という知識から「原因」を導くものであるため、「帰納推論」の例であると考えられる。

ここで「原因」を「p」、「結果」を「q」、「知識」を「知識（p q）」と置き換

えると、「帰納推論」は「知識 ( p q ) 」と話し手に認識可能な「 q 」とを根拠に「推論 ( q p ) 」を行ない、未知の「 p 」を導き出す推論であると一般化することができる。これを図3-2に示す。

《 帰納推論 》				
事態	認識	推量判断		【帰結】
p .....	?	知識 ( a q )	推論 ( q a )	a
q .....	q	知識 ( b q )	推論 ( q b )	b
		:	:	:
		知識 ( p q )	推論 ( q p )	p

図3-2 帰納推論の図

ところで、小林の例では「電車の脱線」以外にも、「飛び込み」、「トラックとの衝突」、「脱線」などさまざまな原因が候補として考えられる。図3-2の「 a 」、「 b 」・・・「 p 」は、これら想定されうるさまざまな原因を表している。そのため、場合によっては「推論 ( q p ) 」によって「 p 」が導かれる以外にも、「推論 ( q a ) 」によって「 a 」が導かれたり、「推論 ( q b ) 」によって「 b 」が導かれる可能性もある。その中でとりたてて「 p 」が導かれるためには、「知識 ( p q ) 」が最も際立つものである必要がある。その場合、結果「 q 」は原因「 p 」を特定するにふさわしい根拠でなければならない。小林の例で「<sup>#</sup>電車が脱線した { ヨウダ/ラシイ } 」が使えないのは、「電車が三十分以上途絶えている」という程度のことは「電車の脱線」を裏付ける根拠とはならないからである。漠然と「事故がおきた { ヨウダ/ラシイ } 」というだけであれば、「電車が三十分以上途絶えている」ということから十分想定できるので適格となる。

このように、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠が必要とされる。このことは、推量判断の「ヨウダ」、「ラシイ」が、比況の「ヨウダ」や伝聞の「ラシイ」と共通するものであることから説明できる。まず「ヨウダ」について説明する。第2章4.1節で考察したように、比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」は、あるAとあるBがともにXという属性をもつことを根拠に、AがBと近接関係にあることを表す表現である。これは、次のように一般化して表すことができる。

(120) 根拠Xにより、AはB ( の ) ヨウダ。

比況と推量判断は、AをBに例えて言うときには比況、AをBと推測して言うときには推

量判断というように、文脈によって用法が分かれる。比況の場合はAとBが似ていることを表すにすぎないが、推量判断の場合はAがBである可能性を示唆する。比況の場合、AをBに例えて言うためには、AとBに共通する属性Xが両者の類似性を主張するに十分なものでなければならない。これと同様に、推量判断の場合も、AをBと推測して言うためには、根拠Xがそれを主張するに十分なものでなければならないのである。

ここで例文(120)を「p」、「q」によって書き換えると次のようになる。

(121) 根拠「q」および「知識(p q)」により、Aは「p」(の)ヨウダ。

「q」が推論の裏付けとなる根拠でなければならないのは、そうでなければ話し手は「p」を連想するのが困難だからである。これはちょうど、スカートををはいている人を見て「女のようにだ」と推論できても、靴下をはいている人を見て「女のようにだ」と推論するのは難しいのと同じである。スカートはその人が女であると推論するのに十分な根拠となるが、(ルーズソックスならともかく)単なる靴下では十分な証拠とはならない。

次に「ラシイ」について説明する。「ラシイ」には、ある情報が他者から伝え聞いたものであることを表す伝聞の用法と、ある情報や何らかの現象を根拠に話し手が推論を行ったことを表す推量判断の用法とがある。

(122) うわさによると、あの人は男ラシイ。(伝聞)

(123) あの歩き方からすると、あの人はどうも男ラシイ。(推量判断)

伝聞の「ラシイ」は、当該の事態の成立が他者からの情報によるものであることを前面に出した表現である。伝聞の「ソウダ」が他者からの情報をそのまま聞き手に伝える表現であるのに対し、伝聞の「ラシイ」は他者からの情報を根拠に話し手にとって「未知の事態」の真偽を述べる表現である。その点で話し手の主観の加わった表現である。そのため、発話時点で既にある人物が「女」であると分かっている場面において、「あの人は男だソウダ」と言うことはできるが、「あの人は男ラシイ」と言うのは不自然である。「ソウダ」は単に他者からの聞き伝えを述べるだけなので使えるが、「ラシイ」を使うとそこに事態の真偽についての判断が加わるため不適切となる。

(124)a. あの人は間違いなく女です。しかし、うわさによると男だソウダ。

b. <sup>?</sup>あの人は間違いなく女です。しかし、うわさによると男ラシイ。

推量判断の「ラシイ」は、未知の事態の真偽に話し手の推量判断が加わったものである。



伝聞の「ラシイ」が他者からの情報であることを前面に出しているのに対し、推量判断の「ラシイ」は他者からの情報や外界の現象を根拠に話し手の推量判断が加えられているという点に違いがある。次の例文(125)は「人魚らしきものを見かけたかどうか」を推量する場面ではないので伝聞の例、例文(126)は「寝ていたのかどうか」を推量する場面なので推量判断の例である。例文(127)は両方の可能性がある例で、「前の下宿は半年ばかりしかいなかった」ということが人から伝え聞いたものであることを述べることに重点があれば伝聞の例、「前の下宿は半年ばかりしかいなかったかどうか」を推量することに重点があれば推量判断の例となる。

- (125) 「情報によるとこの無人島で人魚らしきものを見かけたらしい」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)
- (126) すると、二階から大きなうがいの音が聞こえてきた。田中だ。やはり寝ていたらしい。(魚住昭『特捜検察』岩波新書)
- (127) 「一年半? すると、前の下宿は半年ばかりしかいなかったのですか?」禎子は、きき返した。「そうらしいのです。らしいというのは、僕が知っているわけではなく、事務所に古くからいる連中の話ですがね。ところが、あとの下宿の家がどこだか誰にもわからないのです」(松本清張『ゼロの焦点』)

伝聞の「ラシイ」と推量判断の「ラシイ」は、何らかの根拠の存在によって結論を導くという点で共通する。伝聞の場合は根拠が「他者からの情報」となり、推量判断の場合は根拠が「他者からの情報」あるいは「何らかの現象」となる。両者は次のように一般化して表すことができる。

- (128) 根拠Xにより、AはBラシイ。

ここで例文(128)を「p」、「q」によって書き換えると次のようになる。「ヨウダ」のときと同様に、「q」は推論の裏付けとなる根拠でなければならない。

- (129) 根拠「q」および「知識(p q)」により、Aは「p」ラシイ。

次に、推量判断の「ヨウダ」と「ラシイ」の違いについて考察する。両者を比べると、話し手の責任で判断を下す場面において、「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えないことが分かる。事実、次の場合に「ヨウダ」は自然に使えるが、「ラシイ」を使うと誰か他人が判断を下したか、判断の根拠が他人任せであるように聞こえる。

(130) ライオンとトラはどちらが強いかわかりましたか。

- a. どうもライオンノヨウデス。
- b. \* どうもライオンラシイデス。

同様に、話し手自身の感情を語る場合にも「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えない。話し手自身の感情は話し手の責任で感じ取るものなので「ヨウダ」は自然に使えるが、「ラシイ」を使うと他人事のように聞こえる。

(131)a. 僕は君の話を聞いたら何だか勇気が湧いてきたヨウダ。

- b. \* 僕は君の話を聞いたら何だか勇気が湧いてきたラシイ。

(132)a. あの人は君の話を聞いたら何だか勇気が湧いてきたヨウダ。

- b. あの人は君の話を聞いたら何だか勇気が湧いてきたラシイ。

このように、話し手自身の責任ある判断が必要とされる場合や、話し手自身に知覚できるはずの感情を根拠とする場合には、「ラシイ」を使うことができない。これは、「ラシイ」による判断が他者からの情報や外界の現象を根拠に行われているためである。

さて、根拠に基づく「ヨウダ」と「ラシイ」に対し、「ニチガイナイ」にはこのような制約がなく、話し手の確信さえあれば、推論の裏付けとなる根拠があろうとなかろうと使うことができる。単なる話し手の思い込みであってもよい。例文(133)は推論の裏付けとなる根拠のある例、例文(134)は推論の裏付けとなる根拠のない例である。

(133) 母の取るポーズからは、髻に対する行為が露骨に感じられた。母としてよりも、女としての雰囲気強く発散している。息子という立場からすれば、見たくないポーズではなかっただろうか。亮次は複雑な気持ちで、ファインダーを覗いていたに違いない。（鈴木光司『ループ』）

(134) どうしてだろう。

船が港に近づいてゆく時、昔からいつでもほんの少しよそ者の気分になった。その町に自分が住んでいて、ちょっと船で遠出をした後にまた船でかえってくる、そんな頃でさえそうだった。なぜか自分はよそからやって来て、またいつかこの港から去るにちがいないという予感がする。（吉本ばなな『TUGUMI』）

これを統一的に考えると、「ニチガイナイ」は推論の裏付けとなる根拠があろうとなかろうと、あくまでも話し手の確信（思い込みでもよい）さえあれば使うことができると考え

られる。<sup>1)</sup> さらに、「ニチガイナイ」による推量判断は、「演繹推論」にも「帰納推論」にも使えるという特徴がある。

- (135) 「知識（春になる 桜の花が咲く）」
- a. （春になったのを知って）桜の花が咲くニチガイナイ。（演繹推論）
  - b. （桜の花が咲いているのを見て）春になったニチガイナイ。（帰納推論）

ここで「演繹推論」の流れを図3-3に示しておく。「演繹推論」は、原因「p」と結果「q」のうち、発話時点において認識可能な「p」と話し手の持つ知識「知識（p q）」とから未知の「q」を導く推論である。

《 演繹推論 》

事態	認識	真偽判断		【帰結】
p .....	p	知識（p a）	推論（p a）	a
q .....	?	知識（p b）	推論（p b）	b
		:	:	:
		知識（p q）	推論（p q）	q

図3-3 演繹推論の図

この場合、正しく「知識（p q）」によって推論が行なわれれば正しい帰結が得られるが、誤って別の知識によって推論が行なわれると誤った帰結を導いてしまう。

「ニチガイナイ」で注意したいのは、次の表現のように「演繹推論」であるとも「帰納推論」であるとも考えられる場合があるということである。

- (136) 富士山が笠をかぶったから、雨が降るニチガイナイ。

この表現は「知識（富士山が笠をかぶると、雨が降る）」から導かれたとすれば「演繹推論」であり、「知識（雨が降るときは、富士山が笠をかぶる）」から導かれたとすれば「帰納推論」である。

---

1) なお、「カモシレナイ」も根拠のない場面で使うことができる。  
 (i) 原子はその語源に反して、分割不可能な基本粒子ではないが、電子は基本粒子かもしれない。今のところ、電子がさらに分割できるという証拠は何もない。（和田純夫『量子力学が語る世界像』）

(137) 《 演繹推論 》

「知識（富士山が笠をかぶると、雨が降る）」

富士山が笠をかぶったから、雨が降るニチガイナイ。

(138) 《 帰納推論 》

「知識（雨が降るときは、富士山が笠をかぶる）」

富士山が笠をかぶったから、雨が降るニチガイナイ。

「帰納推論」の場合、「富士山が笠をかぶった 雨が降る 状況となった 雨が降る」という推論の流れとなっている。

最後に木下（1998）の「既定性」について説明しておく。木下は真偽判断を表す文末形式と「既定性」の関係について次のような指摘をした。<sup>1)</sup>

「既定性」とは、発話時点において、既にどこかで真偽が定まっていることを言う。過去や現在の事態であれば「既定性」を持つし、未来の事態であってもどこかで予定としてその成立が既に定まったものとされている場合には「既定性」を持つ。（木下1998：171）

本稿が考察の対象とする文末形式のうち、ヨウダとラシイにはその判断内容が「既定的」でなければならないという制約があるが、カモシレナイ、ニチガイナイ、ダロウにはこのような制約はなく、その判断内容は、むしろ「非既定的」とであると解釈されやすいと考えられる。（木下1998：171-172）

まず「演繹推論」の場合について説明する。「演繹推論」とは「知識（ $p \rightarrow q$ ）」と原因「 $p$ 」を根拠に、結果「 $q$ 」を導く推論である。この場合、推論の根拠となる「 $p$ 」は発話時点において既知のものであるため、既定性は既定的となる。一方、推論の対象となる「 $q$ 」は発話時点において未知のものであるが、その真偽は既に定まっている可能性もある。真偽の定まっている場合は既定的であり、真偽の定まっていない場合は非既定的である。たとえば、例文(139a)のように現在の事態であれば既定的となり、例文(139b)のように未来の事態であれば非既定的となる。

1) これとは別の概念で「既定性」という用語を提出したものに中右（1994）がある。中右は真偽判断のモダリティについて説明する中で次のような指摘をした。「既定的命題とは、その情報が発話時点に先立ってすでに談話の世界に提示されているものとして話し手が認識している命題のことをいう」（中右1994：56）。そして是非判断のモダリティ（I doubt, I deny, I admit など）の関わる命題内容が既定的であるのに対し、真偽判断の場合は非既定的であるとしている。

- (139) 「知識（春になる 桜の花が咲く）」
- a. （春になったのを知って）桜の花が咲いているニチガイナイ。（既定的）
  - b. （春になったのを知って）桜の花が咲くニチガイナイ。（非既定的）

次に「帰納推論」の場合について説明する。「帰納推論」とは「知識（ $p \rightarrow q$ ）」と結果「 $q$ 」を根拠に、原因「 $p$ 」を導く推論である。この場合、推論の根拠となる「 $q$ 」は発話時点において既知のものであるため、既定性は既定的となる。一方、推論の対象となる「 $p$ 」は発話時点において話し手にとっては未知のものであるが、結果である「 $q$ 」の真偽が定まっている以上、原因である「 $p$ 」の真偽自体は既に定まっているはずである。そのため、「 $p$ 」の既定性は既定的となる。たとえば、例文(140)の「春になった」は既定的である。

- (140) 「知識（春になる 桜の花が咲く）」
- a. （桜の花が咲いているのを見て）春になったニチガイナイ。（既定的）
  - b. （桜の花が咲いているのを見て）春になった{ヨウダ/ラシイ}。（既定的）

以上、「推論の型」、「既定性」という観点から、「ニチガイナイ」が話し手の確信（思い込みでもよい）さえあればよいのに対し、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠が必要とされることを明らかにした。

#### 4.4 連体修飾

次に連体修飾について論じる。次に挙げる「ラシイ」は、「そのものの特徴を十分に兼ね備えて、いかにもそれにふさわしい状態であるようす」（森田1989：1205）を表す表現である。こうした接尾辞としての用法は「ヨウダ」にはない。中には、例文(143a)の「もっともらしい」のように、慣用化して使われている例もある。

- (141)a. 「いつもの冷静な厩戸王子らしくない……」（山岸涼子『日出処の天子』）  
 b. \*「いつもの冷静な厩戸王子ノヨウデハない……」
- (142)a. 「騎士らしく一本勝負でこい！」（手塚治虫『鉄腕アトム』）  
 b. \*「騎士ノヨウニ一本勝負でこい！」
- (143)a. 薬害エイズ事件を例にしてみると、あれほどまで被害を拡大させた原因は、厚生省薬務局による政策決定の誤りにあるが、その過程で、エイズという病気や非加熱製剤の危険性についての情報が国民に知らされていれば、ある時

点以降の被害はかなり食い止められたに違いない。それを、「知らせると血友病患者の間でパニックになる」などというもっともらしい理由をつけて公表しなかった。（菅直人『大臣』）

- b. \*「知らせると血友病患者の間でパニックになる」などというもっともノユウナ理由をつけて公表しなかった。

接尾辞としての「ラシイ」は、「〔名詞〕ラシイ」の形で一つの形容詞として機能し、一般の形容詞と同様に連体修飾成分となる。

- (144) 「わたしはあの子に母親らしいことはなにもしてやらなかった…」（山岸涼子『日出処の天子』）
- (145) 「あの、食事はまだじゃないですか？」本多が顔をあげてきいた。そう言われて、禎子は朝から食事らしいものを胃に入れてないことに気づいた。（松本清張『ゼロの焦点』）
- (146) 正門のグリルは黒塗りの鋳鉄で、大学と見まがうような銀杏並木が続いている。建物はすべて、美しい焦げ茶色の化粧煉瓦でできており、いかにも有名進学校らしい重厚なイメージを作り出すことに成功していた。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (147) 「そんな非人間的なところより、うちみたいな人間らしいところへ来い」（鎌田慧『ドキュメント屠場』）

これに対し、あるもの「A」と別のあるもの「B」が近接関係にあることを表す場面では、「ヨウダ」も「ラシイ」も使うことができる。これは「AはBのヨウダ」、「AはBラシイ」という形をとり、連体修飾のときは「BのヨウナA」、「BラシイA」という形をとる。<sup>1)</sup>

- (148)a. 振り返って見ると、今上がってきた入口の部分が、平坦な屋上で、一段高い出っばりを作っていた。その上には、給水タンクらしきものがあった。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- b. その上には、給水タンクノヨウナものがあった。
- (149)a. 「情報によるとこの無人島で人魚らしきものを見かけたらしい」（臼井儀人

---

1) 「ラシイ」は「〔名詞〕ラシキ〔名詞〕」の形の場合は自然に連体修飾するが、「〔名詞〕ラシイ〔名詞〕」の形を取る場合は「ラシイ」の後ろに「と思われる」が省略されているように感じられる。

『クレヨンしんちゃん 』)

- b. 情報によるとこの無人島で人魚ノヨウナものを見かけたらしい。
- (150)a. 幹事らしい男に案内せられて、梯子を登つて来る、拊石といふ人を、どんな人かと思つて、純一は見てゐた。(森鷗外『青年』)
- b. 幹事ノヨウナ男に案内せられて、梯子を登つて来る。
- (151)a. 此時家の主人らしい稍年上の女が、慌ただしげに、しかも遠慮らしく岡田に物を言つた。蛇をどうかしてくれるわけには行くまいかと云ふのである。(森鷗外『雁』)
- b. 此時家の主人ノヨウナ稍年上の女が、慌ただしげに、しかも遠慮らしく岡田に物を言つた。

この場合、「ラシイ」と「ヨウダ」には次のような違いが見られる。たとえば、例文(148)で説明すると、「給水タンクラシキものがあつた」は、発話時点においてそれが給水タンクかどうか不明である場合に使われるのに対し、「給水タンクノヨウナモノがあつた」の場合は、発話時点においてそれが給水タンクであるかどうか不明の場合にも使えるし、給水タンクでないと分かつて言っている場合にも使えるという違いがある。

こうした事実から、「ラシイ」は未知の事態に対する推量判断を行うことに重点があり、「ヨウダ」は「A」と「B」に共通の属性があることを主張することに重点があると考えられる。「ヨウダ」は「A」と「B」に共通の属性があるという意味がもとにあり、「A」が「B」であるかどうか不明の場合には推量判断の用法となる。また、「A」が「B」でないと分かっている場合には比況の用法となり、「A」が「B」であると分かっている場合には婉曲の用法となり、「東京のヨウナ大都会」のように「〔下位語〕ノヨウナ〔上位語〕」の形の場合には例示の用法となる。

さらに、次のように推量判断を表す場合、「～ラシイ〔名詞〕」は使えるが、「～ヨウナ〔名詞〕」は非文となる。「ヨウダ」を使う場合には、「ヨウダ」の後ろに「と思われる」や「という」を付ける必要がある。これに対し、「ラシイ」を使う場合には、「と思われる」や「という」を心の中で補って言うことができる。

- (152)a. 横田課長は慇懃な物腰ではいい、挨拶が終わると、煙草をとりだしてすい、しばらく内容のない話をした。禎子は向かいあつてすわり、微笑んだ。雑談は重大な意味にはいるらしい前ぶれの儀礼であつた。(松本清張『ゼロの焦点』)
- b. \*雑談は重大な意味にはいるヨウナ前ぶれの儀礼であつた。
- c. 雑談は重大な意味にはいるヨウダと思われる前ぶれの儀礼であつた。
- (153)a. どうも本格的に死に望んでいるらしい今、おまえに手紙を遣すという考えだけ

- が、私の心の中で希望となっています。（吉本ばなな『TUGUMI』）
- b. \* どうも本格的に死に望んでいるヨウナ今、おまえに手紙を遺すという考えだけが、私の心の中で希望となっています。
  - c. どうも本格的に死に望んでいるヨウダと思われる今、おまえに手紙を遺すという考えだけが、私の心の中で希望となっています。
- (154)a. 私は黙ってしまった。つぐみが本気でしゃべっているらしいことに驚いたのだ。（吉本ばなな『TUGUMI』）
- b. \* つぐみが本気でしゃべっているヨウナことに驚いたのだ。
  - c. つぐみが本気でしゃべっているヨウダということに驚いたのだ。
- (155)a. 今年六十一歳の山村敬にとって、貞子は一体どんな存在だったのか。遺骨を受け取る時の表情から推して、かなりの愛情を注いだらしいことは想像できる。（鈴木光司『リング』）
- b. \* 遺骨を受け取る時の表情から推して、かなりの愛情を注いだヨウナことは想像できる。
  - c. 遺骨を受け取る時の表情から推して、かなりの愛情を注いだヨウダということは想像できる。

しかし、いずれにせよ、推量判断の「ヨウダ」、「ラシイ」は「と思われる」や「という」を補う必要があるという点で共通している。<sup>1)</sup>

#### 4.5 4節のまとめ

本節では推量判断を表す「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」の違いについて、「判断の根拠」、「推論の型」という観点から分析した。これらの違いは、「ニチガイナイ」が話し手の確信（思い込みでもよい）さえあればよく、「演繹推論」にも「帰納推論」にも使われるのに対し、「ヨウダ」と「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠を必要とし、「帰納推論」のみに使われるという点にある。

「ヨウダ」と「ラシイ」の違いは、「ヨウダ」がある事態「A」と別の事態「B」に共通の属性があることを根拠に推量判断を行なうのに対し、「ラシイ」は他者からの情報や

1) 次の「ラシイ」は完全に非文で、「ラシイ」をとって「と思われる」にする必要がある。このような例は誤用であると考えられる。

- (i)a. \* 所詮、位置的に心臓に一番近いらしい乳房をもてあそぶことの、小ざれいで便利なのに如かない。（石川淳『かよい小町』）
- b. 所詮、位置的に心臓に一番近いと思われる乳房をもてあそぶことの、小ざれいで便利なのに如かない。



外界の現象を根拠に推量判断を行う点にある。したがって、話し手自身の責任ある判断が必要とされる場合や、話し手自身に知覚できるはずの感情を根拠とする場合には、「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えない。

「ヨウダ」は「A」と「B」に共通の属性があるという意味がもとにある。「A」が「B」であるかどうか不明の場合には推量判断の用法となり、「A」が「B」でないと分かっている場合には比況の用法となり、「A」が「B」であると分かっている場合には婉曲の用法となり、「〔下位語〕ノヨウナ〔上位語〕」の形の場合には例示の用法となる。一方、「ラシイ」は、当該の事態の成立が他者からの情報によるものであることを前面に出した場合は伝聞の用法となり、他者からの情報や外界の現象を根拠に推量判断を加えたことに重点のある場合は推量判断の用法となる。

以上の結果、推量判断を表す「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」の意味は次のようになる。

- 「ニチガイナイ」：話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す
- 「ヨウダ」：二つの事態に共通の属性があることを根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す
- 「ラシイ」：他者からの情報や外界の現象を根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す

## 5. ダロウ

既に本章3.3節で論じたように、「ダロウ」は証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表す表現である。例文(156)は、「これまでに解剖した遺体の数が千ではきかない」ことがほぼ間違いないと認識しているが、正確に数えたわけではないため確言を避けた表現である。例文(157)は、「だれでも考えそうな魅力的な発想」であると推量判断しているが、絶対にそうとは言い切れないため確言するのを避けた表現である。

- (156) これまでに解剖した遺体の数は、千ではきかないだろう。にもかかわらず、なぜ今日に限って不安が募るのか。(鈴木光司『らせん』)
- (157) 物質はこれ以上分割することのできない基本粒子から構成されているという考えは、だれでも考えそうな魅力的な発想だろう。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)

こうした表現は、文脈によって蓋然性が高く感じられることもあれば、そうでないこともある。上の例文(156)は話し手自身の経験からほぼ間違いないと確信しているが、例文(157)は話し手の個人的な意見で必ずしも蓋然性が高いとは考えていない。次のように「ダロウ」の形の場合も蓋然性の高さは一定していない。例文(158)は一定の根拠に基づき相対的に蓋然性が高い例、例文(159)は著者の個人的な感想による相対的に蓋然性が高くない例である。

- (158) 当時、香港にはこの種の「騒ぎ」が頻々と伝えられたが、多くは噂の域を出なかった。その中では、この厚街鎮の事件は距離的に近かったため、香港の記者が直接事情を聞き出せたものである。開発区ブームを千載一遇のチャンスとばかりに私腹を肥やす地方官吏と住民の緊張関係がうかがえる。これが開発区急増の実体であろう。(田畑光永『鄧小平の遺産 離心・流動の中国』)
- (159) 『論語』が二千五百年の長い期間多くの読者を引きつけてきた魅力は、何よりも、孔子の言葉のはしばしまであふれ出てくるところの、博大高遠をきわめながら、しかも温厚で親しみやすい人間性にあったと考えるべきであろう。(貝塚茂樹『孔子』)

次のように「ダロウ」は非推量文にも使える点で、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」とは異なる。

- (160)a. むかしから家の中のネズミは地震の前にさっさといなくなってしまうという火山が噴火する前に山からぞろぞろと動物たちが逃げ出す 船が沈むと感じた犬はけっしてその船にはのらないというでしょう(手塚治虫『アドベンチャー 21』)
- b. \*船が沈むと感じた犬はけっしてその船にはのらないという{ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ}。

いわゆる確認要求の表現にも、「ダロウ」は使えるが、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は使えない。

- (161)a. 「国会の証人喚問も相当きびしかったけど、検事さんの調べはもっときついでしょう?」(魚住昭『特捜検察』)
- b. \*「国会の証人喚問も相当きびしかったけど、検事さんの調べはもっときつい

{ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ}？」

最後に連体修飾について論じる。「ダロウ」は連体修飾成分となる場合に、後ろに「と思われる」や「という」を付けないと不自然である。小説などの実例では「ダロウ」が直接連体修飾する例も見られるが、実際に口に出して言うのは不自然である。ところが、「デアロウ」の形を取ると許容度が上がる。以下の例文でも、例文ごとに自然さの違いはあるものの、同じ文脈で「ダロウ」の例と「デアロウ」の例を比較すると、「デアロウ」の例の方が許容度が上がることに気付く。<sup>1)</sup>

まず、原文では「ダロウ」となっているものを「デアロウ」と対比して示す。

- (162)a. <sup>?</sup>窓ガラスには光線よけのためなのだらう濃紺の色が入れられ、外から見ると内部は暗く不気味に映った。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- b. 窓ガラスには光線よけのためなのデアロウ濃紺の色が入れられ、外から見ると内部は暗く不気味に映った。
- (163)a. <sup>?</sup>かつては「湯」とでも書いてあったのだらうガラス戸を引き開けて、ひとりの男がジムへ足を踏み入れた時、私はこれが大戸なのかと眼を見張った。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- b. かつては「湯」とでも書いてあったのデアロウガラス戸を引き開けて、ひとりの男がジムへ足を踏み入れた時、私はこれが大戸なのかと眼を見張った。
- (164)a. <sup>?</sup>土着という、ふだん内藤がほとんど使うことのないだらうその言葉には、彼のどうにかして根をもちたいという願望がこもっているようだった。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- b. 土着という、ふだん内藤がほとんど使うことのないデアロウその言葉には、彼のどうにかして根をもちたいという願望がこもっているようだった。
- (165)a. <sup>?</sup>院が自分を薄情なものとお恨みになるだらうことも心苦しい。(田辺聖子『新源氏物語』)
- b. 院が自分を薄情なものとお恨みになるデアロウことも心苦しい。
- (166)a. <sup>?</sup>彼の七瀬への肉欲がすでに怒りで破壊のエネルギーに変化してしまっているだ

1) 同一作家が同一作品中で「ダロウ」と「デアロウ」を使った場合、連体修飾成分となる割合は「デアロウ」の方が高い。たとえば、宮本輝の『錦繡』では「ダロウ」は57例中0例で「デアロウ」は42例中5例、藤原正彦の『若き数学者のアメリカ』では「ダロウ」は112例中0例で「デアロウ」は55例中2例、沢木耕太郎の『一瞬の夏』では「ダロウ」は303例中3例で「デアロウ」は7例中5例となっている。(「でしょう」「でありましょう」「だろっ?」などの形は除き、平仮名表記の「だらう」「であろう」に限って調べた。)

- ろうことも充分想像できた。(筒井康隆『エディプスの恋人』)
- b. 彼の七瀬への肉欲がすでに怒りで破壊のエネルギーに変化してしまっているデアロウことも充分想像できた。

次に、原文では「デアロウ」となっているものを「ダロウ」と対比して示す。

- (167)a. 菊地は朝食の品々を見て、その日、己の身に起こるであろうことを察したにちがない。(大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』)
- b. <sup>?</sup>菊地は朝食の品々を見て、その日、己の身に起こるダロウことを察したにちがない。
- (168)a. それは、これから、この子を見るたびに受けるであろう苦しみを、今から予感していることでもあった。(田辺聖子『新源氏物語』)
- b. <sup>?</sup>それは、これから、この子を見るたびに受けるダロウ苦しみを、今から予感していることでもあった。
- (169)a. 蔵王といえば冬の樹氷ぐらいしか知らない私は、東京駅のコンコースに立ち停まって、やがて無数の氷と化してしまうであろう樹木たちが、いま鮮やかに色変わりして、満天の星空の下で風になびいているさまを想像してみたのです。(宮本輝『錦繡』)
- b. <sup>?</sup>蔵王といえば冬の樹氷ぐらいしか知らない私は、東京駅のコンコースに立ち停まって、やがて無数の氷と化してしまうダロウ樹木たちが、いま鮮やかに色変わりして、満天の星空の下で風になびいているさまを想像してみたのです。
- (170)a. 残金を調べてみると、現金はほぼ全部使い果し、残るは、虎の子のトラベラーズチェックだけで、その内訳は、コロラドを経てミシガンまでの旅費の約一五〇ドルと、そこに着いた当初に必要となるであろう二〇〇ドル(約六万円)ほどであった。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)
- b. <sup>?</sup>残金を調べてみると、現金はほぼ全部使い果し、残るは、虎の子のトラベラーズチェックだけで、その内訳は、コロラドを経てミシガンまでの旅費の約一五〇ドルと、そこに着いた当初に必要となるダロウ二〇〇ドル(約六万円)ほどであった。

次の場合、「デアロウ」は「デアッタロウ」の形になるが、「ダロウ」は中に「タ」を取り込むことが出来ないので非文となる。

- (171)a. 昨今の住宅事情は駅近辺だけでなく、かつては見わたすかぎり畑であつたろう

- 地帯をすっかり街に変貌させていた。（大塚公子『死刑執行人の苦悩』）
- b. \*昨今の住宅事情は駅近辺だけでなく、かつては見わたすかぎり畑ダッタロウ地帯をすっかり街に変貌させていた。

こうした事実から、「ダロウ」と「デアロウ」には単なる文体差以上の違いがあるものと推察される。ひとまずはこうした指摘にとどめておく。<sup>1)</sup>

## 6. 第3章のまとめ

本章では、「ダ/」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」の違いについて考察した。

まず2節では、認識と推量判断の関係について整理し、文には話し手の推量判断の関わるものと関わらないものがあることを確認した。

次に3節では、「ダ/」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」の違いについて分析した。その結果、従来同じ蓋然性の「高低」あるいは可能性の分散の「有無」という範疇の中で捉えられてきた「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が、実は質的に異なる性質を持っていることが明らかとなった。先行研究では「カモシレナイ」が推量判断を表すと説明するものもあるが、「カモシレナイ」は話し手の推量判断の加わらない一般的事実を表すことができるため、推量表現ではなく話し手の認識を表す表現であることが証明される。これに対し、「ニチガイナイ」は一般的事実を表すことができず推量表現として機能する。一方、「カモシレナイ」と対になるのは「ダ/」である。「ダ/」が当該の事態の成立が確実であると認識したことを表すのに対し、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す。また、「ニチガイナイ」が対話文で使われる場合について考察し、書き言葉的である、対話の場面であっても独白的に使われている、「に+違い+ない」の意味で使われている、のいずれかであることを明らかにした。

続く4節では、推量表現の「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」の違いについて、「判断の根拠」、「推論の型」という観点から分析した。その結果、「ニチガイナイ」が話し手の確信（思い込みでもよい）による推量を表し、「演繹推論」にも「帰納推論」にも使われるのに対し、「ヨウダ」と「ラシイ」は裏付けとなる根拠による推量を表し、

1) 三原（1995）は「デアロウ」と「ダロウ」は別に考える必要があるとしているが、それ以上の分析は行っていない。この点に関しては本研究でも事実の指摘にとどめておく。

「帰納推論」のみに使われることを明らかにした。「ヨウダ」と「ラシイ」の違いは、「ヨウダ」がある事態「A」と別の事態「B」に共通の属性があることを根拠に推量判断を行なうのに対し、「ラシイ」は他者からの情報や外界の現象を根拠に推量判断を行う点にある。したがって、話し手自身の責任ある判断が必要とされる場合や、話し手自身に知覚できるはずの感情を根拠とする場合には、「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えない。

最後に5節では、「ダロウ」について考察した。「ダロウ」の特徴は、証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表すことにある。また、連体修飾成分となる場合、「ダロウ〔名詞〕」に比べ、「デアロウ〔名詞〕」の方が許容度が上がるという事実が見られる。

従来、これらの表現は蓋然性の高さの違いが問題にされる場合があった。しかし、これらの表現は蓋然性の高低によって一つのスケール上に並んでいるわけではなく、上に示したような質的な違いを持っている。したがって、単純に蓋然性の高低を議論することはできない。たとえば、一般に「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表し、「ニチガイナイ」は蓋然性の高いことを表すとされている。しかし、これは「カモシレナイ」が複数の事態の成立可能性を同時に認めることを表すことと、「ニチガイナイ」が推論の帰結がただ一つに導かれることを表すことから来る派生的な意味であると考えられる。また、「ヨウダ」、「ラシイ」による蓋然性の高さは、根拠に基づく推量判断であることに由来する。しかし、これらと思い込みによる推量を表す「ニチガイナイ」とで、どちらの蓋然性が高いのかということは一概には比べられない。さらに「ダロウ」の場合、「証拠不足」という意味により、「ダ/ 」や「ニチガイナイ」より蓋然性が低く感じられるが、元来これらは質的に異なる表現であり、同じスケール上で蓋然性の高さを比べられる性質のものではない。

第4章 キットとカナラズ<sup>1)</sup>

1. はじめに

第4章から第9章では、蓋然性を表す副詞の意味の違いについて分析する。従来、蓋然性を表す副詞は蓋然性の高いものから低いものへと一次元に並んでいると捉えられることがあった(図4-1)。

カナラズ	キット	タブン	モシカスルト	ヒョットスルト
高				低
〔蓋然性〕				

図4-1 一次元的な捉え方

たしかに、「カナラズ雨が降る」と言えば雨の降る蓋然性は100パーセントだが、「キット雨が降る」と言うのと相対的に雨の降る蓋然性が低くなるように感じられる。しかし、モダリティの観点から見ると、「カナラズ」が客体世界における事態成立の可能性の度合いを表すのに対し、「キット」は話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合いを表すという違いがある。したがって、蓋然性を表す副詞の研究に際しては、量的な蓋然性の違いを議論する以前に、こうした質的な違いを区別することが必要となる(図4-2)。

	〔事態の蓋然性〕	〔判断の蓋然性〕
高	カナラズ	キット
	タイテイ	タブン
低	アマリ	モシカスルト

図4-2 二次元的な捉え方

「カナラズ」に比べ「キット」の蓋然性が低く感じられるのは、「カナラズ」が客体世界における事態成立の確実性を表すのに対し、「キット」はあくまでも話し手の推量判断に

1) 本節は杉村(1996)をもとに加筆修正したものである。

よる確信度の高さを表すにすぎないためである。

こうして分類された「事態の蓋然性を表す副詞」と「判断の蓋然性を表す副詞」は、使われる文の種類や共起する文末のモダリティ形式の違いによって、さらにいくつかの類型に分かれる。これらは単に蓋然性の高さの主観性の違いによる二次元的な広がりではなく、独自の様々な特徴をもって分布しているのである（図4-3）。

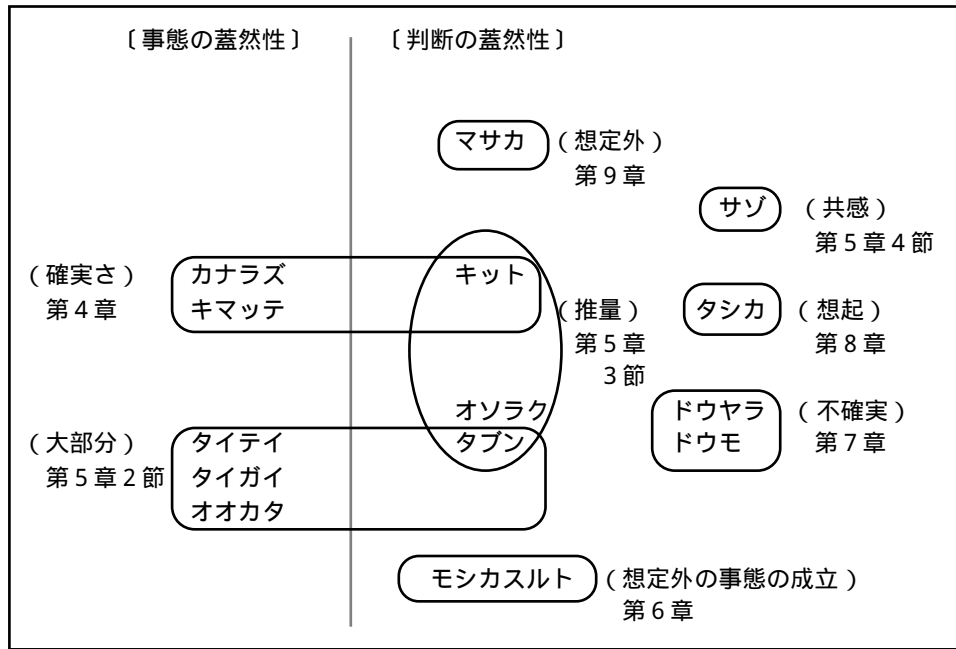


図4-3 本研究で考察する副詞

以下、蓋然性を表す各副詞の意味の違いについて、図4-3に示された各章で考察する。まず、本章では蓋然性の高いことを表すとされる「キット」と「カナラズ」の違いについて分析し、「キット」が判断の蓋然性を表すのに対し、「カナラズ」は事態の蓋然性を表すことを明らかにする。

## 2. 類似点と相違点

従来、「キット」と「カナラズ」はともに話し手の主観を表す副詞として捉えられ、蓋然性の高さ、過去文との相性、「推量的機能」および「習慣的機能」の違いについて分析されてきた。しかし、それらの研究はいまだ事実の記述に終わり、そうした違いの生じる理由を説明するには至っていなかった。これに対し、本研究では「キット」は判断の蓋然



性を表し、「カナラズ」は事態の蓋然性を表すと考えることにより、こうした両者の性質の違いが説明できることを明らかにした。両者はともに蓋然性の高いことを表すという点で共通しながらも、主観性の点では「キット」はモダリティに属し、「カナラズ」は命題に属するという違いがある。

一般に「キット」と「カナラズ」は類義語として扱われ、各種の国語辞典でもメタ言語として互いの語が使用されている。一例として『日本語大辞典』の記述を示す。

きつ-と〔屹度・急度〕（副）（「きと」の転） たしかに。まちがいなく。必ず。  
 certainly 用例 - 来る。 急に態度が厳しくなるようす。 sternly 用例 - にらみつ  
 ける。 厳しく。きりりと。 用例 - 申し付ける。 古語 すぐに。とっさに。 用例  
 - 思ひいだして。（平家・九・生ずきの沙汰）  
 かならず〔必ず〕（副） きつと。たしかに。まちがいなく。 surely 用例 人間は - 死  
 ぬ。 - 間に会うように行きます。 いつも。きまって。 always 用例 会えば - けん  
 かだ。戦えば - 勝つ。

このうち、「キット」の ~ は情態副詞の例で、蓋然性を表す とは用法が異なっている。たとえば、例文(1)の「キット」は眉を厳しくつり上げた様子を形容したものである。

- (1) その日の昼頃、占領軍の兵士が行者様の石像を海に放り込んでしまったと、志津子は眉をきつとつり上げて、悔しそうに言った。（鈴木光司『リング』）

このような「キット」は考察の対象とはしないことにする。

このように、「キット」と「カナラズ」は類義語として捉えることができる。実際、次の文で「キット」と「カナラズ」を入れ替えても、その表す意味はほとんど変わらない。

- (2) 灯の連なる名古屋の街を窓に見入りながら、いつかはきつと、あの女に会える、必ず会ってみせる、と思った。（劉1996第3章5節の例文(1)：松本清張『黄色い風土』）
- (3) わたしが中国にいるとき、あなたはみずから党秘書を訪ねて行って、「明道は必ずわたしのもとに帰ってくる。決してわたしを見捨てたりはしない。心配しないでくれ。わたしがいるかぎり、明道はきつと帰ってくる」とおっしゃったそうですね。（康明道著、尹学準訳『北朝鮮の最高機密』）
- (4) 私は茫然とした。日本の学校を出た彼女は、朝鮮語ができない。しかも、初めての祖国訪問だ。「必ず迎えに来てね」と手紙に書いていたし、「きつと迎えに行く」

と電話で何度も約束した。(李英和『北朝鮮秘密集会の夜』)

しかし、次の場合には「キット」と「カナラズ」を入れ替えることができない。

- (5)a. 彼はキット君のことが好きなのでしょう。
- b. \*彼はカナラズ君のことが好きなのでしょう。
- (6)a. \*君は出された料理はキット残さずに食べるんだね。
- b. 君は出された料理はカナラズ残さずに食べるんだね。

従来、「カナラズ」は「キット」に比べて蓋然性の高いことを表すと説明されることがあった。しかし、両者の違いが単なる蓋然性の高さの違いにあるとしたら、「彼が君のことが好き」である程度が相対的に高いことを「カナラズ」で表したり、「君が出された料理は残さずに食べる」という程度が相対的に低いことを「キット」で表すことができるはずである。それができないということは、「キット」と「カナラズ」には単なる蓋然性の高さの違いでは説明できない違いのあることを示している。

### 3. 先行研究

先行研究で「キット」と「カナラズ」の類義分析を行なったものには、工藤(1982)、山田(1982)、丹保(1984)、佐治(1986、1992)、森田(1989)、小林(1992)、森本(1994)、劉(1996)、坂口(1996)がある。ここではその要点を整理し、分析の視点を定めることにする。

まず工藤(1982)について検討する。工藤は「キット」と「カナラズ」を「叙法副詞」の中に位置付けた。工藤は二語の意味記述をするに当たり、「一語一義説」と「意味＝用法説」<sup>1)</sup>を批判し、「やきつけられ度」として考えるべきことを主張した。「やきつけられ度」とは次のようなものである。

「共起」はいわば量的現象、「呼応」は質的關係だが、質的なものが量的現象を生じるとともに、量的現象が質的变化をもたらすとも、一般的に言える。文の中での意味機能が、使用のくりかえしの中で、しだいに単語の意味機能としてやきつけられていくのである。「共起」と「呼応」とが基本的なところで平行することは、不思議な

---

1) 単語の意味を用法の総体とする説(工藤1982:74)。

ことではない。(工藤1982:71)

工藤は、推量的な副詞群は対象面における「事態実現の確実さ」と作用面における「話し手の確信の度合い」の二面を持つとして、「キット」と「カナラズ」には、話し手の確信、話し手の期待(意志・命令)、確率の高さの三つの用法があるとした(は叙法としての用法、は疑似叙法としての用法)。その上で、二語の意味機能が「やきつけられている」とした。しかし、工藤はただ「やきつけられている」と言うだけで、どのようにしてやきつけられているのかの説明はない。「キット」と「カナラズ」の違いも、「必ず」の基本的用法が/確率/である(工藤1982:73)と述べるにとどまり、その違いは明確ではない。こうした記述の曖昧さは、どの推量の副詞にも「確率」と「確信度」の二面性があるとしたために生じたと考えられる。たしかに、ある事態の成立する「確率」が高ければ「確信度」も高くなる傾向はある。しかし、前者は客体世界における蓋然性、後者は話し手の判断における蓋然性であり、両者は区別して考える必要がある。

次に山田(1982)について検討する。山田はまず文の意味構造から話を始め、文には「断定」、「確信」、「疑問」など話し手の態度を表す部分(心的態度)と、その対象となる部分(命題)があるとした。そして、「客観的態度」をP、命題をQ、「成立する」を「である」と言い換えて示すと、命題Qは一般に、〔Pである〕という構造を持つと言うことができる(山田1982:187)として、命題の中にも話し手の判断「である」が含まれると主張した。その上で、「キット」と「カナラズ」は心的態度は修飾せず、命題だけを修飾するとして、二語を「命題の成立する度合についての話し手の主張を示す」表現であるとした。山田は、「キットQ」は「主観的根拠にもとづいてPである」ことを表し、「カナラズQ」は「Pでないことがありえない」ことを表すと定義した。しかし、山田は「心的態度」と「命題自体に含まれる話し手の判断」を明確に区別しておらず、その点で曖昧な説明となっている。

さて、山田は「カナラズQ」の意味について次のように説明している。

ところで、Pでないことがありえないは論理的にPであるを帰結するが、後者はカナラズの意味に含まれない。このことは次例の検討から明らかになる。

8 彼は明日来るというわけではない。

9 彼は明日カナラズ来るというわけではない。

8は 彼は明日来る の否定で 彼は明日来ない と言っている。9は 彼が明日来ないことがありえない の否定で 彼が明日来ないことがありうる と言っている。もしカナラズが Pである ことをも意味するならば、8と9の論理的意味が同じになるはずだが実際はそうではない。〔カナラズQ〕はただ Pでないことがありえな

い ことを意味しているのである。(山田1982:189)

その上で、命題内容によっては「カナラズ」が使えないこともあるとした。山田は命題を「事実命題」(事実関係によって真偽が決まる命題)と「規約命題」(習慣的規約によって真偽が決まる命題)に分け、「Pである ならば Pでないことがありえない」という論理関係が認められるものは「同語反復」となるため不自然に感じられるとした。たとえば、事実命題のうち「私は来月の会にカナラズ出席する」などは同語反復にはならないので許容されるが、規約命題を表す「北の反対はカナラズ南である」、「 $3 \times 2$ はカナラズ6である」や、事実命題でも既成の一回的事実を表す「私はきのうカナラズ彼に会った」などは同語反復となるため許容されないのであると説明した。しかし、森田(1989)が「三から一を引けば必ず二だ」を適格な文と認めているように、本研究では規約命題を表す場合にも「カナラズ」が使えると考える。その場合にも、「(例外があると考えの人がいるかもしれないが)三から一を引けば必ず二だ」のように、「Pでないことがありえない」という文脈を想定すれば使えるのである。

これと関連して、山田は「既成の一回的事実」を示す場合に、「キットQ」は使えるが「カナラズQ」は使えないとした。

- (7)a. あの人はキット結婚したんですよ。(山田1982:例文(22b))  
 b. \*あの人はカナラズ結婚したんですよ。(山田1982:例文(22a))

これについて山田は、例文(7a)は「「あの人が結婚した」ことの確証はないが、何らかの理由でそう考えられると言っている」(山田1982:193)と説明し、例文(7b)は「「あの人が結婚した」ことを認めればそれ以外の可能性はないからカナラズが使えない」(山田1982:193)と説明した。しかし、「あの人は来年カナラズ結婚する」の場合、上の例と同様に「あの人が結婚する」ことを認めればそれ以外の可能性がないにもかかわらず、適格な表現である。したがって、同語反復を理由に「カナラズ」の使用可能性を説明するのは説得力に欠けることになる。

次に佐治(1986、1992)について検討する。佐治は「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイニ」、「ドウシテモ」を「ことがらに対する話し手の判断の断言の気持の強弱にかかわるもの」(佐治1992:83)として一つの類型としてまとめ、各副詞がどのような文脈で使われるのかを調べた。その結果、「キット」は単なる事実を述べる文ではなく推量の意を帯び得る文にしか使えないとして、「話し手が強くそう推量する気持を表す」と定義した。そのため、意志文、命令文、勧誘文に使われる「キット」については無視された結果となっている。

一方、「カナラズ」については、単なる事実を表す文や静的な事態の推量とは共起せず、変り得る余地のある事態を表す文と共起すること、ある種の条件句を含んだ文に現れることを指摘した。しかし、単なる事実を表す文とは共起しないと言いながら、単なる事実を表す文であっても条件句のある場合には「カナラズ」が使えるとも述べている。佐治は、単なる事実を表す「このあたりは冬になると必ず雪が降った」が成立する理由を、「冬になると」という条件句があるためであるとしている。しかし、条件句があっても「カナラズ」の使えない場合もある。

(8) \*昨日は夜になるとカナラズ雪が降った。

すなわち、条件句の有無では「カナラズ」の使用可能性は説明できないことが分かる。<sup>1)</sup> そもそも、「カナラズ」が話し手の判断と関わる点から考え直す必要がある。

次に森本(1994)について検討する。森本は副詞のカテゴリーの中に「話し手の主観を表す副詞」を設定し、平叙文と共起するか、命令文と共起するか、「ダロウ」、「ラシイ」、「ウ/ヨウ」構文と共起するか、現在文で現れるか過去文で現れるかというテストによって、さらにいくつかのサブカテゴリーに分類した。このうち、「キット」と「カナラズ」は「述べられる行為や状態の実現についての蓋然性に関する判断を担っている」(森本1994:63)ものとして分類され、その中でも特に蓋然性の高いものとして位置付けられている。

森本は、「カナラズ」に「推量的機能」と「習慣的機能」のあることを認め、過去平叙文では「習慣的機能」にしかならないとした。

- (9)a. まりこはかならずここを通る。
- b. わたしの予測ではまりこはかならずここを通る。(推量的機能)
- c. まりこはかならずここを通る。それで店の人が彼女の顔をおぼえてしまった。  
(習慣的機能)

(森本1994第4章の例文(23)。括弧内は引用者による)

- (10) P: まりこは少しお金があるとかならずバラを買った。
- Q: それが彼女の習慣だったの。
- P: うん。

(森本1994: 第4章の例文(22))

---

1) 小林(1992)にも同様の指摘がある。

同様に「キット」にも似た性質があるとして次の例文を挙げている。ただし、こうした用法は現在の日本語では書き言葉に限定されるとしている。<sup>1)</sup>

- (11)a. まりこはお金があるときっとバラを買った。(森本1999: 第4章の例文(24))  
 b. まりこはお金があるときっとバラを買う。(森本1999: 第4章の例文(25))

森本は二語が命令文に使われた場合のニュアンスの違いとして、「直観的に言うと、「きっと」では、話し手は行為を実現させるという自分の期待を強調する。また、「かならず」はその行為が確実に行われることを強調する」(森本1999: 175)と述べている。この捉え方は二語の違いの本質に迫るものである。しかし、森本はそれ以上の考察はしておらず、印象を述べるにとどまっている。その上、「カナラズ」が「習慣的機能」を持つ場合は「文の命題内容にとりこまれると思われる」(森本1999: 74)としながら、これも印象を述べるにとどまり、結局は「習慣性は話し手の心理的態度と無関係ではない。習慣であるという判断は話し手の観点にかかっているからである」(森本1999: 80)として、話し手の主観性と結び付けて考えている。しかし、この森本の論法に従うと、雨の降り方を「ザーザー」と捉えたり「シトシト」と捉えたりするのも話し手の主観によることになり、副詞は全て主観的であるということになる。森本は副詞全体の中でとりたてて「話し手の主観を表す副詞」というものを設定しているが、何を基準に「話し手の主観」を表すとするのが曖昧なまま議論が進められているため、結局「キット」と「カナラズ」の違いがはっきりしないまま議論が終わってしまっている。

次に劉(1996)について検討する。劉は「キット」と「カナラズ」を「話し手の確信度を表す副詞」の中に位置付け、モダリティに関わるものであるとした。劉は「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「ダロウ」、「カモシレナイ」との共起関係を調査し、「カナラズ」は前3つの比較的強い確信度を表すモダリティとしか共起しないのに対し、「キット」はその3つに加え弱い確信度を表す「カモシレナイ」とも共起することから、話し手の確信度は「キット」の方が低いとした。しかし、「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「ダロウ」、「カモシレナイ」を単なる蓋然性の違いとは考えない本研究の立場からすると、これを根拠に「キット」と「カナラズ」の違いを議論することはできないと考える。

劉は、森本(1994)の「推量的機能」と「習慣的機能」についても言及し、「カナラズ」は森本の指摘した通り二通りの読みが可能であるが、「キット」は推量の読みしかできないとした。劉はその根拠として、例文(12)の「カナラズ」が「キット」に置き換えられないことを指摘している。

---

1) 工藤(1982)もこうした用法は文語的であるとしている。

- (12)a. 偽名の手紙を、秋田文作にあてて四日に一度はかならず送った。(劉1996の第3章4節の例文(26):松本清張『危険な斜面』)
- b. \*偽名の手紙を、秋田文作にあてて四日に一度はキット送った。

たしかに、劉の指摘の通り「キット」を「習慣的機能」として使うのは不自然である。こうした違いが現れる理由についてさらに考察が必要となる。

以上の研究は「キット」と「カナラズ」をともにモダリティ表現(あるいは命題表現)と見るか、主観性の違いをあまり考慮せずに分析したものである。これに対し主観性の違いから考察した研究に、丹保(1984)がある。丹保は、「必ず」は、その意義を二つに区分する必要がある。「かならず」と「きっと」との述語に対する係り方は「認定」と「判断」とに分けて考えるべきである。「認定」とは、叙述内容をそれと認めることであり、「判断」とは、認定された叙述内容に対して話し手の心的態度を加えることである(丹保1984:13)と説明し、認定内で働く「かならずa」と、認定外で働く「かならずb」および「きっと」を区別した。

かならず a	成立することを前提としての確信
かならず b	成立することへの強い確信
きっと	事柄に対する確信的推量

丹保は、「事実命題」と「規約命題」において、単純な断定の場合は「キット」しか使えないが、「～ニナル」という意味の文脈では「キット」も「カナラズ」も使うことができるとした。また、超時間的真理の表現には「かならずa」は使えるが、「きっと」と「かならずb」は使えないこと、逆にル形で表された個別的表現には「きっと」と「かならずb」は使えるが、「かならずa」は使えないことを指摘し、タ形で表された個別的表現ではいずれも使えないことを指摘した。さらに、否定文との共起関係については、否定表現を「否定(対象)」、「否定(作用)」、「否定意志」の三つに分け、「否定(対象)」の文は「かならずa」と共起すること、「否定(作用)」の文は「きっと」と共起すること、「否定意志」の文はいずれの文とも共起しないことを指摘した。

丹保の研究の問題点として、「かならずa」と「かならずb」をどの程度別のものとして捉えるのかという疑問がある。たしかに、「カナラズ」には「キマッテ」に近い用法と、「キット」に近い用法とがある。<sup>1)</sup>しかし、「カナラズ」は元々一つの意味を担っており、使われた文の性質によって「a」と「b」に分かれて見えると考えることもできる。もし

1) 本章7.2節で見ると、森田(1989)でもこの二つの違いが指摘されている。

そうでないとすれば、使われる文の数だけ用法を設定する必要も生じてくる。

次に小林（1992）について検討する。小林も「キット」と「カナラズ」の主観性の違いについて言及し、「キット」は「発話態度」に係り、「カナラズ」は「事柄、事態」に係るとした。小林は二語の意味の違いを次のように指摘した。

- |     |  |
|-----|--|
| 必ず  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・確率がほぼ100%であるという意味である。</li> <li>・繰り返して起こる可能性のあることについて言う。<br/>（過去の一度限りのできごとには言わない）</li> <li>・変化の意味を持つ動詞に係る。<br/>（形容詞や名詞のような状態性の文では言わない）</li> </ul> |
| きっと | <ul style="list-style-type: none"> <li>・強い確信や期待を示す。</li> <li>・推量の意味を含む。</li> <li>・ナル的（無意志的）である。</li> </ul>   |

小林の研究は、二語の違いがはっきりと現れているという意味で、きれいな記述となっている。しかし、事実の羅列にとどまっている上に、「カナラズ」が一時的文脈に使われる場合や、「キット」が命令、意志、勧誘を表す場合については排除されている。そのため、一部の用法の記述にとどまってしまっている。

最後に坂口（1996）について検討する。坂口は「ゼヒ」、「ドウカ」、「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイ」の五つの副詞を対象にして、働きかけ文（命令文、依頼文、当為文など）との共起関係を分析をした。このうち「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイ」の違いについては、「「きっと」と「絶対」は話し手の主観性が強く、この点で「必ず」とは異なる。しかし、事態実現の確実さでは「必ず」と「絶対」が高いという点で「きっと」と異なる。また、「きっと」は話し手の推量をより強く表すという点でも他の2副詞と異なっている」（坂口1996：9）と説明している。

坂口は「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイ」の係り先には、次のような違いがあるとした。

- (13) 今度の講演は、[ きっと / 必ず / 絶対 ] 聞いたほうがいい。

（坂口1996：例文(10)）

つまり、「キット」と「ゼツタイ」は「ほうがいい」という当為判断（モダリティ部分）



に係り、「カナラズ」は「聞く」という動作（命題部分）に係るとしたのである。副詞の係り先に統語的な違いがあるとする指摘は、本研究の考えとも一致している。しかし、「キット」が「ほうがいい」に係るとする説明には問題がある。「キット」が話し手の推量をより強く表すという記述からすると、キットは「ほうがいい」ではなく、真偽判断を表す文末のモダリティ形式「   」に係ると考えた方が説得的である。

(14) 今度の講演は、きっと聞いたほうがいい   。

以上、先行研究の記述について検討した結果、「キット」と「カナラズ」を分析する際の論点が明らかとなった。

- 「判断の蓋然性」を表すのか「事態の蓋然性」を表すのか
- 「否定文」、「過去文」との関係について
- 「蓋然性」の高さについて
- 「推量的機能」と「習慣的機能」について
- 「一回的文脈」と「反復的文脈」について
- 「命令」、「意志」、「勧誘」の用法について

以下、これらの論点に沿って「キット」と「カナラズ」の意味分析を行っていく。

#### 4．命題とモダリティ

本節では以下の5つの主観性判定テストによって、「キット」と「カナラズ」が命題副詞として事態の蓋然性を表すのか、モダリティ副詞として判断の蓋然性を表すのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。

- 否定の焦点となるかどうか（否定の焦点テスト）
- 疑問の焦点となるかどうか（疑問の焦点テスト）
- 文代名詞の対象となるかどうか（文代名詞化テスト）
- 連体修飾成分となるかどうか（連体修飾テスト）
- 過去文の中に収まるかどうか（過去テスト）

〔1〕 否定の焦点テスト

次に示されるように「キット」は否定の焦点となりにくい、「カナラズ」は否定の焦点となる。

- (15)a. <sup>?</sup>太郎は [ キット10時に寝る ] のではなく、[ タマニ10時に寝る ] のである。  
 b. 太郎は [ カナラズ10時に寝る ] のではなく、[ タマニ10時に寝る ] のである。

例文(15a)の許容度が「？」となっているのは、「キット」を「例外なく」の意味で読んだ場合、不自然ではあるが全く使えないわけではないからである。ただし、そうした意味を表す場合には「カナラズ」を使う方が自然である。以下のテストで「キット」の許容度が「？」となっているのも同じ理由による。

〔2〕 疑問の焦点テスト

このテストでも、「キット」は疑問の焦点となりにくい、「カナラズ」は疑問の焦点となる。

- (16)a. <sup>?</sup>太郎は [ キット10時に寝る ] のですか、[ タマニ10時に寝る ] のですか。  
 b. 太郎は [ カナラズ10時に寝る ] のですか、[ タマニ10時に寝る ] のですか。

〔3〕 文代名詞化テスト

このテストにおいて、「キット」は文代名詞の対象となりにくい、「カナラズ」は文代名詞の対象となる。文代名詞化 (sentential pronominalization) とは、「任意のSを代用形で (英語では、it、so、もしくは、関係代名詞 which など、日本語では、「そう」「それ」などで) 置き換える操作」(澤田1978:23) のことである。例文(17)で「それ」に含まれるものが客観的な成分である。自然な読みでは、例文(17a)の「それ」には「キット」が含まれず、例文(17b)の「それ」には「カナラズ」含まれる。

- (17)a. A: 太郎はキット10時に寝ますよ。  
 B: それは本当ですか。  
 (それ = 10時に寝ること)  
 (それ キット10時に寝ること)  
 b. A: 太郎はカナラズ10時に寝ますよ。  
 B: それは本当ですか。

(それ = カナラズ10時に寝ること)

(それ 10時に寝ること)

ただし、次のように「キット」が「それ」に含まれる表現もある。

(18) A: 私はキット10時に寝ます。

B: キットですね、それは間違いありませんね。

この場合の「キット」は「絶対に、間違いなく」の意味で使われたもので、話し手の意志を表し、「カナラズ」に近い意味となる。

#### 〔4〕連体修飾テスト

このテストでも、「キット」は連体修飾成分となりにくい、「カナラズ」は連体修飾成分となる。

(19)a. <sup>?</sup>花子は [ 太郎がキット10時に寝る ] 習慣であることを知った。

b. 花子は [ 太郎がカナラズ10時に寝る ] 習慣であることを知った。

次の例文でも「カナラズ」を「キット」に置き換えると不自然あるいは不適格となる。

(20)a. 「きみがどんな姿になろうとぼくはきみとかならず結婚する気だったんだ」  
(手塚治虫『大暴走』)

b. <sup>?</sup>「きみがどんな姿になろうとぼくはきみとキット結婚する気だったんだ」

(21)a. 「ここはわれわれの聖地 神を祭り祈る場所です 説教の前にはかならず火を燃やすのがしきたりです」(手塚治虫『ブッダ』)

b. <sup>?</sup>「ここはわれわれの聖地 神を祭り祈る場所です 説教の前にはキット火を燃やすのがしきたりです」

(22)a. 不動産の場合、この土地は自分の物だと言ったところで、そうだと断定する根拠が明確でない。塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地かもしれない。したがって、家や土地を手に入れたら、かならず登記しておく必要があるのだ。  
(相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる!』)

b. <sup>?</sup>不動産の場合、この土地は自分の物だと言ったところで、そうだと断定する根拠が明確でない。塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地かもしれない。したがって、家や土地を手に入れたら、キット登記しておく必要があるのだ。

〔5〕過去テスト

この場合、一回的文脈と反復的文脈では許容度に違いが出る。過去の一回的事態を表す場合には、「キット」も「カナラズ」も使うことができない。一方、過去において繰り返し行なわれた事態を表す場合には、「キット」は過去文の中に収まりにくい、「カナラズ」は過去文の中に収まる。<sup>1)</sup>

- (23)a. \* [ 太郎は昨日はキット10時に寝 ] た。  
 b. \* [ 太郎は昨日はカナラズ10時に寝 ] た。  
 (24)a. ? [ 太郎は先週は毎日キット10時に寝 ] た。  
 b. [ 太郎は先週は毎日カナラズ10時に寝 ] た。

一回的文脈と反復的文脈における違いについては、本章6節で考察する。

〔6〕まとめ

以上のテストの結果、基本的に「キット」はモダリティ副詞、「カナラズ」は命題副詞であると判定される。「基本的」というのは、「キット」が「例外なく」や「絶対に、間違いなく」という意味で使われる場合もあるからである。(ただし、こうした意味を表す場合には「カナラズ」を使った方が自然ではある。)「キット」と「カナラズ」は、単に蓋然性の高さという量的な違いによって区別されるのではなく、こうした質的な違いによって区別されるのである。

渡辺(1971:310)は、陳述副詞について、「叙述の知的内容量に対しては、全く増減の影響を及ぼすことがない」と指摘している。この点について「キット」と「カナラズ」を比べると、「キット」は叙述の知的内容量に影響を与えないが、「カナラズ」は叙述の知的内容量に影響を与えることが分かる。

- (25)a. 太郎は10時に会社に来る。  
 b. 太郎はキット10時に会社に来る。

---

1) 例文(23a)(24a)が適格となるのは、「キット」が無形の真偽判断のモダリティ形式「     」に係ると読んだ場合である。

- (i) 太郎は昨日はキット 10時に寝た      。  
 (ii) 太郎は先週は毎日キット 10時に寝た      。

- c. 太郎はカナラズ10時に会社に来る。

上の文で、「キット」が付加すると、「太郎は10時に会社に来る」と推量する話し手の確信度の強さに影響を与える。しかし、「太郎は10時に会社に来る」という事態そのものの知的内容量には何ら影響を与えない。一方、「カナラズ」が付加すると、単に「太郎は10時に会社に来る」のではなく、そうした事態が例外なく成立するという意味になり、叙述の知的内容量に影響を与える。こうした事実からも、「キット」がモダリティ副詞であるのに対し、「カナラズ」は命題副詞であることが証明される。

このように「キット」はモダリティ副詞に属し、「カナラズ」は命題副詞に属することから、次に示すように「キット」は文末のモダリティ部分と関係し、「カナラズ」は命題部分と関係することが明らかとなる。

- (26)a. 太郎はキット来るだろう。

- b. 太郎はカナラズ来るだろう。

最後に本研究でいう「主観」と「客観」について確認しておく。森本（1994）などの研究では、「カナラズ」は話し手の主観を表す表現であるとされている。たしかに、次の例文で「来る」度合いを「カナラズ」と表現したのは話し手の主観による。

- (27) 彼は来ると言ったらカナラズ来る男だ。

しかし、もし「カナラズ」が主観的な表現であるとするならば、次の「イツモ」も主観的な表現であるということになる。

- (28) 彼は金が無くなるとイツモうちに来る男だ。

ところが、森本は「イツモ」については、「SSA副詞と密接な関係があることは否めない」（森本1994：80）と言いつつ、SSA副詞からは「統辞論的意味論的特徴によって区別される」（森本1994：80）として客観的な副詞であると考えている。森本は「統辞論的意味論的特徴」によって分類しているとしているが、この分類は恣意的な面が大きく、テストによって主観か客観かを判定したと言うよりは、特定の副詞について初めから主観的であると決め付けているきらいがある。そのため、結局のところなぜ「カナラズ」が主

観的で「イツモ」が客観的なのか分からないままに終わっている。

主観的か客観的かという区別は相対的なものであり、主観や客観という言葉は研究の立場によって様々な意味で使われている。<sup>1)</sup> しかし、森本の言う主観性とは、話し手の発話態度と関わるもののことであり、そうした意味で主観客観を論じるのであれば、「カナラズ」は客観的であるということになる。本研究では、話し手の存在とは独立に客体世界に存在する事態として切り取ったものを客観的表現、発話時点における話し手の心的態度を表すものを主観的表現と考える。こうした立場から見ると、「彼は来ると言ったらカナラズ来る男」であることや、「彼は金が無くなるとイツモうちに来る男」であることは、話し手の存在とは独立に存在するものであるため、「カナラズ」も「イツモ」も客観的表現であるということになる。こうした主観客観の区別は、主観性判定テストによって明示的に示される。そこで、例文(27) (28)を連体修飾テストとして使えば、「カナラズ」や「イツモ」が客観的成分であることが証明される。一方、「キット」のように主観的な成分は連体修飾テストで不適格となる。

(29) <sup>?</sup>彼は来ると言ったらキット来る男だ。

以上、「キット」と「カナラズ」には主観性の点で違いのあることが証明される。

## 5. 共起制限

本節では「キット」と文末のモダリティ形式との共起関係を見ることにより、「キット」が話し手のどのような判断を表すのか、その判断に根拠は必要とされるのか、蓋然性の高さはいかにして生じるのかを分析する。

### 5.1 文末のモダリティ形式との共起

一般に「キット」は推量判断を表し、「タブン」や「オソラク」に比べ蓋然性の高いことを表すと説明されている。しかし、こうした説明は次の2点で問題がある。

第1の問題点は、「キット」を推量表現としている点である。たしかに、「キット」は

---

1) 佐野(1998a:111)は、「程度副詞は、基本的に話者の主観によって程度を述べるものであるが、その「主観性」の質は様でない」と指摘している。また、佐野(1998c)は程度副詞の分類に際し、「XはYより( )A」においてモット類のようにXとYの差を述べるだけのものを「客観的」、ズット類・タショウ類のようにXとYの幅の大きさを話者の評価として述べるものを「主観的」としている。

推量文（および推量伝達文）に使われることが多い。しかし、意志文、命令文、勧誘文に使われる場合もある。

- (30)a. 明日はキット学校に行くだろう。（推量文）
- b. 明日はキット学校に行くぞ。（意志文）
- c. 明日はキット学校に行け。（命令文）
- d. 明日はキット一緒に学校に行こう。（勧誘文）

こうした場合を排除して、推量文に使われる場合だけを取り上げて議論するのは問題である。

第2の問題点は、「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いを蓋然性の高さの違いに求めている点である。たしかに、推量文において「キット」を使うと、「タブン」や「オソラク」を使ったときよりも蓋然性が高く感じられる。しかし、それを根拠に「キット」、「タブン」、「オソラク」を蓋然性の高さの違いで説明することはできない。なぜならば、「タブン」と「オソラク」は推量文（および推量伝達文）には使われるが、意志文、命令文、勧誘文には使われないという性質があるためである。

- (31)a. 明日は{タブン/オソラク}学校に行くだろう。（推量文）
- b. \*明日は{タブン/オソラク}学校に行くぞ。（意志文）
- c. \*明日は{タブン/オソラク}学校に行け。（命令文）
- d. \*明日は{タブン/オソラク}一緒に学校に行こう。（勧誘文）

もし、「キット」、「タブン」、「オソラク」が量的な違いによって区別されるのであれば、「キット」よりも意志や命令や勧誘の態度の弱いことを「タブン」や「オソラク」によって表すことができるはずである。しかし、それができないということは、これらの副詞が量的な違いではなく質的な違いによって区別されていることを示している。

こうした点から考えると、「タブン」と「オソラク」が推量の副詞と呼んで差し支えないのに対し、「キット」は推量の副詞ではなく、推量、意志、命令、勧誘を包括する副詞であると結論される。結局、「キット」は「事態の実現に対する話し手の強い信念を表す」という意味がもとにあり、使われた文の種類によって、推量判断の確信度の高いこと、意志の態度の強いこと、命令の態度の強いこと、勧誘の態度の強いことを表すようになると

考えられる。<sup>1)</sup> (「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いについては、第5章3節で論じる。)

次に「キット」がどのような文末形式と共起するのを見る。これにより「キット」がどのような表現に使われ、どのような表現と衝突するのかが分かる。

(32)a. 明日はキット雨が降る { /ニチガイナイ/ダロウ }。

b. <sup>?</sup>明日はキット雨が降る { カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ }。<sup>2)</sup>

例文(32)に示されるように、「キット」は「カモシレナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」と意味的に衝突を起こす。一般に「キット~カモシレナイ」が使えない理由は、「キット」が蓋然性の高いことを表すのに対し、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表すためであると説明されている。しかし、第3章で考察したように、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表す表現ではなく、複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す表現である。「キット~カモシレナイ」が使えないのは、「キット」にはそのような意味がないためであると考えられる。「キット」は推量文においてある一つの帰結を導くために「カモシレナイ」と共起しないと考えた方が適切である。また、「ヨウダ」と「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量判断を表す。「キット~ヨウダ/ラシイ」が使えないのは、「キット」が根拠に基づく推量判断を表さないためであると考えられる。

一方、「キット」は「ダ/」、「ニチガイナイ」、「ダロウ」と共起する。これらの文末形式はある一つの帰結を導き出す表現であるという点で、「カモシレナイ」とは異なっている。また、話し手の思い込みによる推論にも使えるという点で、「ヨウダ」、「ラシイ」とも異なる。したがって、「キット」は話し手の確信(思い込みでもよい)によりあ

1) 同様の考え方は、石神(1987)にも示されている。石神は、「陳述副詞「きっと」は、程度の極大ということがらの意味を共通項にして、断言・推量・意志・願望という陳述的要素が加わることによって、それぞれの陳述副詞としての意味を表現しているものと考えることができよう」(石神1987:100)としている。なお、石神の言う「断言」は「きっと雨が降る」のようなもの、「願望」は「きっと来て下さい」のようなものを指す。

本研究と石神の研究の違いは、石神が程度の極大という意味を命題的なものと捉えているのに対し、本研究では話し手の期待というモダリティ的なものと捉えている点である。石神は「キット」について、「ある環境で唯一とりあげられる事態が実現する確率がほとんど百パーセントであることが表現されていると考えられる」(石神1987:100)としている。一方、本研究ではこうした意味は「カナラズ」や「ゼツタイニ」によって表され则认为る。

2) 小林幸江(1980)は、「キット」と「ラシイ」、「ヨウダ」は共起しないとしている。一方、小林典子(1992)は、「キット」と「ラシイ」、「ヨウダ」の共起は判定に揺れがあるとして、その理由を「「きっと」が蓋然性の高いことを示しているのに、~ラシイはそれが弱いためにおかしく感じるのだろう」(小林典子1992:8)としている。



る一つの帰結を導き出したことを表す表現であると考えられる。

ところで、「キット」は「ダ/ 」と共起した場合に、認識ではなく推量判断を表す。これは「カナラズ」が一般的事実を表す知識伝達文に使えるのと対照的な点である。その証拠に、次の文で「カナラズ」を使うと一般的事実を表す知識伝達文であると解釈されるが、「キット」を使うと推量文であると解釈される。

- (33)a. 粒子は互いに、相手の粒子が飛びだすときの反作用を受けて動くので、必ず正反対の方向に動く。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)
- b. 粒子は互いに、相手の粒子が飛びだすときの反作用を受けて動くので、キット正反対の方向に動く。
- (34)a. 「あらゆる苦しみはかならず原因から生まれる ブッダはそれらの原因を説き明かされる…… あらゆる苦しみはかならずとめることができる ブッダはそれらのとめる方法を説き明かされる……」(手塚治虫『ブッダ』)
- b. 「あらゆる苦しみはキット原因から生まれる ブッダはそれらの原因を説き明かされる…… あらゆる苦しみはキットとめることができる ブッダはそれらのとめる方法を説き明かされる……」
- (35)a. 「こんど引っ越してきたあの人たち、とても愛し合っているのね。ご主人が仕事に行くとき、必ず奥さんを抱きしめてキスしていくわ。どうしてあなたもそうしないの」(福田健『ユーモア話術の本』)
- b. 「こんど引っ越してきたあの人たち、とても愛し合っているのね。ご主人が仕事に行くとき、キット奥さんを抱きしめてキスしていくわ。どうしてあなたもそうしないの」

たとえば、例文(33a)において「粒子は正反対の方向に動く」ということは発話時点で既に分かっていることであるのに対し、例文(33b)では発話時点において「粒子は正反対の方向に動く」かどうかを推量しているという違いがある。他の例も同様である。

## 5.2 根拠

先行研究には「キット」と「カナラズ」の違いを根拠の主観客観の違いに求めたものがある。たとえば、山田(1982)は「キット」は話し手の「主観的根拠」に基づく表現であると説明している。しかし、根拠の主観客観を議論する考え方には問題がある。この点に関して、劉(1996: 46)は「推論の過程において、主観的であろうが、客観的であろうが、根拠自体は客観的なものであると考えられる」と主張して、「キット」は話し手の「主観的根拠」ではなく、話し手の「主観的な判断」を表していると指摘した。劉の指摘

したとおり、根拠自体は客観的であると捉えるのが適切である。

劉は、根拠を上のように捉え直した上で、「キット」と「カナラズ」の違いを「客観的な根拠」に基づいているかどうかといった観点から説明した。

「かならず」の機能は話し手がある程度客観的な根拠に基づいて判断を下すということである。「きっと」はほとんど客観的な根拠に基づいておらず、話し手の主観的な推量であるから、「かならず」より確信度が低いと言えよう。(劉1996:47)

しかし、二語の違いを「客観的な根拠」に基づくかどうかに求めると、次の例文で「キット」が使える「カナラズ」が使えない理由が説明できなくなる。

- (36) 太郎はもう十日も学校を休んでいる。そう言えば、十日前に雨に濡れて少し頭が痛いと言っていたっけ。そうだ、{キット/\*カナラズ}風邪をひいているんだ。

例文(36)において、話し手は彼が休んだ理由について推量判断を下している。その判断の根拠がいかにか客観的なものであったとしても、「カナラズ」を使うことはできない。したがって、「キット」と「カナラズ」の違いを「客観的な根拠」に基づくかどうかを求めることはできないことになる。(例文(36)で「カナラズ」が使えないのは、「風邪をひく」が状態性の事態を表しているためである。この点については本章7.2節で説明する。)

そもそも「カナラズ」は推量判断を表す表現ではなく、命題副詞として事態が例外なく確実に成立することを表す表現である。その証拠に、先の例文(36)のように推量文に使われるだけでなく、例文(37)のように一般的事実を表す文に使うこともできる。

- (37) 太郎は体が弱いので、雨に濡れるとカナラズ風邪をひく。

「カナラズ」は、例文(36) (37)それぞれの文において、事態が例外なく確実に成立することを表しているのである。結局、判断の蓋然性を表す「キット」と事態の蓋然性を表す「カナラズ」を、一律に根拠の違いによって区別しようとすることに無理があるのである。

ところで、「キット」は推量文において、例文(36)のように推論の裏付けとなる根拠の示された場合だけではなく、例文(38)のように直感的な推量判断にも使われる。

- (38) 太郎はもう十日も学校を休んでいる。理由は分からないけどキット風邪をひいているんだ。

推論の裏付けとなる根拠の有無に関わらず「キット」が使えるということから、「キット」を使った推量文は根拠に依拠した推量ではなく、話し手の確信に依拠した推量を表していることが明らかとなる。

### 5.3 蓋然性

「キット」と「カナラズ」の違いについては、蓋然性の高さの違いが問題にされることがある。たとえば、森本（1994）や劉（1996）は、「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「ダロウ」、「カモシレナイ」との共起可能性を根拠に、「キット」と「カナラズ」の蓋然性の高さの違いを調べた。その結果、森本は「キット」と「カナラズ」が蓋然性の低い「カモシレナイ」と共起しないことを理由に、二語を蓋然性の高い副詞とした。一方、劉（1996）は次のような実例の存在を根拠に、「キット」と「カモシレナイ」は共起するとした。

- (39) アベックや子供連れの乗客ばかりの中で、その男が一人だけでゴンドラに乗り込んだからである。暗い洞窟内部に行くファンタラマに乗るのに濃いサングラスをかけていたのも目立った理由である。

「きっと業者の視察かもしれないわ」（劉1996：第3章4節の例文(11)：森村誠一『レジャーラント殺人事件』）

- (40) 「ずいぶんひどい人もいるものねえ。自分のために命を投げ出した人がいるというのに、よくそんなことができるわ」一緒にテレビを観ていた細君が呆れたように言った。

「きっと恐くなっちゃったのかもしれないな。結局自分たちが殺したような結果になったのだから。」（劉1996：第3章4節の例文(12)：森村誠一『死野』）

- (41) 「ではもう少し待ってみます」細君に心配せぬように若宮は言った。

「きっと、途中で用事を足していらっしゃるのかも知れません。」（劉1996：第3章4節の例文(13)：松本清張『黄色い風土』）

劉は、こうした事実に基づいて、話し手の確信度は「カナラズ」よりも「キット」の方が低いとした。しかし、「キット」と「カモシレナイ」の共起は実例では存在するものの不自然な表現である。

また、ある語と別のある語が同一文上に現れているからといって、必ずしも共起関係にあるわけではない。たまたま同じ文に現れているだけの場合もある。このことを劉の挙げた次の例文で確認する。

- (42) 細密な計画を立てていた彼のことだから、かならず外部に知れることなく野関利江をアパートかどこかに秘匿していたにちがいない、と、沼田仁一には考えられた。  
(劉1996：第3章4節の例文(4)：松本清張『危険な斜面』)
- (43) きっと午後から雷雨が来るにちがいない。(劉1996：第3章4節の例文(5)：森村誠一『死野』)

例文(42)において、「カナラズ」と「ニチガイナイ」は同一の文上に現れている。しかし、この「カナラズ」は「秘匿していた」に係っていると読むのが自然である。その証拠に、この文に「オソラク」を付け加えて、「オソラク細密な計画を立てていた彼のことだから、かならず外部に知れることなく野関利江をアパートかどこかに秘匿していたにちがいない」とすると、「ニチガイナイ」が「カナラズ」ではなく「オソラク」と結び付いていることがはっきりする。それに対して、例文(43)の「キット」は、「ニチガイナイ」に係っているという読みが自然にできる。

以上のことから、「キット」と「カナラズ」を蓋然性の高さによって区別することは、分析の方法として有効ではないと結論される。そもそも、「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「ダロウ」、「カモシレナイ」は、単純に蓋然性の高さの違いによって並んでいるわけではない。そうした違いを考慮せずに、これらの文末形式を蓋然性の高さを測る「ものさし」として使用するのは危険である。

たしかに、蓋然性の高さは「キット」よりも「カナラズ」の方が高く感じられる。実際、「人間はいずれはキット死ぬ」と言うよりも、「人間はいずれはカナラズ死ぬ」と言った方が、確実に死ぬという意味が強くなる。しかし、それを根拠に「キット」と「カナラズ」の蓋然性の高さを云々するのは問題である。「キット」よりも「カナラズ」の方が蓋然性が高く感じられるのは、「カナラズ」が事態そのものの確実さを表すのに対し、「キット」は話し手の確信（言い換えれば「思い込み」）の高さを表すからである。たとえ話し手の確信の程度が高くても、実際に事態が成立するとは限らないため、客体世界において蓋然性の高いことを表す「カナラズ」の方が蓋然性が高く感じられるのである。

## 6．文の意味と副詞の意味

先行研究には、「キット」と「カナラズ」に推量的機能と習慣的機能のあることを指摘したものがある。これに対し、本研究ではこうした機能は副詞自体に備わったものではなく、推量文、反復的文脈といった文に備わったものであることを指摘する。また、推量文と反復的文脈は相互排他的なものではなく、互いに独立したものであることから、推量的

機能と習慣的機能は互いに独立したものであることを指摘する。

#### 6.1 推量的機能と習慣的機能

はじめに推量的機能と習慣的機能について考察する。森本(1994)は、「キット」と「カナラズ」に推量的機能と習慣的機能のあることを指摘した。森本の記述をまとめると表4-1のようになる。

		キット	カナラズ
過去文	単一の行為を表す文	*	*
	複数の行為を表す文	? 習慣	習慣
現在文	単一の行為を表す文	推量	推量
	複数の行為を表す文	推量、習慣	習慣

表4-1 森本(1994)のキットとカナラズの機能

この表に示されるように、森本は「キット」や「カナラズ」自体に推量的機能や習慣的機能が備わっていると考えている。これに対し、本研究ではこうした意味は副詞自体にあるのではなく、これらの副詞の使われた文に備わったものであると考える。

森本は、「「かならず」が現在平叙文で使われるときには文の意味にあいまいさが生じる」(森本1994:74)として、「カナラズ」には推量的機能と習慣的機能の二つがあるとした。

- (44)a. まりこはかならずここを通る。  
 b. わたしの予想ではまりこはかならずここを通る。  
 c. まりこはかならずここを通る。それで店の人が彼女の顔をおぼえてしまった。

(森本1994:第4章の例文(23))

これについて森本は、「本来「例外的な場合なく起こる」という抽象的な意味をもち、そこからふたつの用法が生じるとも考えられる。このふたつの読みは、文脈によってかなりの程度まで決まるが、習慣的な読みは複数の行為を表す文に、また推量的な読みは単一の行為を表す文に現れる傾向があるようだ」(森本1994:75)と説明している。森本の考えにしたがえば、「カナラズ」は推量を表す文脈では推量的機能を表し、同じ行為を反復的に繰り返す文脈では習慣的機能を表すということになる。森本は、はっきりと明言しているわけではないが、二つの機能を相互排他的なものであると考えている。

しかし、推量文でかつ反復的文脈の場合は、推量的機能と習慣的機能を同時に表すことができる。

(45) 警察は、「まりこはいつもカナラズここを通るにちがいない」と見ている。

例文(45)は、「イツモ」という頻度を表す副詞の存在から反復的文脈であることが分かるし、「ニチガイナイ」という文末形式の存在から推量文であることが分かる。ここで問題となるのは、「カナラズ」自体に推量的機能や習慣的機能があるかどうかということである。推量的機能については、「～ニチガイナイ」という推量文に備わったものであると考えることができる。先の主観性判定テストの結果からも明らかなように「カナラズ」は命題副詞である。したがって、「カナラズ」自体が発話時点における話し手の推量判断を表すわけではない。同様に、習慣的機能は「イツモ～」という反復的文脈に備わったものであると考えられる。仮に「カナラズ」が反復的文脈にしか使われないのであれば、「カナラズ」が習慣的機能を持っていると考えることもできる。しかし、「カナラズ」は一回的文脈にも使うことができる。

(46) 警察の情報では、まりこは今日カナラズここを通るそうだ。

しかも、例文(46)は推量文ではなく伝聞文である。したがって、この文は推量的機能も習慣的機能も表さない。結局、「カナラズ」の意味を推量的機能と習慣的機能で説明するのは無理なのである。

以上のことから、「カナラズ」自体は当該の事態が例外なく成立することを表しているにすぎないと考えられる。それが事態が一回だけ成立する一回的文脈では、その一回の事態が確実に成立することを表し、事態が繰り返し行なわれる反復的文脈では、どの場合にも事態が例外なく成立することを表すのである。一方、推量的機能は推量文という文に帰せられるものである。推量文は、「今日カナラズここを通るニチガイナイ」のように一回的事態にも使われるし、「毎日カナラズここを通るニチガイナイ」のように反復的事態にも使われる。推量的機能と習慣的機能は互いに独立した概念で、推量的機能でなければ習慣的機能、習慣的機能でなければ推量的機能というような相互排除的なものではない。この点で森本の分析には混乱が見られる。

森本の分析でもう一つ混乱の見られる点は、「キット」と「カナラズ」を同じ話し手の主観性を表す副詞として捉えてしまっている点である。森本は「キット」についてはほとんど論証もなく、「「きっと」には「必ず」に似た性質がある」（森本1994：75）と説明し、推量的機能と習慣的機能があるとしている。森本が「キット」にこの二つの用法を

設定した理由は、「まりこは少しお金があるときっとバラを買った」という文が、不自然ながら書き言葉として存在することから、それと推量用法の「キット」を区別するためである。しかし、これは推量的機能と習慣的機能の対立としてではなく、「モダリティ用法」と「命題用法」の対立として捉えるべきものである。また、「キット」が推量文で話し手の心的態度を表すのは確かであるが、これを推量的機能と言うのであれば、意志文に使われた場合は意志的機能、命令文に使われた場合は命令的機能、勧誘文に使われた場合は勧誘的機能といった具合に、使われる文の数だけ機能を設定しなければならなくなる。したがって、推量的機能、意志的機能、命令的機能、勧誘的機能は、それぞれの文に備わったものであると考えた方が説得的である

さらに、森本は例文(47) (= (10)) を根拠にして、「カナラズ」は過去平叙文では習慣の読みにしかならず、推量の読みににはならないとしている。

- (47) P: まりこは少しお金があるとかならずバラを買った。  
 Q: それが彼女の習慣だったの。  
 P: うん。

たしかに、森本の言うとおり過去平叙文では推量の読みにならない。しかし、これは推量文の特性に由来するものであり、「カナラズ」とは独立に考える必要がある。推量文は話し手の「発話時点」における推量判断を表すため、過去文の中に収まらないのである。

以上、推量的機能、習慣的機能というものが、副詞に備わったものではなく、推量文、反復的文脈といった文に備わったものであることを指摘した。

## 6.2 一回的文脈と反復的文脈

次に、一回的文脈および反復的文脈において、「習慣的読み」と「推量的読み」が独立に機能していることを明らかにする。まず、「カナラズ」が現在文に使われる例から見る。

- (48)a. 彼は今日は調子がいいのでカナラズ勝つ。  
 b. 彼は将棋を指せばカナラズ勝つ。

例文(48a)は一回的文脈の例である。これは一回性の事態であるため「習慣的読み」とはなりえず、「推量的読み」となる。一方、例文(48b)は反復的文脈の例である。これは事態が繰り返し行なわれることを表す文であるため「習慣的読み」となる。これが認識文や知識伝達文に使われた場合には、事実をそのまま述べる文となり、推量文に使われた場合には「推量的読み」が加わる。ここで注意したいのは、推量的機能と習慣的機能は相互排除

的なものではなく、互いに独立した機能であるということである。したがって、使われる文によって、二つとも機能することもあるし、いずれか一つしか機能しないこともあるし、いずれも機能しないこともある。

次に「カナラズ」が過去文に使われる例を見る。

- (49)a. <sup>?</sup>彼は昨日は調子よかったのでカナラズ勝った。  
b. 彼は将棋を指せばカナラズ勝った。

例文(49a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならない。「推量的読み」なら不可能ではないが、不自然な感じは残る。一方、例文(49b)は「習慣的読み」となる。文末に推量判断を表す「」が付いていると考えれば「推量的読み」も可能である。

次に「キット」が現在文に使われる例を見る。

- (50)a. 彼は今日は調子がいいのでキット勝つ。  
b. <sup>?</sup>彼は将棋を指せばキット勝つ。

例文(50a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはなりえず、「推量的読み」となる。一方、例文(50b)は反復的文脈の文としては不自然である。<sup>1)</sup> この文に「習慣的読み」を持たせることは一般的な用法ではなく、普通は「カナラズ」や「キマッテ」などを使う。森本(1994:75)は、「キット」が過去平叙文に使われる用法は現在の日本語では書き言葉に限定されると述べているが、現在文でも不自然である。劉(1996:45)が「キット」には習慣的機能はないとしているように、「キット」が「習慣的機能」を表す用法は、過去文でも現在文でも不自然である。

最後に「キット」が過去文に使われる例を見る。

- (51)a. <sup>\*</sup>彼は昨日は調子よかったのでキット勝った。  
b. <sup>?</sup>彼は将棋を指せばキット勝った。

例文(51a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはなりえない。「彼は昨日は調子よかったのでキット勝った( /ダロウ/ニチガイナイ)」の意味で取れば、「推量的読み」も可能であるが、この場合は「キット」が過去文の中に入ったことにはならない。一方、

---

1) 例文(50b)は一回的文脈であると解釈すれば自然な文として成立する。その場合は「推量的読み」となる。



例文(51b)のように反復的文脈の場合は、上の(50b)と同様に不自然な文となる。

以上の考察の結果、「習慣的読み」と「推量的読み」は文に備わったものであり、互いに独立して機能していることが明らかとなった。

## 7. キットとカナラズの意味

### 7.1 意志文、命令文、勧誘文のキット

6節では推量文に現れる「キット」を中心に考察した。しかし、「キット」には意志文、命令文、勧誘文に使われる用法もある。例文(52)～(54)は意志文、例文(55)～(57)は命令文、例文(58)は勧誘文の例である。

- (52) 「ここで待ってて！ ママ千歳をきっと連れて帰るから…」(山岸涼子『パイド・パイパー』)
- (53) 「待っていな きっとすぐエネルギーを補給してやるから」(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (54) 「私は誓いました きっといつかロボットの天国を築いてみせるぞ……と!!」(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (55) お前は大きくなったらきっと安全ですばらしいのりものを発明しておくれ(手塚治虫『魔法屋敷』)
- (56) 「おお元気が出たか よしゆけ アトムをさがしてきっと倒してこい」(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (57) 「あしたもきっときてくれよ」(手塚治虫『ブッダ』)
- (58) 明日もキット一緒に行こうね。

これらの「キット」は話し手の意志の強さ、命令の強さ、勧誘の強さを表す。ここで注意したいのは、こうした意味を表す場合には「キット」よりも「ゼツタイニ」や「カナラズ」を使った方が自然だということである。

ところで、「キット」は推量文に使われる場合、文代名詞の対象に含まれない。

- (59) A：太郎はキット逢いに来ますよ。  
       B：それは本当ですか。  
           (それ＝太郎が逢いに来ること)  
           (それ 太郎がキット逢いに来ること)

しかし、意志文や命令文、勧誘文の場合は「キット」が文代名詞の「それ」に含まれる。

- (60) 「百年、私の墓の傍に坐つて待つてゐて下さい。屹度逢ひに来ますから」(夏目漱石『夢十夜』)

例文(60)に対して「それは本当ですか」と尋ねた場合、この「それ」には「キット」が含まれる。「それは本当ですか」という言葉は、単に「逢いに来る」かどうかを確認するのではなく、「間違いなく」逢いに来るかどうかを確認しているのである。例文(59)と例文(60)の違いは、「逢いに来る」の動作手の人称の違いにある。推量文の場合と違い、意志文では話し手自身がその行為をコントロールする責任者となっている。そのため、「キット」という発言も単なる思い込みではすまされず、話し手の責任に帰せられることになる。その証拠に、推量の「キット」に対しては「キットだな!」と言って責任を追及することはできないが、意志の「キット」に対しては「キットだな!」と言って責任を追及することができる。そのため、意志文の「キット」に対しては、「それは本当ですか」という質問によって、相手の意志の強さを尋ねることができるのである。<sup>1)</sup>

## 7.2 カナラズの二類型

次に問題となるのは、「キット」と「カナラズ」が互いに置き換え可能な場合についてどう説明するかということである。たとえば、例文(61)の「キット」と「カナラズ」は置き換えてもほとんど意味が変わらない。ここではこうした「キット」と「カナラズ」の用法について考えることにする。

- (61) 「わしが、おっかさんを探したる。必ず会わせたる」  
住職は」に約束した。きっと母親に会わせてやるから、しっかり精進しろと肩をたたいた。(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)

1) 「キット」は知識伝達文に使われることもある。次の例では「キット」が反復的文脈に使われており、しかも「の」の連体修飾節に入っている。

(i) <sup>2</sup>近松の心中物は、他の三点とともに、一昨年書いたものである。いつも執筆前には多少とも気込みはしても、脱稿した後では、きっと不満足を感じるのがほとんど定例のようで、今取り纏めたものにしても、例によって例のごとくなのであった。(三田村鳶魚著 朝倉治彦編『近松の心中物・女の流行』)

ただし、これはかなり不自然な用法で、「カナラズ」や「キマッテ」の方が自然である。

まず、森田（1989）の次の記述を見たい。森田は「カナラズ」の意味を次の二種類に分けた。

かならず〔必ず〕副

例外や当たり外れが一切なく、間違いなくその状況が成立すること。

□ ある条件を設定して、その条件が成立するときは例外なく、常にある結果が成立する場合。（中略）「朝になれば必ず日が昇る」「ワクチン注射をすれば必ずなおる」（後略）

□ “まちがいなくきつとそうなるはずだ、”という話し手の強い断定を表すようになる。しかし、これは個別的な出来事に用いるので、結果によっては話し手に責任が帰せられる。「今度の試合は必ず勝ってみせる」とは言っても、負けることもありうる。それは当人のみが信じる必ずで、□のような客観性を持たない。このような「必ず」は「きつと」との置き替えが可能である。（後略）（森田1989：332）

森田は「カナラズ」を自然法則、論理、習慣等と関わる □ と、個別的な出来事を表す □ とに分類した。しかし、すでに考察したように、「常にある結果が成立する」とことと「話し手の強い断定を表す」とことは独立したものであるし、「話し手の強い断定」というのも文に備わった特性である。森田の記述はその点の区別がされていないため、例文(62)のように習慣的かつ話し手の推量と関わる表現や、例文(63)（=(45)）のように習慣的かつ話し手の強い断定と関わる表現のように、□の意味でもあり □の意味でもある表現が出てきてしまう。

(62) 警察は、「まりこはいつもカナラズここを通るにちがいない」と見ている。

(63) 「どんな小さなことでも原因があればかならず結果が生まれる！」（手塚治虫『ブッダ』）

これに対し、本研究では「カナラズ」には事態が例外なく確実に成立することを表すという意味がもとにあり、それが一回的文脈と反復的文脈で異なる様相を見せると考える。すなわち、反復的文脈ではその事態が毎回例外なく確実に成立することを表し、一回的文脈ではその事態の成立を妨げようとするどのような条件があっても例外なく確実に成立することを表すと考え。

[ 反復的文脈 ] 場面1、場面2、場面3、…… あらゆる場面で成立

[ 一回的文脈 ] 条件1、条件2、条件3、…… あらゆる条件の下で成立

たとえば、例文(64a)では「太郎が会社へ行く」という事態が昨日、今日、明日、……、と例外なく成立することを表し、例文(64b)では「太郎が会社へ行く」という事態が雨が降っても、槍が降っても、病気になっても、……、と例外なく成立することを表す。

- (64)a. 太郎は毎日カナラズ会社へ行きます。(反復的文脈)
- b. 太郎は明日はカナラズ会社へ行きます。(一回的文脈)

このように、「カナラズ」は「ある事態が例外なく確実に成立することを表す」という意味を持ち、それが反復的文脈ではその事態が例外なく確実に成立することを表し、一回的文脈ではその一回の事態がいかなる条件の下でも確実に成立することを表すのである。

森田(1989)をはじめ、従来「カナラズ」には「話し手の強い断定」を表す用法のあることが指摘されている。次に挙げるのがその例である。

- (65) コペンハーゲン解釈では、「観測のときに波の収縮ということが起こるので、マクロの世界は必ず一つしかない」と主張する。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)
- (66) いうまでもなく、西鶴の『二人男』は貞享二年版であるから、初発患者は、必ず貞享二年以前でなければならぬ。(三田村鳶魚著 朝倉治彦編『近松の心中物・女の流行』)

しかし、これらの文で「話し手の強い断定」を表しているのは、「カナラズ」ではなく「～しかない」や「～でなければならぬ」の部分である。「カナラズ」はあくまでも事態が例外なく確実に成立することを表しているにすぎない。<sup>1)</sup>

さて、先行研究でも繰り返し指摘されてきたように、「カナラズ」は過去の一回的事態、状態性の事態、否定的事態には使えない。

- (67) \* 太郎は昨日はカナラズ会社へ行きました。(過去の一回的事態)
- (68) \* この店のケーキはいつ食べてもカナラズおいしい。(状態性の事態)
- (69) \* 太郎はいつもカナラズ会社へ行きません。(否定的事態)

---

1) 森山(1989)は、「タブン」、「オソラク」、「十中八九」、「キット」は「命題内容に対する話し手の固有の捉え方を表すものである」(森山1989:81)とし、「ダンジテ」、「ゼツタイ」、「カナラズ」は「命令文にも共起するので、むしろ、確実性の強調の意味と言えるかもしれない」(森山1989:93)としている。

こうした現象は、「ある事態が例外なく確実に成立する」という意味からは説明できない。佐治（1986）は、「カナラズ」が否定的事態に使えない理由を、否定形も状態性であるため「カナラズ」と共起しないのであると説明している。しかし、佐治の説明ではなぜ状態性の述語と共起できないのかが不明のままである。

これに対して、丹保（1984：12）は、「それは、「必ず」が「一定の条件でそうなる」ことを表し、「ない」が「状態性」を表すが故に、「ない」の中に「～なる」を感じ取りにくいからであろう」と説明した。また、坂口（1996：7）は、「否定的働きかけ文が“事態の非実現”を求めるいっぽう、「必ず」は100%の確実さで“実現すること”を表す。この両者の違いによって「必ず」は共起できないものと考えられる。「必ず」は、事態が実現して現実世界に現れることを表している」と説明した。しかし、この説明でも依然なぜ「カナラズ」は「実現しないこと」を表さないのかという疑問が残されたままである。この点については、本研究でもいまだ明確な説明を与えることはできていない。ひとまず、「カナラズ」は「実現すること」を表す文でしか使えないことを支持するにとどめておく。

そう考えると、過去の一回的事態に「カナラズ」が使えない理由も、そうした文に「実現すること」という意味が入らないためであると説明することができる。まずはじめに、反復的文脈の場合は過去の事態であっても「カナラズ」が使えることを確認したい。例文(70)は過去において反復的に行なわれた事態を表している。この場合、話し手の視点は過去の時点に移動し、その移動した時点において繰り返し行なわれる事態を描写している。例文(70a)の構造を示すと例文(70b)のようになる。

- (70)a. 太郎は毎日カナラズ会社へ行きました。（反復的文脈）  
 b. [ 太郎は毎日カナラズ会社へ行き ] ました。

ここで「カナラズ」は、[ ] 内に示された現在文の中で機能している。そのことは「毎日」という副詞が非過去文と共起することから証明される。この[ ] の中で考えると、事態は決して既成のものではなく、「実現すること」という意味を表している。そのため、反復的文脈の場合は過去文でも使えるのである。

一方、過去の一回的文脈の場合はこのような構造とはなっておらず、「カナラズ」はあくまでも過去文の中で機能する。このことは「昨日」という副詞が過去文と共起することから証明される。そのため、「カナラズ」の「実現すること」という意味と衝突してしまうのである。

- (71) \* [ 太郎は昨日はカナラズ会社へ行きました ]。（一回的文脈）

なお、同じ一回的文脈でも、未実現の事態であれば「実現すること」という意味が表せるため「カナラズ」が使える。

(72) 太郎は明日はカナラズ会社へ行きます。(一回的文脈)

以上、「カナラズ」は「事態が例外なく確実に成立することを表す」という意味がもとにあり、反復的文脈ではその事態が毎回例外なく確実に成立することを表し、一回的文脈ではその事態の成立を妨げようとするどのような条件があっても例外なく確実に成立することを表すことを指摘した。また、「カナラズ」には「実現すること」という意味のあることを確認し、過去の一回的事態を表す文には使えない理由を明らかにした。

### 7.3 カナラズとキマッテ

次に「カナラズ」と「キマッテ」の違いについて考察する。いずれも事態が確実に成立することを表すという点で共通している。

- (73)a. 天気予報はカナラズ当たる。
- b. 天気予報はキマッテ当たる。

「カナラズ」と「キマッテ」の違いは、次の例文における許容度の違いに現れている。反復的文脈の場合は「カナラズ」も「キマッテ」も成立するが、一回的文脈の場合は「カナラズ」は成立しても「キマッテ」は成立しない。

- (74)a. 星がたくさんでている日の翌朝は、カナラズいい天気になる。
- b. 星がたくさんでている日の翌朝は、キマッテいい天気になる。
- (75)a. 星がたくさんでているから、明日はカナラズいい天気になる。
- b. \*星がたくさんでているから、明日はキマッテいい天気になる。

これにより、「キマッテ」は反復的事態が確実に成立することを表す表現であることが分かる。

次の例文において「キマッテ」は反復的文脈に使われている。この場合、「キマッテ」は「カナラズ」と置き換えることができる。

- (76)a. それでも夢枕に現れる死刑囚は宙吊りになってきりきり舞いをしている。宙を

泳ぐように足が空をむなしく探っている。こんな夢を見る夜は、決まって狭心症の発作に苦しんだ。（大塚公子『死刑執行人の苦悩』）

b. こんな夢を見る夜は、カナラズ狭心症の発作に苦しんだ。

(77)a. 鉄工所へ勤めるようになった奥野は、働いた金を全部母親に渡した。さらに勤めから帰宅後、漬物の行商に出かける。品物が売れ残ったまま帰宅すると、母親は決まって小言を言った。（大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』）

b. 品物が売れ残ったまま帰宅すると、母親はカナラズ小言を言った。

(78)a. Kさんは寂しい笑いを浮かべた。どの死刑囚も必ず決まってこの瞬間には、顔面の筋肉をひきつらせたという。（大塚公子『死刑執行人の苦悩』）

b. どの死刑囚もカナラズこの瞬間には、顔面の筋肉をひきつらせたという。

ところが、例文(79)の「キマッテ」は「カナラズ」に置き換えることができない。

(79)a. だが、今年五月のIWC総会で、捕鯨再開を求める日本の提案はまたも厚い壁に阻まれた。反対国の主張は決まって「ほ乳類のクジラを殺すな」である。「牛や豚ならいいのか」と言い返すとけんかになる。（『中日新聞』1999.7.25 朝刊）

b. \*反対国の主張はカナラズ「ほ乳類のクジラを殺すな」である。

例文(79)で「キマッテ」を「カナラズ」で置き換えられないのは、この文が状態性の事態を表しているためである。すでに論じたように「カナラズ」は、「実現すること」あるいは「～なる」という意味を持つ事態にしか使えない。しかし、「『ほ乳類のクジラを殺すな』である」は状態性の事態を表すため、「カナラズ」が使えないのである。先の例文(75a)も、状態性の事態を表す文に変えると不自然な文となる。

(80) <sup>?</sup>星がたくさんでているから、明日はカナラズいい天気だ。

例文(80)が不自然ながらも非文とならないのは、「いい天気だ」という表現を「いい天気になる」の意味で解釈するためである。

もう一つ「キマッテ」の特徴として挙げられるのは、「カナラズ」と違い未実現の事態を表す文には使えないという点である。事実、次のように未実現の事態を表す文において、「カナラズ」は使えるが、「キマッテ」は使えない。

(81) 明日からは毎日{カナラズ/\*キマッテ}8時に行くそうだ。（伝聞文）

(82) 明日からは毎日{カナラズ/\*キマッテ}8時に行くにちがいない。（推量文）

- (83) 明日からは毎日 { カナラズ/\*キマッテ } 8時に行く。(意志文)
- (84) 明日からは毎日 { カナラズ/\*キマッテ } 8時に行け。(命令文)
- (85) 明日からは毎日 { カナラズ/\*キマッテ } 8時に行こうよ。(勧誘文)

一方、既成の事態を表す文には、「カナラズ」も「キマッテ」も使える。

- (86) 毎日 { カナラズ/キマッテ } 8時に行くそうだ。(伝聞文)
- (87) 毎日 { カナラズ/キマッテ } 8時に行ったにちがいない。(推量文)

以上の分析から、「キマッテ」は既成の反復的な事態が確実に成立することを表す表現であることが分かる。これに対し、同じ事態成立の確実性を表す副詞でも、「カナラズ」は既成の事態にも未実現の事態にも使え、かつ一回的文脈にも反復的文脈にも使えるという特徴のあることが分かる。

#### 8. 第4章のまとめ

従来、「キット」と「カナラズ」は類義表現として捉えられ、ともに蓋然性の高いことを表す副詞であると説明されてきた。しかし、二語を主観性判定テストによって分析した結果、基本的に「キット」は判断の蓋然性を表し、「カナラズ」は事態の蓋然性を表すことが明らかとなった。(「基本的」というのは、一般的な用法ではないが、「キット」が「例外なく」や「絶対に、間違いなく」という意味で使われる場合もあるからである。) すなわち、「キット」と「カナラズ」は蓋然性の高さという量的な違いによって区別されるのではなく、判断の蓋然性が事態の蓋然性かという質的な違いによって区別されるのである。

一般に「キット」よりも「カナラズ」の方が蓋然性が高いとされている。しかし、これは「カナラズ」が事態そのものの確実さを表すのに対し、「キット」は話し手の確信(言い換えれば「思い込み」)の高さを表すことから生じる違いにすぎない。たとえ話し手の確信の程度が高くても、実際に事態が成立するとは限らないため、客体世界において蓋然性の高いことを表す「カナラズ」の方が蓋然性が高く感じられるのである。

「キット」は推量文に使われることが多い。しかし、意志文、命令文、勧誘文に使われる場合もあり、この点で推量文にしか使われない「タブン」や「オソラク」とは性質を異にする。したがって、「タブン」や「オソラク」は推量の副詞であるといって差し支えないが、「キット」は推量、意志、命令、勧誘を包括した副詞であると考え必要がある。



「キット」はこうした表現に使われて、事態の実現に対する話し手の強い信念を表しているのである。

一方、「カナラズ」は「事態が例外なく確実に成立することを表す」という意味がもとにあり、反復的文脈ではその事態が毎回例外なく確実に成立することを表し、一回的文脈ではその事態の成立を妨げようとするどのような条件があっても例外なく確実に成立することを表すことを分析した。さらに、「カナラズ」には「実現すること」という意味のあることを確認し、過去の一回的事態を表す文には使えない理由を明らかにした。また、同じ事態成立の確実性を表す「キマッテ」と比較し、「キマッテ」が既成の反復的な事態にしか使えないのに対し、「カナラズ」は既成の事態にも未実現の事態にも使え、かつ一回的文脈にも反復的文脈にも使えるという違いのあることを明らかにした。

さらに、森本（1994）などで論じられている推量的機能と習慣的機能についても分析し、これらの機能が文の意味に帰せられることを指摘し、両者は一方でなければもう一方であるというような相互排除的な関係にあるのではなく、互いに独立した機能であることを明らかにした。

以上、「キット」、「カナラズ」、「キマッテ」についてまとめておく。

キット：（モダリティ副詞）

事態の実現に対する話し手の強い信念を表す

（推量文、意志文、命令文、勧誘文で使う）

（一般的な用法ではないが「例外なく」、「絶対に、間違いなく」の意味で使われる場合もある）

カナラズ：（命題副詞）

事態が例外なく確実に成立することを表す

（「実現すること」という意味がある）

・一回的文脈：その事態がいかなる条件の下でも確実に成立することを表す

・反復的文脈：その事態がいつでも確実に成立することを表す

キマッテ：（命題副詞）

既成の反復的な事態が確実に成立することを表す

## 第5章 タブンとタイテイ、オソラク、サゾ

### 1. はじめに

本章では「キット」と同様に話し手の推量判断と関わる副詞「タブン」、「オソラク」、「サゾ」、および「カナラズ」と同じように事態の確実性と関わる「タイテイ」について考察する。まず2節では、「タブン」がモダリティ副詞であるのに対し、「タイテイ」は命題副詞であることについて論じる。「タイテイ」については、「タイガイ」、「オオカタ」との意味の違いも分析する。3節では、「キット」、「タブン」、「オソラク」を対象に分析し、これらの違いが単なる蓋然性の違いにあるのではなく、推量判断との関わり方の違いにあることを明らかにする。4節では、「サゾ」について分析し、これが「共感」に基づく推量判断を表すことを指摘する。

### 2. タブンとタイテイ<sup>1)</sup>

#### 2.1 類似点と相違点

第4章では「キット」と「カナラズ」に判断と事態の違いがあることを見た。ここでは「タブン」と「タイテイ」の間にも判断と事態の違いがあることを見る。まず『日本語大辞典』（講談社）の記述を示しておく。

た-ぶん〔多分〕☐ (名) 多いこと。たくさん。相当。a lot of ☐ の寄付をいた  
 だく。その中の大部分。多くの例。the most part ☐ おそらく。たいてい。おおか  
 た。probably ☐ 駄目でしょう。  
 たい-てい〔大抵〕☐ (名) おおよそ。おおかた。たいがい。mostly ☐ の人々。  
 ((下に打ち消しをともなって))ひととおり。なみなみ。ふつう。ordinary ☐  
 のことでは負けない。☐ (副) たぶん。おそらく。probably ☐ だいじょうぶ  
 だろう。ほどほど。☐ うそも にしろ。

---

1) 本節は杉村(1997)をもとに加筆修正したものである。

このうち、「タブン」の □ と「タイテイ」の □ は、その意味記述に互いの語を使用している。このことは二語が類義語として意識されていることを示す。実際、例文(1) (2)の「タイテイ」は「タブン」と置き換えることができる。

- (1)a. 「試験はたいてい通るだろう」(『現代国語例解辞典』第二版)
- b. 「試験はタブン通るだろう」
- (2)a. 「でも、大てい大丈夫でしょう。明倫なら、大したもんですわ。お父さまもお母さまもさぞかしご安心でしょう」(曾野綾子『太郎物語』)
- b. 「でも、タブン大丈夫でしょう。明倫なら、大したもんですわ。お父さまもお母さまもさぞかしご安心でしょう」

しかし、「タブン」が □ の意味で使われている場合でも、必ずしも「タイテイ」で置き換えられるわけではない。「タイテイ」が □ の意味で使われるのは一般的な用法ではない。

- (3)a. 登場する山本屋旅館の人々は、今はもう別の土地に引っ越ししまい、多分2度と私はあの人たちと共に生活することはないと思う。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- b. \*登場する山本屋旅館の人々は、今はもう別の土地に引っ越ししまい、タイテイ2度と私はあの人たちと共に生活することはないと思う。

一方、「タイテイ」が □ の意味で使われる場合、「タブン」と置き換えると意味が変わってしまう。次の例文において「タイテイ成績は上位だった」、「タイテイいくつかの意味をもっている」と言うと、当該の事態は発話時点において既知のものであることになるが、「タブン成績は上位だった」、「タブンいくつかの意味をもっている」と言うと、当該の事態は発話時点において未知のものであることになる。

- (4)a. 彼女は頭が良く勉強家で、病欠のわりにはたいてい成績は上位だったし、あらゆる分野の本を読みあさっていて知識が深かった。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- b. 彼女は頭が良く勉強家で、病欠のわりにはタブン成績は上位だったし、あらゆる分野の本を読みあさっていて知識が深かった。
- (5)a. ひとつひとつの格助詞はそれぞれ異なる機能を担うが、ひとつの助詞がひとつの関係しか表さないというわけではない。たいていいくつかの意味をもっている。  
(森本順子『日本語の謎を探る 外国人教育の視点から』)
- b. ひとつひとつの格助詞はそれぞれ異なる機能を担うが、ひとつの助詞がひとつの

関係しか表さないというわけではない。タブンいくつかの意味をもっている。

以下、こうした「タブン」と「タイテイ」の違いについて、「キット」と「カナラズ」に平行して分析する。

## 2.2 先行研究

先行研究で「タブン」と「タイテイ」を比較したものは辞書類の記述に見られるくらいである。そのような中で、比較的詳細な記述を行なったものに森田（1989）がある。森田は「キット」の関連語として「オソラク、タブン」、「タイテイ、タイガイ」、「オオカタ」を挙げている。

おそらく たぶん

両語とも「きっと」に比べて弱い推量。「恐らく」は丁寧な文体に用いられる。  
（後略）（森田1989：374）

たいてい たいがい

「大抵」「大概」とも、推量としても用いるが、本来これらの語は“大部分”、“おおかた”、“あらまし”の意味で用いられる。したがって「たいてい大丈夫だ」「たいがい大丈夫だ」は“十中八、九という高い確率で大丈夫であろう”という確率の高さを表す。

「彼はたいてい欠席だ」は、出席ではなく欠席であることを、「梅雨時だから、たいがい雨だ」は、晴天ではなく雨天であることを、単なる推量からではなく、“十日のうち八、九日は欠席だ/雨だ”と比率意識から述べているのである。（森田1989：374-375）

おおかた

「大方」は「大方の予想を裏切って……」「おおかた（の）見当はつく」のように「ほとんど」の意味である。推量として用いるときも、「あらかた」「ほとんど」の意味として、その事柄の比率の高さを述べる。

「おおかたそんなことだろうと思った」「今度の連休はおおかた雨だ」など。（森田1989：375）

まず、「タブン」については、他の先行研究と同じように「キット」より弱い推量を表すと説明している。しかし、「キット」が推量文だけでなく意志文、命令文、勧誘文にも

使われるのに対し、「タブン」は推量文にしか使われないため、本研究では単に推量判断の強弱では説明できないと考える。(この点については本章3節で考察する。)

また、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」について森田は、これらの副詞は本来確率、比率の高さを表す副詞で、推量に使われる場合も確率、比率意識で使われることを指摘している。本研究でもこの指摘に従い、この点で「例外なく」という意味を表す「カナラズ」と性質を異にすると考える。(「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」の違いについては本章2.6.4節で考察する。)

### 2.3 命題とモダリティ

次に主観性判定テストによって、「タブン」と「タイテイ」が命題副詞なのかモダリティ副詞なのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。

#### 〔1〕否定の焦点テスト

次に示されるように「タブン」は否定の焦点とならないが、「タイテイ」は否定の焦点となる。

- (6)a. \* 太郎は [ タブン10時に寝る ] のではなく、[ カナラズ10時に寝る ] のである。
- b. 太郎は [ タイテイ10時に寝る ] のではなく、[ カナラズ10時に寝る ] のである。

#### 〔2〕疑問の焦点テスト

このテストでも、「タブン」は疑問の焦点とならないが、「タイテイ」は疑問の焦点となる。

- (7)a. \* 太郎は [ タブン10時に寝る ] のですか、[ カナラズ10時に寝る ] のですか。
- b. 太郎は [ タイテイ10時に寝る ] のですか、[ カナラズ10時に寝る ] のですか。

#### 〔3〕文代名詞化テスト

このテストにおいて、「タブン」は文代名詞の対象とならないが、「タイテイ」は文代名詞の対象となる。

- (8)a. A: 太郎はタブン10時に寝ますよ。  
B: それは本当ですか。  
(それ = 10時に寝ること)

(それ タブン10時に寝ること)

b. A: 太郎はタイテイ10時に寝ますよ。

B: それは本当ですか。

(それ = タイテイ10時に寝ること)

(それ 10時に寝ること)

ところで、ここまでのテストでは「タブン」は「キット」と同じ性質を示してきた。しかし、次の場合に「キット」は「それ」に含まれるが、「タブン」は「それ」に含まれないという違いがある。

(9)a. A: 私はキット10時に寝ます。

B: キットですね、それは間違いありませんね。

b. A: 私はタブン10時に寝ます。

\*B: タブンですね、それは間違いありませんね。

この場合の「キット」は「絶対に、間違いなく」の意味で使われたもので、話し手の意志を表している。こうした用法は一般的なものではなく、「カナラズ」や「ゼットイニ」を使った方が自然であるが、「キット」を使って表すことも可能である。一方、「タブン」にはこうした用法はない。

#### 〔4〕連体修飾テスト

一回的文脈の場合、「タブン」と「タイテイ」はともに連体修飾成分とはならない。<sup>1)</sup>

(10)a. \*花子は [ 太郎が明日タブン10時に寝る ] 予定であることを知った。

b. \*花子は [ 太郎が明日タイテイ10時に寝る ] 予定であることを知った。

一方、反復的文脈の場合は、「タブン」は連体修飾成分とならないが、「タイテイ」は連体修飾成分となる。

(11)a. \*花子は [ 太郎がタブン10時に寝る ] 習慣であることを知った。

---

1) 三原(1995: 296)は「多分、秋頃には出版される本」を可としている。たしかに、こうした表現自体は自然に使うことができる。しかし、これは「多分、秋頃には出版される(と思われる)本」の「と思われる」の省略された形である。もともと「と思われる」のついていない形として連体修飾を考えると不自然な文となる。

- b. 花子は [ 太郎がタイテイ10時に寝る ] 習慣であることを知った。

この結果、「タブン」は常に連体修飾成分とならず、「タイテイ」は反復的文脈の場合に連体修飾成分となることが分かる。

#### 〔5〕過去テスト

この場合も、一回的文脈と反復的文脈では許容度に違いが出る。過去の一回的事態を表す場合には、「タブン」も「タイテイ」も使えない。一方、過去において繰り返し行なわれた事態を表す場合には、「タブン」は使えないが、「タイテイ」は過去文の中に収まる。

- (12)a. \* 太郎は昨日はタブン10時に寝た。  
 b. \* 太郎は昨日はタイテイ10時に寝た。  
 (13)a. \* 太郎は先週は毎日タブン10時に寝た。  
 b. 太郎は先週は毎日タイテイ10時に寝た。

例文(12a) (13a)が言えると判断したとすれば、それは「タブン」が「10時に寝た」の「」に係っていくと読んだ場合である。しかし、その場合は「タブン」が過去文の中に収まったことにはならない。

#### 〔6〕まとめ

以上のテストの結果、基本的に「タブン」はモダリティ副詞に属し、「タイテイ」は命題副詞に属すと判定される。（「基本的」というのは、一般的な用法ではないが「タイテイ」が推量判断を表す場合もあるからである。ただし、こうした意味を表す場合には「タブン」を使った方が自然ではある。）これにより、次に示すように「タブン」は文末のモダリティ部分と関係し、「タイテイ」は命題部分と関係することが明らかとなる。

- (14)a. 太郎はタブン来るだろう。  
 b. 太郎はタイテイ来るだろう。

以上、「タブン」と「タイテイ」には主観性の点で違いのあることを証明した。

### 2.4 共起制限

次に「タブン」がどのような文末形式と共起するのを見る。これにより「タブン」がどのような表現に使われ、どのような表現と衝突するのかが分かる。

- (15)a. 明日はタブン雨が降る { /ニチガイナイ/ダロウ }。  
 b. <sup>?</sup>明日はタブン雨が降る { カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ }。

例文(15)に示されるように、「タブン」は「カモシレナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」と意味的に衝突を起こす。「タブン」とこれらの文末形式との共起は、実例としては存在するものの不自然な表現ではある。<sup>1)</sup>

- (16) <sup>?</sup>内容はもうすっかり忘れてしまったのですが、たぶん人の生死か恋愛のことだったたかもしれません。(劉1996：第3章6節の例文(12)：渡辺淳一『阿寒に果つ』)  
 (17) <sup>?</sup>「先輩から、こうだあだっていわれても、たぶん耳にはいってないみたい、もう手は痛いわ、で。ナイフ研げるまで三年はかかるから、きれいに切れるまで、最初のうちは、毎日研ぐ練習するんですよ」(鎌田慧『ドキュメント屠場』)

一般に「タブン～カモシレナイ」が使いにくい理由は、「タブン」が蓋然性の高いことを表すのに対し、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表すためであると説明されている。しかし、第3章で考察したように、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表す表現ではなく、複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す表現である。「タブン～カモシレナイ」が使えないのは、「タブン」にはそのような意味がないためであると考えられる。「タブン」は推量文においてある一つの帰結を導くために「カモシレナイ」と共起しないと考えた方が適切である。また、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量判断を表す。「タブン～ヨウダ/ラシイ」が使えないのは、「タブン」が根拠に基づく推量判断を表さないためであると考えられる。

一方、「タブン」は「ダ/」、「ニチガイナイ」、「ダロウ」と共起する。

- (18) 一体何が原因だったのか、たぶん熱と頭痛に冒されて、正常な判断力を失ってしまったのだ。(鈴木光司『リング』)  
 (19) 「あなたのすぐそばに人影が見えます それは生身の人間ではなさそうだ たぶん 霊にちがいない」(手塚治虫『ブッダ』)  
 (20) 「まあ別に、毒でも劇薬でもないし。それで、たぶん地震の時に、研究室でピン

1) 例文(17)の「ミタイダ」は、文体差を除いて「ヨウダ」と同じ性質を持つ表現である。



が割れたんやろうってことになって」(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

これらの文末形式はある一つの帰結を導き出す表現であるという点で、「カモシレナイ」とは異なっている。また、話し手の思い込みによる推論にも使えるという点で、「ヨウダ」、「ラシイ」とも異なる。

- (21) 「たぶんね……、私、よくはわからないけれど、あのロケットの中には、時空間をこえてものを運ぶ装置がついていたのよ。(後略)」(手塚治虫『鉄腕アトム 』)

以上の結果、「タブン」は話し手の確信(思い込みでもよい)によりある一つの帰結を導き出したことを表す表現であると考えられる。こうした特徴は「キット」の特徴とも共通している。事実、例文(22)において、「キット」と「タブン」はともに推量判断を表している。

- (22) 「あのハチは私が実験用につかまえたハチだったのです きっと一種の怪物だったのでしょう そしてたぶん人間を滅ぼそうとしてあの毒バリで私たちをさし奴隷にして地下帝国や人造バチをつくらせていたんでしょう」(手塚治虫『鉄腕アトム 』)

ところで、「タブン」が「ダ/ 」と共起する用法を不自然な表現であるとする研究もある。この点に関して工藤(1982)は次のように論じている。

たとえば「たぶんあしたは晴れる。」や「たぶん晴れそうだ」などをくたぶん…だろう>の呼応の乱れとするような、あまりにも形式主義的(かつ規範主義的)な傾向と、その裏返しとしての、「本来陳述副詞はどんな述語と呼応するのが標準的な用法か、ということについて、あまり厳格なことは言えないような感じもする」というような、良心的ではあるが、懐疑的・消極的な傾向とを、同時に克服したいためでもある。(工藤1982:1982)

本研究は工藤の考えに従い、「タブン～ダ/ 」は「タブン～ダロウ」の乱れなどではなく、あくまでも「タブン～ダ/ 」として考える。その理由は、すでに第3章で論及したように、「ダ/ 」と「ダロウ」では意味が異なるためである。

最後に「タイテイ」について考える。「タイテイ」には推量の用法もあるが、次の文のように「おおよそ」の意味で解釈されるのが普通である。次の文において、「タイテイ」

はモダリティ部分の「と思われる」ではなく、命題部分の「大久保が起草し久光が筆を入れてできあがった」を修飾していると解釈される。

- (23) 現存する大久保の文書や日記から推定すれば、薩藩あるいは久光の名で公にされた建言書、意見書類は、たいてい大久保が起草し久光が筆を入れてできあがったと思われる。(毛利敏彦『大久保利通』)

この文は「タイテイ」がなければ一回的文脈とも反復的文脈とも解釈できるが、「タイテイ」があると反復的文脈としてしか解釈されない。この文は、薩藩あるいは久光の名で公にされた建言書、意見書類が、大部分の場合に大久保が起草し久光が筆を入れてできあがったということを表している。

## 2.5 文の意味と副詞の意味

次に、「タブン」と「タイテイ」が推量的機能、習慣的機能とどう関わっているのかを、一回的文脈と反復的文脈とに区別して考察する。まず、「タイテイ」が現在文に使われる例から見る。

- (24)a. 彼は今日は調子がいいのでタイテイ勝つ。  
b. 彼は将棋を指せばタイテイ勝つ。

例文(24a)は一回的文脈の例である。これは一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならず「推量的読み」となる。ただし、こうした用法は会話などでまれに使われるものの多少不自然さは残る。こうした場合には「タブン」を使うのが自然である。一方、例文(24b)は反復的文脈の例である。これは事態が繰り返し行なわれることを表す文であるため「習慣的読み」となる。これが認識文や知識伝達文に使われた場合には、事実をそのまま述べる文となり、推量文に使われた場合には「推量的読み」が加わる。ここで注意したいのは、推量的機能と習慣的機能は相互排他的なものではなく、互いに独立した機能であるということである。したがって、使われる文によって、二つとも機能することもある、いずれか一つしか機能しないこともあるし、いずれも機能しないこともある。

次に「タイテイ」が過去文に使われる例を見る。

- (25)a. <sup>?</sup>彼は昨日は調子よかったのでタイテイ勝った。  
b. 彼は将棋を指せばタイテイ勝った。

例文(25a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならない。「推量的読み」なら不可能ではないが、不自然な感じは残る。一方、例文(25b)は「習慣的読み」となる。文末に推量を表す「」が付いていると考えれば「推量的読み」も可能である。

次に「タブン」が現在文に使われる例を見る。

- (26)a. 彼は今日は調子がいいのでタブン勝つ。  
b. \*彼は将棋を指せばタブン勝つ。

例文(26a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはなりえず「推量的読み」となる。一方、例文(26b)は反復的文脈の文としては非文となる。「キット」なら不自然ながらも使えるが、「タブン」は完全に不可である。<sup>1)</sup>

最後に「タブン」が過去文に使われる例を見る。

- (27)a. \*彼は昨日は調子よかったのでタブン勝った。  
b. \*彼は将棋を指せばタブン勝った。

例文(27a)は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはなりえない。「彼は昨日は調子よかったのでタブン勝った( /ダロウ/ニチガイナイ)」の意味で取れば、「推量的読み」も可能であるが、その場合は「タブン」が過去文の中に入ったことにはならない。一方、例文(27b)のように反復的文脈の場合は、上の(26b)と同様に非文となる。

以上の考察から分かるように、「キット」と「カナラズ」に見られる現象は、「タブン」と「タイテイ」にもほぼ平行して見られる。ただし、「キット」と「カナラズ」に比べて「タブン」と「タイテイ」の方が、お互いの用法の重なりが小さいと言える。

## 2.6 タブンとタイテイの意味

### 2.6.1 意志文、命令文、勧誘文のタブン

「キット」は推量文に使われる以外に、意志文、命令文、勧誘文にも使われる。これに対し、「タブン」は推量文には使われるが、意志文、命令文、勧誘文には使われない。

- (28)a. 花子はキット話すだろう。(推量文)

---

1) なお、例文(26b)は一回的文脈であると解釈すれば自然な文として成立する。その場合「推量的読み」となる。

- b. 花子はタブン話すだろう。(推量文)
- (29)a. 金をひとりじめにするなよ キット山分けだぞ。(意志文)
- b. \*金をひとりじめにするなよ タブン山分けだぞ。(意志文)
- (30)a. レンジで温める際はキットはずしてください。(命令文)
- b. \*レンジで温める際はタブンはずしてください。(命令文)
- (31)a. 今度生まれ変わったらキット結婚しよう。(勧誘文)
- b. \*今度生まれ変わったらタブン結婚しよう。(勧誘文)

こうした事実から、「タブン」は「キット」と違って推量判断専用の副詞であると考えられる。(「キット」と「タブン」の違いについては3節で考察する。)

#### 2.6.2 タイテイの二類型

「タイテイ」は反復的文脈ではその事態が大部分の場合に成立することを表し、一回的文脈ではその事態が大部分の条件の下で成立することを表す。

[反復的文脈] 場面1、場面2、場面3、…… 大部分の場面で成立

[一回的文脈] 条件1、条件2、条件3、…… 大部分の条件の下で成立

たとえば、例文(32a)は「太郎が会社へ9時に行く」という事態が、昨日、今日、明日、…、という時間の流れの中で、ほとんどの場合に成立することを表し、例文(32b)は「太郎が9時に会社へ行く」という事態が、雨が降っても、槍が降っても、病気になっても、…、という条件の下で、ほとんどの場合に成立することを表す。

- (32)a. 太郎は毎日タイテイ9時に会社へ行きます。(反復的文脈)
- b. 太郎は明日はタイテイ9時に会社へ行きます。(一回的文脈)

このように、「タイテイ」は「ある事態が例外はあるものの大部分の場合に成立することを表す」という意味を持ち、それが反復的文脈ではその事態が大部分の場合に成立することを表し、一回的文脈ではその事態が大部分の条件の下で成立することを表すのである。ただし、「タイテイ」を一回的文脈で使うのはあまり一般的な用法ではない。

一回的文脈において「タイテイ」は推量文にしか使われない。

- (33)a. 今日の試合はタイテイ勝つだろう。(推量文)
- b. \*昨日の試合はタイテイ勝った。(認識文)

- c. \*今日の試合はタイテイ勝つそうだ。(伝聞文)
- d. \*今日の試合はタイテイ勝つぞ。(意志文)
- e. \*今日の試合はタイテイ勝て。(命令文)
- f. \*今日の試合はタイテイ勝とう。(勧誘文)

(いずれも一回の試合についての発話)

推量文において「タイテイ」は、十中八九の確率で事態の成立することを表す。

### 2.6.3 カナラズとタイテイ

次に「カナラズ」と「タイテイ」の違いについて見る。二語の違いでまず気付くのは蓋然性の高さの違いである。「カナラズ」が事態の成立を100パーセント確実なものと捉えているのに対し、「タイテイ」は事態の成立を大部分認めているものの成立しない可能性も残している。しかし、「カナラズ」と「タイテイ」は、蓋然性の違いという量的な違い以前に、次の二点で質的な違いを示している。第1点は、「カナラズ」が一回的文脈にも反復的文脈にも広く使えるのに対し、「タイテイ」は反復的文脈に使うのが基本であり、一回的文脈の場合は推量文にしか使われず、しかも、一般的な用法ではないという点である。第2点は、「タイテイの〔名詞〕」が可能であるのに対し、「\*カナラズの〔名詞〕」という形は存在しないという点である。以下、「タイテイの〔名詞〕」の意味を「タイテイ」一語で表したものが、副詞用法としての「タイテイ」であることを明らかにする。

まず、一回的文脈において「カナラズ」が広く使えるのに対し、「タイテイ」は推量文にしか使えないことを確認する。

- (34)a. 花子はカナラズ話すだろう。
- b. 花子はタイテイ話すだろう。
- (35)a. 「金をひとりじめにするなよ かならず山分けだぞ」(手塚治虫『ブッダ』)
- b. \*「金をひとりじめにするなよ タイテイ山分けだぞ」
- (36)a. レンジで温める際は必ずはずしてください(ローソンの弁当の注意書き)
- b. \*レンジで温める際はタイテイはずしてください。
- (37)a. 今度生まれ変わったらカナラズ結婚しよう。
- b. \*今度生まれ変わったらタイテイ結婚しよう。

次の例文(38a)は、一回的文脈に「カナラズ」が使われた例である。この文は「あとの細胞はいずれ寿命が来て死ぬ」という事態が確実に成立するということを述べたものである。ところが、「カナラズ」を「タイテイ」に置き換えると、「タイテイの場合は死んでしま

う」あるいは「タイテイの細胞は死んでしまう」という意味となり、反復的文脈となる。

- (38)a. 生き永らえるのは受精した生殖細胞だけで、あとの細胞はいずれ寿命が来てか  
ならず死んでしまう。(養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』)
- b. 生き永らえるのは受精した生殖細胞だけで、あとの細胞はいずれ寿命が来てタ  
イテイ死んでしまう。

これに関しては「タイテイ」の名詞用法を考える必要がある。「タイテイ」には「タイ  
テイの」、「タイテイは」といった名詞用法があり、「大部分の」、「大部分は」という  
意味を表す。一方、「カナラズ」にはこうした名詞用法がない。

- (39)a. たいていの初級教科書ではバ形をまず最初に教えるようだ。(森本順子『日本  
語の謎を探る 外国人教育の視点から』)
- b. \*カナラズの初級教科書ではバ形をまず最初に教えるようだ。
- (40)a. 「きみせっかくだがこの子の前ではたいていのおどしは役に立たないからね」  
(手塚治虫『鉄腕アトム 』)
- b. \*「きみせっかくだがこの子の前ではカナラズのおどしは役に立たないからね」
- (41)a. 子どもは、自然性が高い。早い話が、思うようにならないのである。子どもを  
持ったことのある人なら、たいていはそれを知っている。(養老孟司・長谷川真  
理子『男の見方 女の見方』)
- b. \*子どもを持ったことのある人なら、カナラズはそれを知っている。
- (42)a. 解放山ホテルの広い食堂に行くと、黒人留学生が静かに食事をする姿を見るこ  
とができる。「第三世界の盟主」を任ずる北朝鮮ならではの光景である。朝鮮語  
を学ぶ外交官の卵、「先進的」な農業技術や工業技術を習得する者、それに芸術  
を志す者もいる。たいていは有力者の子弟で、自国ではエリートである。(李英  
和『北朝鮮秘密集会の夜』)
- b. \*カナラズは有力者の子弟で、自国ではエリートである。

このことから、「タイテイ」が副詞として使われる場合も、名詞用法の延長として考え  
ることができる。つまり、「タイテイの〔名詞〕」という意味を「タイテイ」一語で表し  
たものが、副詞用法の「タイテイ」であると考えられるのである。その証拠に、例文(43)  
~(45)の「タイテイ」は「タイテイの場合」で置き換えることができる。

- (43) 最近は少なくなったようだが、昔はたいてい町内に一人や二人は“偏屈おやじ”

がいたものだ。（相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる！』）

- (44) 寝つかれないとき、わたしは、「羊が一匹、羊が二匹……」と数えると、たいてい、百ぐらいまで数えるうちに、寝てしまうんですが、昨晚は千、二千と数えても、寝つかれませんでした。（福田健『ユーモア話術の本』）
- (45) 捜査二課による逮捕 - 送検（検察庁に身柄を送ること） - 拘留（最長で二日間） - 起訴の手順で処理され、検事が直接調べに乗り出すのはたいてい最終的な証拠固めの段階だ。（魚住昭『特捜検察』）

同様に、「タイテイは」という表現も「タイテイの〔名詞〕は」で置き換えられる。例文(46)の「タイテイは」は、「タイテイの人は」あるいは「タイテイの場合は」で置き換えることができる。

- (46) 時には、対立候補者の熱心な支持者に出くわして険悪な雰囲気になったりもするが、大抵は有権者たちは候補者に心を開き、しばし政治談義に花を咲かせる。（『中日新聞』1999.11.13 朝刊）

こうした例を見ると、「タイテイ」と「カナラズ」では修飾の仕方が異なっていることが分かる。すなわち、「カナラズ」が命題全体を修飾し、その事態実現の確実さの程度を表すのに対し、「タイテイ」はある一つの名詞を修飾し、その名詞の集合のうち「大部分」がそれに該当することを表すのである。それが一語化して副詞用法となった場合に、事態実現の確実性を表すようになるのである。

「タイテイ」が「タイテイの〔名詞〕」から一語化されてできたものであることは、「タイテイ」が状態性の事態、否定的事態に使えることから証明される。第4章7.2節で論じたように「カナラズ」は過去の一時的事態、状態性の事態、否定的事態には使えない。ところが、「タイテイ」は過去の一時的事態には使えないが、状態性の事態、否定的事態には使うことができる。

- (47) \* 太郎は昨日はタイテイ会社へ行きました。（過去の一時的事態）
- (48) この店のケーキはタイテイおいしいのに、今日はまずい。（状態性の事態）
- (49) 太郎はタイテイ会社へ行きません。（否定的事態）

「タイテイ」は名詞修飾が基本である。そのため、例文(48) (49)において直接「おいしい」や「行きません」を修飾するのではなく、「タイテイの場合おいしい」「タイテイの場合行きません」のように、名詞の「場合」を修飾していると考えられる。「タイテイ」は

「カナラズ」と違い直接述語を修飾しないため、「実現すること」という意味が含まれない。したがって、状態性の事態や否定的事態にも使えるのである。「タイテイ」が過去の一回的事態に出来ないのは、「タイテイの場合」に込められた反復の意味と衝突するためである。

#### 2.6.4 タイテイ、タイガイ、オオカタ

次に「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」の違いについて考察する。まず、「タイテイ」と「タイガイ」の違いから分析する。森田(1989)が二語を同じものとして扱っているのに対し、飛田・浅田(1994:253)は例文(50)を挙げて、「「たいてい」は一般的な傾向を述べる暗示がある」と説明している。

- (50)a. ここまで言えたいがいわかるだろう。(大部分の人がわかるはずだ)  
 b. ここまで言えたいていわかるだろう。(普通の人ならわかるはずだ)

しかし、「大部分の人」か「普通の人」かは、文脈によってどちらとも解釈しうるものである。単に人数の多さを述べる場合には「大部分の人」という意味になるし、そこから一般的傾向を引き出す場合には「普通の人」という意味になる。結局、飛田・浅田の説明では例文(50)の二つの文の違いを区別しきれないのである。

むしろ、二語の違いは、「タイガイ」を使うと「大部分の人」という意味にも「大部分の話の内容」という意味にも取れるのに対し、「タイテイ」を使うと「大部分の人」という意味にしかならず、「大部分の話の内容」という意味には取りにくいという点にある。すなわち、ある一回の話について「タイガイの話はわかる」と言えば、「大部分の内容はわかる」の意味で解釈できるが、「タイテイの話はわかる」と言うのは不自然である。「タイテイの話はわかる」という表現が自然に使えるのは、複数の話のうち大部分の話が理解できるという意味の場合である。例文(50b)が「タイテイの話」の意味で使えると解釈した場合でも、一回の話の中にいくつかの話題があり、そのうちの大部分の話題が分かるという意味で解釈される。

このことから、「タイテイ」と「タイガイ」では事態の切り取り方に違いのあることが分かる。つまり、「タイテイ」を使った場合には、集合の一つ一つを区別して数的に見ているのに対し、「タイガイ」を使った場合には、集合を全体として量的に見ているのである。同じ「大部分の人」という意味でも、「タイテイの人」という場合には数的意識で述べられており、「タイガイの人」と言う場合には量的意識で述べられている。「タイテイ」と「タイガイ」の違いは、図4-1のように図式化される。





図4-1 「タイテイ」と「タイガイ」の意味

続いて「オオカタ」との違いについて分析する。小林（1980：21）は、「オオカタ」について「ある事柄の蓋然性の高さについての単なる判断」と説明している。しかし、「単なる判断」というのは不明瞭な説明である。そこで次の例文で考えることにする。

(51) 太郎の話は{タイテイ/タイガイ/オオカタ}わかる。

例文(51)は、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」のいずれも使われているが、次のような意味の違いがある。この文を自然に読むと、「タイテイわかる」は「大部分の場合に分かる」という反復的な読みとなるのに対し、「オオカタわかる」は「大部分の内容が分かる」という一回的な読みとなる。一方、「タイガイわかる」は「大部分の場合に分かる」という意味にも「大部分の内容が分かる」という意味にも解釈できる。しかし、いずれの場合にも量的意識で述べられているため一回的な読みとなる。

「タイガイ」と「オオカタ」はともに一回的な読みとなるが、両者の違いは次の場合に明らかとなる。

(52) わが家の改修作業も{\*タイテイ/\*タイガイ/オオカタ}完成に近付いた。

(53) わが家の改修作業も{\*タイテイ/?タイガイ/オオカタ}完成した。

(54) A：今飛行機はどの辺りを飛んでいるんだろう。

B：{\*タイテイ/\*タイガイ/オオカタ}岐阜辺りだろう。

(55) {\*タイテイ/\*タイガイ/オオカタ}の見通しをつける。

これらの文は、「改修作業が完成する」、「飛行位置を岐阜と確信する」、「完全に見通しをつける」といった基準点にほぼ到達したことを表す表現である。こうした場合に「タイテイ」や「タイガイ」が使えないことから、これらの副詞には到達度を表す用法はないことが分かる。例文(53)で「タイガイ」が多少使いやすくなるのは、到達度ではなく、どれくらい完成したのかその量を表すという解釈が可能なためである。一方、「タイガイ」は割合意識で述べられ、ある基準点を「100%」としてその基準点にほぼ到達したことを表す。先の例文(51)において、「太郎の話はタイガイわかる」という表現は、量的に太郎の話が「大部分」わかることを表し、「太郎の話はオオカタわかる」という表現は、「太

郎の話が全てわかるコト」を「100%」として、割合の面から「大部分」わかることを表している。

オオカタ

 基準点 (100%)

図4-2 「オオカタ」の意味

以上のように、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」は、同じ「大部分」という意味を持ちながらも、「数的」、「量的」、「割合」という異なる側面から世界を切り取っているのである。

## 2.7 2節のまとめ

本節では、「キット」、「カナラズ」より蓋然性の低いことを表すとされる「タブン」、「タイテイ」について考察した。その結果、基本的に「タブン」は判断の蓋然性を表し、「タイテイ」は事態の蓋然性を表すことを明らかにした。（「基本的」というのは、一般的な用法ではないが「タイテイ」が推量判断を表す場合もあるからである。）「タブン」と「タイテイ」は蓋然性の高さという量的な違いによって区別されるのではなく、判断の蓋然性が事態の蓋然性かという質的な違いによって区別されるのである。

このように、「タブン」と「タイテイ」は「キット」と「カナラズ」に平行した性質を見せながらも、次の点で異なる様相を見せている。第1は、「タブン」と「タイテイ」は「キット」と「カナラズ」に比べて意味の重なりが小さい点である。「キット」と「カナラズ」が多くの場合に置き換え可能であったのに対し、「タブン」と「タイテイ」はまれに「タイテイ」が推量判断を表す場合に「タブン」と置き換えが可能となるにすぎない。

第2は、「キット」が推量文、意志文、命令文、勧誘文に使われるのに対し、「タブン」は推量文にしか使われない点である。「キット」が推量、意志、命令、勧誘を包括し、事態の実現に対する話し手の強い信念を表すのに対し、「タブン」は推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す。（この点については、「オソラク」を含め本章3節で論じる。）

第3は、「タイテイ」が「タイテイの〔名詞〕」が一語化されたものであるという点である。「カナラズ」が命題全体を修飾し、その事態実現の确实さの程度を表すのに対し、「タイテイ」はある一つの名詞を修飾し、その名詞の集合のうち「大部分」がそれに該当することを表す。「タイテイ」が「タイテイの〔名詞〕」を基にしていることは、「タイテイ」が状態性の事態、否定的事態に使えることから証明される。「タイテイ」は「カナ

ラズ」と違い直接述語を修飾しないため、「実現すること」という意味が含まれない。したがって、状態性の事態や否定的事態にも使えるのである。

さらに、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」の違いについて考察し、いずれも事態が大部分の場合に成立することを表すという点で共通しながらも、「大部分」ということに対して、それぞれ「数的」、「量的」、「割合」という異なる側面から捉えていることを明らかにした。

以上、「タブン」、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」についてまとめておく。

タブン：（モダリティ副詞）

推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す

（「キット」と違い、意志文、命令文、勧誘文では使えない）

タイテイ：（命題副詞）

数的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

・一回的文脈：その事態が絶対ではないがほとんど確実に成立することを表す

（推量文の場合に限られ、しかもあまり使わない用法である）

・反復的文脈：その事態が例外はあるもののほとんどの場合に成立することを表す

タイガイ：（命題副詞）

量的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

オオカタ：（命題副詞）

割合の面から、事態が基準点に大部分到達したことを表す

### 3．キット、タブン、オソラク

#### 3.1 蓋然性の高さ

本節では「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いについて分析する。一般に「タブン」と「オソラク」は「キット」よりも蓋然性が低いとされ、「オソラク」と「タブン」では「タブン」の方が蓋然性が低いとされてきた。

二語（引用者注：「タブン」と「オソラク」）の表わす可能性は、「きっと」や「絶対」ほど高くなく、「もしかしたら」「ひょっとしたら」よりは高い。（小学館辞典編集部1994：868）

「たぶん」は「おそらく」より実現の可能性が低く、「きっと」は実現の可能性について確信をもっている様子が暗示される。(飛田・浅田1994:101)

また、劉(1996)も、例文(56)を根拠にして以下のように説明している。

- (56)a. 不測の事態が起きない限り、まず、これで大丈夫だ。  
b. <sup>?</sup> 不測の事態が起きない限り、おそらく、これで大丈夫だ。  
c. <sup>??</sup> 不測の事態が起きない限り、たぶん、これで大丈夫だ。

(劉1996:第3章6節の例文(21))

「不測の事態が起きない限り」という表現がある場合、「まず」は問題なく使えるが、「おそらく」は不自然であり、「たぶん」はさらに不自然である。「不測の事態が起きない限り」という表現は、普通の状況における事柄の実現に対して、話し手の強い確信度を表すものであるから、「まず」、「おそらく」、「たぶん」はこの順で、より強い確信度を表すと考えられる。(劉1996:56-57)

このように、従来「キット」、「タブン」、「オソラク」の三語は、蓋然性の高さの違いによって区別されてきた。

たしかに、次の表現を比べると「キット」、「オソラク」、「タブン」の順に確信度が低くなるように感じられる。

- (57)a. 由香里は、磯良の記憶の中で、太陽光線が致命的だったことを思い出した。おそらく、磯良は、夜にしかやって来ないだろう。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)  
b. キット、磯良は、夜にしかやって来ないだろう。  
c. タブン、磯良は、夜にしかやって来ないだろう。

しかし、次の場合には「オソラク」以外は使いにくい。例文(58)は、多重人格の森谷千尋について専門家が見解を述べている場面である。森谷千尋には十三の人格が宿っているが、そのうち磯良という人格がどのようにして生まれたのかを分析して述べた発言である。

- (58)a. 「あなたが、いいかげんなことを言っているんじゃないことは、よくわかったわ。森谷千尋さんについては、危険な人格という一点を除いては、私も、ほぼ同じ認識を持っています。その、磯良という人格については、おそらく入院後に生

まれたと考えられるわね。大震災が引き金になったという可能性だって、十分考えられるし」（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

- b. \*キット、入院後に生まれたと考えられるわね。
- c. ?タブン、入院後に生まれたと考えられるわね。

「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いが単に蓋然性の高さの違いにあるとしたら、「入院後に生まれた」という推量判断が、「オソラク」より相対的に高いことを「キット」、「オソラク」より相対的に低いことを「タブン」で表すことができるはずである。実際、「入院後に生まれた」という推量判断を、「{キット/オソラク/タブン}入院後に生まれたんでしょね」のように言うことは可能である。しかし、それができないことから、「オソラク」には「と考えられる」と共起する性質があるのに対し、「キット」、「タブン」は「と考えられる」と共起する性質がないことが分かる。

以上は推量文の例であったが、「キット」は推量文以外にも、意志文、命令文、勧誘文に使えるという性質がある。これに対し、「タブン」と「オソラク」は推量文にしか使えないという性質がある。こうした点から考えても、「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いは、単なる蓋然性の高さだけでは説明のできないことが分かる。

### 3.2 文体差、好ましくない事態

「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いについて、先行研究の中には「蓋然性」の他に「文体差」や「好ましい事態かどうか」が関係するとするものもある。しかし、本研究ではこうした特徴はこれらの副詞を区別する根本的な基準ではないと考える。

まず「文体差」について見ていく。飛田・浅田（1994：101）は、「オソラク」について、「ややかたい文章語で、あらたまった会話などでは「たぶん」のかわりに用いられることも多い」と説明し、森田（1989：374）は、「タブン」と「オソラク」について、「両語とも「きっと」に比べて弱い推量。「恐らく」は丁寧な文体に用いられる」と説明している。劉（1996：58）も、「「たぶん」は通常話し言葉で使われるのに対して、「おそらく」は、文章語として、あるいはあらたまった場面で使われる」と説明している。

たしかに、「オソラク」は文章語として、あるいはあらたまった場面で使われる表現であると言える。実際、次の場面において「キット」を「タブン」に置き換えても、確信度は低くなるものの適格な文として判断される。しかし、「オソラク」を使うのは不自然で、「キット」や「タブン」に比べて許容度が落ちる。

- (59)a あたしという人間がそこにいたことも、  
みんなの記憶から、忘れ去られてしまうんだ。

人一人の、存在の重さなんて、  
その程度のものなんだよね。  
きっと…。

(折原みと『桜の下で逢いましょう』)

- b. あたしという人間がそこにいたことも、  
みんなの記憶から、忘れ去られてしまうんだ。

人一人の、存在の重さなんて、  
その程度のものなんだよね。  
{ タブン…。/? オソラク…。 }

こうしたことから、「キット」、「タブン」、「オソラク」には、蓋然性の違いのみではなく、文体差の違いもあるように感じられる。

ところで、事例では日常の軽い話し言葉で「オソラク」の使われた例もある。例文(60)で話し手は、母親がバーゲンに行ったまま帰ってこないことを述べている。この場合、勿体ぶった言い方をしているように聞こえる。

- (60) 「でもバーゲンに行ったってことはおそらく夕方まで帰ってこないぞ」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)

ここで考えたいのは、「オソラク」を使うとなぜ硬い表現になるのかということである。詳しくは次の3.3節で論じるが、「オソラク」は根拠のある推量判断を表すため、文章語的な硬い表現になると考えられる。「オソラク」は論文、報告書、裁判、ニュース、新聞など根拠を必要とする場面で使われることにより硬い表現となるのである。一方、「キット」や「タブン」は直感や思い込みによる推量判断を表すため、軽い話し言葉に使うことができる。実際、論文や報告書などで「キット」や「タブン」を使うと、根拠が乏しく説得力に欠けた論述とみなされる。上の例文(59b)で「オソラク」が使いにくいのも、話し手の思い込みによる推量判断を述べる場面だからである。さして根拠があるわけでもないのに「オソラク」を使うのが不自然なのである。一方、例文(60)で「オソラク」が使えるのは、「バーゲンに行った」ことが「母親が夕方まで帰ってこない」ことの根拠となっているからである。以上、「キット」や「タブン」に比べて「オソラク」に文章語的な性質のあることは確かであるが、それ以前に「オソラク」は根拠に基づく推量判断を表すという点で特徴付けられることを指摘した。

次に、「オソラク」は「好ましくない事態」に使われるとする先行研究の指摘について検討する。「オソラク」について、飛田・浅田(1994: 101)は、「危惧や疑問の暗示を

伴って推量する様子を表すことが多い。好ましい事柄の可能性を推量する場合には、ふつう「たぶん」「きっと」などを用いる」とし、小林（1980：21）も、「ある事柄に対する話者の消極的で控えめな判断」を表すとしている。

小林は次の例文(61)を根拠に、「キット」を使うと家族は安心するが、「オソラク」を使うと不安は隠せまいと説明している。しかし、必ずしもそう言い切れるわけではない。

- (61)A. だいじょうぶでしょうか、先生。  
 B. (イ) ええ、きっと治るでしょう。  
 (ロ) ええ、おそらく治るでしょう。

「キット」の方が安心できると感じる人は、「キット」のもつ「事態の実現に対する話し手の強い信念」という意味から、医者が強い信念を抱いているのなら治る確率も高いであろうと判断するためである。しかし、「キット」は直感的な推量判断を表すため、単なる気休めの言葉ととられる可能性もある。一方、「オソラク」は根拠に基づく推量判断を表すため、客観的な診断による発言であるという安心感が生じる可能性もある。「キット」と「オソラク」のどちらが好ましい事態に使われるかということは、一概には言えないのである。<sup>1)</sup>

実際、次のように好ましい事態を予想する場面において、「キット」を「オソラク」に置き換えても許容度は落ちない。「キット」を使うと直感的な判断で、「オソラク」を使うと根拠に基づく慎重な判断となるという違いはあるものの、いずれも好ましい事態を予想している点では変わらない。

- (62)a. 「だからこそ……そう見えるからこそ、安全なのよ。きっとどこかに、抜け道があるはずだわ」（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）  
 b. オソラクどこかに、抜け道があるはずだわ。  
 (63)a. 「（前略）それにしても、女性が、おいしそうに食事をする姿っていうのは、いいものですね。きっと、シェフも喜んでますよ」（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）  
 b. オソラク、シェフも喜んでますよ。

結局、好ましくない事態かどうかによって「オソラク」の使用可能性を説明する論法には

---

1) 劉（1996：66）も、「「おそらく」にこの特徴を認めるべきか否かに関しては、今後さらに詳しく検討したい」として、慎重な態度をとっている。

無理があるのである。

以上、「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いは、蓋然性の高さ、文体差、好ましい事態かどうかという基準では説明しきれないことを指摘した。

### 3.3 共起制限

まず、文の種類との共起関係を見ると、「キット」が推量文、意志文、命令文、勧誘文のいずれにも使えるのに対し、「タブン」と「オソラク」は推量文にしか使えないことが分かる。

- (64)a. 明日は{キット/タブン/オソラク}学校に行くだろう。(推量文)
- b. 明日は{キット/\*タブン/\*オソラク}学校に行くぞ。(意志文)
- c. 明日は{キット/\*タブン/\*オソラク}学校に行け。(命令文)
- d. 明日は{キット/\*タブン/\*オソラク}一緒に学校に行こう。(勧誘文)

次に「キット」、「タブン」、「オソラク」が、推量文でどのような文末形式と共起するのかを見る。

- (65)a. 明日はキット雨が降る{ /ニチガイナイ/ダロウ}。
- b. <sup>?</sup>明日はキット雨が降る{カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ}。
- (66)a. 明日はタブン雨が降る{ /ニチガイナイ/ダロウ}。
- b. <sup>?</sup>明日はタブン雨が降る{カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ}。
- (67)a. 明日はオソラク雨が降る{ /ニチガイナイ/ダロウ/ヨウダ/ラシイ}。
- b. <sup>?</sup>明日はオソラク雨が降るカモシレナイ。

「キット」と「タブン」についてはすでに考察したので、ここでは「オソラク」について考察する。上の例文からも分かるように、「オソラク」は「カモシレナイ」との共起は不自然であるが、「 /ニチガイナイ」「ダロウ」とは共起する。

- (68) <sup>?</sup>内容はもうすっかり忘れてしまったのですが、オソラク人の生死か恋愛のことだったたかもしれせん。(例文(16)の「タブン」を「オソラク」に変えた文)
- (69) 金曜日ということであれば、おそろく噂になったのはあの一件以外にはなかった。四日前だ。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA -』)
- (70) 遠い外国の、日本人観光客が訪れることの決してない辺境の地。そんなところで思いもかけず日本人どうしが出会うことがあったらどうだろう。まったくの気づ知



らずの間柄であったとしても、おそらくごく親しい感情を抱くにちがいあるまい。

(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)

- (71) おそらく、死刑執行の命令書に署名して押印するときの法務大臣は、Fさんのような看守の胸の裡など思いやることなどないだろう。(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)

「オソラク」は、複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す「カモシレナイ」とは共起しにくく、ある一つの帰結を導き出す「　」、「ニチガイナイ」、「ダロウ」とは共起する。したがって、「キット」、「タブン」と同じように、ある一つの帰結を導き出す表現であることが分かる。

一方、「オソラク」の特徴は、「ヨウダ」、「ラシイ」とも共起する点にある。「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量判断を表す。

- (72)a. おそらく設計者は、大学に未来的な外観を与えることを意図したらしいが、由香里の目には、バブル崩壊で建設中止に追い込まれたテーマパークか、田舎の遊園地のようにしか見えなかった。
- b. オソラク設計者は、大学に未来的な外観を与えることを意図したヨウダが、由香里の目には、バブル崩壊で建設中止に追い込まれたテーマパークか、田舎の遊園地のようにしか見えなかった。

「オソラク」が根拠を必要とする推量に使えるということは、「(ノ)デハナイカ(と見られる、と考えられる)」との共起からも証明される。「(ノ)デハナイカ」は、ある根拠に基づいて推論が一つの帰結に傾いていることを表す表現である。

- (73) 金日成の頭のなかに武力統一の構想が芽ばえたのはいつからだろうか。さまざまな状況から、おそらく一九四八年の秋から冬にかけてではないかとみられる。(萩原遼『朝鮮戦争 金日成とマッカーサーの陰謀』)
- (74) 資料を探すように支持はしたものの、私は本当に出てくるかどうかは五分五分だと思っていた。おそらくすでに処分されているか、あるいは関係者の一人である郡司元課長が次の職場である東大に持って行ってしまっているのではないかとも考えていた。(菅直人『大臣』)

こうした文に「オソラク」が使われることから、「オソラク」は根拠に基づく推量を表すことができると考えられる。

一方、「キット」と「タブン」は、「ヨウダ」、「ラシイ」、「(ノ)デハナイカ」と共起せず、推論の裏付けとなる根拠を必要とする場合には使えない。したがって、次の例文で「タブン」を使うと直感的な推量となり、「オソラク」を使うと根拠のある推量となる。

- (75)a. 「不思議な事に千歳ちゃんのいた形跡が全く見当たりません たぶんまだ千歳ちゃんは生存しているとおもわれますが」(山岸涼子『パイド・パイパー』)  
 b. 不思議な事に千歳ちゃんのいた形跡が全く見当たりません オソラクまだ千歳ちゃんは生存しているとおもわれますが。

こうした事実に基づき、「オソラク」は単に根拠に基づく推量を表せるというのではなく、根拠に基づく推量であることを積極的に表す表現であると考えられる。

先行研究には、「タブン」は話し言葉的で「オソラク」は書き言葉的であるというように、二語の違いを文体差によって区別するものもある。しかし、それは「タブン」が直感的な推量を表すのに対し、「オソラク」が根拠に基づく推量を表すということから派生的に生じた違いである。直感的な推量は軽い話し言葉で使うことができるし、根拠に基づく推量は論文、報告書、裁判、ニュース、新聞などで好まれる。こうした違いが文体差となって現れると考えられる。

### 3.4 判断の対象

次に推量の対象について考察する。次の会話文は、二番目の文の話し手が描いた絵を見ながらその絵に何が描かれているのかを話している場面である。ここで二番目の文の話し手は、自分自身の描いた絵について「ええ……たぶん、そうです」と答えている。しかし、自分で描いた絵について「タブン」を使うのは不自然である。そのため三番目の文で「タブン？」と聞き返しているのである。

- (76) 「それで、ここなんだけど。これは、木に蔦が絡みついているの？」  
 「ええ……たぶん、そうです」  
 「たぶん？」

(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

話し手自身の描いた絵については話し手自身がよく知っているため、推量の必要はないはずである。こうした場面で「タブン」を使うと、他人事のように聞こえるため不自然となるのである。実は、例文(76)の二番目の文は、多重人格者がもう一人の自分の描いた絵に

について語ったものである。この絵を描いたのは別の人格で、今話している人格にとっては他人も同然である。そのため、「ええ……たぶん、そうです」という言い方が使われているのである。次の例文も同様である。

- (77) 「これ、あなたが描いた絵よね？」  
「……たぶん」  
返事も、何となく頼りない。  
「おぼえてないの？」  
「いえ。おぼえています」（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

このように、話し手自身の知りうるはずの事態について「タブン」を使うと、不自然な表現となる。この場合、「キット」や「オソラク」で置き換えても同様に不自然である。

一方、推量の対象が話し手の知りえない事態や、はっきり覚えていない過去の記憶の場合には、「タブン」と「オソラク」は自然に使うことができる。しかし、そのような場合でも、単に事態の真偽を推量するだけの場合には「キット」は使いにくい。

- (78) 「これ、あなたのママが描いた絵よね？」  
「……{<sup>?</sup>キット/タブン/オソラク}」  
(79) 思い返してみると、太郎と花子が知り合ったのは{<sup>?</sup>キット/タブン/オソラク}三年前の夏だったと思う。

「キット」が使えるのは、推量の対象が話し手の知りえない事態で、話し手がその事態の「実現」に強い信念を抱いている文脈である。

- (80) 「今年の運動会、あなたのママ来てくれるよね？」  
「……{キット/タブン/オソラク}」  
(81) どう考えてみても、太郎と花子が知り合ったのは{キット/タブン/オソラク}三年前の夏だったと思う。  
(82) 新しい自分は、きっとここにある。（「名鉄スポーツクラブ車内広告」）

「キット」が事態の実現に対する話し手の強い信念を表すと考えると、「キット」が意志の用法をもつことが説明可能となる。まず、話し手自身の未実現の行為に対して、「タブン」、「オソラク」を使うと推量の解釈となることを確認する。例文(83)で「タブン」、「オソラク」を使うと、「私は来週の会議には{タブン/オソラク}出席できると思いま

す」の意味で推量の解釈が強くなる。

(83) 私は来週の会議には{キット/タブン/オソラク}出席します。

一方、「キット」を使うと、推量よりも意志の解釈が強くなる。これは「キット」が事態の実現に対する話し手の強い信念を表すためである。例文(83)の「出席する」は、話し手の意志でコントロールできる行為である。話し手の意志でコントロールできる行為について強い信念を持つということは、単なる推量ではなく話し手にその行為を行なう決意があることを示す。そのため、話し手の意志でコントロールできる行為に対して「キット」を使うと意志の解釈となるのである。その証拠に、「生きられる」のように話し手の意志でコントロールできない事態の場合には、「キット」、「タブン」、「オソラク」のいずれも推量の解釈となる。

- (84)a. 「わしはな あとキット四十歳ぐらいは生きられる」  
 b. 「わしはな あとたぶん四十歳ぐらいは生きられる」(手塚治虫『ブッダ』)  
 c. 「わしはな あとオソラク四十歳ぐらいは生きられる」

例文(84)の三つの表現の違いは、「キット」を使うと「あと四十歳ぐらいは生きられる」ことに期待をもった表現となり、「タブン」を使うと単に「あと四十歳ぐらいは生きられる」可能性が高いことを直感的に推量した表現となり、「オソラク」を使うと「あと四十歳ぐらいは生きられる」ということを根拠に基づいて推量した表現となる点にある。

以上、「キット」、「タブン」、「オソラク」は、話し手自身の知りうるはずの事態について使うことができないことを指摘した。このうち「タブン」と「オソラク」は、推量の対象が話し手の知りえない事態や、はっきり覚えていない過去の記憶であれば自然に使うことができるが、「キット」は単に事態の真偽を推量するのではなく、話し手がその事態の「実現」に強い信念を抱いている文脈において使われる。また、「キット」は当該の事態が話し手の意志でコントロールできる行為の場合に意志の解釈となる。

### 3.5 蓋然性の違いの生じる理由

従来、「キット」と「タブン」の違いは、蓋然性の高さの違いにあるとされてきた。しかし、両者は単に蓋然性の高さの違いだけでは説明できない。

例文(85)は、ある人物を犯人と決めつけたいとする話し手の気持ちが現れた文脈である。こうした場面で「キット」は使えるが「タブン」を使うと許容度が落ちる。こうした違いは、事態の実現に対する話し手の信念の有無にあると考えられる。

- (85)a. 「なぜこの人が犯人だとわかるんです？」  
 「こいつはものがいえない目も見えないんで」  
 「目が見えないものがいえないそれだけで犯人と決めつけるのか！」  
 「証拠なんかねえすよ でもこいつの顔を見てください きっと犯人でさあ！」  
 「それではあなたは人を見かけだけで判断するのですか？」  
 「そうでさあ みにくいヤツはどうせ悪いやつに決まってら」  
 (手塚治虫『ブッダ』)
- b. 「なぜこの人が犯人だとわかるんです？」  
 「こいつはものがいえない目も見えないんで」  
 「目が見えないものがいえないそれだけで犯人と決めつけるのか！」  
 ? 「証拠なんかねえすよ でもこいつの顔を見てください タブン犯人でさあ！」  
 「それではあなたは人を見かけだけで判断するのですか？」  
 「そうでさあ みにくいヤツはどうせ悪いやつに決まってら」

もし「キット」と「タブン」の違いが蓋然性の高さで説明できるのであれば、例文(86)で「タブン」より蓋然性の高いことを「キット」で表したり、例文(87)で「キット」より蓋然性の低いことを「タブン」で表すことができるはずである。ところが、実際にはそのような置き換えをすると、もとの文に比べて許容度が落ちてしまう。

- (86)a. たぶん何もしてやれない だけど今そばにいてあげるよ (池田貴族『Mi Y O U』)  
 b. ?キット何もしてやれない だけど今そばにいてあげるよ。
- (87)a. きっとわかってもらえる日まで僕はまってるいつまでも (菅原芙美恵『あの時君は若かった』)  
 b. ?タブンわかってもらえる日まで僕はまってるいつまでも。

例文(86)は、何かしてやれるかどうかを述べているだけであって、特に「何もしてやれない」ということに信念をもっている場面ではない。こうした場面で「キット」を使うのは不自然である。一方、例文(87)は「わかってもらえる日」の来ることに話し手の期待が込められている場面である。こうした場面で「タブン」を使うのは不自然である。

また、例文(86b)で、仮に話し手が「何もしてやれない」ことに信念をもっていたとしても、「キット」を使うと未来のことか他人事のように聞こえてしまう。

- (88) 今は{<sup>?</sup>キット/タブン/オソラク}僕は君に何もしてやれない。  
 (89) 今は{キット/タブン/オソラク}彼は君に何もしてやれない。  
 (90) 来年になっても{キット/タブン/オソラク}僕は君に何もしてやれない。  
 (91) 来年になっても{キット/タブン/オソラク}彼は君に何もしてやれない。

このように、「タブン」と「オソラク」が話し手自身の今現在の境遇について使えるのに対し、「キット」はそれができないという特徴がある。第三者の今現在の境遇であれば、「キット」も使える。

- (92)a. 「淋しいのは、お母さんよ、きっと」(吉本ばなな『TUGUMI』)  
 b. 「淋しいのは、お母さんよ、{タブン/オソラク}」

話し手自身の今現在の境遇について強い信念をもって言う場合には、「キット」を使わずに「今は僕は君に何もしてやれない」と言うのが自然である。

以上、「キット」が事態の実現に対する話し手の強い信念を表す表現であることを指摘した。この点で、話し手の知りえない事態や、はっきり覚えていない過去の記憶について、単にその真偽を推量することを表す「タブン」や「オソラク」と区別される。「キット」には「事態の実現に対する信念」という意味が含まれているため、「タブン」や「オソラク」よりも蓋然性が高く感じられるのである。また、「タブン」と「オソラク」を比較して、「オソラク」の方が蓋然性が高く感じられるのは、「タブン」が直感的な推量判断を表すのに対し、「オソラク」が証拠に基づく推量判断を表すためである。

先行研究の中には、「キット」が話し手の「期待」を表すと定義したものがある。(工藤(1982):「話し手の期待」、森本(1999):「行為を実現させるという自分の期待を強調する」、小林(1992):「強い確信や期待を示す」)<sup>1)</sup>しかし、「キット」による判断の対象には、話し手にとって好ましい事態も、好ましくない事態も含まれる。

- (93)a. 私はキット幸福な人生を歩むでしょう。  
 b. 私はキット不幸な人生を歩むでしょう。

「期待」という表現を使うと、話し手にとって好ましい事態を待ち望むという意味に勘違いされる恐れがあるため、本研究では「期待」という表現を避け、「事態の実現に対する

---

1) ただし、これらの研究では「期待」という特徴について、本研究のような考察を行っていないわけではない。

信念」という表現を使うことにする。

なお、「オソラク」には「オソラクハ」のように助詞「ハ」を伴う用法がある。

- (94) そもそも、U F Oとは未確認飛行物体の略だから、その存在を信じるかと聞くのは、日本語として意味をなさない。こんなものを分析させられて、おそらくは職員会議で報告も求められるであろう浩子に、由香里は同情した。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

一方、「キット」や「タブン」には「キットハ」「タブンハ」という形はない。この点に関しては、今のところ事実の指摘にとどめておく。

### 3.6 3節のまとめ

本節では「キット」、「タブン」、「オソラク」の違いについて考察した。従来、これらの副詞は、蓋然性の高さ、文体差、好ましい事態かどうかという基準によって、その違いが説明されてきた。これに対し、本研究ではこうした特徴はこの三つの副詞を区別する本質的な特徴ではないと考える。すなわち、これらの副詞の違いは、「キット」は事態の実現に対する話し手の強い信念を表し、「タブン」は直感的な推量判断を表し、「オソラク」は根拠に基づく推量判断を表す点にあると考える。

こうした違いは、「タブン」と「オソラク」の場合、推量の対象が話し手の知りえない事態や、はっきり覚えていない過去の記憶であれば自然に使うことができるのに対し、「キット」は話し手がその事態の「実現」に強い信念を抱いている文脈においてしか使われないことから証明される。また、「キット」は当該の事態が話し手の意志でコントロールできる行為の場合には意志の解釈となることも指摘した。

以上、「キット」、「タブン」、「オソラク」についてまとめておく。

キット：(モダリティ副詞)

事態の実現に対する話し手の強い信念を表す

タブン：(モダリティ副詞)

推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す

オソラク：(モダリティ副詞)

推量判断において根拠に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す

## 4. サゾ

本節では「サゾ」について考察する。次に示すような「サゾカシ」、「サゾヤ」という形式も当面「サゾ」と同様に考えておく。

- (95) 「（前略）。 が、それはともかくも、おれはこの島へ渡った当座、毎日忌々しい思いをしていた」

「それはさぞかし御難儀だったでしょう。御食事は勿論、御召し物さえ、御不自由勝ちに違いありませんから」（芥川龍之介『俊寛』）

- (96) 康子様 お手紙有難う。

軽井沢へのおさそい、とても魅力があります。第一、涼しいところで、さぞや気持ちよく勉強できるだろうと、羨ましい気がします。（石川達三『青春の蹉跎』）

#### 4.1 先行研究

まず小林（1980）、森本（1994）、森田（1989）、飛田・浅田（1994）の研究を検討し、分析の視点を定めることにする。

小林（1980）は、「サゾ」の使えない例文(97)と「サゾ」と呼応する語(98)を比較して、「サゾ」を「述語のもつ「程度性」に対する推量判断」（小林1980：21）と定義した。

- (97)a. \*さぞこのタイプの女性はあきらめないのだろう。

b. \*さぞ全面撤退はないだろう。

c. \*さぞこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろう。

- (98) V：驚く、喜ぶ、困る、いやな気がする、手柄顔に話す、気を悪くする、勉強家のように見える

A1：おかしい、寒い、おもしろい、気のいい

A2：めいわく、安心

N：おかんむり

森本（1994）は、「サゾ」は「キット」、「タブン」、「オソラク」などに比べて現れ方が限定されているとして、次のような共起制限のあることを指摘した。

- (a) 高い蓋然性を示す構文（「だろう」構文、「ちがいない」構文）には現れるが、基本的平叙文には現れない。<sup>1)</sup>

---

1) 小林（1980）は、「サゾ」は「ダロウ」とのみ呼応し、「ヨウダ」、「ラシイ」、「断定」（本研究の ）、「ニチガイナイ」とは呼応しないとしている。



- (b) 「さぞ」と共起する文は肯定文でなければならない。
- (c) 「さぞ」と共起する文は非行為文 (non-action) でなければならない。

森本は、(b) については「\*彼はさぞ悲しんでいないだろう」、(c) については「\*彼はさぞ行こうだろう」が非文となることを根拠としている。両文とも「サゾ」がなければ適格な文となる。

また、森本は「サゾ」と「キット」を比較して、以下のように説明している。

- (99) P : 息子は去年事故でなくなりました。
  - a. Q : そうですか。それはさぞおつらかったでしょう。  
(森本1994 : 第4章の例文(11))
  - b. Q : きっとおつらかったでしょう。(森本1994 : 第4章の例文(11)')

(11)' (引用者注 : 本研究の例文(94b)) は、第三者の心中を推し量っているのだから、相手の心中を察して言う場合には、いささか無理が感じられるようだ。この、相手に対して共感を込めるという点に、「さぞ」と「きっと」の違いが感じられる。このように、信念の程度の高さという点で共通していても、「さぞ」が示す話し手の態度は、より細かな特定化がされているということが考えられる。(森本1994 : 69)

さらに森本は、次の例文の「サゾ」を「非常に」、「大変」に置き換えても許容度が変わらないことを根拠にして、「「さぞ」は可能性の程度の高いことを示すとともに、文の内容の、質、量的に測定可能な一部を強調するという複合的な特徴を持つということである」(森本1994 : 70)と述べ、その強調機能が語用論的に「共感」という意味と結びつくと説明している。

- (100) \*彼はさぞ来る。(森本1994 : 第4章の例文(12)')
- (101) 彼はさぞ悲しんでいるだろう。(森本1994 : 第4章の例文(13)')
- (102) この映画はさぞおもしろいだろう。(森本1994 : 第4章の例文(14)')
- (103) このまちはさぞにぎやかになるだろう。(森本1994 : 第4章の例文(15)')

森田(1989)は「サゾ」と「サダメシ」を類義語として分析した。このうち「サゾ」については、「話し手の現在認知できない条件に対して、その立場にある状態を推測的に想像し、推量判断を下すときに用いる」(森田1989 : 488)と説明し、次の条件のもとで使われることを指摘した。

一 他所・他者の現在の状況

a、離れた場所の状況や環境条件

「御地は南国ゆえさぞ暑いことございましょうね」

b、他者の置かれた環境条件

「彼も教頭職に就いて、さぞ多忙を極めていることだろう」

c、他所・他者の状態

「お嬢様もさぞお綺麗におなりあそばされたでしょうね」

d、他者の感情・感覚など

「日本に着いたばかりで、さぞお疲れでしょう」

二 他所・他者の過去の状況

「戦後しばらくはさぞ食糧難に悩まされたことだろう」

森田はさらに、二人称にも三人称にも使えること、推測する契機があること、過去・現在、ないしは現在までの状態であること、その状態を話し手は現在未知未見であること、共感や同情の気持ちの伴う場合が多い、といった条件が前提となって使われることを指摘した。

一方、「サダメシ」については、「「さぞ」と同じく、話し手の現在認知できない事柄を推測推量する表現として共通する。「……だろう/……でしょう/……にちがいない」と呼応する点も共通する。ただし、「さぞ」が現在と過去の状況についての推測判断であったのに対し、「さだめし」は現在・過去のほか、未来推量にも使える点、用法は広い」（森田1989：489）と説明した。その上で、例文(104a)は「だれかの現在もしくは過去の入試経験を見聞して、その状況から察して“どんなにかむずかしいことだろう”、“きっとむずかしいにちがいない”と推測する現在の判断である」（森田1989：489）、例文(104b)は「“去年、おとしと皆むずかしかったそうだから、この次の入試も恐らくむずかしいことであろう”、“あの大学は競争率が高いことで有名だから、来年も恐らくむずかしいにちがいない”という未来推量にもなる」（森田1989：489）と説明した。

(104)a. 入学試験はさぞ（かし）むずかしいことだろうな。

b. 入学試験はさだめしむずかしいことであろう。

そして最後に、「「さぞ」は、他者や他所の既定の状態を思いやり共感する自発的感情。

「さだめし」は、未定・未確認の状況を自由に想像して心にある固定像を描き出すかなり積極的な推量。「たぶん、恐らく、きっと」に近い」（森田1989：490）と二語の違いを記述した。

飛田・浅田(1994)は、「サゾ」は「自分の関係する以外の相手の様子や物の状態などの程度のはなはだしさを推量するというニュアンスがあり、同情の暗示を伴う。自分自身の状態については用いられない」(飛田・浅田1994:166)と説明した。

以上の先行研究をまとめると次のようになる。

「サゾ」:

「共感」の意味が入る

二人称や三人称の事態に用いられる

現在と過去の事態について用いられる

「程度性」のある事態に用いられる

以下、先行研究の記述を検討しながら「サゾ」の意味分析を行なう。<sup>1)</sup>

#### 4.2 命題とモダリティ

次に主観性判定テストによって、「サゾ」が命題副詞なのかモダリティ副詞なのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。

##### 〔1〕否定の焦点テスト

(105) \*入学試験は[サゾ難しい]のではない。

##### 〔2〕疑問の焦点テスト

(106) \*入学試験は[サゾ難しい]のですか。

##### 〔3〕文代名詞化テスト

(107) A: 入学試験はサゾ難しいでしょう。

B: それは本当ですか。

(それ=難しいこと)

(それ サゾ難しいこと)

##### 〔4〕連体修飾テスト

(108) \*花子は[サゾ難しい]入学試験を受ける。

---

1) 「サダメシ」については、現代語ではあまり一般的な言葉ではないため考察の対象から外した。

〔5〕過去テスト

(109) \* [ 入学試験はサゾ難しかっ ] た。

これは、「入学試験はサゾ難しかったダロウ」なら適格となる。しかし、その場合は「サゾ」が「ダロウ」に係るため、過去文の中に収まったことにはならない。

以上のテストの結果、「サゾ」はモダリティ副詞であると結論される。

4.3 共起制限

次に共起制限について考察する。まず文の類型との共起関係を見ると、「キット」が推量文、意志文、命令文、勧誘文のいずれにも使えるのに対し、「サゾ」は推量文にしか使えないことが分かる。

- (110)a. 入学試験は{キット/サゾ} 難しいだろう。(推量文)
- b. 明日は{キット/\*サゾ} 学校に行く。(意志文)
- c. 明日は{キット/\*サゾ} 学校に行け。(命令文)
- d. 明日は{キット/\*サゾ} 一緒に学校に行こう。(勧誘文)

しかし、同じ推量文でも動作性の事態には「サゾ」が使えない。<sup>1)</sup>

- (111) 明日は{キット/\*サゾ} 学校に行くだろう。(推量文)

したがって、「サゾ」は状態性の事態に対する推量判断を表すと判断される。

次に「サゾ」がどのような文末形式と共起するのを見る。

- (112)a. 入学試験はサゾ難しい{ニチガイナイ/ダロウ}。
- b. \*入学試験はサゾ難しい{ /カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ}。

「サゾ」は「カモシレナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」とは共起しないため、複数の事態の成立可能性がともに存在することや、根拠に基づく推量判断は表さない。また、「     」とも共起しないため、確言による推量判断は表さない。この点で、「キット」、「タブン」、

---

1) ちなみに、「サダメシ」も意志文、命令文、勧誘文には使えず、状態性の事態に対する推量判断にしか使えないという性質をもつ。

「オソラク」とは異なる。

(113) 入学試験は{キット/タブン/オソラク}難しい。

これは、後で論じるように「サゾ」による推量判断があくまでも共感によるものであり、確言できないためであると考えられる。

一方、「サゾ」は直感的な推量判断を表す「ニチガイナイ」、「ダロウ」とは共起する。

(114) その日以来、原稿を書くのを一時休んで、日夜嘗々として礼節を学んだ、今年、東京で出会う友人たちが、さぞかし驚くにちがいないと、今から楽しみである。  
(五木寛之『風に吹かれて』)

(115) 「ご主人はさぞ氣落ちしておられるでしょうねえ。社長から一挙に平社員とは」  
(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

小林(1980)は、「サゾ」は「ニチガイナイ」と共起しないとしているが、事例でも自然に使われている。

以上、「サゾ」が直感的で慨言による推量判断を表すことを示すことができた。<sup>1)</sup>

#### 4.4 サゾの意味

先行研究では、「サゾ」の特徴として、「共感」の意味が入る、二人称や三人称の事態に用いられる、現在と過去の事態について用いられる、「程度性」のある事態に用いられる、ということが記述されてきた。ここでは、こうした点について再検討し、「サゾ」が共感に基づく推量判断を表すことを明らかにする。

##### 4.4.1 共感

森本(1994)は、「キット」は二人称の胸中の推量には使えないが、「サゾ」はそれができると指摘した。森本の指摘の通り、二人称の胸中を推量する場合、「サゾ」は自然に使えるが、「キット」を使うと他人事のように聞こえる。

(116)a. あなたもサゾ鼻が高いことでしょうね。

b. <sup>?</sup>あなたもキット鼻が高いことでしょうね。

---

1) この点で「サダメシ」も同じ性質をもつ。

次の例文は二人称の胸中を推量する場面で使われたものであるが、「キット」はやはり不自然で、「サゾ」をつかった方が自然である。「キット」を使うと第三者のことを言っているように聞こえる。

- (117)a. 私も返す言葉に困り、お嬢さまを亡くされて、さぞお力落としであろうといったようなことを口にしました。(宮本輝『錦繡』)
- b. <sup>?</sup>私も返す言葉に困り、お嬢さまを亡くされて、キットお力落としであろうといったようなことを口にしました。
- (118)a. 「あははは、お国どのは忠義者でございますから、さぞやご窮屈でございますたろう」(司馬遼太郎『国盗り物語』)
- b. <sup>?</sup>「あははは、お国どのは忠義者でございますから、キットご窮屈でございますたろう」
- (119)a. 「四天王とよばれ、これまではちからを合わせて道場をまもり来った間柄ゆえ、勝負を争うことも、さぞ、つらいことであろう。もし、それなれば、おのれがえらんだ、おのれの門人を代りに出場せしめてもよい」(池波正太郎『剣客商売』)
- b. <sup>?</sup>「四天王とよばれ、これまではちからを合わせて道場をまもり来った間柄ゆえ、勝負を争うことも、キット、つらいことであろう。もし、それなれば、おのれがえらんだ、おのれの門人を代りに出場せしめてもよい」

一方、三人称の胸中を推論した場合は、「サゾ」を「キット」に置き換えることができる。この場合、「サゾ」と「キット」の違いは共感の有無に求められる。次の例文で「サゾ」を使った場合には「御父さんや御母さん」、「妻」、「小僧」に対する話し手の共感が感じられるが、「キット」を使った場合にはそれが感じられない。

- (120)a. 奥さんは私に「結構ね。さぞ御父さんや御母さんは御喜びでしょう」と云ってくれた。(夏目漱石『ころ』)
- b. 奥さんは私に「結構ね。キット御父さんや御母さんは御喜びでしょう」と云ってくれた。
- (121)a. 「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」(夏目漱石『ころ』)
- b. 「悪い事をした。怒って出たから妻はキット心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものが

ないんだから」

- (122)a. 「御馳走してやればいいのに。幾らでも、食えるだけ食わしてやると云ったら、さぞ喜んだろう」(志賀直哉『小僧の神様』)
- b. 「御馳走してやればいいのに。幾らでも、食えるだけ食わしてやると云ったら、キット喜んだろう」

「サゾ」は、二人称や三人称の胸中以外にも、話し手の知りえない感覚や状況を推量する場合に使われる。この場合にも、「サゾ」はその境遇にある人物に共感を示していると考えられる。

- (123) 北海道も、住めば都だそうだね。雪が屋根までつもるときいて、おどろいたよ。  
さぞ寒いことだろう。ぼくの方は変わりがない。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (124) マンションの内部も、外観にふさわしく豪華な造りになっていた。内装や家具も、さぞ高かったろうと思わせる物ばかりである。(赤川次郎『女社長に乾杯!』)
- (125) 「あれほどの御道楽でござりますゆえ、御家中の御歴々のあいだではさぞ茶道がお盛んでござりましょうな」(司馬遼太郎『国盗り物語』)

「サゾ」が共感を表すことは次の例文によって証明される。すなわち、同じ推量でも「雨だ」や「寝ている」のように共感を伴わない事態を推量する場合には「キット」しか使えないのに対し、「ひどい雨だ」や「ぐっすり寝ている」のように、その状態に共感を示すことができる場合には「サゾ」も使えるようになる。

- (126)a. そちらは{\*サゾ/キット}雨でしょう。
- b. そちらは{サゾ/キット}ひどい雨でしょう。
- (127)a. 花子は疲れていたから今ごろ{\*サゾ/キット}寝ているでしょう。
- b. 花子は疲れていたから今ごろ{サゾ/キット}ぐっすり寝ているでしょう。

実例では、例文(128a)のように「サゾ」が「雪景色だ」に使われる例もある。この場合に読み手は、「さぞやたいした雪景色であろうな」、「さぞやすばらしい雪景色であろうな」のように、共感を伴う形用語を補って解釈する必要がある。一方、「キット」を使うと、単に近江の戦陣が雪景色かどうかを推量する文となる。

- (128)a. 義昭は、涙を垂らしそうな顔で、寒そうにすわっている。  
「近江の戦陣も、さぞや雪景色であろうな」

と義昭は目で笑った。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

- b. 義昭は、洩を垂らしそうな顔で、寒そうにすわっている。

「近江の戦陣も、キット雪景色であろうな」

と義昭は目で笑った。

以上、「サゾ」が共感による推量判断を表すことを指摘した。森本(1994)は「サゾ」のもつ強調機能がディスコースにおいて「共感という語用論的な含意」と結び付くとしているが、本研究では共感は第一に「サゾ」の意味を規定するものであると考える。

#### 4.4.2 人称制限

先行研究では、「サゾ」は二人称や三人称の事態に用いられるとされている。たしかに、例文(129)(130)は二人称の「御前」、「光秀」の事態に対する推量判断、例文(131)(132)は三人称の「姉様」、「庄九郎どなの御内儀」の事態に対する推量判断である。

- (129) 「少し午眠でもおしよ。御前もさぞ草臥れるだろう」(夏目漱石『こころ』)

- (130) 「光秀、そちのかさねがさねの武功、さぞ信長の覚えがめでたかろう」(司馬遼太郎『国盗り物語』)

- (131) ようよう気を取り直して、一枝二枝苅るうちに、厨子王は指を傷めた。そこで又落葉の上にすわって、山でさえこんなに寒い、浜辺に往った姉様は、さぞ潮風が寒かろうと、ひとり涙をこぼしていた。(森鷗外『山椒大夫』)

- (132) 「庄九郎どなの御内儀とあれば、さぞ才色を兼ねた女人であろう。ちかごろ都では書風は何がはやっております」(司馬遼太郎『国盗り物語』)

例文(129)~(131)のように二人称や三人称の感情、感覚、境遇を推量する場合には、その人物に感情移入して推量判断を行なう。一方、例文(132)のように姿や情景を推量する場合には、話し手はまるでその場面にいるかのようにして推量判断を行なう。つまり、話し手は当該の場面の観察者の立場に感情移入して推量判断を行なう。例文(133)(134)も同様である。

- (133) 太郎はよく食べるというからサゾ太っているでしょうね。

- (134) 花子はきれい好きじゃないからサゾ部屋が散らかっているでしょうね。

先行研究の記述に反し、「サゾ」は一人称の事態にも使われる。事実、次の例文において「いい気持ち」、「愉快だ」、「うまい」と感じるのは話し手自身である。



- (135) 宝塚の清荒神に日本一の鉄斎の大蒐集があるという事は、兼ねてから聞いていた。片っぱしからみんな見たらさぞいい気持ちになるだろう。(小林秀雄『真贋』)
- (136) 私は自分の傍にこうじっとして坐っているものが、Kでなくて、御嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事が能くありました。(夏目漱石『こころ』)
- (137) 「いや、さぞかし焼いたらうまかろうと思うんだ」(曾野綾子『太郎物語』)

この場合、「サゾ」を使うことによって、話し手は現実にその事態を体験しているかのような気分となっている。その証拠に、「サゾ」を「キット」に置き換えるとそうした臨場感がなくなる。こうした事実からも、「サゾ」が共感を表していることが証明される。

#### 4.4.3 過去、現在、未来の事態

森田(1989)によると、「サゾ」は現在と過去の状況についての推量判断を表すとされる。<sup>1)</sup> たしかに、例文(138)は過去の事態、例文(139)は現在の事態である。

- (138) 私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。(夏目漱石『こころ』)
- (139) 「ふうん。夜学の先生とは、これはまた地味な商売だ。あの親父に似合わぬ息子だな。本人もさぞイライラと焦っていることだろう」(吉行淳之介『樹々は緑か』)

しかし、次のように「サゾ」は未来の事態についての推量判断も表せる。

- (140) 妻は二人揃って御参りをしたら、Kがさぞ喜こぶだろうと云うのです。(夏目漱石『こころ』)
- (141) (これは、楽しみがふえた。この猿を毎日からかってやると、さぞおもしろいことになるだろう)(司馬遼太郎『国盗り物語』)

したがって、「サゾ」は過去、現在、未来関係なく使えることが分かる。話し手の共感さ

---

1) 森田は「サゾ」について、一方で「現在と過去の状況についての推測判断」(森田1989:489)と断言しながら、一方では「過去や現在の事柄となりやすい」と控えめな言い方をしている。しかし、「サゾ」との対照によって分析した「サダメシ」については、「「さだめし」は現在・過去のほか、未来推量にも使える点、用法は広い」(森田1989:489)としていることから、「サゾ」が現在と過去の事態について使われると考えていることは間違いない。

え及ぶのであれば、「来年の夏はサゾ暑くなるだろう」でも「百年後の夏はサゾ暑くなるだろう」でも自然に使うことができる。

#### 4.4.4 程度性

小林(1980)と森本(1994)は、「サゾ」が使えるかどうかを、事態の「程度性」の有無によって説明しようとした。これに対し、本研究では「サゾ」が共感を表すことから自動的に程度性の意味が導かれることを主張する。共感の対象となる事態には程度性が伴うため、「サゾ」によって推量される事態には必然的に程度性が伴うと考えるのである。

まず、先行研究で言う「程度性」とはどのようなものであるのかを確認しておく。小林(1980)は、先に挙げた例文(97a)の「あきらめる」には程度性がないとした。しかし、「{ヒジョウニ/タイヘン}あきらめる」とは言えないが、「少しはあきらめたけど、完全にはあきらめきれない」なら言えるため、単純に「あきらめる」に程度性がないとは言えなくなる。同様に、例文(97b)の「全面撤退」に程度性がないとしても、ただの「撤退」であれば、「わずかの撤退」、「五十歩の撤退と百歩の撤退」などと言えるため、「撤退」に程度性がないとは言えなくなる。ところが、「\*さぞ撤退はないだろう」という表現は成り立たない。こうしたことから、単に程度性というだけではなく、もう少し詳しい定義が必要となる。

ところで、「サゾ」とは直接関係ないが、述語の「程度性」について論じた研究に佐野(1998b)がある。<sup>1)</sup> 佐野は、まず主体変化動詞句を進展性の有無によって、「+進展的变化」の動詞句と「-進展的变化」の動詞句とに分けた。進展性とは、変化が進展的・漸次的に進んでゆく性質のことである。次に「+進展的变化」の動詞句を「+限界/進展的变化」の動詞句と「-限界/進展的变化」の動詞句に分けた。限界について佐野は、「進展性に限界を持たない動詞句とは、いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つものであり、進展性に限界を持つ動詞句とは、変化の結果成立した結果状態が更に変化する可能性を持たないものである」(佐野1998b:8)と説明している。佐野はそれぞれの動詞句について、次の例を挙げている。

[ - 進展的变化 ] 動詞句：

死ぬ、割れる、(モノが)落ちる、生まれる、結婚する、(人が)座る、着る、  
(人が)消える

[ + 限界/進展的变化 ] 動詞句：

暮れる、腐る、凍る、冷める、沸く、溶ける、治る、枯れる、(夜が)明ける、

---

1) 佐野(1997、1999)にも、程度性についての詳細な分析がある。

(魚が) 焼ける

[ - 限界/進展的变化 ] 動詞句 :

広まる、冷える、上がる、温まる、老ける、高まる、太る、痩せる、伸びる、縮む

ここで、佐野の分類を「サゾ」の共起と関連させて考えると、「サゾ」と共起できるのは「- 限界/進展的变化」動詞句のみであることが分かる。また、形容詞の場合にも、「美しい、おいしい、元気だ」など「- 限界」のものは「サゾ」と共起するが、「丸い、四角い、同じだ」など「+ 限界」のものは「サゾ」と共起しない。従来、「サゾ」と共起する事態には「程度性」があると指摘されてきたが、それは「- 限界」という性質を持ったものであることが分かる。

「サゾ」が程度性と関わることにしてもう一つ論じておくことがある。それは、ある事態が「サゾ」によって修飾されるのは、その程度が標準以上に高い場合だということである。次の例文でも、話し手は「雨が降り」、「悲しむ」、「気分がすっきりする」という状態を、並以上に雨が降り、並以上に悲しみ、並以上に気分がすっきりすると判断している。少しだけ雨が降ったり、少しだけ悲しんだり、少しだけ気分がすっきりすると判断した場合には、「サゾ」を使うことができない。

- (142)a. 夏になれば{サゾ/キット}雨が降るでしょう。
- b. 夏になれば{サゾ/キット} たくさん雨が降るでしょう。
- c. 夏になれば{ \*サゾ/キット} 少し雨が降るでしょう。
- (143) 「ただおまえがこわれたらウランがさぞ悲しむだろうと思ってな」(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (144) 言いがかりや不当な要求、身に覚えのないことなどを言われた場合、明るくジョークを交えて言い返せたら、さぞ気分がすっきりするだろう。(福田健『ユーモア話術の本』)

以上、「サゾ」は当該の事態の程度が標準以上に高いと判断された場合に使われることを指摘した。

#### 4.5 4 節のまとめ

本節では「キット」と比較しながら「サゾ」の意味特徴について考察し、「サゾ」が共感に基づく推量判断を表すことを明らかにした。

従来、「サゾ」の特徴として、「共感」の意味が入る、二人称や三人称の事態に用

いられる、現在と過去の事態について用いられる、「程度性」のある事態に用いられる、ということが記述されてきた。しかし、「サゾ」が一人称の事態や、未来の事態にも用いられることは、実例からも明らかである。

また、「サゾ」の意味について、小林（1980）は「述語のもつ「程度性」に対する推量判断」、森本（1994）は「可能性の程度の高いことを示すとともに、文の内容の、質、量的に測定可能なある一部を強調する」、飛田・浅田（1994）は「程度のはなはだしさを推量する」のように、先行研究では事態の程度の高さを推量する表現であるとされてきた。これに対し、本研究では「サゾ」は共感による推量判断を表すのが第一義で、程度性は「サゾ」が共感を表すことから自動的に伴う性質であるとする。<sup>1)</sup>

以上、「サゾ」についてまとめておく。

サゾ：（モダリティ副詞）

推量判断において共感に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す

---

1) 森田（1989）は、「サゾ」について「その立場にある状態を推測的に想像し、推量判断を下すときに用いる」としているが、「共感」の意味を前面に据えた説明ではない。

## 第6章 モシカスルト<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

本章では「カモシレナイ」や「ノデハナイカ」と共起関係にある「アルイハ」、「モシカスルト」、「モシカシタラ」、「ヒョットスルト」、「ヒョットシタラ」について考察する。<sup>2)</sup>

従来、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」は、蓋然性の違いを表し分ける副詞であるとされ、この順番に蓋然性が低くなるとされてきた。<sup>3)</sup> それに従えば、例文(1)~(3)において雨の降る蓋然性は、(1) (2) (3)の順に低くなることになる。

- (1) キット明日は雨が降るダロウ。
- (2) タブン明日は雨が降るダロウ。
- (3) モシカスルト明日は雨が降るカモシレナイ。

たしかに、これを見る限りそのような違いが感じられる。しかし、「キット」と「タブン」は「カモシレナイ」と共起せず、「モシカスルト」は「ダロウ」と共起しないということからも分かるように、これらの表現はミニマル・ペアとして比較することはできない。

一般に「モシカスルト」が蓋然性の低いことを表すとされる場合、「カモシレナイ」との共起関係を根拠に説明されてきた。しかし、第3章で指摘したように、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表す表現ではなく、当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す表現である。したがって、「カモシレナイ」との共起関係を根拠に考えると、「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表す表現ではなく、他の事態の成立する可能性を認める表現であると考えた方がよいことになる。

---

1) 本章は杉村(1998a)をもとに加筆修正したものである。

2) 以下、「モシカスルト」と「ヒョットスルト」は交代可能なものと考え、記述の便宜上、特に必要でない限り「モシカスルト」を代表として使用する。また、「モシカシタラ」、「ヒョットシタラ」は、それぞれ「モシカスルト」、「ヒョットスルト」と置き換えてもほとんど意味が変わらないため、当面同じものとして扱うことにする。

3) 野田(1984)、森田(1989)、益岡(1991)、宮崎(1991、1992)、益岡・田窪(1992)、飛田・浅田(1994)、小学館辞典編集部(1994)、森本(1994)、須賀(1995)、木下(1999)など。

事実、「モシカスルト」は必ずしも蓋然性の低い場面のみに使われるとは限らない。たとえば、次の例文において、話し手は雨が降る蓋然性を低いものとは見ていない。

- (4) マサカ雨が降るとは思わなかったけど、こんなに空が曇り風が強くなってきたところを見ると、モシカスルト雨が降るカモシレナイ。早く家に帰らなきゃ大変だ。

この文は、当初雨が降るとは想定していなかったが、発話時点において雨が降る可能性も否定できないと判断するに至ったことを表しているのであって、けっして雨が降るという事態の蓋然性の「高さ」について述べたものではない。このような例文の存在から、「モシカスルト」は想定外の事態の成立可能性について表した表現であると考えられる。以下、この点について明らかにする。

## 2. 命題とモダリティ

本節では、主観性判定テストによって、「モシカスルト」が命題副詞なのかモダリティ副詞なのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。

### 〔1〕否定の焦点テスト

- (5) \* 太郎は [ モシカスルト10時に寝るカモシレナイ ] のではなく、[ カナラズ10時に寝る ] のである。

### 〔2〕疑問の焦点テスト

- (6) \* 太郎は [ モシカスルト10時に寝るカモシレナイ ] のですか、[ カナラズ10時に寝る ] のですか。

### 〔3〕文代名詞化テスト

- (7) A: 太郎はモシカスルト10時に寝るカモシレマセンよ。  
 B: それは本当ですか。  
 (それ = 10時に寝るカモシレナイこと)  
 (それ = モシカスルト10時に寝るカモシレナイこと)

### 〔4〕連体修飾テスト

- (8) \*花子は[太郎がモシカスルト10時に寝るカモシレナイ]習慣であることを知った。

〔5〕過去テスト

- (9) \*太郎はモシカスルト10時に寝るカモシレナカッタ。

以上のテストの結果、「モシカスルト」はモダリティ副詞であると結論される。<sup>1)</sup>

### 3. 共起制限

#### 3.1 文末形式との共起制限

次に共起制限について考察する。はじめに文の類型との共起関係を見ると、「モシカスルト」は推量文には使えるが、意志文、命令文、勧誘文には使えないことが分かる。

- (10)a. 明日はモシカスルト学校に行くかもしれない。(推量文)  
 b. \*明日はモシカスルト学校に行く。(意志文)  
 c. \*明日はモシカスルト学校に行け。(命令文)  
 d. \*明日はモシカスルト一緒に学校に行こう。(勧誘文)

ここで注意したいのは、「モシカスルト」自体は推量を表す表現ではないということである。たしかに、「モシカスルト」は推量の文脈で使われることもある。次の文は、ライオンとトラのどちらが強いのかを推量している文脈である。

- (11) ライオンとトラのうち強いのは、モシカスルトライオンかもしれないし、モシカスルトトラかもしれない。どっちだろう。

しかし、「モシカスルト」は推量を表さない文脈で使われることもある。次の文は、単に

---

1) 同じ想定外の意味を表す副詞でも、「アンガイ」は命題副詞として機能する。その証拠に、「アンガイ弱虫な男」のように連体修飾成分となる。次の文で「アンガイ」はあくまでも事態が想定外のものであることを表しているにすぎず、蓋然性の意味は「カモシレナイ」に帰せられる。

(i) あの夜、つぐみは浜で白い石ころをひろい、それを本棚のすみっこにずっと今も置いているのだ。つぐみがあの夜、どういう気持ちだったのかは知らない。どんな気持ちがあるのか、石ころにこもっているのかも、わからない。案外、いいかげんなことなのかもしれない。(吉本ばなな『TUGUMI』)

この点で、「アンガイ」は「イガイニ」、「ゾンガイニ」、「オモイノホカ」と共通している。

二通りの可能性があることを述べているにすぎない。

- (12) ライオンとトラのうち強いのは、モシカスルトライオンかもしれないし、モシカスルトトラかもしれない。どちらの可能性もあります。

したがって、「モシカスルト」が推量文に使われた場合も、推量の意味は文脈に帰せられると考えられる。

次に、文末のモダリティ形式との共起関係を見る。「モシカスルト」は文末のモダリティ形式と次のような共起制限をもつ。

- (13)a 明日はモシカスルト雨が降る {カモシレナイ/ノデハナイカ}。  
b. \*明日はモシカスルト雨が降る { /ニチガイナイ/ダロウ/ヨウダ/ラシイ}。

実際、「モシカスルト」はほとんど全ての場合に「カモシレナイ」や「デハナイカ」と共起する。

- (14) 由香里は、心を打たれるのを感じた。彼女はもしかしたら、救いを求めているのかもしれない。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)  
(15) ひょっとすると、満は、千尋の傷ついたプライドを庇うために、誕生した人格なのではないだろうか？(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性が共存することを表す表現であり、「デハナイカ」は当該の事態の成立可能性に疑いを残した表現である。いずれも当該の事態の成立を一つの可能性として捉え、他の事態の成立も意識した表現であるという点で共通している。こうした表現との共起から、「モシカスルト」は当該の事態の成立する可能性もあると捉えた表現であることが分かる。

実例では、次のように命題表現の「可能性がある」と共起する例もある。こうした事実も、「モシカスルト」が当該の事態の成立する可能性もあると捉えた表現であることを証明している。

- (16) ボタンを押すと、機械が淡々と三十件のメッセージを再生していった。予想したとおり、どれも、無言だった。時間はどれも午後二時から三時の間。つまり、若槻と三善が病院で幸子と会った直後である。もしかすると、幸子は病院からかけた可能性さえあった。(貴志裕介『黒い家』)



一方、「モシカスルト」が「      」、「ニチガイナイ」、「ダロウ」、「ヨウダ」、「ラシイ」と共起しないのは、これらがある一つの可能性に傾いた表現だからである。ただし、実例では次のように「ミタイ」と共起するものもある。しかし、この文は「モシカシタラできたカモシレナイ」と「ドウモできたミタイ」が話し手の頭の中で混じりあって作られたものであると考えられる。

- (17) 「もしかしたらできたみたい! 月のものも遅れてるし…」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)

従来、「モシカスルト」は可能性の低いことを表す表現であるとされてきたが、この例の場合、話し手はむしろ事態成立の可能性が高いと思っている。「モシカスルト」が可能性の低いことを表すととられやすいのは、複数の事態の成立をとともに否定しないことから来る派生的な意味であると考えられる。

以上、「モシカスルト」が当該の事態の成立する可能性もあると捉えた表現であることを指摘した。

### 3.2 カモシレナイとの共起

次に「カモシレナイ」との共起について考察する。「キット」、「タブン」、「モシカスルト」は、「ダロウ」、「カモシレナイ」と次のような共起制限をもつ。

- (18)a. キット明日は雨が降る {ダロウ/\*カモシレナイ}。<sup>1)</sup>  
 b. タブン明日は雨が降る {ダロウ/\*カモシレナイ}。  
 c. モシカスルト明日は雨が降る {<sup>\*</sup>ダロウ/カモシレナイ}。

これを見ると、「キット」や「タブン」と違い、「モシカスルト」は「カモシレナイ」と意味的に衝突しないことが分かる。

---

1) 実例では、「キット」と「カモシレナイ」の共起する例もある。しかし、こうした共起は落ち着きが悪く感じられる。

(i) もっと、のんびりと時間をかけて考えりゃ、きっとオレと同じことを思い付くかもしれねえな。(鈴木光司『リング』)

(ii) もし私が医者でなかったら、きっと驚きのあまり腰を抜かしていたかもしれない!。しかし、私はこの症例をテキストの写真で見て知っていた。睾丸性女性化症候群。(鈴木光司『リング』)

従来、「カモシレナイ」との共起を根拠に、「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表す表現であるとされてきた。しかし、第3章で指摘したように、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す表現である。<sup>1)</sup> このことは例文(19)からも確認できる。

- (19) カンボジアのポル・ポト元首相の死亡について、タイ情報筋は十九日、同氏が一九七〇年代の政権時代の大虐殺への懲罰を避けるため、毒殺または、自殺したかもしれないと述べた。

同情報筋は、長期にわたりポル・ポト派の動向を担当してきたタイ当局高官で、「遺体の調査結果および事件を取り巻く状況からみて、毒殺されたと思われる」と指摘した。「毒殺は彼の同意を得て行われたともみられ、ポル・ポト氏が自分で毒薬を飲み込んだ可能性もある」とも述べた。（「中日新聞」1998.4.20 夕刊）

例文(19)は、ポル・ポト元首相の死因が、「毒殺または自殺である」可能性が低いことを述べた記事ではない。毒殺または自殺の可能性が高いか低いかは別にして、そういう可能性も否定できないということを述べた記事である。これからも分かるように、「カモシレナイ」は他の事態の成立可能性も残っていることを表す表現である。

同様に、次の例文の「カモシレナイ」も、事態成立の可能性の低さを表す表現ではない。たしかに、「ヒョットシタラ」の文において、「もっと深い闇に支配された井戸の底に降りなくてはならない」という事態の成立する可能性は不確実ではある。しかし、「事態成立の不確実」イコール「可能性の低さ」ということにはならない。

- (20) これから何をすべきか、浅川にはちゃんとわかっていた。わかっているもまだ恐怖心は湧かない。床板がすぐ頭上に迫るだけで息苦しいというのに、ひょっとしたら、もっと深い闇に支配された井戸の底に降りなくてはならないかもしれないのだ。……かもしれない、ではない。山村貞子を引きずり出すためには、ほとんど確実に井戸の中に入っていかなければならない。（鈴木光司『リング』）

例文(20)は、当初浅川は山村貞子を引きずり出すために井戸の底まで降りていくことを想定していなかったが、思いもかけず井戸の底に降りなくてはならない可能性も生じてきたということを述べた文である。この文において、浅川は「井戸の底に降りなくてはならな

---

1) 三宅（1992）、田中（1993）、須賀（1995）、木下（1999）にも、「カモシレナイ」は可能性の存在を表すとの記述がある。

い」という事態の成立する可能性を「不確実」と思いこすれ、けっして「低い」とは思っていない。むしろ、そうした事態の成立する可能性のある程度高いものと意識している。したがって、「カモシレナイ」との共起を根拠に「モシカスルト」が蓋然性の低いことを表すとする説明は成り立たなくなる。「カモシレナイ」との共起から言えば、「モシカスルト」は他の事態の成立する可能性もあると認める表現であるということになる。

実際、複数の事態の成立可能性を認める場面において、「キット」と「タブン」は使えないが、「モシカスルト」は使える。

- (21)a. \*明日は晴れると思うけど、この雲行きだとキット雨が降るダロウ。
- b. \*明日は晴れると思うけど、この雲行きだとタブン雨が降るダロウ。
- c. 明日は晴れると思うけど、この雲行きだとモシカスルト雨が降るカモシレナイ。

「キット」や「タブン」は、ある一つの帰結を導く表現である。そのため、次のように「晴れる」と思った時と「雨が降る」と思った時が別々の時間でなければ適格とならないのである。

- (22)a. 明日は晴れると思ったけど、この雲行きだとキット雨が降るダロウ。
- b. 明日は晴れると思ったけど、この雲行きだとタブン雨が降るダロウ。

以上、「モシカスルト」は「カモシレナイ」と共起して、複数の事態の成立可能性を同時に表す文脈に使われることを示した。

### 3.3 デハナイカとの共起

次に「デハナイカ」との共起について考察する。「モシカスルト」は「カモシレナイ」だけではなく「デハナイカ」とも共起する。「デハナイカ」は事態成立の可能性に疑いを残していることを表す表現である。

- (23) まず、最初に、私が彼女が多重人格ではないかと疑い始めた時のことを、話しておきたいの。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)
- (24) 私としては、たしかに、大臣になれば何でもできるとは考えていなかったが、やり方によっては、ある程度の仕事はできるのではないかと、考えてもいた。(菅直人『大臣』)

例文(23)は、「彼女が多重人格である」という考えに傾きながらも、そうでない可能性も

残されていることを表した文である。また、例文(24)は、「大臣になればある程度の仕事はできる」ということに確信がなく、その事態の成立に疑いを残していることを表した文である。この「疑いを残している」という意味が他の事態の成立を暗示するのである。<sup>1)</sup>

「デハナイカ」は次のようにさまざまな副詞と共に共起する。「ヤハリ」や「オソラク」と共起すると当該の事態の成立する可能性が高く感じられるし、「モシカスルト」と共起すると当該の事態の成立する可能性が低く感じられる。いずれにせよ、その事態の成立に疑いを持つという点で共通している。

- (25) やはり彼女は、真部を愛していたのではないだろうか？（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (26) 金日成の頭のなかに武力統一の構想が芽ばえたのはいつからだろうか。さまざまな状況から、おそらく一九四八年の秋から冬にかけてではないかとみられる。（萩原遼『朝鮮戦争 金日成とマッカーサーの陰謀』）
- (27) 少女は身じろぎしたが、表情は変わらなかった。由香里が待ち望んでいたのは、少女の心の声だったが、何も聞こえてこない。それが、あまりにも静かだったので、感情を抑制しているというよりも、もしかすると、この人格の中身はまったくの空虚ではないかという気さえた。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (28) 私は由香里よ。知ってるでしょう？ きっと、今までほかのみんなとお話しをしてたのを、心の奥から見てたんじゃないかな？（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

なお、実例では例文(28)のような「キット～デハナイカ」という共起も存在する。この場合、「キット」のもつ「事態の実現に対する話し手の強い信念」という意味にひかれ、「デハナイカ」のもつ疑いの程度は弱くなる。

「デハナイカ」は事態成立の可能性に疑いを残していることを表すが、「カモシレナイ」と違って、複数の事態を同時に認める表現ではない。したがって、例文(29a)のように言うことはできない。一方、例文(29b)のように、「晴れる」と思った時と「雨が降る」と思った時が異なる時間であれば、「デハナイカ」を使うことができる。

---

1) 同じ「デハナイカ」でも、他の事態の成立を認めないものもある。次は「彼が、それだけ純粋な人間、他人の苦痛に共感できる人間である証しである」と主張している文である。このような「デハナイカ」は、また別に考える必要がある。

(i) 由香里は、彼女の前で弱みをさらけ出した真部のことを、情けないとは思わなかった。むしろそれは、彼が、それだけ純粋な人間、他人の苦痛に共感できる人間である証しではないか。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

- (29)a. \*明日は晴れると思うけど、この雲行きだとモシカスルト雨が降るノデハナイカ。  
 b. 明日は晴れると思ったけど、この雲行きだとモシカスルト雨が降るノデハナイカ。

先に「モシカスルト～カモシレナイ」が複数の事態を同時に認めることを見たが、上のような事実から、複数の事態を同時に認める意味は「モシカスルト」自体にあるのではなく、「カモシレナイ」に備わったものであることが分かる。

以上論じたように、「カモシレナイ」は他の事態の成立可能性を認める表現で、「デハナイカ」は当該の事態の成立可能性に疑いを残した表現である。両者の共通点は、当該の事態の成立を一つの可能性として捉え、他の事態の成立も意識している点にある。「モシカスルト」はこうした表現と共起する性質をもつことが分かる。

#### 4. モシカスルトの意味

本節では「モシカスルト」の意味について分析する。一般に「モシカスルト」と「カモシレナイ」は、同じ意味を表すものとして扱われてきた。これに対し、本研究では両者は互いに独立した意味を持つと考える。

##### 4.1 想定外の事態

はじめに、「モシカスルト」が「当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、発話時点において当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す」表現であることを示す。次の例文を見るとこのことがよく分かる。例文(30)は、当初別の予想をしていたが、推論の結果、真相はそうじゃない可能性もあると思うに至ったことを述べている。例文(31)は、当初鍵が開いているとは思っていなかったが、推論の結果、鍵が開いていた可能性もあると思うに至ったことを述べている。例文(32)は、当初大石智子と岩田秀一が恋人どうしではないかと考えていたが、推論の結果、二人は一面識もないと思うに至ったことを述べている。

- (30) だけど、もしかしたら、真相はそうじゃないかもしれないって思いはじめたんだ。  
 (貴志裕介『黒い家』)

- (31) 二人は、探索が始まってすぐに、ここを調べていた。真部が回りに張りめぐらされているロープを乗り越えて、出入り口と窓とが、すべてしっかりと施錠されてい

ることを確認していたのだ。(中略)

「最初は、一階のどこかの鍵が開いてたんだよ。扉でも、窓でも。ひょっとすると、そこら中、開いていたかもしれない。(後略)」(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

- (32) 友人たちに聞いても、辻遥子が東京の予備校生と付き合っているらしいという噂は耳にした。ただ、いつごろ、どのようにして知り合った仲なのかは、今のところまだわからない。とすると、当然、大石智子と岩田秀一も恋人どうしではないかという疑問も出てくるが、いくら調べてもそれを裏付ける事実は出てこない。ひょっとしたら、大石智子と岩田秀一は一面識もないかもしれない。(鈴木光司『リング』)

先行研究では、「モシカスルト」と「カモシレナイ」は単に副詞と文末形式の違いとして捉えられ、ともに蓋然性の低いことを表す表現であると説明されてきた。しかし、「カモシレナイ」は発話以前の想定を含意しないという点で「モシカスルト」とは異なる。

- (33)a. 明日は雨カモシレナイなあ。  
 b. モシカスルト明日は雨カモシレナイなあ。  
 (34)a. 明日は雨ジャナイカナあ。  
 b. モシカスルト明日は雨ジャナイカナあ。

例文(33a) (34a)は、明日の天気について特に何らかの想定を含意していない。これに対し、例文(33b) (34b)は、「明日も晴れると思っていた」とか、「明日雨が降るとは思いもよらなかった」など、明日雨の降ることが想定外の事態であるという意味となる。

このように、「モシカスルト」は当該の事態が想定外のものであることを表す表現である。そのため、次のように定説とは異なる新説を提示する場面で効果的に使われる。

- (35) つまり、先にあげた、  
 オヤ、アンナ所に鶯ガイル！  
 というのが、この種の文型の実実は典型的な使い方なのだ。発見、あるいは新鮮な印象、それはしばしば驚きでもあろう。日本人は、多分英文法が頭にあって、  
 ナント美シイ声デショウ！  
 というような形の文だけを「感嘆文」と思っているけれども、ひょっとしたら、上の鶯の文のような文は日本語的な感嘆文と呼んでもよいような性質を、その実際の使い方から見れば、持っているといってよいのではなかろうか。(寺村秀夫『文法随筆』)

- (36) ともかく、こうして見てくると、ふつう格助詞として、その枠で説明されている「を」も、分かっているのはひょっとしたらほんの一部ということになるのではないかとおそろしくなってくる。(寺村秀夫『文法随筆』)

例文(35)は、一般に「オヤ、アンナ所に鶯ガイル!」という文が感嘆文であるとは考えられていなかったが、話し手の考察の結果、感嘆文である可能性も否定できないと考えるようになったことを表している。また、例文(36)は、一般に「を」は格助詞として説明されているが、話し手の考察の結果、そうでない可能性も否定できないと考えるようになったことを表している。いずれも、定説とは異なる新説の成立可能性を主張しているところに「モシカスルト」の特徴がある。ただし、当該の事態の成立を一つの可能性として捉えているため、そうでない可能性も暗示した控えめな主張となっている。

ところで、「キット」と「タブン」は、特にそのような前提は必要とされていない。例文(37)は、マンションを見上げた瞬間に「夜景がきれいに見えるんだろうな」と推論したことを述べた文である。それ以前に特に夜景のことは考えておらず、想定外の意味は入らない。例文(38)も、「コンピュータの世界と人間の世界とは違いがある」ということが、特に想定外の事態であるとして述べられているわけではない。

- (37) その高くそびえるマンションを見上げたら彼の部屋がある十階はとても高くて、きっと夜景がきれいに見えるんだろうなと私は思った。(吉本ばなな『キッチン』)
- (38) すでにみたように、さまざまなコンピュータ試合からしっぺ返し戦略が有効なことがわかってきたので、これを知った以上みんながしっぺ返し戦略をとるだろう、と予想されるかもしれませんが。でもコンピュータの世界と人間の世界とは、たぶん違いがあるでしょう。(西山賢一『勝つためのゲームの理論』)

以上、「モシカスルト」は当該の事態が想定外のものであることを表す表現であることを指摘した。この点で「カモシレナイ」や「デハナイカ」とは異なる。

#### 4.2 判断の根拠

次に判断の根拠について考える。次の例文から分かるように、「モシカスルト」は判断の裏付けとなる根拠がある場合にもない場合にも使われる。例文(39)は心理学を専攻する主人公が、学術的な根拠をもとに千尋が多重人格になった原因を探っている場面である。「一般に～」以下の部分に明確に根拠が示されている。一方、例文(40)は、主人公である由香里が千尋の交替人格の一つである悠子に、「この後のことをどの人格が知っているか」と尋ねている場面である。その質問に対して悠子は、範子という別の人格が知っているか

もしれないと答えている。しかし、「悠子は自信なげに由香里を見、すぐに目を伏せた」という表現からも分かるように、特に根拠があって述べられた発言ではない。

- (39) もしかすると、千尋の交代人格は、すべて千尋自信が生み出しているのではないだろうか？ 由香里の中で、そんな疑問が芽生えた。

一般に多重人格とは、過去に受けた精神的外傷の記憶や、支配的な意識から抑圧された観念などが心の深層に沈殿していくうちに、しだいにその周囲にさまざまなものをくっつけ、肥大化し、ついには、独立した人格としてふるまえるほど複雑なものになったものだと言われている。

普通は、そのプロセスは、偶然の手にゆだねられているはずだ。だが、千尋の場合に限っては、そこに何らかの意志のようなものが介在しているとしか思えなかった。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

- (40) 「悠子さんは、覚えてないのね？」

内気な少女は、黙って顔をうなずかせた。

「この後のことは、誰か知っているはずよね？ 誰が知っているのか、わかる？」

「さあ……」

悠子は自信なげに由香里を見、すぐに目を伏せた。

「でも、ひょっとすると」

「だいじょうぶよ。言ってみて？」

「範子が、知ってるかも……」

（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

次の例文では、金大中氏の政治姿勢について詳しく知って書いたとすれば根拠があることになるし、希望的観測で書いただけなら根拠がないことになる。

- (41) 金大中氏なら北にたいして多少はやわらかい姿勢をとるのではないか、もしかしたら五 年もの国土の分断がすこしはゆるむかもしれない、手紙のやりとりや親族との再会もできるようになるかもしれない。（萩原遼『ソウルと平壤』）

以上のことから、「モシカスルト」は判断の裏付けとなる根拠の有無とは関係なく使われることが分かる。

#### 4.3 蓋然性の高さ

先行研究では「キット」、「タブン」、「モシカスルト」の順に事態成立の可能性が低



くなるとされてきた。しかし、次の「モシカスルト」は、むしろ事態成立の可能性が高い場面で使われている。

(42) 『保護者は、あの通りの石頭だし』『もしかすると虐待の張本人かもしれないから、協力が得られるはずはない』（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

(43) ようやく、浅川の心に希望が湧いた。ひょっとしたら、締め切りに間に合うかもしれない、そんな思いがふと胸をよぎった。（鈴木光司『リング』）

例文(42) (43)は、「保護者が虐待の張本人である」、「締め切りに間に合う」という事態の成立する可能性が「ある」ことを述べているのであり、決してその可能性が「低い」ことを述べているのではない。実際、この文を「タブン～ダロウ」で置き換えた場合に、必ずしも蓋然性が高く感じられるわけではない。

しかし、それでもやはり「キット～ダロウ」と置き換えた場合と比べると、可能性が低く感じられる。これは、当該の事態の成立について、「キット」がそれに信念をもった表現であるのに対し、「モシカスルト」は成立しない可能性も残した表現だからである。こうした違いが蓋然性の高さの違いとなって現れるのである。

#### 4.4 モシカシテとの違い

「モシカスルト」（「ヒョットスルト」）は、当該の事態が想定外のものであることを表す副詞である。しかし、「モシカシテ」（「ヒョットシテ」）という形式の場合は、このような想定がなくても使える。

(44) （何の想定もなく空を見て）モシカシテ明日は雨かもしれないなあ。

例文(44)において、「モシカシテ」は想定外ということよりも、事態の成立が不確実であることを表すことに重点がある。

ただし、「モシカシテ」は想定外のことを表さないわけではない。むしろ、「モシカシテ」は想定外のことを表す場面によく使われる。

(45) 3歳の時でわたしは忘れているけれどももしかして本当に火事を予言したのかもしれないわ（山岸凉子『汐の声』）

(46) 「よくボケても昔の事は覚えてっていると聞くわ おじいちゃん本当の事いっていたんだわ あれがおかかえ運転手ではなく津田家の息子と知っていたのね そしてたぶん彼が病人だという事も それに昨日おじいちゃんは公園にいたのだからもしか

してわたしが見た大家の車を見ているのかもしれない」(山岸涼子『パイド・パイパー』)

- (47) ひょっとして、「こいつ」はと、克久はそれまで考えてもみななかったことを考えたのは、赤い夕陽が並んだ団地の向こうに沈んでいこうとしている時だった。

ひょっとして、こいつは俺と張り合っているんじゃないか？(中沢けい『楽隊のうさぎ』)

- (48) センターに入ると、正面がレストランになっていた。ガラス張りなので、中の様子がよくわかる。浅川はここでも驚かされた。レストランの営業は八時で終わりだけれど、まだ半分ほどの席がうまっていたのだ。家族連れや、女の子だけのグループ。一体どういうことだ。浅川は首をひねった。この連中はどこから来たのだろう。不思議でならない。自分が今通って来たあの同じ道を通して、ここにいる人々がやって来たとはどうしても思えないのだ。ひょっとして、今通ってきたのは裏道で、本当はもっと他に明るく広い道があるのではないだろうか。(鈴木光司『リング』)

例文(45)は、当初3歳の時に火事を予言したとは信じていなかったが、あるきっかけからその可能性も否定できないと思うようになったことが述べられている。例文(46)は、初めおじいちゃんの話を利用していなかったが、実はおじいちゃんの話は本当だったのではないかと思うようになったことが述べられている。例文(47)は、それまでこいつが俺と張り合っているとは考えてもみななかったが、今はその可能性もあるのではないかと思に至るようになったことが述べられている。例文(48)は、今通ってきたのが裏道だとは思ってもいなかったが、実は裏道だったかもしれないと思うようになったことが述べられている。

先の例文(44)のような表現は、こうした想定外の意味が弱まって、事態成立の不確実を表すことに重点を移した表現であると考えられる。

さらに「モシカシテ」の特徴として、話し言葉に使われるということが挙げられる。共起する文末形式も、「カモシレナイ」や「デハナイカ」に限らない。

- (49) もしかして奈保子ちゃんも真実を告げるためわたし達をこの海へ呼んだのかしら... (山岸涼子『海の魚鱗宮』)

- (50) 「もしかして船の荷の中にわしの首みたいなものを見なかったかと聞いてるんだ！」(手塚治虫『鉄腕アトム』)

- (51) 『うそー！ それって、一種のプロポーズじゃない？ 本気でわたしと一緒に、これからの人生を送りたいの？ 昼も夜もずっと一緒に？ 嬉しい。でも、先生は、そんなにわたしのことを好きだったっけ？ 怪しいなあ。それとも、ひょっとして、そこにいる可愛い人を助けたいだけなのかな？』(貴志祐介『十三番目の人格 -

ISOLA - 』)

(52) 「マーくんちであそんできた」

「あらよかったわね」

「おやつ食べていいでしょ」

「うんいいわよ 冷蔵庫にプリンが... ちょっと待った!!! ひょっとして食べてきたんじゃないの?」

「そのようなじじつはいっさいございません」

「じゃあ口のまわりについてるチョコレートはなんなの!! ウソつきは政治家のはじまりです よそのおうちで何かいただいたらちゃんとママに言わなきゃダメでしょ」

(臼井儀人『クレヨンしんちゃん 』)

もう一つの特徴として、「モシカシテ」と「モシカスルト」には、次のような違いが見られる。

(53)a. モシカシテ今日中にできなくても構わないかもしれません。

b. モシカスルト今日中にできなくても構わないかもしれません。

(54)a. モシカシテ今日中にできなくても、私の方は構いません。

b. \*モシカスルト今日中にできなくても、私の方は構いません。

例文(53)のように、「カモシレナイ」に係る場合は、「モシカシテ」も「モシカスルト」もともに使うことができる。しかし、例文(54)のように、「テモ」に係る場合は、「モシカシテ」は使えるが、「モシカスルト」は使えない。このことから、「モシカシテ」には「モシ」や「タトエ」に近い用法のあることが分かる。<sup>1)</sup>

#### 4.5 アルイハ、モシカスルト、ヒョットスルト

次に、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の違いについて分析する。

例文(55)~(57)を比べると、「アルイハ」「モシカスルト」「ヒョットスルト」の順に事態の成立する可能性が低くなるように感じられる。

(55) アルイハ明日は雨が降るカモシレナイ。

---

1) 次の「ヒョットシテ」は、「たら」との共起から明らかなように「モシ」の意味を表す。

(i) 私とキム・チョンヒは急いで旅館を抜け出し、素早くバスに乗り込みました。ひょっとして駅で一味とバツタリ会ったら最後です。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)

- (56) モシカスルト明日は雨が降るカモシレナイ。
- (57) ヒョットスルト明日は雨が降るカモシレナイ。

しかし、これらの副詞の違いは蓋然性の高さにあるのではなく、当該の事態の成立を想定外のものであると捉える強さの違いにあると考えられる。すなわち、当初の想定と発話時点での考えとの隔たりが、「アルイハ」「モシカスルト」「ヒョットスルト」の順に大きくなると考えられるのである。

まずはじめに「アルイハ」について見る。「アルイハ」には接続詞の用法と副詞の用法とがある。

- (58) 英語アルイハ中国語のできる人が就職に有利です。
- (59) 冒頭にも言ったように、刑務官の服務規定には、「死刑の執行をする」という項目はない。けれども、刑務官研修所を出て刑場付設の拘置所あるいは刑務所に採用された刑務官は、死刑囚舎房担当、あるいは死刑の執行官の役が割り当てられるという不運にあう。（大塚公子『死刑執行人の苦悩』）
- (60) 全面裏切り戦略をもった個体からなる集まりがあるとしましょう。この個体は生物の種かひとりひとりの人間か、あるいは組織であるかもしれません。（西山賢一『勝つためのゲームの理論』）
- (61) 資料を探すように支持はしたものの、私は本当に出てくるかどうかは五分五分だと思っていた。おそらくすでに処分されているか、あるいは関係者の一人である郡司元課長が次の職場である東大に持って行ってしまっているのではないかと考えていた。（菅直人『大臣』）
- (62) この心持ちを最初アレキサンドリアあたりへ輸入したのは、あるいはインドからであったかも知れない。（和辻哲郎『古寺巡礼』）
- (63) あるいは、これが届く頃にはおまえは私の葬式のためにこちらへ出向いているかもしれません。（吉本ばなな『TUGUMI』）

例文(58) (59)の「アルイハ」は接続詞の例である。接続詞の「アルイハ」は「マタハ」と置き換えができ、「AアルイハB（アルイハC）」の形で「AとB（とC）のうちどちらか（どれか）一つ」の意味を表す。例文(60) (61)の「アルイハ」は接続詞の用法であるとも考えられるし、副詞の用法であるとも考えられる例である。例文(62) (63)の「アルイハ」は副詞の例である。副詞の「アルイハ」は「マタハ」と置き換えができず、「カモシレナイ」や「デハナイカ」と共起して、当該の事態の成立する可能性もありうるという意味を表す。

例文(62) (63)は、当該の事態の成立する可能性もありうると述べているにすぎず、特にそれを想定外のものとして述べているわけではない。このように、「アルイハ」には想定外という意味があまり強く感じられない。そのため、例文(64)のように、当該の事態の成立が思いもよらないものであるという文脈では、「アルイハ」は使いにくい。

- (64)a. 実のところ、九十九パーセントまで、小栗はこの話を信じていなかった。しかし、心の奥にほんの少し、ひょっとしたらという思いがあった。ひょっとして、本当だったら……、世界にはまだ現代科学の及ばない領域があるのかもしれない。その危険性がある限り、いくら理性が働きかけたところで、肉体は拒否するに決まっている（鈴木光司『リング』）
- b. 実のところ、九十九パーセントまで、小栗はこの話を信じていなかった。しかし、心の奥にほんの少し、モシカシタラという思いがあった。モシカシテ、本当だったら……。
- c. <sup>2</sup> 実のところ、九十九パーセントまで、小栗はこの話を信じていなかった。しかし、心の奥にほんの少し、アルイハという思いがあった。アルイハ、本当だったら……。

例文(65)では、「ヒョットスルト」と「モシカスルト」が使われている。両者を比較すると、「ヒョットスルト」の方が想定外という意味が強く感じられる。

- (65) 千尋が一礼して生徒相談室を出て行くのを待って、浩子は、あらためて二枚の絵を見直してみた。同一人物が短いインターバルで描いたにしては、その二枚はあまりにもかけ離れていた。
- ひょっとすると、一枚目の絵は、千尋以外の人物が描いたのだろうか？ もしかすると誰かと絵を交換したのかもしれない。いたずら好きの高校生ならば、やりそうなことである。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）

この例文で、「ヒョットスルト」は「一枚目の絵は、千尋以外の人物が描いたのだろう」という判断が、思いもよらない事態であることを強調している。これを「モシカスルト」に置き換えると、思いもよらない事態であるという意味が弱くなる。ゆえに「ヒョットスルト」は「モシカスルト」に比べて事態の意外性を強く表すことが分かる。<sup>1)</sup>

1) 「ヒョットスルト」を使用する状況として、森田（1989）では「予期されない事態」が生起する時に用いられると記述され、小学館辞典編集部（1994）では「予想外の事態」が偶然起こるときに用いられると記述されている。

「ヒョットスルト」は、次の「ヒョットシタ」、「ヒョンナ」、「ヒョッコリ」などの表現とつながっていると思われる。これらの表現は、いずれも当該の事態が思いがけない出来事であることを表している。

- (66) 薫代はそれに対して、育ちがわるい。通信簿では、正子に対照して、なにもかもダメ。色白で上背もあり、本人がその気になれば、正子よりもずっと際立つだけの美貌をそなえているのに、ひょっとした動きの端が細かくて、なんとはなしに貧相である。（養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』）
- (67) 凝った比喻。美女ないし金持ちの出現。自分を「凡庸」と評する主人公。そして彼はやっぱりひょんなことから外国へ旅に出る。（『中日新聞』1999.6.1 夕刊）
- (68) そこへ、ひょっこり友達があらわれ、家の者から事情を聞いた。（福田健『ユーモア話術の本』）

こうした表現との関係からも、「ヒョットスルト」が想定外という意味を強く押し出す表現であることが分かる。

以上、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」は、当該の事態を想定外のものと捉える強さに違いのあることが分かった。当該の事態を想定外のものとする強さは、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の順に強くなる。

## 5. 第6章のまとめ

本章では、想定外の事態の成立可能性を認める「モシカスルト」について考察した。一般に「モシカスルト」は、「キット」や「タブン」に比べて蓋然性の低いことを表す表現であるとされてきた。その場合、「モシカスルト」が「カモシレナイ」と共起することが根拠として挙げられてきた。しかし、「カモシレナイ」は他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す表現であり、蓋然性の低いことを表す表現ではない。したがって、「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表す表現ではないことが分かる。また、「モシカスルト」は事態成立の可能性に疑いを残す「デハナイカ」とも共起する。これにより、「モシカスルト」は当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す表現であることが明らかとなる。

一般に「モシカスルト」と「カモシレナイ」は副詞と文末形式の違いはあるものの、ともに蓋然性の低いことを表す表現であるとして同じように扱われてきた。これに対し、本研究では、「モシカスルト」は当該の事態が想定外のものであることを表すという点で、

「カモシレナイ」や「デハナイカ」と区別されることを明らかにした。

最後に「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の違いについて分析し、当該の事態を想定外のものと捉える強さに違いのあることを指摘した。当該の事態を想定外のものとする強さは、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の順に強くなる。

以上、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」についてまとめておく。

アルイハ、モシカスルト、ヒョットスルト：（モダリティ副詞）

当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、発話時点において当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す

（想定外の意味は「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の順に強くなる）

## 第7章 ドウモ、ドウヤラ

### 1. はじめに

本章では、「ヨウダ」や「ラシイ」と共起関係にある「ドウモ」、「ドウヤラ」について考察する。

従来、「ドウモ」と「ドウヤラ」は類義語として捉えられてきた。たとえば、『日本語大辞典』では次のように記述されている。

どう-も □(副) いかにも。まったく。まことに。[用例] すみません。 どうしても。[用例] わからない。 どこことなく。[用例] 変だ。 □(感)((俗語)) 「どうもありがとうございます」「どうもすみません」などの略で、あいさつに使う。[用例] やあ、 、 。

どう-やら〔如何やら〕(副) なんとか。やっとのことで。anyhow [用例] ついて来た。 なんだか。どうも。likely [用例] 雨らしい。

このうち、「ドウヤラ」の □ は、その意味記述に「ドウモ」を使用している。これは二語が類義語として意識されていることを示す。事実、例文(1)の「ドウヤラ」は「ドウモ」に置き換えることができる。

- (1)a. 月はまだ出ていなかったが、星明りで、ぼんやりあたりが濃淡のむらをつくり、むろん、遠くの稜線などは、はっきり見分けることができた。どうやら、岬の先端あたりに、向っているらしい。(安部公房『砂の女』)
- b. 月はまだ出ていなかったが、星明りで、ぼんやりあたりが濃淡のむらをつくり、むろん、遠くの稜線などは、はっきり見分けることができた。ドウモ、岬の先端あたりに、向っているらしい。

ここで問題となるのは、「ドウモ」と「ドウヤラ」ではどのような意味の違いを表すのかということである。以下、この点について分析していく。



## 2. 先行研究

「ドウモ」と「ドウヤラ」について記述した先行研究には、証拠性の観点から説明したものと、不確定性の観点から説明したものとがある。本節ではこの二つの説について整理し、不確定性の観点から説明した方がよいことを指摘する。

## 2.1 証拠性

はじめに証拠性の観点から説明した研究を見る。<sup>1)</sup> 益岡(1991)は、「ヨウダ」と「ラシイ」の意味分析をする中で、これらの文末形式と共起関係にある「ドウモ」と「ドウヤラ」について言及し、「「どうやら」や「どうも」は、「何らかの観察や情報からすると」といった意味で用いられていると言ってよさそうである」(益岡1991:119)と述べ、これらの副詞との共起を根拠に、「ヨウダ」と「ラシイ」は「判断をもたらす手がかりが現実世界での観察や情報にある」(益岡1991:118)ことを表す表現であると説明している。

宮崎(1991)は、「ヨウダ」と「ラシイ」には確信度が分化しないということを説明する中で「ドウモ」と「ドウヤラ」について言及し、「「ドウヤラ」「ドウモ」は、確信の弱さを表現するものではないということに注意しなければならない。むしろ、話し手の判断が、恣意的にではなく、証拠に基づいて、ある程度客観的に成立してしまうことを表明するものである。あるいは、そう判断せざるをえない状況が存することを表明すると言ってもよい」(宮崎1991:49)と説明している。

しかし、益岡や宮崎の研究は、「ドウモ」、「ドウヤラ」の意味を「ヨウダ」、「ラシイ」の意味とは独立に規定していないという点で問題がある。<sup>2)</sup> こうした説明は、副詞の意味を文末形式の意味に求め、文末形式の意味を副詞の意味に求めるといった具合に循環論に陥る危険性がある。しかも、両者の違いは副詞であるか文末形式であるかの違いでしかなくなってしまう。益岡(1991)では、両者の関係が「モダリティの核要素」(文末形式)と「モダリティの呼応要素」(副詞)として捉えられているが、こうした捉え方は両者の意味を同じであるとする危険性を含んでいる。

これに対し、本研究では副詞と文末形式は互いに独立した意味を担っていると考える。その証拠に、「ドウモ」、「ドウヤラ」は、「ヨウダ」と「ラシイ」だけでなく、「カモシレナイ」や「デハナイカ」とも共起する。これらの表現に一定の共起関係のあることは確かであるが、古語の「ナ～ソ」のように呼応と呼べるほどの密接な関係があるわけでは

1) 森本(1994:96)も、二語を「証拠性機能(evidential function)」を担う表現であると説明している。

2) 木下(1999:10)にも同様の指摘がある。ただし、木下は益岡の記述自体には従っている。

ない。<sup>3)</sup>

益岡や宮崎の研究でもう一つ問題となるのは、「ドウモ」と「ドウヤラ」が蓋然性の意味を表す場合しか考察の対象となっていない点である。この場合、仮に「ドウモ」と「ドウヤラ」が証拠性で説明できたとしても、「ドウモ不安だ」とか「ドウヤラ生きている」のように蓋然性に関わらない用法との関連が説明しにくくなってしまう。結局、益岡や宮崎の研究では、「ドウモ」と「ドウヤラ」の一部の用法の説明に終わっているのである。

## 2.2 不確定性

次に不確定性の観点から説明した研究を見る。田中(1983:84)は、不確実述語における「ドウモ」、「ドウヤラ」、「ナンダカ」の違いについて、「「どうやら」「どうも」は、不確実ながらも認定が成り立つということを表すことで不確実述語文の作用構造を顕勢化し、「何だか」は事態の側における漠然たる合致の程度を表すことで同じくその対象構造を顕勢化する、といった事情が観察されるのである」と説明した。

森本(1994)は、「どうもこの音楽は単調だ」などの文の観察から、「「どうも」は、話し手にとって、明確にしにくい、特定するのが難しい感情を表すものと考えられよう。この感情は、実際の状況では、疑いや怪しむ気持ちなどとしても現れる」(森本1994:84)と説明した。しかし、そのすぐ後では、「このような性格づけでは、「どうも」の示す文との共起制限を説明するに十分ではない」(森本1994:84)として、ラシイ構文との共起関係を根拠に、証拠性の観点で説明している。一方、「ドウヤラ」については、「基本的には「どうも」と同じメカニズムにかかわり、「どうも」と同じように、確実性には不足であるが、不明から明確への動きで特定される」(森本1994:93)と説明した。結局、森本は「ドウモ」と「ドウヤラ」について、不確実性と証拠性の二つの観点から考察した末に、「証拠性による正当化で特徴づけられる」(森本1994:95)として、「証拠性が関与的でないことで特徴づけられ」(森本1994:95)る「サゾ」、「マサカ」、「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイニ」と区別した。

森本の説明は議論が散漫であるが、整理するとおおよそ次のようになる。「ドウモ」は事態が不確実であると感じる話し手の感情を表す。「ドウモ」がラシイ構文と共起するのは、「ドウモ」もラシイ構文も、その推論が話し手の認知的経験に基づいており、かつ確信の不足ということで共通するためである。「ドウヤラ」は「ドウモ」と違って形容詞文に現れにくく、不確実な事態が確実なものとして捉えられるようになるという変化を表す。しかし、確実性に不足しているという点で「ドウモ」と共通する。ラシイ構文で

3) 益岡(1991:119)は、「ドウモ」と「ドウヤラ」は「ハズダ」、「ダロウ」、「ニチガイナイ」、「カモシレナイ」とは共起しないとし、木下(1999:10)は「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」とは共起しないとした。

は「ドウモ」と「ドウヤラ」の意味はほとんど変わらない。

森本の説明は、「ドウモ」と「ドウヤラ」の区別を試みた点と、ラシイ構文以外に使われる「ドウモ」、「ドウヤラ」を分析の対象にした点に特徴がある。しかし、結局のところ、「ドウモ」の意味とラシイ構文の意味の違いが不明確なままに終わっている。

一方、「ドウモ」、「ドウヤラ」の用法を推量以外にも広く対象に入れて分析した研究に森田（1989）がある。森田は「ドウモ」、「ドウヤラ」の基本義を定め、これが文脈によって異なる意味となって現れる様子を次のように説明した。

#### どうも 副 感動

事柄の実体・真実がじゅうぶんにつかめないにもかかわらず、なぜそうなるのかその理由がはっきりわからないため、しかと断定できない推量的気分を残した言い方に用いる。

〔分析〕 □(1)「どうも……ない」と否定と呼応して、“どのようにしても”の意を表す。対象となる事柄が話し手の意志を超えた存在であるため、残念だが思ったとおりになっていかないのである。（マイナス結果）

「なぜ先生が怒ったのか、どうもよくわからない」（中略）

(2) この気持ちが進んでくると、“理由はわからぬが何となく、どことなくそう感じられてくる”自発感情を表すようになる。

「どうも気になってしょうがない」（中略）

(3) さらに、なぜそうなるのかを訝がる気持ちが強まれば、自発的懷疑となる。

「どうも変だ」「どうも不思議だ」（中略）

(4) これに話し手の推断を下せば「どうも……ようだ／らしい／かもしれない」「事実はどうかわからぬが、何となくそのように思われる”推量表現となる。「どうやら」に近づく。

「こんなに皆の成績が悪いところを見ると、どうも問題がむずかしすぎたようだ」（中略）

(5) はっきりと判断に決着が下されれば、“事実はどうあれ、どっちにしても、いずれにしても……だ”の断定となる。

「どうも仕方がない。あきらめましょう」「数学はどうも苦手だ」（中略）

□ この“いずれにしても”の気持ちが弱まって、固定した一つの言葉として慣用化すれば、もはや感動詞である。

「どうも有難うございました」「どうもご馳走さま」（後略）（森田1989：779-780）

どうやら 副

その対象の真の姿がはっきりとはわからないものの、およそその輪郭がつかめてきた状態。

**分析** (1) ほぼ実現が間違いないと感ずる推定判断。

伝聞したことや、その対象に現れたおよその状態変化から、たぶん間違いなく生起するとして下す推量的判断である。「どうやら……らしい／どうやら……しそうだ／どうやら……ようだ」などの助動詞で受けるところからもわかるように、外面の様子や状況変化のきざしから将然状態にあることを察知する推定判断。確信的とまではいかない。その一手手前の、かなりあいまいな手さぐり状態である。そのため「はっきりとは断定できないが何となく／何だか／どことなく／たぶん」といった気分が生まれる。

「この分ではどうやら雪になりそうだ」（中略）

(2) ほぼ間違いなく実現に至ったと感ずる判断（「どうやら……た」の形で）

完全な状態に漕ぎつけるまでに種々の紆余曲折を経たが、ほぼ完了のめどが立った、もしくは、やっと完了した段階に用いる。したがって「どうにか辛うじて」、「何とか」といった気分を伴う。なかなか進まなかったその事柄が次第に終了段階に近づいて、完了の一手手前の、かなりはっきりした状態に達したことを察知する気持ちである。

「さんざん苦労したあげく、どうやら仕事に目鼻がついてきた」（後略）（森田 1989：781）

森田の記述のように、「ドウモ」、「ドウヤラ」は推量文以外に使われる用法もある。こうした用法を除外して分析すると、「ヨウダ」、「ラシイ」との違いが不分明となってしまうのである。

先行研究では、「ドウモ」、「ドウヤラ」の意味について、事態が不確定であることを表すとか、はっきりわからないことを表すといった指摘がなされている。この意味は「ドウモ」、「ドウヤラ」が蓋然性を表す場合にも、そうでない場合にも共通して現れる。そのため、これらの副詞は不確定性の観点から説明した方がよいと考えられる。<sup>1)</sup>

### 3．命題とモダリティ

本節では「ドウモ」と「ドウヤラ」に命題副詞としての用法と、モダリティ副詞として

---

1) 先行研究でいう「不確実」は、本研究でいう判断確定性の「不確定」に相当する。

の用法のあることを指摘し、蓋然性の用法の場合には判断の蓋然性を表すことを明らかにする。

### 3.1 ドウモ

はじめに「ドウモ」について分析する。「ドウモ」には次のような用法がある。

- (2) 「どうもなりやしないさ……どうにもならないから、地獄の罰なんじゃないか！」  
(阿部公房『砂の女』)
- (3) お松は袖を攪まへられながら、ぢつと耳を澄まして聞いてゐる。直き傍のやうに聞こえるかと思ふと、又さうでないやうにもある。慥かに四疊半の中だと思はれる時もあるが、又どうかすると便所の方角のやうにも聞える。どうも聞き定めることが出来ない。(森鷗外『心中』)
- (4) この桜の園まで借金のかたに売られてしまうのだからね、どうも不思議だと云って見た処で仕方がない……。 (林芙美子『放浪記』)
- (5) 「どうも己は女の人に物を言ふのは、窮屈でならないが、なぜあの奥さんと話をするのを、少しも窮屈に感じなかつたのだらう。それにあの奥さんは、妙な目の人だ。あの目の奥には何があるか知らん。」(森鷗外『青年』)
- (6) 底のほうから、けずり取ってみると、斜面にそって砂は流れ落ちるが、勾配はいぜんとして元のままである。ドウモ砂には、安定角というようなものがあるラシイ。

例文(2)の「ドウモ」は「ドウモ～ない」の形をとり、「どのようにも」の意味で使われたものである。例文(3)の「ドウモ」は、「どのようにも」の意味で解釈することもできるし、「どういうわけか」の意味で解釈することもできる。例文(4)(5)の「ドウモ」は、「どのようにも」の意味では解釈できず、「どういうわけか」という意味となる。特に例文(4)のように「不思議だ」、「変だ」という表現と結びつくと、事態の成立を訝がる気持ちが強くなる。例文(6)の「ドウモ」は、推量判断を表す「ラシイ」と共起して、当該の事態の成立が断定はできないが成立しそうであることを表している。以上のように「ドウモ」には様々な用法がある。

次に、これらの「ドウモ」が命題に属するのか、モダリティに属するのかを主観性判定テストによって分析する。

#### 〔1〕否定の焦点テスト

- (7)a. あのことは[ドウモなりやしない]わけではなく、[ドウニカなる]のである。
- b1. あの音は[ドウモ聞き定めることが出来ない]わけではなく、[ドウニカ聞き定

めることができる]のである。

- b2. \*あの音は[ドウモ聞き定めることが出来ない]のではなく、[タシカニ聞き定めることができない]のである。
- c. \*あのことは[ドウモ不思議]なのではなく、[タシカニ不思議]なのである。
- d. \*己は[ドウモ女の人に物を言ふのは窮屈でならない]のではなく、[タシカニ女の人に物を言ふのは窮屈でならない]のである。
- e. \*砂には[ドウモ安定角というようなものがあるラシイ]ではなく、[タシカニ安定角というようなものがあるラシイ]のである。

例文(7a)の「ドウモ」は否定の焦点となるが、例文(7c)～(7e)の「ドウモ」は否定の焦点とはならない。例文(7b)の「ドウモ」は、「どのようにも」の意味で解釈した場合には否定の焦点となるが、「どうしても分からないが」の意味で解釈した場合には否定の焦点とはならない。以下、疑問の焦点テスト、文代名詞化テストでも同じことが言える。

## 〔2〕 疑問の焦点テスト

- (8)a. あのことは[ドウモなりやしない]のですか、[ドウニカなる]のですか。
- b1. あの音は[ドウモ聞き定めることが出来ない]のですか、[ドウニカ聞き定めることができる]のですか。
- b2. \*あの音は[ドウモ聞き定めることが出来ない]のですか、[タシカニ聞き定めることができない]のですか。
- c. \*あのことは[ドウモ不思議]なのですか、[タシカニ不思議]なのですか。
- d. \*あなたは[ドウモ女の人に物を言ふのは窮屈でならない]のですか、[タシカニ女の人に物を言ふのは窮屈でならない]のですか。
- e. \*砂には[ドウモ安定角というようなものがあるラシイ]のですか、[タシカニ安定角というようなものがあるラシイ]のですか。

## 〔3〕 文代名詞化テスト

- (9)a. A：あのことはドウモなりやしないよ。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝ドウモなりやしないこと)
- b. A：あの音はドウモ聞き定めることが出来ません。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝あの音は(ドウモ)聞き定めることが出来ないこと)
- c. A：あのことはドウモ不思議だよ。

B：それは本当ですか。

(それ=あのことが不思議なこと)

d. A：己はドウモ女の人に物を言ふのは窮屈でなりません。

B：それは本当ですか。

(それ=女の人に物を言ふのが窮屈でならないこと)

e. A：砂にはドウモ安定角というようなものがあるラシイよ。

B：それは本当ですか。

(それ=砂には安定角というようなものがあること)

#### 〔4〕連体修飾テスト

(10)a. それは[ドウモなりゃしない]ことだ。

b. それは[ドウモ聞き定めることが出来ない]音だ。

c. \*それは[ドウモ不思議]な出来事だ。

d. \*それは[ドウモ女の人に物を言ふのが窮屈]な人だ。

e. \*それは[ドウモ安定角というようなものがあるラシイ]砂だ。

例文(10a)の「ドウモ」は連体修飾成分となるが、例文(10c)～(10e)の「ドウモ」は連体修飾成分とはならない。もし言えとすれば、「それはドウモ安定角というようなものがあるラシイと思われる砂だ」のように、「と思われる」を読み込んでいるためである。「と思う」を読み込まない場合は不適格な文となる。例文(10b)の「ドウモ」は、「どのようにも」の意味で解釈した場合には連体修飾成分となるが、「どうしても分からないが」の意味で解釈した場合には連体修飾成分とはならない。

#### 〔5〕過去テスト

(11)a. あのことはドウモなりゃしなかった。

b. あの音はドウモ聞き定めることが出来なかった。

c. あのことはドウモ不思議だった。

d. 己はドウモ女の人に物を言ふのは窮屈でならなかった。

e. 砂にはドウモ安定角というようなものがあるラシカッタ。

この場合、例文(11a)および例文(11b)で「どのようにも」の意味で解釈した場合には、「ドウモ」が自然に過去文の中に収まる。一方、例文(11c) (11d)および例文(11b)で「どうしても」の意味で解釈した場合、「ドウモ」は過去文の外で機能する。たとえば例文(11c)は、「どうしても、あのことは不思議だった」の意味となり、「ドウモ」は発話

時点での話し手の心的態度を表す。また、例文(11e)は小説などの語り物で使われる表現で、「ドウモ安定角というようなものがあるラシイ」と推量判断する視点と、そういう状況が過去にあったことを執筆時点から眺める視点とが合わさった表現である。

以上、「ドウモ」は「どのようにも」の意味を表す場合には命題副詞として機能し、「どういうわけか」の意味を表す場合と、当該の事態の成立が断定はできないが成立しそうであることを表す場合にはモダリティ副詞として機能することが分かる。

### 3.2 ドウヤラ

次に「ドウヤラ」について分析する。「ドウヤラ」には次のような用法がある。

- (12) 主人の収入で一家六人がドウヤラこうやら過ごすことができる。
- (13) どうやら活気のある生活を取り戻した。(林芙美子『放浪記』)
- (14) 底のほうから、けずり取ってみると、斜面にそって砂は流れ落ちるが、勾配はいぜんとして元のままである。どうやら砂には、安定角というようなものがあるらしい。(安部公房『砂の女』)

例文(12)の「ドウヤラ」は、「どうにか辛うじて」の意味で使われた例である。例文(14)の「ドウヤラ」は、「ドウヤラ～タ」の形で、当該の事態が完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表している。この場合も、「どうにか辛うじて」その状態になったという意識で使われている。例文(15)の「ドウヤラ」は、推量判断を表す「ラシイ」と共起して、当該の事態が完全にではないがほぼ実現しそうであることを表している。以上のように「ドウヤラ」には様々な用法がある。

次に、これらの「ドウヤラ」が命題に属するのか、モダリティに属するのかを主観性判定テストによって分析する。

#### 〔1〕否定の焦点テスト

- (15)a. 一家六人は[ドウヤラ過ごしている]のではなく、[贅沢に過ごしている]のである。
- b. \*私は[ドウヤラ活気のある生活を取り戻した]のではなく、[完全に活気のある生活を取り戻した]のである。
- c. \*砂には[ドウヤラ安定角というようなものがあるラシイ]ではなく、[本当に安定角というようなものがあるラシイ]のである。

#### 〔2〕疑問の焦点テスト



- (16)a. 一家六人は[ドウヤラ過ごしている]のですか、[贅沢に過ごしている]のですか。
- b. \*あなたは[ドウヤラ活気のある生活を取り戻した]のですか、[完全に活気のある生活を取り戻した]のですか。
- c. \*砂には[ドウヤラ安定角というようなものがあるラシイ]のですか、[本当に安定角というようなものがあるラシイ]のですか。

〔3〕文代名詞化テスト

- (17)a. A：一家六人はドウヤラ過ごしています。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝ドウヤラ過ごしていること)
- b. A：私は苦労のあげく、ドウヤラ活気のある生活を取り戻しました。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝活気のある生活を取り戻したこと)
- c. A：砂にはドウヤラ安定角というようなものがあるラシイよ。  
B：それは本当ですか。  
(それ＝砂には安定角というようなものがあること)

〔4〕連体修飾テスト

- (18)a. それは[ドウヤラ過ごせるだけの]収入だ。
- b. #私は[ドウヤラ取り戻した]活気のある生活に満足している。
- c. \*それは[ドウヤラ安定角というようなものがあるラシイ]砂だ。

例文(18b)自体は適格であるが、その場合は「ドウヤラ」が「どうにか辛うじて」の意味で使われていることに注意したい。「ドウヤラ～タ」の形で当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表す用法としては不適格となる。

〔5〕過去テスト

- (19)a. 主人の収入で一家六人がドウヤラ過ごした。
- b. ドウヤラ活気のある生活を取り戻した。
- c. 砂にはドウヤラ安定角というようなものがあるラシカッタ。

例文(19a)のように「どうにか辛うじて」の意味の場合、「ドウヤラ」は過去文の中に収まる。次の例も同様である。

- (20) 世間。どうやら自分にも、それがぼんやりわかりかけて来たような気がしていました。(太宰治『人間失格』)

一方、例文(19b)は過去文ではなく事態の変化した結果を表す文となり、「ドウヤラ」は発話時点の話し手の心的態度を表す。また、例文(19c)は小説などの語り物で使われる表現で、「ドウヤラ安定角というようなものがあるラシイ」と推量判断する視点と、そういう状況が過去にあったことを執筆時点から眺める視点とが合わさった表現である。次の例も同様である。

- (21) トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあって、どうやら漁業組合の集合所らしかった。(安部公房『砂の女』)

以上、「ドウヤラ」は「どうにか辛うじて」という意味の場合には命題副詞として機能し、「ドウヤラ～タ」や「ドウヤラ～ラシイ」の形で使われ、当該の事態が完全にではないがある基準点にほぼ近づいたと判断したことを表す場合には、モダリティ副詞として機能することが分かる。

#### 4. 共起制限

本節では蓋然性を表す「ドウモ」、「ドウヤラ」の共起制限について考察する。「ドウモ」、「ドウヤラ」には次のような共起制限がある。

- (22)a. 明日はドウモ雨が降る { ヨウダ/ラシイ/カモシレナイ/(降りソウダ) }。  
 b. \*明日はドウモ雨が降る { /ニチガイナイ/ダロウ }。  
 (23)a. 明日はドウヤラ雨が降る { ヨウダ/ラシイ/カモシレナイ/(降りソウダ) }。  
 b. \*明日はドウヤラ雨が降る { /ニチガイナイ/ダロウ }。

まず共起しない場合から見る。「ドウモ」、「ドウヤラ」は当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す「ダ/」、話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す「ニチガイナイ」とは共起しない。そのため、事態の成立を確実とする認識や推量判断には使えないことが分かる。また、「ドウモ」、「ドウヤラ」は証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表す「ダロウ」とも共起しない。

い。

これに対し、「ドウモ」、「ドウヤラ」は、二つの事態に共通の属性があることを根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す「ヨウダ」や他者からの情報や外界の現象を根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す「ラシイ」、および兆候や様相の現れを表す「ソウダ」とは共起する。

- (24)a. 「……これも、何かで読んだ話だが……ほら、最近は、大変な家出ばやりだろう？……生活環境の悪さのせいかと思っていたら、どうも、そればかりじゃないらしいんだなあ……（後略）」（阿部公房『砂の女』）
- b. どうも、そればかりじゃないヨウなんだなあ……
- c. どうも、そればかりじゃなさソウなんだなあ……
- (25) 安定した感情の波動と声の抑揚からすると、どうやら、陶子のようだったので、由香里はほっとした。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (26) 「ふっ どうやらとんでもない事件に首をつっこんじまったらしい！ オレはもう平和な日常にはもどれぬかもしれん!!」（臼井儀人『クレヨンしんちゃん 』）
- (27) これで横綱への夢もどうやら実現しそうです。（NHK総合「大相撲夏場所千秋楽」1999.5.23）

次の例文は確言形と共起している。しかし、話し手の意識としては「君はドウモ詩を知らないヨウダね」のように言っていると考えられる。

- (28) 「君は、どうも、詩を知らんね。それじゃあ、臍物のアントは？」（太宰治『人間失格』）

さらに、「ドウモ」、「ドウヤラ」は、「カモシレナイ」や「デハナイカ」と共起することもある。「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性が共存することを表す表現であり、「デハナイカ」は当該の事態の成立可能性に疑いを残した表現である。

- (29) どうも、私はこの頃恐怖症にかかっているのかも知れない。人がみなおそろしく思える。（林芙美子『放浪記』）
- (30) どうやら、これまで彼が見ていたものは、砂ではなくて、単なる砂の粒子だったのかも知れない。（安部公房『砂の女』）
- (31) 「どうもこのガイド嬢、知識不足ではないのか。それとも新米なのかも知れない」（大前研一『悪魔のサイクル』）

- (32) 去年は、金融危機の年だったが、今年はどうも、安全保証（軍事問題）の年になるのではないか。（副島隆彦『副島隆彦の World Watch』）

こうした共起関係は、多少不自然ではあるが「ドウモ明日は晴れるカモシレナイなあ」のように話し言葉などで使われる。<sup>1)</sup> こうした共起に不自然さが残るのは、「ドウモ」と「ドウヤラ」は認識確定性の「不確定」、「カモシレナイ」と「デハナイカ」は事態確定性の「不確定」という違いがあるためであると考えられる。

## 5. ドウモ、ドウヤラの意味

### 5.1 ドウモ

次の例文は「ドウモ」が推量判断以外の用法で使われた例である。

- (33) 合計十二銭也を払って、のれんを出ると、どうもありがとうと女中さんが云ってくれる。（林芙美子『放浪記』）
- (34) 箱の中で暴れる猫の声がやかましく、気になった。今宵一ト夜の命だと思うと可哀想でもあるが、どうも致方ないとも思われた。（志賀直哉『濠端の住まい』）
- (35) それを書いたのは他へ縁付いている細君の一番上の姉で、祖母の病気が今度はどうも面白くないと書いてあった。（志賀直哉『好人物の夫婦』）
- (36) 俳句でもつくってみたくなるけれど、どうも、川柳もどきになってしまう。（林芙美子『放浪記』）
- (37) 「どうも変だと思って、電話をかけて見たらやっぱりそうだった」（志賀直哉『山科の記憶』）

例文(33)は「ありがとう」という感動詞を強調する用法で、本研究の考察対象からは除外する。例文(34)の「ドウモ（～ない）」は、「どのようにも」の意味で、猫を助けようにもどうにもならないことを表している。これに対し、例文(35)～(37)の「ドウモ」は、話し手の認識が不確定で事態の成立がはっきりしないことを表す。例文(35)の「ドウモ」は、「祖母の病気が面白くない」という事態がはっきりそうとは認識できず、不確定であることを表している。例文(36)の「ドウモ」は「どういうわけか」の意味で、川柳もどきにな

1) 益岡（1991）と木下（1999）は、「ドウモ」、「ドウヤラ」は「カモシレナイ」と共起しないとしている。一方、森田（1989）は「ドウモ」が「カモシレナイ」と共起するとしている。

る理由がはっきりしないことを表している。例文(37)の「ドウモ」は「何となく」の意味で、何となく変だと感じるが、はっきり変であるとは断言できないことを表している。

こうした不確定の意味を持つ「ドウモ」が推量文に使われると、認識が不確定ながらも一つの帰結を導いたことを表すようになる。

- (38) 「どうも人ちがいらしい 思いつめているせいかどうかどうもだれでもベムに見えちゃうんだ」(手塚治虫『鉄腕アトム』)
- (39) 「ね! ゆみちゃん、私は、どうも赤ん坊が出来たらしいのよ、厭になっちゃうわ……」(林芙美子『放浪記』)
- (40) 「俺はやはり腸捻転になったのだろう」と蠣太が苦しげに云った。「どうもそうかと思われます」と安甲が答えた。(志賀直哉『赤西蠣太』)

この「ドウモ」は、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが不確定であることを表す。そこから様相の現れがはっきりしないため確証はできないが、そのように推量できるといふ婉曲的な表現となる。このとき、その推量判断が話し手によって慎重になされたものであるというニュアンスが伴う。

さて、先行研究では「ドウモ」が証拠性の観点から説明されることがあった。これに対し、本研究では証拠性の意味は「ヨウダ」や「ラシイ」に帰せられるもので、「ドウモ」事態はあくまでも認識の不確定を表す表現であると考え。次の例文において証拠性の意味を表すのは「ドウモ」ではなく「ヨウダ」である。

- (41) 「どうも制服の意味が昔と違ってきているようだ。以前は『制服を着てこんなことをしては恥ずかしい』という役割を果たしていたが、今は『制服なら何でも許される』という“甘えの服”になっている。地下鉄構内で“地ベタリアン”をしているのは、セーラー服の子たちで、私服を着てやってるのは見たことがない」(『中日新聞』2000.2.14 夕刊 投書・40代男性)

この文で、制服の意味が昔と違ってきている根拠となっているのは、点線で示した部分である。こうした場面で「ドウモ」を使うと、根拠に基づきながらも慎重で婉曲的な推量判断となる。

例文(42)は認識文で、女子工員が旋盤で切削をしているようには見えないということを述べた文である。この場合にも、「ドウモ」は認識の不確定性を表しているのみで、証拠性は表していない。

- (42) 奥のほうでは数名の女子工員が、旋盤の周りにいる。しかし、どうも切削をして  
いるようには見えない。やっぱり、金属の切り粉がほとんど見当たらないのである。  
(李英和『北朝鮮秘密集会の夜』)

ここで「切削をしているようには見えない」の根拠となっているのは、「やっぱり、金属の切り粉がほとんど見当たらないのである」という文である。「ドウモ」は、それだけの根拠では当該の事態の成立が確証できないという話し手の慎重な態度を表している。

## 5.2 ドウヤラ

次の例文は「ドウヤラ」が推量判断以外の用法で使われた例である。

- (43) 毎日の生活断片をよくうったえる秋田の娘さんである。古里から十五円ずつ送金してもらって、あとはミシンでどうやら稼いでいる、縁遠そうな娘さんなり。いい人だ。(林芙美子『放浪記』)
- (44) 学校は欠席するし、学科の勉強も、すこしもしなかったのに、それでも、妙に試験の答案に要領のいいところがあるようで、どうやらそれまでは、故郷の肉親をあざむき通して来たのですが、(後略)(太宰治『人間失格』)
- (45) 自分は受験勉強もろくにしなかったのに、どうやら無事に入学できました。(太宰治『人間失格』)
- (46) 現在になって、私はどうやら両親を遊ばせておける位になったのだけれども、その日その日を働いて日銭をもうけて来ている人達なので、仲々私につきそって隠居をして来ようとはしない。(林芙美子『放浪記』)

例文(43)~(46)の「ドウヤラ」は、当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表している。例文(43)は、秋田の娘さんが期待するほどの稼ぎではないが、それでもなんとか暮らしていけるだけの収入はあることを表している。例文(44)は、完璧に両親を欺いてきたわけではないが、それでも辛うじて成功してきたことを表している。例文(45)(46)は、いずれも時間的推移のある文脈で使われ、紆余曲折の末、期待する結果に近づいたことを表している。

こうした意味を持つ「ドウヤラ」が推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表す。そこから様相の現れが不完全であるため確証はできないとする、話し手の慎重で婉曲的な推量態度を表すようになる。

- (47) (桑田がベンチからマウンドに向かうのを見たアナウンサーの発話)  
 桑田がどうやら抑えとしてマウンドに向かいます。(中京テレビ「プロ野球中継 巨人 - 横浜」1999.9.7)
- (48) 女はそのままの姿勢で、ランプの火を見つめながら、いつまでも作ったような笑いをうかべている。どうやら、わざとえくぼを見せつけているのだと気づき、思わず体を固くする。(安部公房『砂の女』)
- (49) 「癡人」は、どうやらこれは、喜劇名詞のようです。(太宰治『人間失格』)

例文(47)は、眼前描写文と推量文の中間的なものである。アナウンサーは眼前の事態を述べているが、その事態の実現を完全なものとは捉えきれていない。しかし、現場の状況やこれまでの経緯から、桑田がマウンドに行くという事態の実現をほぼ間違いないと判断しているのである。例文(48) (49)は推量文の例で、「わざとえくぼを見せつけている」とか、「「癡人」は喜劇名詞である」ということが、確証はできないがほぼ確実であることを表している。この場合も証拠性の意味は「ヨウダ」、「ラシイ」に帰せられると考えられる。

## 6. 第7章のまとめ

本章では、認識の不確定と関わる「ドウモ」、「ドウヤラ」について考察した。先行研究では、二語を証拠性の観点から説明したものと、不確定性の観点から説明したものとがある。これについて、本研究では証拠性の意味は文末の「ヨウダ」、「ラシイ」に帰せられるもので、「ドウモ」、「ドウヤラ」はあくまでも不確定性の意味を表すことを主張した。たしかに、蓋然性を表す場合だけを見ていると、「ヨウダ」、「ラシイ」との共起により証拠性の意味があるように見える。しかし、「ドウモ」、「ドウヤラ」が蓋然性以外の意味を表す場合をも視野に入れると、二語が不確定性の意味を表すことが分かる。

「ドウモ」は話し手の認識が不確定で事態の成立がはっきりしないことを表し、文脈によって「どういうわけか」、「何となく」などの意味を表す。これが蓋然性を表す文脈において、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが不確定であることを表す。

一方、「ドウヤラ」は当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表し、文脈によって「どうにか辛うじて」、「何とか」などの意味を表す。これが蓋然性を表す文脈において、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表す。

以上、「ドウモ」、「ドウヤラ」についてまとめておく。

ドウモ：（命題副詞）

「ドウモ～ない」の形をとり、「どのようなにも」の意味を表す

ドウモ：（モダリティ副詞）

話し手の認識が不確定で事態の成立がはっきりしないことを表す

（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが不確定であることを表す）

ドウヤラ：（命題、モダリティ副詞）

当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表す

（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表す）



## 第8章 タシカ

### 1. はじめに

本章では想起を表す「タシカ」について考察する。「タシカ」は当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認する表現である。この点で「タシカ」は、未知推量に使われる「キット」、「タブン」、「オソラク」と区別される。

### 2. 先行研究

先行研究で「タシカ」について分析したものに、森田（1989）、小林（1992）、森本（1994）がある。以下、この順に見ていくことにする。

森田（1989）は、副詞の「タシカ」と形容動詞の「タシカダ」に共通する意味を「ある対象や事柄に対し、なんらかの拠り所をもとに、それが間違いなく成り立つという判断」（森田1989：638）であるとした。このうち副詞の「タシカ」については、「「確か」は、事柄の成立を、ある客観的な根拠をもとに“間違いなく”と判断する働きを持つ。そこで、話し手自身の記憶による事実を受けると、“判断の根拠は記憶なので不確かだが、その記憶が正しいとすればその事柄は間違いなく成立するはずだ”という含みを持った表現となる」（森田1989：639）と説明した。

小林（1992）も、「タシカ」と「タシカニ」を類義語として分析した。このうち「タシカ」については次のように説明している。

「確か」も「確かに」と同じように、先に述べられている事、あるいはこれから述べようとする事が確かなものであると、確認する表現意図をもっている陳述副詞である。しかし、「確かに」がコトを問題にするのに対して、「確か」は話し手の発話態度を問題にしているのである。つまり、「確かに」が、そのコトが確実であるということを確認するのに対して、「確か」は、話し手の判断の根拠となったそのコトの記憶を確認するものである。その結果、逆に、話し手の判断があやふやであることを示し、コトの内容が不確かであることを表現することになる。（小林1992：10）

- 確か ・話し手の判断の根拠となった記憶を、「確かだ」と自らに確かめようとする表現。結果的に、不確かであることを示す。
- ・意向、命令、依頼、願望には使わない。

(小林1992:15)

小林の研究の特徴は次の2点にある。第1点は、「タシカ」は話し手の発話態度を問題にし、「タシカニ」はコトを問題にするというように、二語に主観性の違いを認めた点である。第2点は、「述べようとするのが確かなものであると、確認する表現意図をもっている」という説明にあるように、「確認」という意味のあることを指摘した点である。この「確認」という意味は、二語を「タブン」や「カクジツニ」などの副詞から区別する特徴となっている。<sup>1)</sup>

最後に森本(1994)について見る。森本は「話し手の主観を表す副詞」の下位分類として、「タシカニ、タシカ、アキラカニ、モチロン、ジツハ、ジジツ」を一つのグループにまとめている。これらの副詞の特徴は、「文の命題内容についての真理判断にかかわっており、文の内容に認識的なコメントをつける」(森本1994:108)ことにある。このうちの「タシカ」については、「「たしか」は、文の内容が話し手の心の中に知識/情報として蓄えられている場合だけ妥当であることが、一貫して示される」(森本1994:111)

- 1) 本研究では考察の対象としていないが、「タシカニ」は次のように談話上の前提を受け、それに同意する意味を表す。

- (i) 「あの女には不思議な魔力があるんですね」

「確かにあれは魔力ですなあ！ 僕もそれを感じたから、もうあの人には近寄るべからず、近寄ったらば、此方が危いと悟ったんです。」(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

次の例文は小説の冒頭部分に使われたものである。このように「タシカニ」が前提なしで使われると唐突な感じがする。この場合、つくみがいかにもいやな女の子だったのか説明したくだりを省略することにより、読み手を突然物語世界に引き込む効果をもたらしている。

- (ii) 確かにつくみは、いやな女の子だった。(吉本ばなな『TUGUMI』)

こうした効果をもつのも、「タシカニ」が前提を踏まえ、それが確実であることを確認した表現であることの証拠となっている。

こうした意味をもつ「タシカニ」は、前提を踏まえない「カクジツニ」と区別される。

- (i)a. 運がいいとか悪いとか人は時々口にするけど そうゆうことって確かにあるとあなたを見ててそう思う(さだまさし『無縁坂』)

- b. \*運がいいとか悪いとか人は時々口にするけど そうゆうことってカクジツニあるとあなたを見ててそう思う(さだまさし『無縁坂』)

- (ii)a. 私はもちろん私の死において彼等に会い得ることを確実には知っていない。(三木清『人生論ノート』)

- b. \*私はもちろん私の死において彼等に会い得ることをタシカニは知っていない。

「タシカニ」は他者の考えや話し手自身の当初の考えに間違いのないことを表す表現であり、「カクジツニ」は失敗や間違いをすることなく正確に事態が成立することを表す表現である。

として、「たしか」は、英語でいうなら、‘ If I remember correctly ’ に近い。日本語で説明的にいいかえると、「わたしの記憶する限りでは」のようになるだろう」（森本1994：111）と説明した。

以上の先行研究に指摘されている通り、本研究でも「タシカ」は話し手の記憶による判断を表すと考える。

### 3．命題とモダリティ

次に主観性判定テストによって、「タシカ」が命題副詞なのかモダリティ副詞なのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。

#### 〔 1 〕 否定の焦点テスト

- (1) \* 太郎は [ タシカ10時に寝る ] のではなく、[ カナラズ10時に寝る ] のである。

#### 〔 2 〕 疑問の焦点テスト

- (2) \* 太郎は [ タシカ10時に寝る ] のですか、[ カナラズ10時に寝る ] のですか。

#### 〔 3 〕 文代名詞化テスト

- (3) A：太郎はタシカ10時に寝ますよ。

B：それは本当ですか。

（それ＝10時に寝ること）

（それ タシカ10時に寝ること）

#### 〔 4 〕 連体修飾テスト

- (4) \* 花子は [ 太郎がタシカ10時に寝る ] 習慣であったことを思い出した。

#### 〔 5 〕 過去テスト

- (5) 太郎は昨日はタシカ10時に寝た。

例文(5)において、「タシカ」は「夜10時に寝た」という過去の部分ではなく、その外側の無形のモダリティ形式「」に係っていく。これは「太郎は昨日はタシカ夜10時に寝たハズダ」において、「タシカ」が「ハズダ」と共起するのと同じことである。次の例文で

も、「タシカ」は「閉めといた」ではなく「ハズダ」と共起している。

- (6) 「おや、鍵がはずれてる。たしか閉めといたはずだがな」(東海テレビ「妖怪人間ベム」2000.8.22)

以上のテストの結果、「タシカ」はモダリティ副詞であると判定される。

#### 4. 共起制限

次に「タシカ」がどのような文末形式と共起するのを見る。まず、文の種類との共起関係を見ると、「タシカ」は推量文、意志文、命令文、勧誘文には使えず、想起文に使われることが分かる。

- (7)a. \*明日はタシカ学校に行くだろう。(推量文)  
 b. \*明日はタシカ学校に行くぞ。(意志文)  
 c. \*明日はタシカ学校に行け。(命令文)  
 d. \*明日はタシカ一緒に学校に行こう。(勧誘文)  
 e. 明日はタシカ一緒に学校に行くはずだ。(想起文)

次に、「タシカ」がどのような文末形式と共起するのを見る。

- (8)a. 昨日はタシカ雨が降った{ /ハズダ }。  
 b. \*昨日はタシカ雨が降った{ カモシレナイ/ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ/ダロウ }。

これにより、「タシカ」は複数の事態の成立可能性がともに存在することを表す文や、推量を行なう文、証拠不足のため当該の認識や推量判断が確認できないことを表すには使えないことが分かる。

次は「タシカ」が「 」と共起して想起を表す例である。例文(11)は「ラシイ」と共起しているが、この「ラシイ」は伝聞を表していることに注意したい。

- (9) それは確か、つぐみが中学に入ったばかりの時だった。(吉本ばなな『TUGUM I』)  
 (10) 真白な名札が立って、それには MISS のついた苗字が二つ書いてあったっけ。...

...そう、その一方が確か MISS SEYMORE という名前だったのを私は今でも覚えている。(堀辰雄『美しい村』)

- (11) 本多は足をゆるめ、手帳をとりだしてひろげた。「鶴原さんの前の下宿の住所ですが、事務所の者に聞いたのです。たしかこの辺らしいのですが」(松本清張『ゼロの焦点』)

また、「タシカ」は「ハズダ」と共起することもある。

- (12) 高校もほとんど行っていないため、由香里の化学の知識は、ほとんどないに等しかったが、体操の選手が、よく鉄棒の前に手をつけているのが、たしか炭酸マグネシウムだったはずだ。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)
- (13) 児玉は受け取った顧問料などで「たしか、ワリフドー(日本不動産銀行の割引債券)を買ったはずだが」と答えた。(魚住昭『特捜検察』)
- (14) 「金庫のなかにゆいごん状がたしかあるはずです」(手塚治虫『バンパイア 』)

「タシカ」と「ハズダ」の共起が多いのは、二語の持つ意味が互いに共鳴し合うためである。「ハズダ」の意味について詳しく研究したものに木下(1999)がある。木下は「ハズダ」の意味を、「命題が「推論」の結果ただ一つ導かれたことを表す。「推論」の際、「前提E」の存在が意識されている」(木下1999:101)と説明した。<sup>1)</sup> この「前提E」とは、「「推論」の際、例外的な事態については考慮しないという前提」(木下1999:99)のことを指す。たとえば「名古屋で8時に東京行の新幹線に乗れば、10時に東京駅に着くハズダ」という文の場合、「ハズダ」は途中で事故が起きたり、地震が発生したりするといった例外的な事態が生じない限り、名古屋で8時に東京行の新幹線に乗れば、10時に東京駅に着くということを表す。一方、「タシカ」は想起文において当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認する表現で、話し手の記憶に間違いがなければその事態が成立するということを表す。この記憶に間違いがなければという気持ちだが、例外的な事態が生じない限りという「ハズダ」の意味と馴染むのである。

従来指摘されているように、「タシカ」は不確かな記憶による判断を表す。事実、確実な記憶による場合は「タシカ」を使うことができない。

- (15) (昨日雨が降ったことをはっきり記憶している場合に)

---

1) 木下が「ハズダ」全体をモダリティ表現と捉えているのに対し、本研究ではモダリティに属するのは「ダ」の部分だけで、「ハズ」の部分は命題に属すと考える。

- a. \*タシカ昨日は雨が降った。
- b. {ゼツタイニ/マチガイナク/タシカニ} 昨日は雨が降った。

「タシカ」による判断は、不確かな記憶による判断であるため、判断の蓋然性は確かな記憶による場合に比べて低くなる。この場合、共起する文末形式の違いによって記憶の確かさに違いが現れる。すなわち、「          」と共起すると記憶に自信があるように感じられるが、「ハズダ」を使うとその気持ちが相対的に低くなる。また、「ヨウナ気ガスル」や「ヨウニ思ウ」と共起すると、記憶の確かさに少し自信がないというニュアンスが加わる。

- (16)a. タシカ昨日は雨が降った。
- b. タシカ昨日は雨が降ったハズダ。
- c. タシカ昨日は雨が降った{ヨウナ気ガスル/ヨウニ思ウ}。

次の例文は、文末に「ヨウナ心モチガスル」、「ヨウニ思ウ」が使われているため、話し手の記憶が正確ではないという意味になる。

- (17) こんな事は確か何かの草紙に、書いてあったような心もちがする。(芥川龍之介『好色』)
- (18) その厨子の上には経文と一しよに、阿弥陀如来の尊像が一体、端然と金色に輝いていました。これは確か康頼様の、都返りの御形見だとか、伺ったように思っています。(芥川龍之介『俊寛』)

しかし、この場合にも話し手の気持ちとしてはその記憶が正しいものであると考えているのである。

## 5. タシカの意味

森田(1989)は、「タブン」と「オソラク」について説明した部分で、「タシカ」について次のような記述をしている。

(引用者注:「オソラク」と「タブン」は、)過去の事態に用いられれば不確かな記憶を表す「確か」と同じ意味になる。

「あれは恐らく一昨年の朝のことだったと思います」「たぶん去年の夏休みだったと

思うよ」など。

ただし、「確か」と違って、確認をする言い方を持たない。

「確かあなたは山田さんでしたね」を「恐らく／たぶん」に言い換えることはできない。（森田1989：374）

森田の説明によると、過去の事態について述べる場合には、「タシカ」と「タブン/オソラク」が置き換え可能であることになる。しかし、未知の事態に対して「タブン/オソラク」を使うのはよいが、話し手の記憶を思い出して述べる場合に「タブン/オソラク」を使うのは不自然であると思われる。

宮崎（1992）も想起を表す文として例文(19)を挙げている。

(19) 「図書館の休館日はいつですか？」「たぶん、月曜日だったと思います。」

（宮崎1992：例文(69)）

この文について宮崎は、「(69)の場合、「図書館ノ休館日八月曜日デアル」という情報は、話し手の知識として定着しておらず、あやふやな記憶を頼りにして、話し手は発話時に新たに判定を下しているのである」（宮崎1992：52）と説明している。しかし、宮崎の挙げた例文は、軽い話し言葉などで使われることはあるにしても、やはり不自然な表現である。「タブン」が発話時において新たに判定を下すというのは本研究と同じ考えであるが、その場合は「たぶん、月曜日だと思います」と言うと思われる。話し手自身の記憶をたどる場合は、それがあやふやな記憶であったとしても、「タシカ」を使った方が自然である。

以上のように、話し手自身の記憶による判断を行なう場合に、「タシカ」は普通に使われるが、「タブン/オソラク」は使いにくい。こうした違いは「タシカ」による判断のあり方と「タブン/オソラク」による判断のあり方が異なっていることを示している。すなわち、「タブン/オソラク」が話し手の知識にない未知推量を表すのに対し、「タシカ」は話し手の記憶による判断を表すという違いがある。実際、例文(20)に示すように「タシカ」は未知推量を表すことができない。

(20) 「知識（無理な運転をする 事故が起きる）」

a. 《 帰納推論 》（事故が起きたのを見て）

\* タシカ無理な運転をしたハズダ。

b. 《 演繹推論 》（無理な運転をしたのを見て）

\* タシカ事故が起きるハズダ。

また、「タシカ」は当該の事態が話し手の記憶に存在するものであるため常に既定的である。過去や現在の事態はもとより、未来の事態でもすでに予定として決まっていれば既定的である。話し手の記憶の中にあることであれば、事態の実現する時間にかかわらず「タシカ」を使うことができる。

- (21)a. 昨日はタシカ日曜日だったね。(過去の事態)
- b. 今日はタシカ日曜日だったね。(現在の事態)
- c. 明日はタシカ日曜日だったね。(未来の事態)

一方、「タブン/オソラク」は発話時点で初めて推論するため、これらの文に使うと不自然な文となる。

- (22)a. <sup>?</sup>昨日は{タブン/オソラク}日曜日だったね。(過去の事態)
- b. <sup>?</sup>今日は{タブン/オソラク}日曜日だったね。(現在の事態)
- c. <sup>?</sup>明日は{タブン/オソラク}日曜日だったね。(未来の事態)

以上の考察により、「タシカ」は当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す表現であることが明らかとなった。

## 6. 第8章のまとめ

本章では想起を表す「タシカ」について考察した。「タシカ」は当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す表現で、想起文に使われる。この「判断の根拠が記憶による」という特徴が、文脈によって記憶だから間違いないという意味になる場合もあれば、記憶だから間違っているかもしれないという意味になる場合もある。これによって、蓋然性は相対的に高くもなれば低くもなる。

以上、「タシカ」についてまとめておく。

タシカ：(モダリティ副詞)

当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す



## 第9章 マサカ<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

本章では否定副詞「マサカ」について考察する。<sup>2)</sup> 先行研究では、「マサカ」は可能性を否定する表現、あるいは否定推量を表す表現であるとされてきた。これに対し、本研究では可能性の否定や否定推量を表すのは文末の「ハズガナイ」や「マイ」などに帰せられるものであり、「マサカ」自体は当該の事態が想定外のものであることを表す表現であることを指摘する。

たしかに、「マサカ」は可能性を否定したり、否定推量をする場面で使われることが多い。

- (1) マサカ太郎が謝るはずがない。
- (2) マサカ太郎は謝るまい。

しかし、単に当該の事態が「想定外」のものであることを表す場面でも使われる。

- (3) マサカ太郎が謝るとは思わなかった。
- (4) マサカ太郎が謝るとは知らなかった。

したがって、「マサカ」自体が可能性の否定や否定推量を表すわけではないことが分かる。

### 2. 先行研究

「マサカ」については、国語辞典類に「可能性の低いことを表す」との記述がある以外は、ほとんど分析されていないのが現状である。たとえば、『新明解国語辞典第四版』では、「一抹の危惧（キグ）の念はあるけれども、その可能性はまずなかりうという主体

---

1) 本章は杉村（1998b、1998c、2000a）をもとに加筆修正したものである。

2) 副詞の中には、「マサカ」、「ケッシテ」、「ゼンゼン」、「メッタニ」、「スコシモ」のように常に否定文において使われるものがある。これを否定副詞と呼ぶことにする。

の判断を表す」と記述されている。研究論文においては、否定表現や推量表現を扱った中に辞書と変わらない程度の簡単な記述が見られるくらいである。以下、「マサカ」について比較的詳しく説明した辞書の記述を示す。

森田 (1988)

「真実である可能性、または実現の可能性のありそうなもののうちから、仮に一つを想定して、それが現実となる可能性を強く否定したい、あるいは否定しなければならない気持ちを表す」「対象の状態や自身の行為に対して否定的意見を加える表現であるから、多く打ち消し「ない」を後に伴い、意志や推量の言い方を要求する」

飛田・浅田 (1994)

「可能性が非常に低いという判断を表す。ややマイナスイメージの語。後ろに打消しや否定の表現を伴う述語にかかる修飾語になることが多い。

小学館辞典編集部 (1994)

「ある事態の生じる可能性を強く否定したり、実現することが意外だと思う気持ちを表わす」「打消しや反語の表現を伴って使われ、まったく意外である、容易には信じられないという気持ちを表わす」

Makino and Tsutsui (1995)

‘ The adverb masaka is used to express the speaker’s strong belief that an action or a state is not expected to become or to have become a reality. The action or the state is usually something that is not desirable for the speaker, but not always. ’

‘ The final predicate is either a thinking verb, a conjecture expression daro, or an expectation expression hazu, ( wake ni wa iku ) mai, and all take a negative form, as shown in Formation. ’

これらの研究をまとめると次のようになる。

1. 否定表現において使われる
2. 可能性の低いことを表す、可能性を強く否定する
3. 意外だという気持ちを表す

以下、「マサカ」は否定表現に使われ、「以外だ」という気持ちを表すが、「可能性の低いことを表す」とか「可能性を強く否定する」というのは「マサカ」自体の意味ではないことを明らかにする。

### 3. 命題とモダリティ

#### 3.1 主観性判定テスト

本節では、主観性判定テストによって、「マサカ」が命題副詞なのかモダリティ副詞なのかを分析する。以下のテストにおいて、命題副詞の場合は適格と判定され、モダリティ副詞の場合は不適格と判定される。比較の対象として、同じ否定副詞の「ケッシテ」と「ゼンゼン」も分析する。<sup>1)</sup>

##### 〔1〕否定の焦点テスト

- (5)a. \* 太郎は [ マサカ風邪を引かない ] のではなく、引くこともある。
- b. 太郎は [ ケッシテ風邪を引かない ] のではなく、引くこともある。
- c. 太郎は [ ゼンゼン風邪を引かない ] のではなく、引くこともある。

##### 〔2〕疑問の焦点テスト

- (6)a. \* 太郎は [ マサカ風邪を引かない ] のですか、引くこともあるのですか。

---

1) ときどき話し言葉で、「ゼンゼンおいしい!」のような言い方をする人を見かけるが、現在のところ一般的には不自然な用法とされている。「ゼンゼン」が肯定文に使われる現象について、梅林(1994:110)は、「すでに用法に変化が見えてきている以上、現状を見て、具体的にどういう表現が行われているのかを把握するところから始めなければならない」としており、本研究でもこうした態度は必要であると考え。ただし、以下のような実例のあることを認めながらも、いまだ熟した表現とはなっていないため、本研究では一般に言われるように「ゼンゼン」を否定副詞として扱うことにする。

- ( ) 現に年をとつたバツグの皿は若いチャツクの皿などとは全然手ざはりも違ふのです。(芥川龍之介『河童』)
- ( ) 「ねえ秘密の場所のクロッカスの球根どうなったか見に行った?」「あ! ううんぜんぜん忘れていたわ」(山岸涼子『パニユクス』)
- ( ) 中学のときから“不良”というレッテルはもっていました。そのころ、身体はぜんぜん小さかった。(鎌田慧『ドキュメント屠場』)
- ( ) 「ダメだなア君たちは ボクなんか注射ぐらいぜんぜん平気。痛くないのさ」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)
- ( ) これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。(芥川龍之介『羅生門』)

- b. 太郎は[ ケッシテ風邪を引かない ] のですか、引くこともあるのですか。
- c. 太郎は[ ゼンゼン風邪を引かない ] のですか、引くこともあるのですか。

〔3〕 文代名詞化テスト

- (7)a. A : 太郎はマサカ風邪は引かないだろう。  
B : それは本当ですか。  
(それ = 風邪を引かないこと)  
(それ マサカ風邪を引かないこと)
- b. A : 太郎はケッシテ風邪を引かないだろう。  
B : それは本当ですか。  
(それ = ケッシテ風邪を引かないこと)  
(それ 風邪を引かないこと)
- c. A : 太郎はゼンゼン風邪を引かないだろう。  
B : それは本当ですか。  
(それ = ゼンゼン風邪を引かないこと)  
(それ 風邪を引かないこと)

〔4〕 連体修飾テスト

- (8)a. \* 太郎はマサカ風邪を引かない人です。
- b. 太郎はケッシテ風邪を引かない人です。
- c. 太郎はゼンゼン風邪を引かない人です。

〔5〕 過去テスト

- (9)a. \* 太郎はマサカ風邪を引かなかった。
- b. 太郎はケッシテ風邪を引かなかった。
- c. 太郎はゼンゼン風邪を引かなかった。

以上のテストにより、「マサカ」はモダリティ副詞、「ケッシテ」と「ゼンゼン」は命題副詞であることが分かる。

3.2 主観性の違い

先行研究では、「マサカ」と「ケッシテ」を主観性の点で近いものと捉える立場と、離れているとする立場とがある。この点に関して、「マサカ」はいずれの研究においても主観的な副詞として位置付けられているが、「ケッシテ」の位置付けは揺れている。そこで、

ここでは「ケッシテ」の位置付けを概観しながら、「マサカ」との主観性の違いを見ていきたい。<sup>1)</sup>

工藤(1983)は、「ケッシテ」の位置付けに関して、例文(10)~(12)を根拠にして以下のように説明している。

- (10) {たいして / <sup>?</sup>けっして}おもしろくない話
- (11) cf.けっして{おもしろくはない話 / おもしろいとは言えない話}
- (12) きっと{たいして / <sup>?</sup>けっして}おもしろくないだろう。

「けっして」はクローズ性の弱い連体句に収まりにくいし、また叙法副詞「きっと」と共存するには、重複の感が強すぎるだろう。「けっして」は「たいして」等よりは「まさか・よもや」の方に近いのである。(工藤1983:190-191)

これについて、原(1992)は工藤の指摘を一応認めつつも、「ところが、動詞が連体修飾句になる場合は、“決して”を用いることができる」(原1992:76)と指摘した。しかし、「ケッシテ」は動詞に限らず形容詞が連体修飾成分となる場合にも使える。その証拠に、「ケッシテ安くない学費」、「ケッシテ苦くない薬」は自然な表現である。したがって、「ケッシテ」が「マサカ」に近いとする工藤の説明は修正が必要となる。

一方、北原(1975:31-32)は、「君の意見を決して受け入れない人は...」のような表現が可能であるのも、「決して」が陳述修飾成分に属するものではないからである」として、「ケッシテ」を客観・主観の中間的なものとした。たしかに、北原の指摘の通り「ケッシテ」は連体修飾成分となる。

- (13) 日本から朝鮮に帰国した人はおよそ十万人。私の友人、知人も何人も帰国している。十万人という数はけっして少くない数字である。(萩原遼『ソウルと平壤』)
- (14) 消費者への損害補償の仕組みの制度化も、けっして無視できない問題である。(新藤宗幸『行政指導 官庁と業界のあいだ』)

---

1) 従来の陳述論において、「ケッシテ」は陳述副詞として位置付けられていた。たとえば、時枝(1950)は、「オソラク」が「ダロウ」という辞の部分修飾するのと同様に、「ケッシテ」も「ナイ」という辞の部分修飾するため、陳述副詞に属すとした。また、渡辺(1949)は、「ケッシテ」の係り方は「決して開け・ない、決して寄せつけ・ない、決して跳んで歩か・ない」ではなく、「決して・開けない、決して・寄せつけない、決して・跳んで歩かない」であるとして、「決して」は、被修飾文節の詞にかかるのみでなく、同時にそれを否定する事を要求し、そのかかり方は否定辞に及んである」(渡辺1949:3)と説明し、陳述副詞の一つであるとした。これは「ケッシテ」と共起する否定の「ナイ」が陳述部分であるとされたためである。

さらに、過去文の中にも収まる。

- (15) 「地縛霊はいないのかな。」  
 柊が笑って言ったが目は決して笑っていなかった。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)
- (16) 「アヒンサーおまえはちゃんとルールを守った けっして一度も右手を使わなかった 反則もしなかった」(手塚治虫『ブッダ 』)

しかも、次のような従属句にも入る。

- (17) しかし今、知った。はっきりと言葉にして知ったのだ。決して運命論的な意味ではなくて、道はいつも決まっている。(吉本ばなな『満月 キッチン2』)
- (18) 人との間にとったスタンスを決してくずさないくせに、反射的に親切が口をついて出るこの冷たさと素直さに、私はいつでも透明な気持ちになった。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)
- (19) もう決して眠れずに夢の余韻に苦しむひとりきりの夜明けだ。いつも、その頃に目が覚めるのだ。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)

これらの従属句は、南(1974、1993)のB類の従属句に相当する。南は文の構造を階層的に捉え、「ことがら(ディクトウム)的側面」から「陳述的(モドウス)側面」へ向かって、「描叙段階」、「判断段階」、「提出段階」、「表出段階」の四つの階層があるとし、それに対応して従属句にA～Cの三類があるとした。B類の従属句はこのうちの「判断段階」に属する。南(1993:211)では、「ケッシテ」は「トウテイ」、「メッタニ」、「ロクニ」、「ゼンゼン」と同じ「判断段階」に属すとされている。南(1974:133)は、「オソラク」、「タブン」、「マサカ」をC類の従属句(「提出段階」)に位置付けているが、これに比べて「ケッシテ」はより客観的な階層に位置していることになる。

こうした事実により、「ケッシテ」は「マサカ」に比べて客観的な性質を示すことが分かる。以下、「マサカ」が発話時点における話し手の心的態度を表すことを確認する。

### 3.3 話し手の心的態度

はじめに「マサカ」が話し手の心的態度を表すことを証明する。次の例文で「マサカ」と言っているのは話し手である。

- (20) 「僕もさう思つた。しかしまさか梁山泊の豪傑が店を出したと云ふわけでもあるまい。」(森鷗外『雁』)
- (21) 「まさかお父さんも羅両峯の畫がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」(芥川龍之介『玄鶴山房』)

一方、次の例文で「マサカ」と言っているのは、話し手(あるいは書き手)以外の人物である。しかし、これらの場合も話し手に準じて考えることができる。

- (22) 中には随分職人の真似をして、小店と云ふ所を冷かすのが面白いなどと云つて、不断も職人のやうな詞遣をしてゐる人がある。併しまさか眞面目に聲色を遣つて歩く人があらうとは、未造も思つていながつたのである。(森鷗外『雁』)
- (23) 部長は部下をリストラしようとしているが、マサカ自分がリストラされるはずはないと思っている。

例文(22)は小説などに見られる用法である。ここで「マサカ」と言っているのは「未造」であり、話し手ではない。しかし、この場合、作者は登場人物に感情移入することによって「マサカ」という気持ちを共有している。そのため、話し手に準じて考えることができるのである。例文(23)も「マサカ」と言っているのは、話し手ではなく「部長」である。しかし、ここで注意したいのは、「マサカ自分がリストラされるはずはない」全体が「と思っている」の引用文となっているということである。すなわち、この「マサカ」は引用文の話し手である部長の心的態度を表していることになる。したがって、この場合も「マサカ」は話し手の心的態度を表していると言することができる。

### 3.4 発話時点での心的態度

次に、「マサカ」が発話時点での心的態度を表すことを証明する。

- (24) 総理が辞任するとは聞いているが、マサカ本当に辞めるとは思わない。
- (25) 総理が辞任するとは聞いていたが、マサカ本当に辞めるとは思わなかった。

例文(24)の「マサカ」は、現在文に使われて、「総理が辞める」という事態が発話時点で思いもよらないことであることを表している。一方、例文(25)の「マサカ」は、「～とは思わなかった」という過去文に使われている。しかし、「マサカ」という気持ちを抱いたのは発話時点である。この文は発話時点から過去を振り返って、「今考えても、総理が辞めるなんて思いもよらないことであつた」ということを表している。次の例文も同様で、

発話時点以前には特に「看護婦さんに早とちりされる」とか「車が海へ落ちて中の人間が死ぬ」ということが頭に上っているわけではない。したがって、「マサカ」という気持ちも発話時点以前のものとは考えられない。

- (26) 「まさか看護婦さんに早とちりされるとは思わなかった。」(CBCテレビ「ザ・ドクター」1999.7.25)
- (27) 「まさか車が海へ落ちて中の人間が死ぬとは思わなんだ!!」(手塚治虫『七色いんこ』)

一方、次の「マサカ」はこの文の発話時点のものではない。しかも、話し手ではなく登場人物の心的態度を表している。例文(28)では「刑務官の人たち」が、例文(29)では「特務たち」が、その事態を思いもよらないものであると述べているのである。

- (28) 執行官を命じられた刑務官の人たちも、まさか今年は執行があるとは思っていなかったのではあるまいか。(大塚公子『死刑執行人の苦悩』)
- (29) 特務たちが吉林省の隅々まで探しまわったはずなのに、外事処だけはすっぱりと抜かしていたようだった。まさかここまで手を打っていたとは思ってもいかなかったのだろう。(康明道著 尹学準訳『北朝鮮の最高機密』)

例文(28) (29)の意味を考えると、例文(28)' (29)' に示されるような直接話法の文が基となっていてできていることが分かる。

- (28)' 刑務官の人たちは「マサカ今年は執行がないだろう」と考えていた。
- (29)' 特務たちは「マサカここまで手を打っていないだろう」と思っていた。

例文(28)' (29)' において「マサカ」は、発話時点における話し手の心的態度を表している。これが間接話法となったとき、例文(28) (29)として現れるのである。<sup>1)</sup> したがって、例文(28) (29)の「マサカ」も、例文(28)' (29)' の「マサカ」と同様に、引用文の中で発話時点における話し手の心的態度を表していると考えられる。

同様に、例文(30)の「マサカ」もこの文の発話時点におけるものではない。この場合、

---

1) 新藤(1983:150)は、「日本語のNPI(引用者注: Negative Polarity Item)は、同じ節内に明示的な否定語(「ない」等)の存在を要求する。明示的な否定語と同じ節内にしか生じない」という一般化を引き出した。その上で「マサカ」はその制約を破るものとして、更に詳しく調べてみる必要があると述べている。



「マサカないがしろにされることはあるまい」は「と考えました」の引用文の中に入るため、引用文の発話時点における心的態度を表していることが分かる。

- (30) 「田中総理が五億円の提供を受け入れられたことは、私にもかなり期待感を抱かせたことは事実でした。檜山社長の頼みごとを受け入れた以上、まさかないがしろにされることはあるまいと考えました。(後略)」(魚住昭『特捜検察』)

次に、例文(31)～(34)の「マサカ」の違いについて考える。これらの文の「マサカ」は、いずれも発話時点における話し手の想定外の気持ちを表している。

- (31) 総理は辞任すると言っていたが、マサカ本当に辞めるはずがなかった。  
 (32) 総理は辞任すると言っていたが、マサカ本当に辞めるとは思わなかった。  
 (33) 総理は辞任すると言っているが、マサカ本当に辞めるはずがない。  
 (34) 総理は辞任すると言っているが、マサカ本当に辞めるとは思わない。

例文(31)において総理は実際には辞めていない。この場合、話し手はもともと「総理は辞めない」と思っており、発話時点で改めて「総理が辞める」ということが想定外の事態であることを確認している。例文(32)では実際に総理が辞めている。この場合、「総理が辞める」ことは考えもしなかったことであると、発話時点において述べている。例文(33)(34)では総理はまだ辞めていない。この場合、「総理が辞める」ことは発話時点において想像もつかない事態であることを表している。

これに関して、次のような許容度の違いが観察される。<sup>1)</sup>「？」のついた例文は言えそうだという人もいるであろうが、他の例文と比べると許容度が落ちる。

- (35) 彼が会社を辞めるとは聞いていたが、マサカ本当に辞めるとは思わなかった。  
 (36) <sup>?</sup>彼が会社を辞めるとは聞いていたが、マサカ本当に辞めるとは思わない。  
 (37) <sup>?</sup>彼が会社を辞めるとは聞いているが、マサカ本当に辞めるとは思わなかった。  
 (38) 彼が会社を辞めるとは聞いているが、マサカ本当に辞めるとは思わない。

「～とは聞いていたが」の後は、「その通りになった/ならなかった」のように確定した事態を述べるのが自然である。一方、「～とは聞いているが」の後は、「その通りになる

---

1) 例文(35)～(38)は、名古屋大学研究生(現大学院日本言語文化専攻)の李欣怡さんによるものである。

だろう/ならないだろう」のように未確定の事態を述べるのが自然である。

以上、「マサカ」が発話時点における話し手の心的態度を表すことを明らかにした。

#### 4. 共起制限

本節では「マサカ」の共起制限について考察する。「マサカ」は同じ否定文でも、(A)のように共起する場合と(B)のように共起しない場合とがある。

##### (A) マサカ～ナイダロウ、マイ(真偽判断)

マサカ～トハ思ワナイ、トハ思ワナカッタ、トハ知ラナカッタ(思考・知識)

マサカ～ワケニハイカナイ、モノカ、ワケガナイ、ハズガナイ(道理)

##### (B) \*マサカ～シナイ、デハナイ(断定)

\*マサカ～シナイ(意志)

\*マサカ～シタクナイ(願望)

\*マサカ～スルナ、シナイデクレ(命令・依頼)

\*マサカ～スルベキデハナイ、シナイハウガイイ(当為)

\*マサカ～シテホシクナイ(希求)

\*マサカ～ない(存在)

従来、「マサカ」は否定推量を表すとされてきた。森本(1994)は、「その、推量されたことが起こる/起こったというのは、不可能であるという、話し手のコメントを表す」(森本1994:72)と定義し、「話し手の側の推量的態度という特徴をこのグループのほかの副詞<sup>1)</sup>と共有する」(森本1994:73)と説明した。たしかに、「マサカ」は話し手にとって未知の事態を推量する文脈にも使われる。

- (39) 「田中総理が五億円の提供を受け入れられたことは、私にもかなり期待感を抱かせたことは事実でした。檜山社長の頼みごとを受け入れた以上、まさかないがしろにされることはあるまいと考えました。(後略)」(魚住昭『特捜検察』)

1) 「このグループのほかの副詞」とは、「タブン」、「オソラク」、「サゾ」、「キット」、「カナラズ」、「ゼツタイ」、「ヒョットシタラ」を指す。

- (40) 「まさかあなたはブツダの命をねらってるのではないでしょうねっ」(手塚治虫『ブツダ』)

しかし、次の文において、「マサカ」は当該の事態が話し手の考えもしなかった出来事であることを表しているにすぎず、否定推量を表しているわけではない。例文(41)でも、「マサカ」は「ニチガイナイ」とではなく「考えていなかった」と共起していると考えられる。その証拠に、この文に「キット」を付け加えると、「キット[マサカ突然自分を死が襲ってくるとは考えていなかった]ニチガイナイ」となり、「マサカ」が「考えていなかった」と共起していることが明らかとなる。

- (41) 孫は処刑された七月十七日の朝、まさか突然自分を死が襲ってくるとは考えていなかったにちがいない。(大塚公子『死刑囚の最後の瞬間』)
- (42) まさか、同じ朝鮮同胞の人たちに私の心を踏みにじられるとは夢にも思わなかった。(朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』)
- (43) 一方、まさか謀られたとは知らぬ青年は、いつものようにテーブルの前に座って飲んだくれて管を巻いていた。(桐生操『本当は恐ろしいグリム童話』)
- (44) あの症状こそ潜伏期を経過しての、天然痘の初期状況であったのだが、まさか自分がそんな病気にかかっているとは思ってもよらなかった。(鈴木光司『リング』)

こうした事実により、本稿では「マサカ」を「当該の事態が想定外のものであることを表す表現」と考える。この想定外という意味が、推量や道理を表す文脈において、「当該命題の成立する可能性を否定しようとする話し手の強い心的態度」(杉村1998c: 85)となって現れるのである。<sup>1)</sup>

ところで、「マサカ」は「ダ/」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」とは共起しないという性質がある。

- (45)a. マサカ明日は雨が降らないダロウ。  
 b. マサカ明日は雨が降る {マイ/ハズガナイ/ワケニハイカナイ/トハ思ハナイ}。  
 c. \*マサカ明日は雨が降らない { /カモシレナイ/ニチガイナイ/ヨウダ/ラシイ}。

例文(45b)は否定の「ない」が命題の外にあり、事態が想定外のものであることを表すため

1) 「当該命題の成立する可能性を否定する」という機能が、「マサカ」自体の意味ではないのではないかという指摘は、名古屋大学(現大阪大学)の木下りか氏(個人談)による。

適格となる。一方、例文(45c)は否定の「ない」が命題の中に入り、想定外の意味とならないため不適格となる。残る例文(45a)は「マサカ明日は雨が降るダロウとは思わない」の意味で使われているため適格な文となる。

森本(1994)など、先行研究では「マサカ」を否定推量の表現と捉えるものがある。しかし、「ダロウ」は証拠不足のため当該の認識や推量判断が確認できないことを表すものであり、推量を表す表現ではない。したがって、「ダロウ」との共起関係を根拠にして「マサカ」が否定推量を表すということは成り立たなくなる。むしろ、「マサカ」は「ダロウ」と共起した場合、当該の事態の成立が想定外で確認できないことを表すと考えた方が適切である。

以上のように考えると、「マサカ」が先の(B)の文に使えない理由が説明できる。(B)の文は、否定文ではあるが何らかの想定について述べた文ではない。そのため、「マサカ」を使うことができないのである。次の例文には(B)の形式が現れているが、「マサカ」は文末の「ノデハナイダロウカ」と共起しているため、自然な文として容認できるのである。

- (46) 彼はマサカ私と結婚シタクナイんじゃないだろうか。
- (47) 父はマサカ私に結婚シテホシクナイんじゃないだろうか。

なお、(B)の文でも「ハ」で取り立てると適格となるとの指摘がある。<sup>1)</sup>

- (48) マサカ今さら海外に行って、もう一度外国語の勉強などしたくはない。
- (49) マサカまだ18にもならない娘をたぶらかすようなことはしないでくれ。
- (50) マサカまたうちの娘を誘惑してほしくはない。

しかし、これらの表現は次のような意味を表しており、文面には現れていない(A)の形式と共起していると考えられる。

- (48)' マサカ今さら海外に行って、もう一度外国語の勉強などしようとは思わない。
- (49)' マサカそんなことするとは思わないけど、まだ18にもならない娘をたぶらかすようなことはしないでくれ。
- (50)' マサカもうしないと思うけど、またうちの娘を誘惑してほしくはない。

---

1) 例文(48)~(50)は、杉村(1998c)の査読者によるものである。

以下、「マサカ」との比較のため「ケッシテ」と「ゼンゼン」についても論じておく。「ケッシテ」は、先の(A)、(B)のうち存在の「ない」以外とは共起するが、存在の「ない」とは共起しない。たとえば、本田(1981a、1981b)は、形容詞の「ない」と「ケッシテ」は共起しないとした。<sup>1)</sup>

- (51) \* 仕事をする気が決して無い。(本田1981a: 例文(14a))
- (52) \* そういうことに使う予算は決してなかった。(本田1981a: 例文(14b))
- (53) \* 貧乏を根絶する望みは決してない。(本田1981a: 例文(14c))
- (54) \* ここにはあなたの読むような本は決して無い。(本田1981a: 例文(14d))

一方、次のような「ない」は「ケッシテ」と共起する。

- (55) ここでは強き者が辱しめられることは決してない。(本田1981b: 例文(20a))
- (56) 大統領に限って不倫なんかケッシテないと思います。

二つの「ない」の違いは、前者の「ない」が単に事態の非存在を表しているのに対し、後者の「ない」は当該の事態の成立を否定し、「そのようなことはありえない」ということを述べている点にある。後者のように事態の成立を断定したり期待したりする態度を否定する場合には「ケッシテ」と共起するが、そうでない場合には「ケッシテ」と共起しないのである。

ここで例文(54)を次のように変えると容認可能な文となる。両者の違いは、例文(56)が単に本の非存在を表しているのに対し、例文(57)(58)は「ここにあなたの読むような本がある」という断定の態度を否定している点にある。

- (57) ここにはあなたの読むような本はケッシテありません。
- (58) ここにはあなたの読むような本はケッシテありはしない。

形容詞の「ない」は「ゼンゼン」によって修飾できるため、否定的な表現ではある。しかし、「アル」ということを否定する表現ではなく、非存在ということを肯定的に述べる表現である。<sup>2)</sup> そのため、「ケッシテ」と共起しないのである。一方、「～ません」や「～はしない」は、「アル」という事態の成立を否定する表現である。そのため、「ケッ

1) こうした指摘は、原田(1982)などにも見られる。

2) この意味で「ない」は「ある」の否定ではないと言える。「ある」の否定は「ありはしない」、「ない」の否定は「なくはない」である。

シテ」と共起するのである。<sup>1)</sup>

一方、「ゼンゼン」は頻度、数、量などの程度が0であることを表す表現である。<sup>2)</sup> したがって、程度量のある事態には使えるが、程度量のない事態には使えない。<sup>3)</sup>

(59) 今の調子じゃ、あと数年阪神はゼンゼン優勝しないだろう。

(60) \*今の調子じゃ、今年の阪神はゼンゼン優勝しないだろう。

非存在の「ない」も、存在の程度が0であることを表すため、「ゼンゼン」と共起することができる。

(61) ここにはあなたの読むような本はゼンゼンない。

これに対し、次の例文が非文となるのは命令や当為に程度量がないためである。

(62) \*あなたはゼンゼン本を読むな。

(63) \*あなたはゼンゼン本を読むべきではない。

以上、「マサカ」は「ケッシテ」や「ゼンゼン」と違い、想定外の意味を表す否定文に使われることを見た。

- 
- 1) 石神(1990)は、否定構文を形容詞「ない」を述語とする「～がない」構文と、述語に助動詞「ない」を持つ構文の二つに分けて考察し、「「～がない。」という形容詞文が非存在という否定的内容を肯定形式で表すということは、日本語の構文における否定ということを考える上で注目されてよい問題である」(石神1990: 61)と論じている。
- 2) 小川(1984b: 27-28)は、「「全然」は「ない」と共起はするものの単にそれとの呼応のみに存在の価値があるのではない。明らかに被修飾文節たるべきものの中核的語彙をも含めてこの全体に係ってゆく、言わば全面的介入である。その介入は下接する被修飾文節全体の実質的な意味に対するある種の意味的な介入である。ある種の意味的介入とは「全然」の持つ本来的な意味であって、それは「ない」と共起して「その状態がほんの僅かも成立しない」ことの意味的付与である。この意味的付与は別の言葉で言えば、「ない」ことの度合であり、程度である」と論じている。
- 3) 副詞全般の程度量について記述したものに森重(1958)がある。いわゆる陳述副詞と程度副詞を程度量という観点から分類したものであるが、作用と対象の区別や程度の「高低」の分類に恣意的な面が見られ、「マサカ」と「メッタニ」が同一のグループに入るなどの問題がある。一方、新川(1979)は、副詞と動詞の共起関係から副詞の分類を試み、その中で量規定に関するものを、(1)程度、(2)数量、(3)空間的な量、(4)時間的な量、(5)頻度に分類した。また、堀(1997)は、新川の研究をさらに精密化し、程度副詞は程度規定を基本とし情態副詞は運動量規定を基本としながらも、互いに連続していることを明らかにした。

## 5. マサカの意味

### 5.1 想定外

次に「マサカ」の意味について考察する。例文(64)において、「マサカ」は「話し手自身が厚生大臣になり、以前自分たちが出した質問主意書に自ら回答を出す立場になる」という事態が予想外の出来事であるという、話し手の意外に思った気持ちを表している。

- (64) さて、私のアドバイスを受け、枝野議員は原告団の弁護士とも相談しながら、二度にわたってかなり細かいところまで突っ込んだ質問主意書を提出した。二度目の質問主意書に対して、厚生省から、とても七日以内には回答できない内容だったので、回答期限を延長して、二カ月以上先の二月末まで待つて欲しいという回答が来ていた。この時点では、まさか私が厚生大臣になり、その回答を出す立場になるとは、私も枝野議員も思ってもいなかった（村山内閣が退陣することすら、予想もしていなかったのだから）（後略）（菅直人『大臣』）

次の例文は単に「意外」とか「予想外」という意味を表すのではなく、「身の程知らずだ」、「そうあって欲しくない」、「信じたくない」という意味を表している。しかし、こうした意味は共起する文末成分や文脈によって生じるものであり、「マサカ」自体はあくまでも当該の事態の成立が想定外のものであることを表しているにすぎない。<sup>1)</sup>

- (65) マサカお前のようなやつが総理大臣になるなんて考えもつかないや。
- (66) 哲明は顔を曇らせた。まさか、その資料の中からある一人を捜して欲しいと言いつ出すのではあるまいかと。（鈴木光司『リング』）
- (67) だが、心理学者やカウンセラーには、直感や印象を重んじる人が多い。凡庸な人間はまったくの役立たずでしかないが、中にはどんな非凡な洞察力を持った人物がいて、一足飛びに由香里の秘密に迫らないとも限らない。まさか、すぐに彼女がエンパスであることを見破られるようなことはないだろうが……。（貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』）
- (68) ところが、入口に『十八歳未満の方は入館できません』と掲示があるのを見て、

---

1) 糸川（1989：108）は、「「まさか」は、共通して意外性を表わしているが、陳述副詞「まさか」のもつ陳述は激怒であったり、不安であったりする。場に支えられているためである」としている。

まさか子供を外で待たせて調べ物を済ますわけにもいかず、仕事のほうは諦め、子供と一緒に公園で遊んだことがあった。(鈴木光司『らせん』)

(69) 「(前略)わたしは、彼女は、多重人格ではないかと思っています」

浩子は、あっけにとられたような顔になり、絶句した。

『なぜ、わかったんだろう?』『まさか! あてずっぽうで言ってるだけかも』

『だけど、わざわざやって来て言うからには、確信があるはず……』『しかし、私でも、あれだけ診断に手間どったというのに!』『あれだけ、テストを繰り返して』

『それを、ちょっと会っただけでわかるはずが』(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

最後に、本研究でいう「想定外」の概念について整理しておく。本研究では、次の1～3をまとめて「想定外」と呼ぶことにする。

[ 想定外 ]

- 1．当該の事態の成立について特に考えていなかった場合に、当該の事態が成立する
- 2．当該の事態の成立する可能性を否定していた場合に、当該の事態が成立する
- 3．他の事態の成立する可能性を考えていた場合に、当該の事態が成立する

これら3つの「想定外」の例を順に挙げておく。

(70) 「何してんの? まさかその穴にピーマンすてる気じゃないでしょうね」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん 』)

(71) ピーマンをすてないと思っていたけど、まさかその穴にピーマンすてる気じゃないでしょうね。

(72) ちゃんとピーマンを食べると思っていたけど、まさかその穴にピーマンすてる気じゃないでしょうね。

「マサカ」のもつ想定外という意味は、否定文全般の意味と関係する。丹保(1980: 128)は、「否定は常に肯定を前提にしているのに対して、肯定は否定を前提としているわけではなく、直接的な認識によっていると考えられる」と指摘し、小川(1984a: 29)も、「始めから「無」の認識は有り得ない。「当然そこにあるべきもの」として認識され、事実、それが在るのか無いのかを確認して、無いと判断したとき、「ない」と表現するのである」と論じている。先行研究の指摘にもあるように、否定文はある前提を否定する。「マサカ」の場合、前提に当たるのが「想定」で、その否定が「想定外」である。



## 5.2 他の副詞との比較

次に、「マサカ」と他の副詞との意味の違いを分析する。考察に当たっては、次に挙げる副詞の違いを明らかにしていく。

(73) P 今回のワールドカップ、僕は日本が優勝すると思うけど君はどう思う。

- Q a. 日本は優勝しないだろう。  
 b. マサカ日本は優勝しないだろう。  
 c. \*ゼンゼン日本は優勝しないだろう。  
 d. ケッシテ日本は優勝しないだろう。  
 e. モシカスルト日本は優勝しないかもしれない。  
 f. キット日本は優勝しないだろう。  
 g. ヤハリ日本は優勝しないだろう。

### 5.2.1 ケッシテ、ゼンゼンとの比較

例文(73)の6つの副詞のうち、「マサカ」、「ケッシテ」、「ゼンゼン」は否定文において使われる。これらは同じ否定副詞であるが、先に示したように主観性の点で違いがある。

まず「ゼンゼン」について見る。「ゼンゼン」は、頻度、数、量などに広く使われ、事態の成立する可能性が0であることを表す表現である。<sup>1)</sup>

(74) 「そんなこと気にやむことないわよ」「だって夕べからぜんぜん姿をみせないんだよ」(山岸凉子『シュリンクス・パーン』)

(75) 「知ってる お姉ちゃんぜんぜんモテなかったものね そういふ人が女に走るのね」(山岸凉子『キメイラ』)

(76) 「あなたここへ来てから髭がのびないのね 髪の毛も爪もぜんぜんのびない」(山岸凉子『グール(屍鬼)』)

(77) 「ぜんぜん反省の色が見えないわね」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)

1) 田中(1983)は、否定副詞を否定の作用面ではたらく「ケッシテ」や「ダンジテ」などと、否定の対象面ではたらく「ゼンゼン」や「サッパリ」などの二つに分類した。

田中は、「ケッシテ」と「ゼンゼン」はともに作用・対象の二面があるとした上で、(1)二重否定、(2)仮定条件句、(3)疑念を表す文、(4)眼前描写表現、(5)「ない」が非存在を表す実質的な形容詞、(6)対象面における程度性への直接関与の違いによって、「ケッシテ」よりも「ゼンゼン」の方が対象的な性質を示すとした。

次の文で「ゼンゼン」が使えないは、「ゼンゼン」が命題の程度量を規定し、その程度が0であることを表すためである。そのため、対象となる事態に頻度、数、量といった程度性のある場合にしか使えない。例文(73c)の「優勝する」は、一回的事態で程度性がないため「ゼンゼン」と共起しないのである。

(73) P 今回のワールドカップ、僕は日本が優勝すると思うけど君はどう思う。

- Q b. マサカ日本は優勝しないだろう。
- c. \*ゼンゼン日本は優勝しないだろう。
- d. ケッシテ日本は優勝しないだろう。

その証拠に、反復的文脈で使われた場合には、事態に程度性が現れるため「ゼンゼン」との共起が可能となる。

(78) P 今後日本が10回ワールドカップに出場したとして何回優勝すると思う。

- Q b. マサカ日本は優勝しないだろう。
- c. ゼンゼン日本は優勝しないだろう。
- d. ケッシテ日本は優勝しないだろう。

いずれの場合にも「マサカ」と「ケッシテ」が使えるのは、この二語が事態の程度量とは関係なく機能するためである。

次に「ケッシテ」について見る。先行研究では、「ケッシテ」はある前提を踏まえた否定表現であることが指摘されている。たとえば、原(1992:66)は、「ある肯定的事態の不成立、即ち、肯定的予測に対する否定である」と説明し、小学館辞典編集部(1994:1008)は、「「決して」は、否定の言葉と呼応して、話し手の強い打ち消しの意志を表わす。そのとき、客観的にみて無条件に否定するのではなく、ある前提にもかかわらず、という譲歩の気持ちがある」と説明している。<sup>1)</sup>

次の例文において、「ケッシテ」は「笑いは自然におこるもので、自分の力ではどうにもならない」、「連立参加問題に関して改革クラブを無視したのではないか」、「無知は恥ずかしいものだ」という、思い込みや固定観念を否定している。

---

1) 森田良行(1988)、飛田・浅田(1994)にも同様の指摘がある。一方、本田(1981b:7)は、「否定副詞「決して」は話手の、ある事態に対する否定的断定と呼応し、それを強調する役割をしている副詞ということができる」と説明している。

(79) 笑いは自然におこるもので、自分の力ではどうにもならないと思っている人がいる。だが、少し考えてみればわかるように、決してそんなことはない。(福田健『ユーモア話術の本』)

(80) 「決して無視したり、お断りしたのではない。自由党、公明党ときちんと相談してから、改めて相談したい」

自民党の森喜朗幹事長は三十日の記者会見で、連立参加問題に関する改革クラブの抗議に、困惑の表情を浮かべた。(『中日新聞』1999.8.1 朝刊)

(81) 無知はそれを自覚しさえすれば、決して恥ずかしいことではない。自覚することなく、あたかも自分が歴史を知っているかのように装って、もしくは居直って、こうしたものに名を連ねることが恥ずかしいのである。(佐高信『タレント文化人100人斬り』)

ここで注意したいのは、「ケッシテ」は単に前提のある場面で事態の否定をするのではなく、そのような事態の成立を思い描く想定を否定するということである。次の「ケッシテ」も「日本の市場が閉鎖的であること」自体を否定しているのではなく、「日本の市場が閉鎖的である」と考える米国やヨーロッパの想定を否定している。

(82) 米国やヨーロッパでは、「日本の輸入が輸出に比べて少ないのは、日本の市場が閉鎖的であるためであり、市場を開放すれば日本の輸入は増大し、その経常収支の黒字も減少する」と考える人が多い。しかし、日本の輸入関税率と輸入数量制限品目数は世界でも最低の水準であり、この点に関しては日本の市場は欧米に比べて決して閉鎖的とはいえない。(岩田規久男『国際金融入門』)

ところで、森田(1989)は次の二つの文の違いを分析し、「ゼッタイニ」が前提を必要としないのに対し、「ケッシテ」はある前提のもとで譲歩の余地のある否定を表すと説明している。

(83)a. それは絶対によくない。(森田1989)

b. それは決してよくない。(森田1989)

森田は、例文(83a)については、「よくない」という事態に対して譲歩の余地は全くなく、たとえどんな条件がそこにあったにしても、やはり例外は認められないということを表すと説明し、例文(83b)については、「今回はやむを得ないが、それは決してよくはない」や「それは決してよくはないが、そうかと言って他に方法は見あたらないし……」など、一

応「よくない」と認めつつも例外を設ける、譲歩を前提とした判断を表すと説明した。<sup>1)</sup>  
この説明によると、「ゼツタイニ」は全部否定を表す表現であり、「ケッシテ」は部分否定を表す表現であるということになる。

たしかに、「ゼツタイニよくない」は全部否定を表す。しかし、「ケッシテよくない」は部分否定にも使われるが、全部否定にも使われる。しかも、部分否定の場合には取り立て助詞「は」を入れた方が自然である。

- (84)a. それはケッシテよくない。完全に悪い。(全部否定)
- b. それはケッシテよくはない。しかし完全に悪いわけでもない。(部分否定)

たとえば、「不死鳥はケッシテ死なない鳥である」という表現も、全部否定として不死鳥が死ぬ可能性は一切ないことを述べている。ゆえに全部否定・部分否定ということは、「ケッシテ」自体の意味ではなく文脈に帰せられるものであると考えた方が適切である。

以上のように、「ケッシテ」は何らかの想定を否定する表現であると言える。次の例文(85)は優勝の確定していない場面で使われ、「マサカ」が「日本が優勝することは思いもよらないことである」ということを表すのに対し、「ケッシテ」は「あなたは日本が優勝すると思っているのではないか」とする想定を否定する。一方、例文(86)は優勝が確定した場面で使われる。この場合に「マサカ」を使うと日本が優勝したことになり、「日本が優勝することは思いもよらなかったこと」であることを表す。それに対し、「ケッシテ」は「日本が優勝と思っていたのではないか」とする想定を否定する。「ケッシテ」の場合、文脈がなければどこが優勝したのかは分からない。

- (85)a. マサカ日本が優勝するとは思わない。
- b. ケッシテ日本が優勝するとは思わない。
- (86)a. マサカ日本が優勝するとは思わなかった。
- b. ケッシテ日本が優勝するとは思わなかった。

以上、「マサカ」は当該の事態を想定外のものであるとする表現、「ケッシテ」は想定を否定する表現、「ゼンゼン」は命題の程度量が0であることを表す表現であることを指摘した。

---

1) 同様の記述は飛田・浅田(1994)、小学館辞典編集部(1994)にもある。飛田・浅田はこれを全部否定と部分否定の違いとして扱っている。

### 5.2.2 モシカスルトとの比較

次に、「マサカ」と同じ想定外の意味をもつ「モシカスルト」との比較を行なう。次の文で「マサカ」は、1999年7月に地球が滅びるなどとは考えもつかないことであるということを表している。

- (87) マサカ1999年7月に地球が滅びるとは思わない。
- (88) マサカ1999年7月に地球が滅びるはずがない。

一方、次の文で「モシカスルト」は、当初1999年7月に地球が滅びるとは思っていなかったが、推論の結果、その可能性もありうると判断するに至ったことを表している。

- (89) モシカスルト1999年7月に地球が滅びるかもしれない。
- (90) モシカスルト1999年7月に地球が滅びるのではないか。

「モシカスルト」は、他の事態の成立する可能性を想定していた場面で、当該の事態の成立する可能性も否定できないと判断したことを表す表現である。

以上のことから、同じ想定外の意味を持つ表現でも、「モシカスルト」が当該の事態の成立する可能性を認めようとするのに対し、「マサカ」は当該の事態の成立する可能性を認めようとしないという点で違いのあることが分かる。これにより、次の二つの文の違いが明らかとなる。例文(73b)は「日本が優勝することは思いもよらないことである」と判断したことを表している。一方、例文(73e)は「当初日本は優勝すると思っていたが、その後の推論により、日本の優勝しない可能性も否定できない」と判断したことを表している。

- (73) P 今回のワールドカップ、僕は日本が優勝すると思うけど君はどう思う。
- Q b. マサカ日本は優勝しないだろう。
- e. モシカスルト日本は優勝しないかもしれない。

同様に、例文(91)は「思いもよらず日本の優勝する可能性もある」と判断したことを表し、例文(92)は「当初日本の優勝は考えなかったが、その後の推論により、日本の優勝する可能性も否定できない」と判断したことを表す。

- (91) マサカ日本は優勝するのではないだろうか。
- (92) モシカスルト日本は優勝するのではないだろうか。

こうしたことから、次の例文(94)が非文となる理由を説明することができる。例文(93)は、当初「日本の優勝」の可能性はないと考えていたが、すぐ後で万が一の可能性はあると考え直したことを表している。一方、例文(94)は、優勝する可能性が存在すると言いな

(93) マサカ日本の優勝はないだろう。でもモシカスルト優勝するかもしれない。

(94) \*モシカスルト日本は優勝するかもしれない。でもマサカ優勝はないだろう。

以上、同じ想定外の意味を持つ表現でも、「モシカスルト」が当該の事態の成立する可能性を認めようとするのに対し、「マサカ」は当該の事態の成立する可能性を認めようとしないという点で違いのあることを指摘した。

### 5.2.3 キットとの比較

次に、「キット」との比較を行なう。森本(1994)は「マサカ」と「キット」を推量を表す副詞として捉え、「蓋然性の高さという点ではほとんど同じになる」(森本1994: 71)と説明した。森本はその根拠として、ともに「ニチガイナイ」や「ダロウ」とは共起するが「カモシレナイ」とは共起しないことを挙げている。その上で、森本は次の例文によって「マサカ」と「キット」の違いを説明した。

(95)a. みちこは東京にいないだろう。

b. まさかみちこは東京にいないだろう。

c. きっとみちこは東京にいないだろう。

(森本1994: 第4章の例文(16))

森本は例文(95b)については、「話し手は文の内容(=みちこが東京にいること)、つまり、話し手の推量したことを信じていないのである」(森本1994: 71)として、英語の“I think it impossible that Michiko is in Tokyo.”に相当するとした。一方、例文(95c)については、「話し手は、みちこが東京にいない可能性が高いと考えている」(森本1994: 71)として、英語の“I think it sure that Michiko is not in Tokyo.”に相当するとした。その上で、「このふたつの文の違いは、「きっと」が、否定文で、生起しない可能性の程度について述べるのに対し、「まさか」は可能性の否定にかかわるという点である」(森本1994: 71)と説明した。

さらに森本は、「「まさか」は、客観的な不可能性を表現する文には現れないことに留意すべきである」(森本1994: 71)として次の例文を挙げた。

(96)a. ひとりの人間が二度死ぬことはできない。

b. \*まさかひとりの人間が二度死ぬことはできない。

(森本1994：第4章の例文(18))

こうして森本は、「この例から、「まさか」は、推量によって述べられるできごとだけに関わること、「まさか」の機能は、その、推量されたことが起こる／起こったというのは、不可能であるという、話し手のコメントを表すことだといえよう」(森本1994：72)と結論した。

しかし、ここで注意したいのは、「マサカ」は推量された事態に対してのみ使われる表現ではないということである。事実、次の例文では店が混むか混まないかを推量しているのではなく、店が混むことを想定していなかったと述べているにすぎない。

(97) 「いやー、まさかこんなに店が混むなんて思ってなかったのよ。こちらこそごめんなさいね、じゃ、朝ね！」(吉本ばなな『キッチン』)

たしかに、「マサカ」は「どう考えても、まさか店は混まないだろう」のように推量を表す場合にも使われるが、「まさか店が混んでいるとは知らなかった」のように、単に当該の事態が想定外のものであることを述べる場合にも使われる。森本は「マサカ」を「話し手の側の推量的態度」(森本1994：73)を表す表現であるとしているが、推量の意味は「マサカ」自体にあるのではなく、推量文に帰せられるものである。

結局、例文(73b)は「日本が優勝することは思いもよらないことである」ということを表しているのに対し、例文(73f)は「日本は優勝しない」という推量判断に信念をもっていることを表していると説明できる。

(73)P 今回のワールドカップ、僕は日本が優勝すると思うけど君はどう思う。

Q b. マサカ日本は優勝しないだろう。

f. キット日本は優勝しないだろう。

以上、「マサカ」と「キット」は、推量表現専用の副詞ではないことを指摘した。「マサカ」は事態が想定外のものであることを表し、「キット」は事態の実現に対する話し手の強い信念を表す。こうした話し手の態度が、推量文において強い(否定)推量の態度となって現れると考えられる。

#### 5.2.4 ヤハリとの比較

最後に「ヤハリ」との比較を行なう。いずれも発話以前の想定と関わる点で共通している。「マサカ」が当該の事態を想定外のものとして述べるのに対し、「ヤハリ」は当該の事態を想定通りのものとして述べるという点で違いがある。

「ヤハリ」について、深尾（1996：47）は、「話題として取り上げたことが、自身の信念、考え、気持ちに一致するという意味を持つ。話し手の心的態度を表す」と説明した。「ヤハリ」はこうした意味を持ちながら、次のような様々な用法として現れる。

- (98) 浅川はダイヤルを回し、呼び出し音を十回鳴らした。だれも出ない。東中野のアパートで、竜司は独りで暮らしている。まだ帰ってないのだ。軽くシャワーを浴びてからビールを一本あけ、もう一度電話する。やはりまだ帰っていない。  
（鈴木光司『リング』）
- (99) 電子が、波の式（シュレディンガー方程式）で表されはするが実は量子力学的意味での粒子であったように、光もやはり粒子なのだろうか。（和田純夫『量子力学が語る世界像』）
- (100) このように、誤った判断をした役人たちに、どういうペナルティがかけられるかについて、かなり考えたのだが、役所のこれまでのシステムにしたがうという前提では、やはり限界があった。（菅直人『大臣』）
- (101) わたしと有璃が話している間に、いつのまにか教授が消えていた。  
「あれ、教授は？」  
「やっぱり、本を読んでも途中だったから書斎に引っこんじゃったんじゃない」  
（司直『JKI物語』）

例文(98) (99)の「ヤハリ」は、「相変わらず」や「同様に」と置き換えることができ、先行する事態と当該の事態の間に変化のないことを表す。例文(100)の「ヤハリ」は、「思ったとおり」と置き換えることができ、当該の事態が当初の想定通りであったことを表す。例文(101)の「ヤハリ」は感動詞のように使われるもので、事前の想定があまり感じられない。これは話し言葉で多用され、話し手の考えが正当なものであることを強調する。以上の「ヤハリ」のうち、ここでは例文(100) (101)の用法について考えることにする。

例文(100)の「ヤハリ」と例文(101)の「ヤハリ」の違いは、発話時点以前に当該の事態について考えていたかどうかの違いによる。例文(100)の「ヤハリ」は「思ったとおり」で置き換えられることから分かるように、当該の事態について発話以前から考えていた場合に使われる。一方、例文(101)の「ヤハリ」は発話時点以前には当該の事態について特に考えていなかった場合に使われる。この場合、話し手の考えが正当なものであるということを、何らかの前提となる基準や考えに一致させようとする意識で「ヤハリ」が使わ



れていると考えられる。

したがって、次の文も事前の想定のある場合と、事前の想定のない場合とに分けて考える必要がある。

(73) P 今回のワールドカップ、僕は日本が優勝すると思うけど君はどう思う。

Q b. マサカ日本は優勝しないだろう。

g. ヤハリ日本は優勝しないだろう。

まず、例文(73b)は事前の想定のあるなしとは関わりなく、「日本が優勝することは思いもよらないことである」ということを表す。一方、例文(73g)は事前の想定のある場合とない場合とで意味が異なる。事前の想定のある場合、話し手は当初から「日本は優勝しない」と思っており、Pに尋ねられた後も当初の考えに変わりのないことを表す。一方、事前の想定のない場合、話し手はPに尋ねられて初めて「日本の優勝」について考え、その結果「日本は優勝しない」と結論したことを表す。この場合、話し手の考えが正当なものであるということを、何らかの前提となる基準や考えに一致させようとする意識で「ヤハリ」が使われている。

以上の考察により、「マサカ」は当該の事態が想定外のものであることを表す表現であると結論することができる。

## 6. 第9章のまとめ

本章では、否定副詞「マサカ」について考察した。一般に「マサカ」は可能性を否定する表現、あるいは否定推量を表す表現であるとされている。これに対し、本研究では可能性の否定や否定推量を表すのは文末の「ハズガナイ」や「マイ」などに帰せられるものであり、「マサカ」自体は当該の事態が想定外のものであることを表す表現であることを指摘した。

以上、「マサカ」についてまとめておく。

マサカ：（モダリティ副詞）

当該の事態が想定外のものであることを表す

# 第10章 終わりに

## 1. 事態の蓋然性と判断の蓋然性

最後にこれまでの考察を整理し、残された課題について考える。本研究では、現代日本語における蓋然性を表す副詞について、モダリティ論の立場からその意味記述を行なった。従来、これらの副詞は蓋然性の高いものから低いものへと一次元スケールで捉えられてきた。(図10-1 = 図4-1)

カナラズ	キット	タブン	モシカスルト	ヒョットスルト
高				低
〔蓋然性〕				

図10-1 一次元的な捉え方

しかし、一口に蓋然性と言っても、事態の蓋然性と判断の蓋然性とは主観性の点で異なる性質をもつ。すなわち、前者が命題に属し、客体世界における事態成立の可能性の度合いを表すのに対し、後者はモダリティに属し、話し手の判断の中での事態成立の可能性の度合いを表すという違いがある。したがって、両者の蓋然性を同列に比べることはできない。そこで、本研究ではまず事態の蓋然性を表す副詞と判断の蓋然性を表す副詞とを区別して考えた。(図10-2 = 図4-2)

	〔事態の蓋然性〕	〔判断の蓋然性〕
高	カナラズ	キット
	タイテイ	タブン
低	アマリ	モシカスルト

図10-2 事態と判断に区別する捉え方

両者の区別は、主観性判定テストによって行なった。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため、それ自体は真偽の対象とならず、連体修飾成分ともならず、過去文の中にも収まらないという性質をもつ。一方、命題は客観的な成分であるため、こ

うした制限が加わらない。そこで、こうした性質を利用して、否定の焦点となるかどうか（否定の焦点テスト）、疑問の焦点となるかどうか（疑問の焦点テスト）、文代名詞の対象となるかどうか（文代名詞化テスト）、連体修飾成分となるかどうか（連体修飾テスト）、過去文の中に収まるかどうか（過去テスト）の5つの主観性判定テストを設定した。これらのテストで適格となるものは命題、不適格となるものはモダリティに属すと考えられる。

主観性判定テストによって、「キット」、「タブン」、「オソラク」、「サゾ」、「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」、「タシカ」、「マサカ」はモダリティ副詞、「カナラズ」、「キマッテ」、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」は命題副詞、「ドウモ」、「ドウヤラ」はいずれにも使われることが明らかとなった。

## 2. 文末のモダリティ形式

蓋然性を表す副詞は、主観性判定テストによって、ひとまず事態の蓋然性を表す副詞と判断の蓋然性を表す副詞とに区別される。しかし、それぞれの副詞はそれぞれの内部で蓋然性の順に列に並んでいるわけではなく、さらにいくつかの類型に分かれている。こうした類型は、共起する文末のモダリティ形式の違いによって区別される。

先行研究でも、副詞と文末のモダリティ形式の共起関係についてはしばしば議論されてきた。しかし、それらの研究には大きく次の2点で問題がある。第1の問題点は、副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味との間で循環論に陥っている点である。例えば、「キット」は「ニチガイナイ」との共起を理由に蓋然性の高いことを表すと説明されてきたが、「ニチガイナイ」の研究では、逆に「キット」との共起を理由に「ニチガイナイ」が蓋然性の高いことを表すと説明されてきた。これは副詞と文末のモダリティ形式のどちらかを先に、もう一方とは独立に規定していないため循環論に陥っているのである。この点に関して、本研究ではまず副詞とは独立に文末のモダリティ形式の意味を規定した。その理由は、文末のモダリティ形式があって副詞のない文は普通であるが、副詞があって文末のモダリティ形式のない文は「マサカ！」などを除いて一般的ではないためである。

第2の問題点は、副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味が一体的に捉えられている点である。例えば、「キット～ニチガイナイ」という共起を理由に、副詞と文末のモダリティ形式が二つで一つの意味と関わると考えられてきた。しかし、「キット」は「ニチガイナイ」の他に「ダロウ」や「 」とも共起するし、「ニチガイナイ」も「キット」の他に「オソラク」や「サゾ」とも共起する。副詞と文末のモダリティ形式には一定の共起関係があり、意味的に関連していることは確かであるが、両者は独立した意味を担っている

と考える必要がある。そこで、本研究ではある一つの副詞が複数の文末のモダリティ形式と共起関係にあることに着目し、どのような性質のものと共起するのか、あるいはどのような性質のものと共起しないのかを分析することによって、副詞独自の機能を抽出した。

こうして、先行研究の記述を再検討し、真偽判断のモダリティを表す文末形式の意味を以下のように定義した。本研究の分類の特徴は、一般に蓋然性の高さの違いを表し分けるとされている「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が、認識と推量判断の違いであることを指摘した点、「ダ／」と「カモシレナイ」が認識確定性の確実と不確実で対立していることを指摘した点、推量判断の「ヨウダ」は比況の「ヨウダ」から説明され、推量判断の「ラシイ」は伝聞の「ラシイ」から説明されることを指摘した点、「ダロウ」が認識や推量判断のための証拠不足を述べた表現であることを指摘した点にある。

#### 真偽判断のモダリティを表す文末形式

「ダ／」

当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す

「カモシレナイ」

当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す

「ニチガイナイ」

話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す

「ヨウダ」

二つの事態に共通の属性があることを根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す

「ラシイ」

他者からの情報や外界の現象を根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す

「ダロウ」

証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表す

### 3．蓋然性を表す副詞の意味

蓋然性を表す副詞の意味記述に関して、先行研究で特に問題となるのは次の2点である。第1の問題点は、ある副詞と別のある副詞の違いが単純に蓋然性の高さの違いとして説明されてきた点である。たとえば、一般に「キット」、「タブン」、「モシカスルト」は、

この順に蓋然性の高いものから低いものへと並んでいると説明されてきた。その場合、「キット」は「ニチガイナイ」と共起し、「タブン」は「ダロウ」と共起し、「モシカスルト」は「カモシレナイ」と共起することが根拠とされてきた。しかし、これらの文末形式は単純に蓋然性の高さの違いを表し分けるものではない。したがって、これを根拠に各副詞の蓋然性の高さを比較することはできないことになる。むしろ、共起関係から意味を考えるならば、「ニチガイナイ」は話し手の確信による推量判断を表し、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性を表すという点に注目する必要がある。

第2の問題点は、ある副詞の意味を特定の用法の観察だけで規定してしまう傾向にあった点である。たとえば、「タブン」は推量文のみに使われるが、「キット」は推量文以外に、意志文、命令文、勧誘文にも使われ、「モシカスルト」は推量文以外に、認識文にも使われる。こうした違いを考えずに、推量文に使われる場合のみを比較するのは問題である。また、「ドウモ」、「ドウヤラ」は根拠のある推量を表すと説明されることが多いが、「ドウモ気分がすぐれない」の「ドウモ」は「どういうわけか」の意味であり、事態成立の不確定を表しており、「ドウヤラ死なないだけの生活を送っている」の「ドウヤラ」は「何とか」の意味であり、事態がある基準点にほぼ近づいたことを表している。こうした用法を排除して推量判断の場合だけを取り上げると、一面的な分析に陥ってしまう危険性がある。考察の対象を広くとることにより、推量文において「ドウモ」、「ドウヤラ」自体はあくまでも事態成立の不確定や事態がある基準点にほぼ近づいたことを表し、根拠のある推量を表すのは文末の「ヨウダ」や「ラシイ」に帰せられることが明らかとなる。

本研究では、こうした問題点を踏まえ、被修飾成分や共起する文末形式、判断の根拠の違いなどを分析し、蓋然性を表す副詞の意味を以下のように定義した。

判断の蓋然性を表す副詞（モダリティ副詞）

「キット」

事態の実現に対する話し手の強い信念を表す

「タブン」

推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す

「オソラク」

推量判断において根拠に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す

「サゾ」

推量判断において共感に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す

「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」

当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、発話時点において当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す

（想定外の意味は「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の順に強くなる）

「ドウモ」

話し手の認識が不確定で事態の成立がはっきりしないことを表す

（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが不確定であることを表す）

「ドウヤラ」

当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表す

（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表す）

「タシカ」

当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す

「マサカ」

当該の事態が想定外のものであることを表す

事態の蓋然性を表す副詞（命題副詞）

「カナラズ」

事態が例外なく確実に成立することを表す

「キマッテ」

既成の反復的な事態が確実に成立することを表す

「タイテイ」

数的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

「タイガイ」

量的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

「オオカタ」

割合の面から、事態が基準点に大部分到達したことを表す

#### 4．残された課題

本研究は、文末のモダリティ形式の意味の違いについて新たに認識と推量判断という視点から説明し直した点、蓋然性を表す副詞が単なる蓋然性の高さの違いによって区別されるのではなく、主観性の違い（命題、モダリティ）、使われる文の種類の違い（推量文、意志文、命令文、勧誘文、認識文、想起文）、判断の根拠の違い（直感によるか、裏付け

となる根拠に基づくか、共感によるか、過去の記憶の想起によるか）、発話の前提を必要とするか、といった観点から区別されることを指摘した点に特徴がある。蓋然性を表す副詞は、主観性と蓋然性の二本の軸によって単純に平面上に分布しているのではなく、様々な特徴によって区別されているのである。（図10-3）

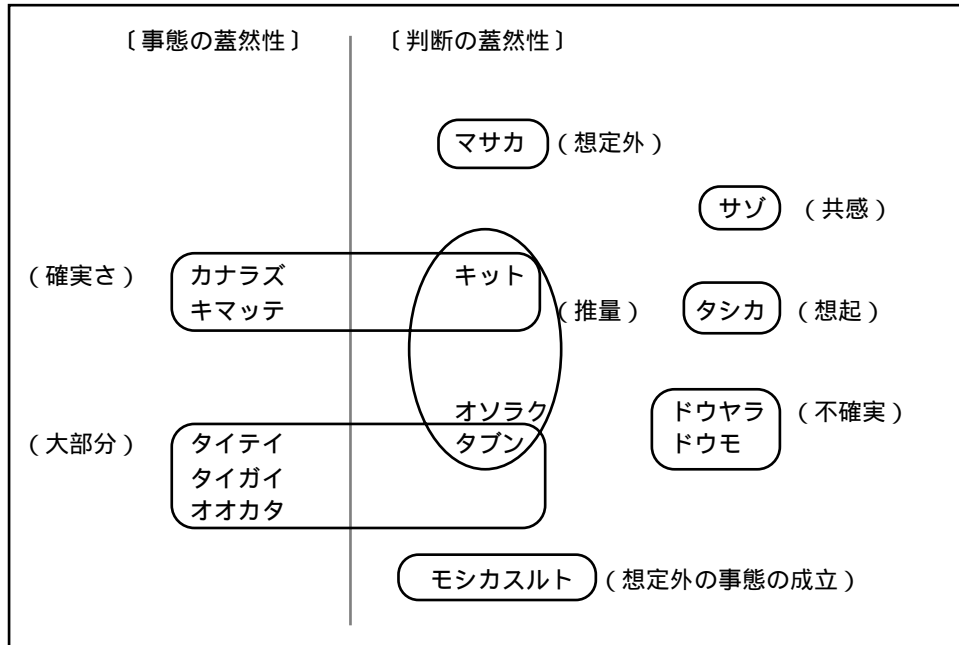


図10-3 本研究で考察した副詞

本研究の考察により、蓋然性を表す副詞の体系はしだいに明らかとなってきた。しかし、現段階では「キット」を中心とした分析に偏っているため、今後は他の副詞の分析を進めることによって、さらに精密な体系の構築を図っていきたい。「カナラズ」のもつ「実現すること」という意味なども、明確な説明が求められている。

各副詞の分析には、図10-3にはない副詞との比較も必要となる。たとえば、「カナラズ」は「キット」、「キマッテ」、「タイテイ」以外にも、「ゼツタイニ」や「ケッシテ」など話し手の断定的態度と関わる表現との比較を行なうことにより、さらにその特徴が明確となると考えられる。

さらに、副詞の分析には命題とモダリティの位置付けについても考える必要がある。たとえば、例文(1)の各副詞は「この汚れが完全に落ちること」を表しているという点で共通している。

- (1)a. この汚れはゼツタイニ落ちる。

- b. この汚れはカナラズ落ちる。
- c. この汚れはスベテ落ちる。

しかし、例文(2)に示されるように、これらの副詞はシンタグマティックな関係にあり、それぞれの修飾する内容が異なっている。

- (2) この汚れはゼツタイニ カナラズ スベテ落ちる。

こうした承接関係については、現段階では十分な説明をするには至っていない。

また、「ケッシテ」は例文(3)のように連体修飾成分となるという点では命題的であるが、例文(4)のように否定命令（禁止）を表す「ナ」と共起するという点ではモダリティ的である。

- (3) 不死鳥はケッシテ死なない鳥である。
- (4) ケッシテ諦めるナ。

こうした表現に対して、あくまでも命題とモダリティのいずれかで説明するのか、それとも命題とモダリティの両方に使われる表現であるのか議論する必要がある。あるいは、主観性の点で命題とモダリティの中間に位置するものを新たに設ける可能性も視野に入れた分析が期待される。今後このような現象を分析することによって、命題とモダリティの関係をより一層明らかにしていきたい。



## 参考文献

- 安達太郎（1997）「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』新輯3  
pp.1-11
- 案野香子（1996）「副詞の問題点」『国文学解釈と鑑賞』61・1 pp.88-94
- 石神照雄（1987）「陳述副詞の修飾」寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人（編）『ケーススタ  
ディ日本文法』 pp.96-101 おうふう
- （1990）「否定と構文」『日本語学』9-12 pp.57-67
- 糸川 優（1989）「陳述副詞の本質」『青山語文』19 pp.102-109
- 梅林博人（1994）「副詞「全然」の呼応について」『国文学解釈と鑑賞』59-7 pp.103-110
- 大鹿薫久（1992）「「かもしれない」と「にちがいない」 叙法的意味の一端 」『ことば  
とことのは』9 pp.127-134 いずみ書院
- （1993）「推量と「かもしれない」「にちがいない」 叙法の体系化をめざして 」  
『ことばとことのは』10 pp.96-104 いずみ書院
- 大島資生（1999）「現代語における主格の「の」について」『國語學』199 pp.161-149（左28-40）
- 小川輝夫（1984a）「否定表現の原理」『文教國文學』14 pp.22-39
- （1984b）「否定誘導表現 陳述副詞の機能再考 」『文教國文學』15 pp.20-39
- 柏岡珠子（1980）「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41 pp.169-178
- 木下りか（1998）「「真偽判断」を表す文末形式と「既定性」」『ことばの科学』11 pp.171-182
- （1999）『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』名古屋大学博士学位論文
- 北原保雄（1975）「修飾成分の種類」『國語學』103 pp.18-34
- 工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能 その記述方法をもとめて 」『国立国語研究所  
報告71 研究報告集3』 pp.45-92 秀英出版
- （1983）「程度副詞をめぐる」渡辺実（編）『副用語の研究』 pp.176-198 明治書院
- 小坂光一（1999）「意志の客観的描写としての「（よ）うとしている」」『ことばの科学』12  
pp.349-370
- 小林幸江（1980）「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7 pp.3-22
- 小林典子（1992）「「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析」『筑波大学留学生センタ  
ー日本語教育論集』7 pp.1-17
- 坂口和寛（1996）「副詞の語意的意味が統語的現象に与える影響 働きかけ文での共起関係を  
中心に 」『日本語教育』91 pp.1-12
- 阪田雪子・倉持保男（1980）『教師用日本語教育ハンドブック 文法Ⅱ 助動詞を中心にして』  
凡人社

- (1993)『教師用日本語教育ハンドブック 文法Ⅱ 助動詞を中心にして  
(改訂版)』凡人社
- 佐治圭三(1986)「「必ず」の共起の条件 「きっと」「絶対に」「どうしても」との対比に  
おいて」『同志社女子大学学術研究年報』37-4 pp.1-12(通375-386)
- (1992)『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 佐野由紀子(1997)「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16 pp.121-133
- (1998a)「程度限定における「主観性」について」『現代日本語研究』5 pp.111-120
- (1998b)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3 pp.7-22
- (1998c)「比較に関わる程度副詞について」『國語學』195 pp.112-99(左1-14)
- (1999)「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』6  
pp.32-50
- 澤田治美(1978)「日英語文副詞類(Sentence Adverbials)の対照言語学的研究 Speech  
act 理論の視点から」『言語研究』74 pp.1-34
- 柴田 武(1982)「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」国広哲弥・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子  
(編)『ことばの意味3』 pp.87-94 平凡社
- 小学館辞典編集部(1994)『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- 新川 忠(1979)「「副詞と動詞のくみあわせ」試論」言語学研究会(編)『言語の研究』  
pp.173-202
- 新藤一男(1983)「「あまり」の文法」『山形大学紀要(人文科学)』10-2 pp.101-113(通  
149-161)
- 須賀一好(1995)「「かもしれない」の意味と蓋然性」『山形大学紀要(人文科学)』13-2  
pp.79-88
- 杉村 泰(1996)「キットとカナラズの意味分析 モダリティの観点から」『名古屋学院大学  
日本語学・日本語教育論集』3 pp.55-68
- (1997)「副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層 タブン/タイテイとの並  
行性」『世界の日本語教育』7 pp.233-249
- (1998a)「真偽判断を表わすモダリティ副詞「モシカスルト」と「ヒョットスルト」の研  
究」『日本語教育』98 pp.25-36
- (1998b)「否定構文に現れる副詞とモダリティ」『ことばの科学』11 pp.93-110
- (1998c)「モダリティ副詞「マサカ」について」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育  
論集』5 pp.67-86
- (1999)「事態の蓋然性と判断の蓋然性」『ことばの科学』12 pp.171-187
- (2000a)「モダリティ副詞「マサカ」再考」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』  
7(掲載予定)

- (2000b)「ヨウダとソウダの主観性」『言語文化論集』22-1(印刷中)
- (2001)「ヨウダとベキダの主観性」『言語文化論集』22-2(掲載予定)
- 鈴木一彦(1959)「副詞の整理」『國語と國文學』429 pp.59-70
- 高橋太郎(1985)『国立国語研究所報告82 現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5 pp.37-48
- 田中敏生(1983)「否定述語・不確定述語の作用面と対象面 陳述副詞の呼応の内実を求めて」『日本語学』2-10 pp.77-89
- 田中俊子(1993)「「～カモシレナイ」について」『東北大学留学生センター紀要』1 pp.23-29
- 田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』 pp.785-795
- 三省堂
- (1994)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『成蹊人文研究』2 pp.62-78
- 丹保健一(1980)「否定表現の文法(1) 否定内容と文構造とをめぐって」『三重大学教育学部研究紀要 人文科学』31-2 pp.127-136
- (1984)「副詞の意味記述 「かならず」「きっと」の意味用法の違いに着目して」『国語学研究』24 pp.112-99(左1-14)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店[1978改版、岩波全書]
- 中右 実(1980)「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』 pp.157-219 大修館書店
- (1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 中畠孝幸(1990)「不確かな判断 ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』1 pp.25-33
- (1991)「不確かな様相 ヨウダとソウダ」『三重大学日本語学文学』2 pp.26-33
- (1993)「確かさの度合い カモシレナイ・ニチガイナイ」『三重大学日本語学文学』4 pp.13-20
- 仁田義雄(1981)「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『國語と國文學』58-5 pp.88-102
- (1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』 pp.1-56 くろしお出版
- (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (1999)「モダリティを求めて」『月刊言語』28-6 pp.34-44
- 野田尚史(1984)「～にちがいない/～かもしれない/～はずだ」『日本語学』3-10 pp.111-119
- (1995)「現場依存の視点と文脈依存の視点」仁田義雄編『複文の研究』 pp.327-351

くろしお出版

- 野林靖彦 (1999) 「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」 三水準にわたる重層的考察」『國語學』197 pp.89-75 (左54-68)
- 芳賀 綏 (1954) 「“陳述”とは何もの？」『國語國文』23-4 pp.47-61 (通241-255)
- 橋本進吉 (1939) 「日本文法論」[1959『國文法體系論』 pp.71-158 岩波書店 所収]
- 早津恵美子 (1988) 「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7-4 pp.46-61
- 原由起子 (1992) 「中国語副詞“竝”と日本語の“決して”」『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』 pp.63-82 くろしお出版
- 原田登美 (1982) 「否定との関係による副詞の四分類 情態副詞・程度副詞の種々相」『國語學』128 pp.138-122 (左1-17)
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 深尾まどか (1996) 「「やはり」「やっぱり」について」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』3 pp.41-54
- 堀和佳子 (1997) 「程度・量を規定する副詞について」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』4 pp.41-61
- 本田 治 (1981a) 「日本語の否定構文(1) 「否定副詞」の分布をめぐって(前)」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』17-1 pp.67-88 (通170-149)
- (1981b) 「日本語の否定構文(1) 「否定副詞」の分布をめぐって(2)」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』17-2 pp.1-23 (通234-212)
- 益岡隆志 (1987) 「モダリティの構造と意味 価値判断のモダリティをめぐって」『日本語学』6-7 pp.30-40
- (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- (1999) 「命題との境界を求めて」『月刊言語』28-6 pp.46-52
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
- 三浦つとむ (1975) 『日本語の文法』勁草書房
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾語」仁田義雄編『複文の研究』 pp.285-307 くろしお出版
- 三宅宏宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学編』26 pp.35-47
- (1993) 「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61 pp.36-46
- (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『國語國文』63-11 pp.20-34
- (1995) 「「推量」について」『國語學』183 pp.86-76 (左1-11)

- 宮崎和人 (1991) 「判断のモダリティをめぐって」『新居浜高等専門学校紀要 人文科学編』27 pp.35-53
- (1992) 「現代日本語の判定文について」『広島修大論集 人文編』32-2 pp.35-63
- 森重 敏 (1958) 「程度量副詞の設定」『國語國文』27-1 pp.34-55
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』pp.57-74 くろしお出版
- (1992a) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101 pp.64-83
- (1992b) 「文末思考動詞「思う」をめぐって 文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11-9 pp.105-116
- (1995) 「ト思ふ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～」『日本語の類義表現の文法』(上) pp.171-182 くろしお出版
- 山田 進 (1982) 「カナラズ・キット」国広哲弥・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(編)『ことばの意味3』pp.186-194 平凡社
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館
- 劉 女青 (1996) 『陳述副詞の研究 話し手の確信度を表す副詞を中心に』名古屋大学修士学位論文
- 渡辺 実 (1949) 「陳述副詞の機能」『國語國文』18-1 pp.1-26
- (1957) 「品詞論の諸問題 副用語・付属語」『日本文法講座1 総論』pp.77-95 明治書院
- (1971) 『国語構文論』塙書房
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明[監修](1989)『日本語大辞典』講談社
- 林 巨樹[監修](1993)『現代国語例解辞典第二版』小学館
- 松村明・山口明穂・和田利政(編)(1992)『旺文社国語辞典[第八版]』旺文社
- 山田忠雄[主幹](1989)『新明解国語辞典第四版』三省堂
- Greenbaum, Sydney (1969) Studies in English Adverbial Usage. London: Longman (郡司利男・鈴木英一訳『英語副詞の用法』研究社出版)
- Makino, Seiichi and Michio Tsutsui (1995) A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar. Tokyo: The Japan Times
- Palmer, F. R. (1986) Mood and Modality. Cambridge: Cambridge University Press

例文の出典

赤川次郎『女社長に乾杯！』新潮文庫の100冊／阿川弘之『山本五十六』新潮文庫の100冊／芥川龍之介『河童』『玄鶴山房』『羅生門』（いずれも「日本文學全集22 芥川龍之介集」より）新潮社、『好色』『俊寛』（いずれも『羅生門・鼻』より）新潮文庫の100冊／飛鳥圭介『おじさん図鑑』（『中日新聞』サンデー版2000.7.9より）／阿部公房『砂の女』新潮文庫の100冊／有吉佐和子『華岡青洲の妻』新潮文庫の100冊／池波正太郎『剣客商売』新潮文庫の100冊／石川淳『かよい小町』（『焼跡のイエス・処女懐胎』より）新潮文庫の100冊／石川達三『青春の蹉跎』新潮文庫の100冊／五木寛之『風に吹かれて』新潮文庫の100冊／伊藤左千夫『野菊の墓』新潮文庫の100冊／岩田規久男『国際金融入門』岩波新書／魚住昭『特捜検察』岩波新書／臼井儀人『クレヨンしんちゃん』『クレヨンしんちゃん』『クレヨンしんちゃん』『クレヨンしんちゃん』双葉文庫／江本裕訳注『好色五人女』講談社学術文庫／大江健三郎『死者の奢り』『戦いの今日』（いずれも『死者の奢り・飼育』より）新潮文庫の100冊／大岡昇平『野火』新潮文庫の100冊／大塚公子『死刑執行人の苦悩』『死刑囚の最後の瞬間』角川文庫／大前研一『悪魔のサイクル』／折原みと『桜の下で逢いましょう』講談社X文庫／貝塚茂樹『孔子』岩波新書／鎌田慧『ドキュメント屠場』岩波新書／川端康成『雪国』新潮文庫の100冊／菅直人『大臣』岩波新書／康明道著、尹学準訳『北朝鮮の最高機密』文春文庫／貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』角川ホラー文庫、『黒い家』角川書店／北杜夫『楡家の入びと』新潮文庫の100冊／桐生操『本当は恐ろしいグリム童話』KKベストセラーズ／倉橋由美子『聖少女』新潮文庫の100冊／小林秀雄『真贋』（『モオツアルト 無常ということ』より）新潮文庫の100冊／佐高信『タレント文化人100人斬り』現代教養文庫（社会思想社）／沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫の100冊／椎名誠『新橋烏森口青春篇』新潮文庫の100冊／塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』新潮文庫の100冊／志賀直哉『赤西蠣太』『好人物の夫婦』『小僧の神様』『濠端の住まい』『山科の記憶』（いずれも『小僧の神様・城の崎にて』より）新潮文庫の100冊／司馬遼太郎『国盗り物語』新潮文庫の100冊／新藤宗幸『行政指導 官庁と業界のあいだ』岩波新書／鈴木光司『リング』『らせん』角川ホラー文庫、『ループ』角川書店／相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる！』知的生きかた文庫（三笠書房）／副島隆彦『副島隆彦の World Watch』（『正論』1999年3月号より）産経新聞社／曾野綾子『太郎物語』新潮文庫の100冊／高野悦子『二十の原点』新潮文庫の100冊／太宰治『人間失格』新潮文庫の100冊／田辺聖子『新源氏物語』新潮文庫の100冊／谷崎潤一郎『痴人の愛』新潮文庫の100冊／田畑光永『鄧小平の遺産 離心・流動の中国』／朝鮮日報『月刊朝鮮』編、夫址榮訳『祖国を棄てた女』小学館文庫／司直『JKⅠ物語』（鮎川哲也編『本格推理』より）光文社文庫／筒井康隆『エディプスの恋人』新潮文庫の100冊／壺井栄『二十四の瞳』新潮文庫の100冊／手塚治虫『魔法屋敷』（『地底国の怪人』より）角川文庫／『アバンチュール21』『ザ・クリエイター』『大暴走』

『七色いんこ』『バンパイア』秋田文庫、『鉄腕アトム』『鉄腕アトム』『鉄腕アトム』  
 『鉄腕アトム』『鉄腕アトム』『鉄腕アトム』光文社文庫、『ブッダ』『ブッダ』『ブッ  
 ダ』『ブッダ』潮ビジュアル文庫／寺村秀夫『文法随筆』（『月刊日本語』1巻1号より）ア  
 ルク／中沢けい『楽隊のうさぎ』（『中日新聞』1999.9.4 夕刊より）／中島敦『名人伝』『李陵』  
 （いずれも『李陵・三月記』より）新潮文庫の100冊／夏目漱石『夢十夜』（『漱石全集第十二巻』  
 より）岩波書店、『こころ』新潮文庫の100冊／西山賢一『勝つためのゲームの理論』講談社ブルー  
 バックス／萩原遼『ソウルと平壤』『朝鮮戦争 金日成とマッカーサーの陰謀』文春文庫／林芙美  
 子『放浪記』新潮文庫の100冊／福田健『ユーモア話術の本』知的生きかた文庫（三笠書房）／藤原  
 正彦『若き数学者のアメリカ』新潮文庫の100冊／堀辰雄『美しい村』（『風立ちぬ・美しい村』よ  
 り）新潮文庫の100冊／松本清張『ゼロの焦点』中央公論社／三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫の100冊  
 ／三浦哲郎『幻燈畫集』『初夜』（いずれも『忍ぶ川』より）新潮文庫の100冊／三木清『人生論ノ  
 ート』新潮文庫の100冊／三島由紀夫『金閣寺』新潮文庫の100冊／三田村鳶魚著 朝倉治彦編『近  
 松の心中物・女の流行』中公文庫／水上勉『雁の寺・越前竹人形』（『雁の寺』より）新潮文庫の  
 100冊／宮沢賢治『ビジテリアン大祭』（『銀河鉄道の夜』より）新潮文庫の100冊／宮本輝『錦繡』  
 新潮文庫の100冊／武者小路実篤『友情』新潮文庫の100冊／村上春樹『世界の終わりとハイドボイ  
 ルド・ワンダーランド』新潮文庫の100冊／毛利敏彦『大久保利通』中公新書／森鷗外『雁』『心中』  
 （いずれも『鷗外全集第八巻』より）『青年』（『鷗外全集第六巻』より）岩波書店、『山椒大夫』  
 （『山椒大夫・高瀬舟』より）新潮文庫の100冊／森本順子『日本語の謎を探る 外国人教育の  
 視点から』ちくま新書／山岸涼子『日出処の天子』『日出処の天子』白泉社文庫、『ゲール  
 （屍鬼）』『シュリンクス・パーン』『パイド・パイパー』『パニユクス』（いずれも『シュリン  
 クス・パーン』より）『海の魚鱗宮』『キメラ』『スピックス』（いずれも『ハトシェブスト』  
 より）『汐の声』（『わたしの人形は良い人形』より）文春文庫ビジュアル版／養老孟司・長谷川  
 真理子『男の見方 女の見方』PHP文庫／吉本ばなな『キッチン』『満月 キッチン2』『ム  
 ーンライト・シャドウ』（いずれも『キッチン』より）角川文庫、『TUGUMI』中公文庫／吉  
 行淳之介『樹々は緑か』（『砂の上の植物群』より）新潮文庫の100冊／李英和『北朝鮮秘密集会の  
 夜』文春文庫／和田純夫『量子力学が語る世界像』講談社ブルーバックス／和辻哲郎『古寺巡礼』  
 岩波文庫／（新潮文庫の100冊はCD-ROM版）

## 【要旨】

本研究は、現代日本語における「蓋然性を表す副詞」について、モダリティ論の立場から意味記述を行なったものである。従来、蓋然性を表す副詞の研究は、「キット」と「カナラズ」の類義分析を除いてほとんど進んでいなかった。その原因として、各副詞の違いが単なる蓋然性の高さの違いとして捉えられてきたこと、事態の蓋然性と判断の蓋然性が混同して議論されてきたこと、副詞の意味と文末のモダリティ形式の意味とが一体的に捉えられ、両者の間で循環論に陥っていること、副詞の意味規定の基となるべき文末のモダリティ形式の意味が十分に説明されていないことが挙げられる。本研究は、先行研究にこうした問題点のあることを指摘し、蓋然性を表す副詞の体系を明示的に示している。

従来、蓋然性を表す副詞は、蓋然性の高いものから低いものへと一次元的なスケールの上に並んでいると捉えられてきた（図1）。

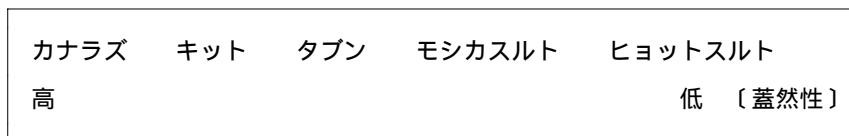


図1 一次元的な捉え方

これに対し、本研究では話し手が切り取った客体世界の事態を表す「命題」と、発話時点における話し手の心的態度を表す「モダリティ」とを区別して考えた。命題とモダリティの区別は、否定の焦点となるかどうか、疑問の焦点となるかどうか、文代名詞の対象となるかどうか、連体修飾成分となるかどうか、過去文の中に収まるかどうか、という5つの「主観性判定テスト」によって行った。これらの条件を満たすものが命題で、満たさないものがモダリティであると判定される。その結果、「カナラズ」などが客観的な命題副詞であるのに対し、「キット」などは主観的なモダリティ副詞であることが明らかとなった。

従来の研究では、「キット～ニチガイナイ」や「ドウモ～ヨウダ」などの共起を根拠にして、「キット」と「ニチガイナイ」はともに蓋然性の高いことを表すとか、「ドウモ」と「ヨウダ」はともに根拠のある推量を表すといった説明がなされてきた。しかし、本研究では副詞と文末形式は互いに独立した意味を担っていると考える。このことは、「キット」が推量文だけでなく意志文、命令文、勧誘文にも使われたり、同じ推量文でも「ニチガイナイ」だけでなく「」や「ダロウ」とも共起することや、「ドウモ」が推量文だけでなく「ドウモ様子が変だ」のように不確定を表す認識文にも使われることから証明される。そこで、本研究ではまず副詞の意味とは独立に文末形式の意味分析を行なった。

文末形式に関しては、一般に蓋然性の高さの違いとされる「カモシレナイ」と「ニチガイ



ナイ」が、認識と推量判断の違いであること、「ダ/ 」と「カモシレナイ」が認識確定性の確実と不確実で対立していること、推量判断の「ヨウダ」は比況の「ヨウダ」から説明され、推量判断の「ラシイ」は伝聞の「ラシイ」から説明されること、「ダロウ」が認識や推量判断のための証拠不足を述べた表現であることを指摘した。この点に本研究の特徴がある。また、一般にモダリティ表現とされる「ソウダ」や「ベキダ」が、主観性判定テストの結果、命題表現であることも明らかにした。

#### 真偽判断のモダリティを表す文末形式

「ダ/ 」：当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す

「カモシレナイ」：当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す

「ニチガイナイ」：話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す

「ヨウダ」：二つの事態に共通の属性があることを根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す

「ラシイ」：他者からの情報や外界の現象を根拠に、当該の事態が成立すると推量したことを表す

「ダロウ」：証拠不足のため当該の認識や推量判断が確証できないことを表す

蓋然性を表す副詞は、蓋然性、主観性、被修飾成分や共起する文末形式、判断の根拠の違いによって分類される（図2）。

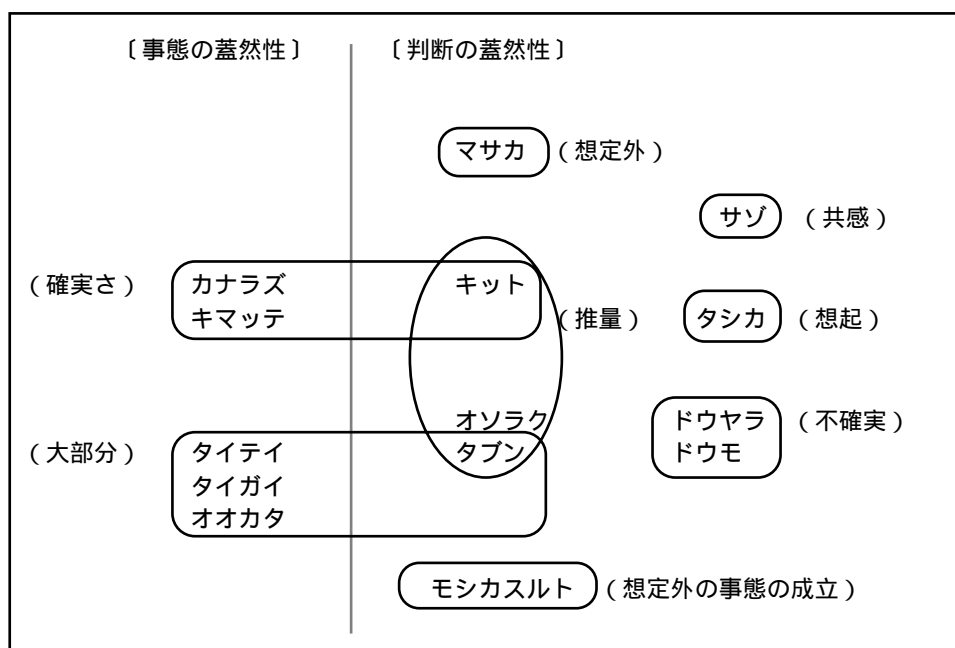


図2 本研究で考察した副詞

本研究の特徴は、これらの副詞が単なる蓋然性の高さの違いによって区別されるのではなく、主観性の違い（命題、モダリティ）、使われる文の種類の違い（推量文、意志文、命令文、勧誘文、認識文、想起文）、判断の根拠の違い（直感によるか、裏付けとなる根拠に基づくか、共感によるか、過去の記憶の想起によるか）、発話の前提を必要とするか、といった観点から区別されることを指摘した点にある。以下、本研究で分析した副詞の意味を記す。

判断の蓋然性を表す副詞（モダリティ副詞）

- 「キット」：事態の実現に対する話し手の強い信念を表す
- 「タブン」：推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す
- 「オソラク」：推量判断において根拠に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す
- 「サゾ」：推量判断において共感に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す
- 「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」：当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、発話時点において当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す（想定外の意味は「アルイハ」、「モシカスルト」、「ヒョットスルト」の順に強くなる）
- 「ドウモ」：話し手の認識が不確定で事態の成立がはっきりしないことを表す（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが不確定であることを表す）
- 「ドウヤラ」：当該の事態がある基準点にほぼ近づいたことを表す（推量文に使われると、当該の事態の成立を示唆する様相の現れが完全にではないがある基準点にほぼ近づいたことを表す）
- 「タシカ」：当該の事態の成立を話し手の記憶によって確認することを表す
- 「マサカ」：当該の事態が想定外のものであることを表す

事態の蓋然性を表す副詞（命題副詞）

- 「カナラズ」：事態が例外なく確実に成立することを表す
- 「キマッテ」：既成の反復的な事態が確実に成立することを表す
- 「タイテイ」：数的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す
- 「タイガイ」：量的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す
- 「オオカタ」：割合の面から、事態が基準点に大部分到達したことを表す

蓋然性を表す副詞は、それぞれこうした様々な側面から蓋然性に関わっているのである。